十一月一日發行

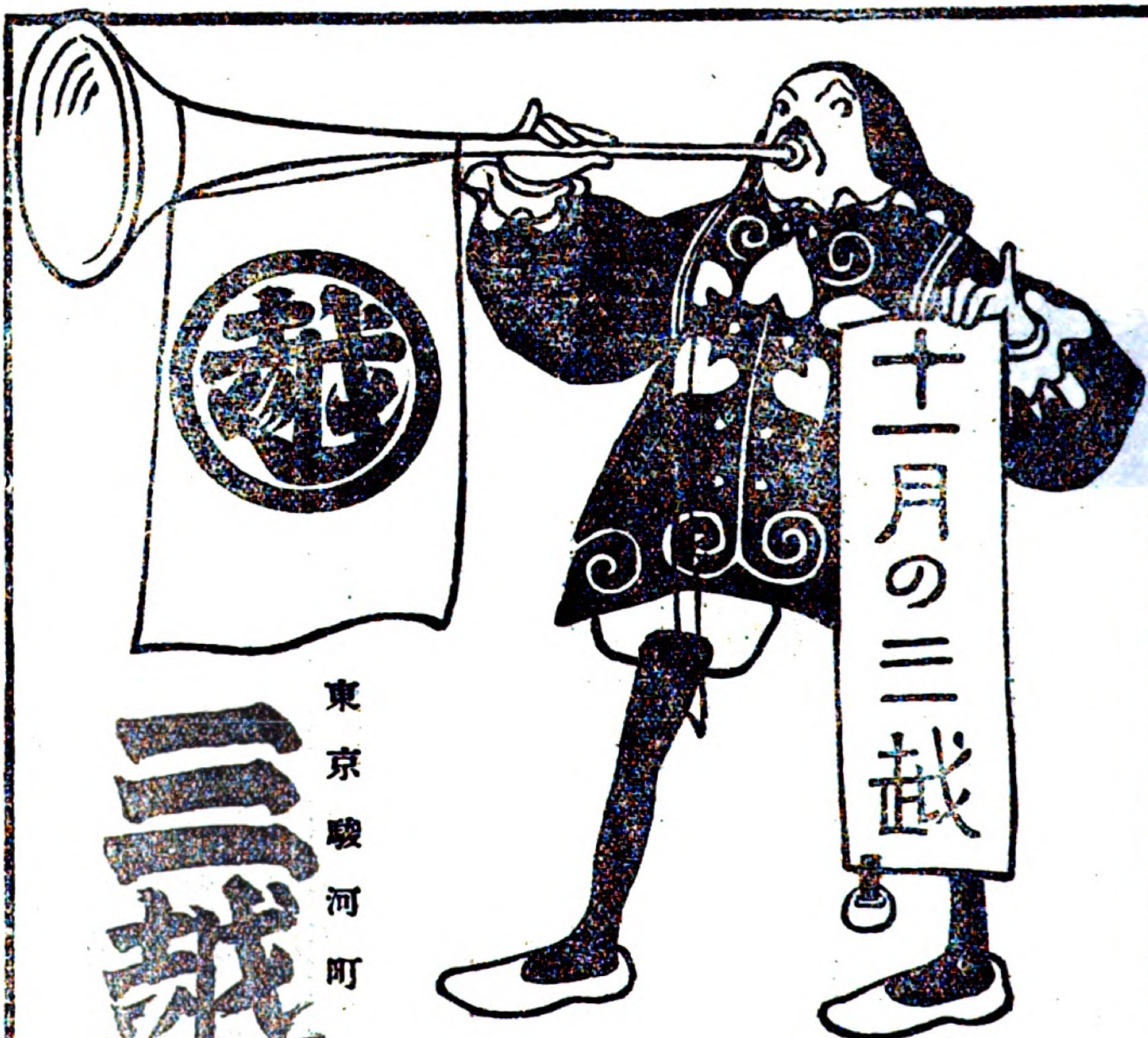
# 女學世界

第十二卷
第十五號

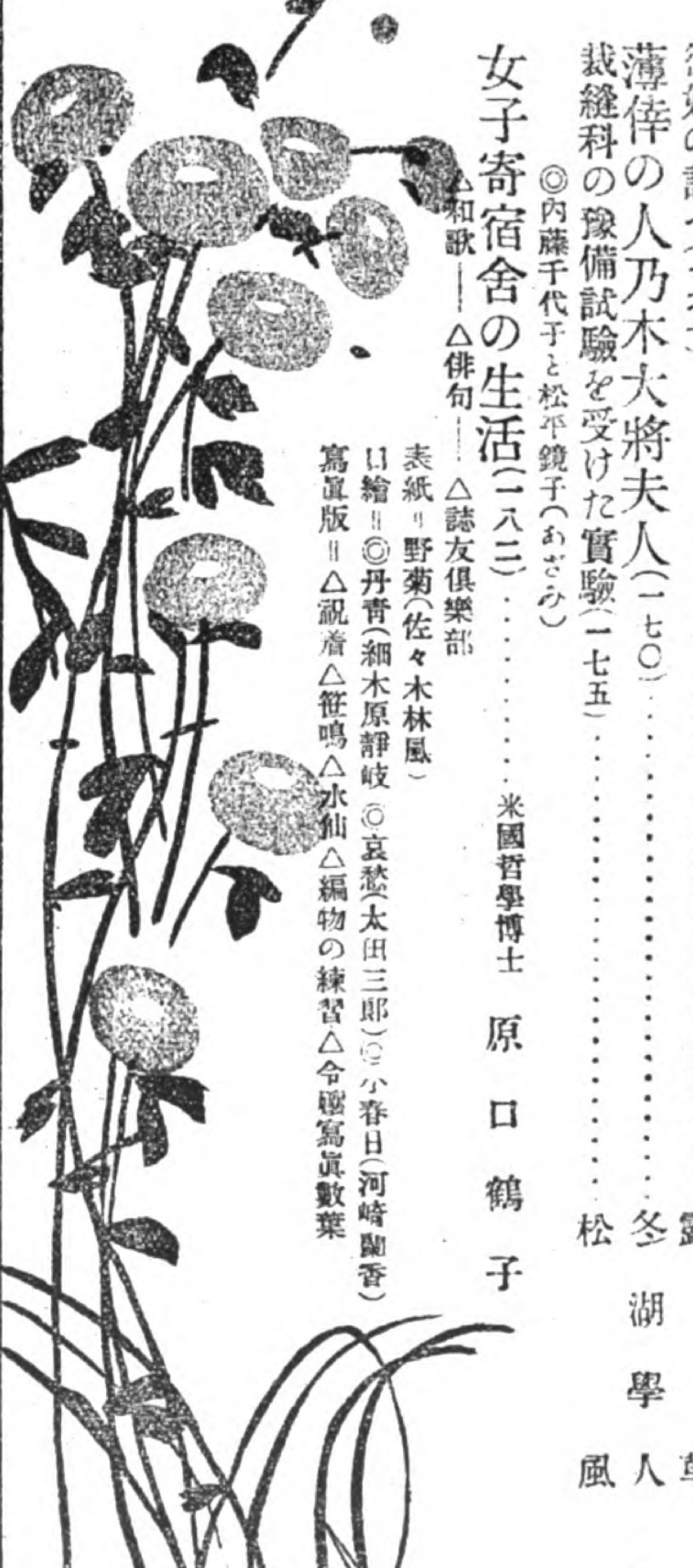
博文館

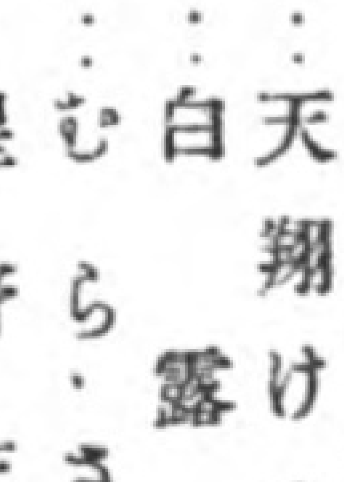



暇のない時
化粧せずとも
化粧に勝る
優美さ保つは
レートが作った
素顔地肌の
自然の美
東京 大阪 平尾賛平
乳白化粧レート


十一月の三越

# 女學世界 第十二卷第拾五號 十一月號目次





# クラブ新聞





## 化粧と品性

居は氣を移すと云ふことがありますが、啻に住居ばかりではない、衣服でも矢張り其通りです、殊に日常のお化粧は、その人の品性陶冶に影響するところが頗る大きからうと思ひます。常に清楚な化粧を好む人は、他人から氣高く見らるゝばかりでなく、その人自身も、自然に品性が高尚になつて來るものです。だらしのない姿をするのは厭になつて來るものです。汚れた行ひの人を見るのは厭になつて來るものです。自分の行ひにも、また少しの汚れた點でもあると心が寂しくなつてたまらないやうになつて參ります。

化粧の德も亦大なりと云はねばなりません。日常のお化粧を忽がせにしてならないのは即ち此點で、クラブ化粧品をお勧め申すものも亦此點であります。

### ◉クラブ白粉の大改良

品質の優秀なるを以て好評嘖々高まり賣行俄に激增したる彼のクラブ白粉は更に品質本位の實を完からしめんとして去る七月十二日より又々其品質に一大改善を施し高價なる香料數種を配合して盛んに製造しつゝありと。

### 露の玉摘んで見たる童かな　一茶

單衣の袖にはやゝ寒いやうな秋風が吹きそめた朝、朝顔ももうだん／＼と花が小さくなつて來るの畑には芋の葉が子供の背よりも高い位になりました。澄男さんは乳母にクラブ齒磨で齒を磨いて貰つて、毎朝つけるクラブクリームで顔をさつとこすられて　乳母に負さつて出て參りました。

空は青々と高く晴れてをります

『乳母これ何？』

云ひながら澄男さんは芋の葉に置いた露を摘まうとしました。露ははら／＼と乳母の肩にこぼれました。

澄男さんはわづかに生えた美しい齒を見せてニコ／＼と笑ひました。

クラブ洗粉で磨き上げた肌、クラブ白粉で薄化粧をした顔は、何時もかの美しい月を聯想させる。その美しい月の下に立つたクラブの人は、殊更に其氣高さを增すのである。



月下のクラブ人

雁の落した雫か草の月もクラブに匂ふ庭　府下　前田寂楼

髪に操の色さへ見せて月にクラブの化粧振　同人

名月やクラブ粧ふ歌式部　横濱　飯塚稜威子

詩をよくすクラブの君の月今宵　埼玉　北田松葉

日本女子商業學校學監 嘉悅孝子女史案

# 最新實用 家計簿

定價金五拾錢
郵稅八錢

▲類似品續出す日本女子商業學校出版部に御注意願ます
▲いつからでもつけられる家計簿は本書の外ありません

## 此『家計簿』の重寶がらるゝ理由

### 組織の特長

▲此帳簿は一度つけると賄帳日記帳金銀出納帳元帳をつけたのと同じ結果を一頁内で示します組織になつてゐます。

▲收支一覽表は月々の小計、累計、一年中の收支豫算超過か否かゞ分る組織で家計の歷史とする爲に年々保存するやうに出來てゐます

▲立替金及時貸表、負債償却明細表を新らしく加へました。

### 利益の要點

▲費用を省く……（一冊にて何冊も兼る故なり）

▲時間の經濟となる…（一度つければ凡てのものをつけしと同じき故なり）

▲一目にて家計の模樣を知る（一頁の中に凡てのものが現はるゝ爲也）

▲生活費の膨脹を防ぐ（絕えず豫算と支出との差を知るを得る爲なり）

▲家計の歷史を作る…（一覽表を保存し得る故也）

發行所 日本女子商業學校出版部

發兌元 松邑三松堂

東京市京橋區南鍛冶町
電話本局一二七六
振替東京七九三四

女（いの一）

# 美顔ならんとせば最新最良の

**アルモンドクリームを試よ**

現代醫學と化學の進步は遂に本品を世に公けにせり美人たらんとせば是非御試用を乞ふ



特製　一圓四十錢
小瓶　二十錢
（送費各八錢）

アルモンド
クリーム特効

白粉下に光もよくのり、のび實によし
**ニキビ、ソバカス**、其他吹出物等に特効
如何に本品が美顔的完全せるか實地に御覽の上御愛用あらんことを
著名の和洋小間物店にあり品切の時は直接御注文を乞ふ

發賣元　東京日本橋區橫山町二丁目
花王白粉本舗
中外化粧品問屋　**脇田盛眞堂**
電話浪花四二番

---

文學博士　**佐佐木信綱先生新著**

■ **近刊** ■

# 歌集　新月

洋裝四六判總布上製
紙數約百六十頁

歌集新月は出でたり。長く歌界の期待せし佐佐木先生の歌集新月は出でたり。夙く明治の歌壇に清新なる竹柏園の歌風を唱道せられし佐佐木先生、さきに歌集思ひ草を著して其さやかなる調に世人の耳を新たならしめしより、九年、爾來詠出せられし數千首の詠草の中より、數百首を精選してこゝに新歌集を公けにせらる和歌に志ある士女はもとより、世の文藝を愛する人は、須からく來りて歌壇の陰雲を拂ひ出たるこの新月の清光を仰ぎ見ざるべからず

東京本町　**博文館發行**

女（いの二）

**御大葬紀念徽章付 金張懐中時計廉價發賣**



今回の御大葬は上下萬民の永久に紀念し奉るべき一大御儀式也依て弊堂が東都有名の意匠家に嘱托製造せし金製紀念徽章は一面に**明治天皇陛下**御製の國風を謹寫し一面は**皇城二重橋**の壯嚴を彫刻せし絶好の美術的**時計用徽章**にして體裁高尚優美にて眞に紳士淑女の御携帯に適す●本時計は夙に響き高き米國時計會社美人商標刻印付特製品にして両蓋紙密斜子刻み中蓋付三枚蓋龍頭發引出し針廻し機械最新アンクル式寶石入四十時間持紳士用15 16 17 18貴婦人用金張梨地片硝子13形均一特價 **五圓五拾錢** 本品は製造會社が多年の實驗と斬新なる化學を應用して十八金張に製造したるものにして普通瑞西製メッキ側等の粗製品と異り眞の金張故に優に**十八金側**を凌駕し尚ほ金色燦爛として機械の要所には寶石を鏤めたるものなれば全無缺にして進遲振止の憂なく故に**卅ケ年**の保險を附す景品には舶來鎖前記紀念徽章並に鹿皮の三品を進呈望の方は弊舖は責任を重じ女學世界廣告に依り御注文の旨御申越次第代金引換小包郵便にて送る送費廿錢爲替は玉局宛**注意**弊舖は信用を重んじ遠隔の購客にして現品御覧なく御購求後萬一貴意に適せざる時は無割引他品交換亦は代金返戻す

大阪上本町五丁目 時計商 **夏目時計商舖**

---

從二位勲二等伯爵 鷲尾隆聚閣下題字 池の坊小[illegible]月宗匠著

**池の坊流 生花の手引**

和洋頗美本全二冊 插畫百數個入 定價四拾錢 小包送料八錢

大好評

本書は一般有觸れた生花指南書と異り既に花を習はば悉く圖畫を挿入れ手を以て教ふる如く輕妙なる行文に獨特の趣味多大の價値を感ずべし蓋し生花上の心得は此書に網羅して漏すなし是非一本を求められよ

---

栗原秀子 大和花子 共著

**和洋裁縫獨まなび**

定價一冊 金四十五錢 小包送料八錢 郵券代用一割増

本書は婦女子に極分り易き様詳しく最も親切に説き明し且つ數多の挿畫を加へたれば一讀して裁縫の全體に通ずるを得べし

**書籍販賣** 定價入總目錄進呈 御入用の方はハガキにて御申越あれ

大阪市京町堀通四丁目一二 振替口座大阪一七七八五番 **岩崎浪速堂**

---

# 大阪小笠原病院長實驗皮膚病專門新劑

## 皮膚石鹸

久しく小笠原病院において患者に授與せられし者にして巧妙なる藥劑の配伍により眞に色を白くしキメを細かにし輕き皮膚病を治せしめ其他各種の病毒を豫防消毒するの力强大に而かも香氣馥郁且價格低廉なるが故に今や衛生と經濟上不可缺物として各家庭に常備せらるゝの光榮を有するに至れり由來藥石鹸は常用せらるべきにして發病後流て、用ゆるが如きは惡の極なりと知らるべし

定價 一個五錢送費二錢 半打廿八錢送費四錢 壹打五十錢送費八錢

## 艶美羔

にきび並にさくろ鼻の特效劑なり由來此種の藥劑は汗牛充棟啻ならずと雖も眞にニキビを治せしむる效力ある者は本劑を措て他にあらざる事は已に用ゐし者の熟知せらるゝ所なるべし

定價 小八錢 中十五錢 大廿八錢 送費各二錢

## 皮膚軟羔

いんきんたむし、くさ、かんせん、なまづ、ひぜん、かゆがり、ひび、婦人局部の痒み、肛門の痒み、たい毒、しもやけ等凡て痒みある皮膚病の特效劑にして奏效神の如しとの讃評は過言に非ず加之しゆまず薬ます内攻せず蓋し天下の皮膚病藥の上乘なる者也

定價 小十錢 中廿錢 大五十錢 送費各二錢

## 美膚練

わきがの防臭に用ゐて奏效顯著其他しらくも、はたけ等には一二回にして奏效確實ひび、あかぎれ、頬手足のあれ等に用ゐて卓効を現はす事世上に有り觸れたるアレシラズの比に非ず敢て試用を祈る

定價 小五錢 中十錢 大二十錢 送費各二錢

高等香油 **ヱンゼル香油** 毛髪を黑く艶かにしてフケぬけ毛等を防ぐ偉効ある逸品なり

定價 十五錢送費六錢 廿五錢送費八錢 四十五錢送費八錢

**本舖** 大阪東區北久太郎町四丁目 **回天堂** ●東京小石川武島町廿一 **回天堂出張店**

●各地藥店にあり品切の節は本舖又は出張店へ御注文あれ

女(いの三)




私は以前非常な癖毛でして、眞箇に困つて了つたんですの。それはモウ種々な藥や油も塗けて見ましたし、出來るだけの手を盡したんですが、到底も髷など結ふ事が出來なかつたんで、什う致やうかと思つて居ますと、吾夫が、毛頭には**パール**煉香油が良いと云ふ評判だから塗けて見ろと申しますので、試しに塗けて見ますと、まあ何時の間にか、こら如此に、綺麗に髷を結ふ事が出來るやうになりましたの、眞箇に**パール**煉香油は、匂ひが良い、所へ持つて來て、不思議な程頭髮を美くする油ですのよ。

スミレ黒香油
くせなほし呉竹
ルビー石鹸

本舗　東京市日本橋區横山町三
平尾銑也商店
電話浪花百十番・振替東京百十番



田中製版所三色版

薔薇の香


最上醤油
元祖
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番

（その一）

# 室内暖爐

破格大安賣



○御一報次第目錄進呈

○市内は無料配達仕候

石油用、瓦斯用、石炭焚等
種々取揃有之候
其他西洋食器類一式陳列

東京銀座通り尾張町交叉點

宮内省御用達

## 十一屋商店

電話新橋 一三四三 一三四四
振替口座 九〇九二

---

# 毛ぬき

新劑

従來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて皮膚に有害にして悪臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘールビンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールビン
定價 壹圓
特製 參圓
内地送料 十五錢
海外 三十五錢

# 飲色白

くなる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其儘效あるものなく色黒き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の悪液排泄劑ピオール錠は極て強度の淸血劑にして一般悪血悪液性の人本劑を服用するときは血液を淸淨となし悪液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる美白劑となりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ピオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
内地送費 十五錢

東京市牛込區
北山伏町壹番地

## 百合園製藥所

女（ろの二）




すきとほりたる水にて付くると
白くなり
流行の
薄化粧料
にして
目立ぬ故
男子方にて
今盛に
用ゐられる

定價
五拾錢
貳拾五錢
拾五錢

女(その三)


香水の代用となる
千代田香油
定價
小瓶十七錢
中廿五錢
大卅五錢
特八十五錢
（送費八錢）
千代田香油本舗
石鹼發賣元
山岸三之助
東京馬喰町
大阪鹽町
月もよし
菊もよし
殊に
千代田の
薫り良し
千代田は純植物性の高等香油にして抜毛を防ぎ惡臭を去り髪を黒く長く美しき光澤を出す



菊の花の哀愁　太田三郎筆

# 最見易き琴の譜本

井上胡蝶著

## 生田流箏曲新譜

四版巻壹定價壹圓卅錢送料六錢再版巻貳巻参定價各金壹圓拾錢宛送料各金六錢　代金引換各金拾六錢増
海外代金引換三十四錢増

**巻壹**　曲譜目次　四季の花　門松　鶴の聲　黒髪　六段　亂　八段　金剛石　夕顔　新高砂　越後獅子　千鳥　茶音度　春の曲　小督の曲

**巻貳**　春日影　朝外出　六段前歌　難波獅子　末の契　松竹梅　殘月　秋風　八重衣　冬の曲

**巻参**　松叢萬歳　八千代獅子　雪　九段　巌上の松　新雪月花　凱旋喇叭の曲　四季の詠め　夏の曲　秋の曲

生田流
山田流　新譜

## 箏曲之栞　第一輯

定價金壹圓送料六錢　代金引換十六錢増

門松　ことぶき　春雨　六段　七草　流盡し　御製の曲　水は器　千鳥　菊水　那須野　御國の譽　外練習

曲譜——用四曲

## 山田流譜本

| | |
|---|---|
| 江の島 | 卅五錢 |
| 住吉 | 同上 |
| 松上鶴 | 同上 |
| 初若菜 | 同上 |
| 四季の艶<br>今様朝妻船 | 同上 |
| 松風 | 四十錢 |
| 菊水 | 三十錢 |
| 越後獅子 | 四十錢 |
| ほとゝぎす | 三十錢 |
| 櫻狩 | 四十錢 |
| 那須野 | 同上 |
| 春の宮<br>子の日遊 | 卅五錢 |
| 山田流手ほどき | 六段外七曲合本 六十錢送料四錢 |
| 小督の曲 | 四十錢 |

送料各貳錢

## 本書の特色と購求者の便利

一以上各種の譜本は何れも調子の合せ方や音符休止符左右手法其他弾琴に必要の事は悉く平易明瞭に記載しあれば直接師に就きて習ふ通りであります

一此譜本は西洋樂譜の心得無き人でも直ちに了解せられ且つ言葉記號を附記しあれば音符を知らぬ人も之に依りて弾奏せらるる事を得べく自然の間に完全なる樂譜を覺え給ふに至るべし

一本書の購求者は曲中の不詳は返信料添へ質義あれば無料之が説明教授をなすべし
苟も琴を習はんと欲して師を得給ふに難きか或は一度習ひて忘れたりとて歎かせ給ふこと勿れ本書は是等の人々に多大の満足を與へ得べしと信ずればなり

琴調子笛六十錢一圓五十錢二圓送料各八錢宛　琴絲〃器其他琴及附屬品一切

**發行所**　福岡縣福岡市外馬出東公園博多座横　**箏曲通信教授所**

女（はの一）

女(はの二)

# やせる藥

人に嘲なく●やせて●中肉美容となる新藥なり試みたき方は郵劵二錢送れ詳細報知す

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの

東京市牛込區赤城元町三三

池田製藥所

---

本品は最新式にして洗●ね小便袋●ね小便袋

定價乳兒用八拾五錢中人用壹圓拾錢大人用壹圓八拾錢

子を持つ親病人ある家には必要

男女の區別あれば御注文の節乞注意

衛生最良德用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば老人小兒病人の最も必要にして




ね、おき、たち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長

---



新案 ぢ押へ器械

價 甲壹圓七拾錢 乙壹圓參拾錢

本器を使用せば如何なる慢性にて脱肛し汚物の衣服に着くの患も防ぎ立居歩行運動にもく少しの不便不愉快の感じなく苦痛を忘るは既に世の同病者より高評を得たる本器の特長なり世の痔病患者是非一器を御購求ありて全快速ならしめ

注文の節腹部寸法御通知の事

發賣元 大阪天下茶屋町五〇五 振替口座大阪壹四番 ともゑ號

---

# 見よ◎月經な女子◎病める婦人

婦人病の多くは月經不順月やく止り發する者少なからず故に一日も早く女月丸を服用して健康と成れよ本劑は學理上有効なる藥種を蒐集し製劑したる良藥なれば婦人血の道月經不順月やく滯り又は血塊など稱する永き間經水なき爲め腹痛する人或は女子十七八歲に至り月經なき人等に用ゐて特効あり必ず服用試られよ



改良 月きく 女月丸

藥價 一劑六十錢 二劑一圓十錢 特製 二圓二十錢 三圓三十錢(送料各四錢)

---

# ●艶美白色美容劑




子供の折は美愛と賞せられし人も年頃になりて脂肪多くぶとく太り血太りニキビ吹出物ソバカス等の爲めに醜婦となる人少なしとせず故に美容白色ならんと思へば是非本劑を御試用あれ全くキレーに艶美白色と成る事ゝ信じます

# 肥滿病藥

本劑は肥滿病內服藥と皮膚外用藥との二種有れば御注文の時は必ず患部御容體を書き添へ御申込有れば其容體に適合の方を送付致します

藥價 一劑一圓五十錢 三劑四圓三十錢 二劑二圓九十錢 四劑五圓半(送料各八錢)

惡性固疾の方は三四劑分の多き方が御利益になります

必ず御試用下さい

一手販賣 東京京橋中橋和泉町一 振替東京一〇六七七番 小宮愛生堂

# 品のよい實用雜誌

# 婦人世界

十一月一日發行 七卷拾參號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 半年前金一圓五錢

## 皇太后陛下の御坤德……記者謹識

▲肺結核は癒り易い……遠山博士

▲安受合をする惡い癖……下田歌子

▲醫者を嫌ふ支那婦人……吉岡彌生

◎婦人の横顏美……

◎美しく撮れる寫眞……

◎秋菊の作り方……

◎西洋風の朝飯……

◎簡便な美容法……

◎秋季の漬けもの

◎新形の秋の束髮

## ◎我が家の樂しみ……

安部磯雄

橫河夫人

服部夫人

星夫人

▲婦人の心得べき盜賊の豫防法……本堂署長

▲現代の婦人贅澤調べ……婦人記者

▲氷塊で飯を炊いた私の實驗……渡邊厨長

◎衣服を作る準備

◎小兒の結核病……

◎髮の毛の手當……

◎附乳の出ぬ原因

◎鹿兒島縣の婦人

◎十一月の總菜獻立

◎家庭講談春日局

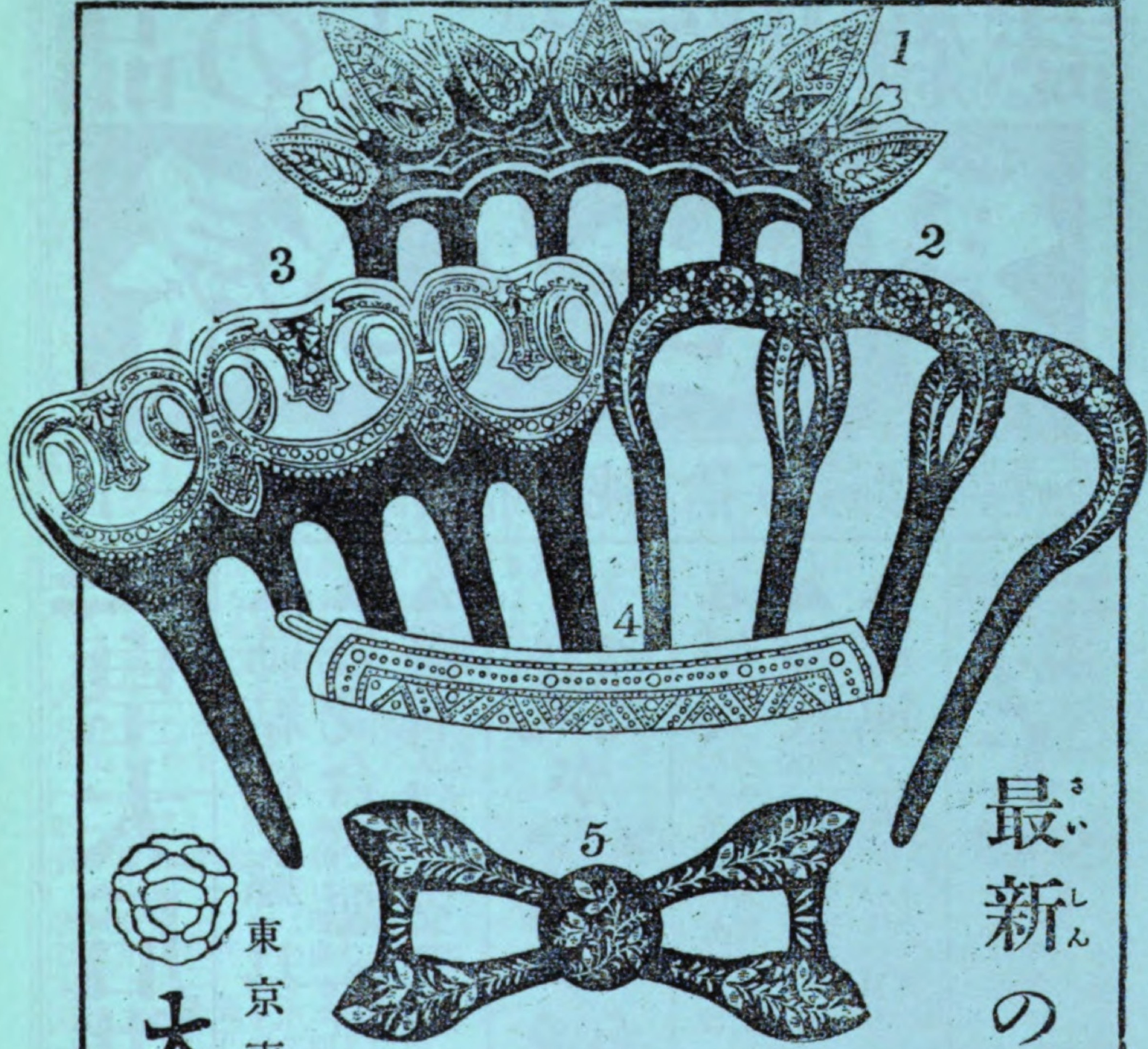
## 小說 子寶

愈よ出でて愈よ佳境に入る清淨純潔の家庭小說を求むるものは本編を繙かれよ

村井弦齋

發行所 東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 振替口座三二六番 賣捌 全國各地書店

女(はの三)




# 最新の束髪挿

現代御婦人の束髪に配合よき御挿物として、最近米國より輸着のたぼ櫛たぼ止の内、御目新しき形を圖にて御案内申上候

1より5迄ばら斑と、鼈甲色の二種有之何れも金蒔絵に小さき新ダイヤをあしらひ、其美しき事未だ比類なき出來榮に御座候。

1　束髪櫛　九圓
2　束髪櫛　四圓貳拾錢
3　束髪櫛　拾圓
4　たぼ止　五圓貳拾錢
5　たぼ止　五圓五拾錢

郵便御注文の節は、振替口座東京九二九三番へ代金御振込願上候

東京南傳馬町

## 大西白牡丹



小春日　河崎蘭香筆

# ニキビ

## 吹出物を治療して色白く美しくする內服藥




ニキビ吹出物油顏其他皮膚ドス黑く色澤惡しく薄穢き等は槪ね體內胃腸の變化より生ずる一種の毒素に原因す故に之を治するには必ず內服藥を以て體內より治療するを要す然る時は奏効確實にして外用藥の如く內攻の恐れなし是現今皮膚病學上の定論なり本劑は此理由に依り製出せる內服藥にして既に醫藥の成書に於て確實に効能を記載せられたるに係はらず先に報知新聞大阪每日其他八大地方新聞に於て社會的試驗の計畫を發表し多數の患者に試驗し驚くべき好成績を報告せらる最早學理に於ても又實際に於ても疑ふの餘地なき有効藥たる事を確信するに至り玆に發賣す患者は只十錢郵劵三枚封入申込あれば直ちに送藥すべし

藥價　四日分三十錢●一週間分五十錢●十五日分一圓
市內は電話かハガキにて御通知次第無料配達
地方は成るべく爲替又は振替の事

東京市下谷區上根岸町百十一番地
本舖　藥學得業士　金澤巖
振替東京四六七番電話下谷二二五九番

（其の一）

女(にの二)

THE LADY'S GRAPHIC.

# 婦人畫報

十二月一日 十一月卷 一冊廿五錢 郵税二錢五厘 三冊八十錢 六冊一圓五十三錢 十二冊二圓九十四錢

## 畫報

● 野路の露 岡田三郎助氏作 二頁大美人油繪

▼ 落葉かき…… ▼ 加藤博士夫人と令孃……

● 伏見桃山御陵

▼ 西郷侯後室居間と庭園…… ▼ 薄茶の席……

● 皇后陛下御座所

▼ 新婚の御披露 ▼ コンノート殿下の香蘭女學校臺臨

● 乃木將軍夫妻殉死當日寫眞

▼ 別莊に於ける青山博士夫人と令孃 ▼ 逝ける遠山女史 ▼ 鑛石書と盆景

● 文展出品三閨秀畫家と其傑作

▼ ビルマの留學生…… ▼ 山羊…… ▼ 佐々木侯爵令孃と本多子爵令孃

● 兩名家の菊花壇

▼ 御挨拶…… ▼ 母と愛兒……

● 在米本邦婦人の職業

▼ 新婚の前田伯令息夫妻

● 兩女學校の修學旅行

▼ 下條氏の家庭

● 奥様の買物ぶり

● 如花諸名家令孃

## 讀物

▼ 大正婦人に警告す 新渡戸博士

● 子供同士の愛情……久保學士

▼ 當世細君氣質 山路愛山

● 五十錢會……文學士

▼ 戰慄すべき女學生墮落の徑路

● 家庭かきのぞ記……記者

▼ 危險な處女時代 三輪田元道

● 文展出品三閨秀畫家作品 藤懸學士

▼ 貴婦人の道樂……記者

● 小說ある婦人に與ふる手紙 藤村

▼ 女は何處までも女也……田代博士

● 塔の澤より……長谷川時雨

▼ 姿をよくする法 田邊學生

● 歐洲より……與謝野晶子

▼ 女記者女中仕込の記

● 育兒衞生……加藤博士 警視廳醫部 山口鎮雄

● 男まさりの女

▼ 懷しい母 伊澤氏夫人

● この頃の料理、裁縫、家事…… 加藤氏夫人

女(この三)

東京麹町區飯田町四ノ四四番 東京社 電話番町二三三九 振替東京一一八一八 (全國各書店にて販賣す)


二人の女
何處から見てもあの奥様の
化粧姿の上品さ
屹と私達と同じよう
ライラック
エメラ化粧水
つねぐ缺さず
召すお方!
ライラック
エメラ
化粧
水
輸入元
理容商會
東京新橋金六町十五
電話新橋二三〇二番
振替東京二三〇〇番

女(にの四)



丹青　細木原靜岐筆



河崎蘭香筆

# 惡筆は一生の不幸

敬愛なる諸姉よ！諸姉は從來字の拙いため損失をしたことや恥しい思をなされたことはありませんか？手紙を書くたびにつく〴〵自己の惡筆なることに愛憎の盡るやうなことは無かつたでせうか？女子諸藝の中筆蹟が一番重きをおかれて居ります。御婦人として筆蹟の美事なることほど生涯幸福で利益なことはありません。

若し短日月の間に字が巧くなりたいと思ふ方があらば從來の習字法は斷然廢して、文明的習字法たる特許速成法で練習なされば從來如何なる惡筆の方にても羨まるゝやうな能筆家になられます。其方法を知りたき方は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會（電下三二一〇番）へ「ハガキ」で住所姓名を御知らせなさい。無代で委しき方法を御知らせします。近來類似物澤山出來御注意なさい。



女(ほの二)

# 乃木夫人哀悼畫報

# 新婦人

拾一月之卷發行 ▶本號に限り◀ 定價金三十二錢 郵税金三錢

千古に卓絶せる壯烈貞烈なる言行と風丰を滿載す

親の愛 石版極彩色油繪……川村清雄
墓畔紅涙 極彩色四頁掛……鰭崎英朋
皇太后陛下桃山參拜鹵簿……
皇太子殿下近衛師團行啓鹵簿……
將軍自筆自作軍歌……
丸髷裾模樣の靜子夫人……
其他御大葬に關する口繪插畫等

●喪中の將軍●將軍二令息▲乃木夫人追悼會●其他夫人及將軍●十二一重の夫人●夫人殉死當日の夫人の夫人の絶筆●夫人の柩車●夫人の辭世●殉死當日の將軍三圖●英國皇室待遇中の將軍●殉死前コンノート殿下陪乘の將軍●閑院宮殿下と馬上同列の將軍●將軍の戰死者法會●獨帝謁見の將軍●送葬砲車●乃木邸差遣の勅使●英國將校の勳章捧持●將軍夫妻の墓標

## 乃木大將軍夫妻殉死當日對座の肖像

堅八寸五分横一尺三寸グローイング紙グラビヤ式寫眞額面用

◉將軍殉死の日人生の煩累を去つて從容迫らず最后の記念として撮影せられたもの

本號の記事は將軍に親昵せる各名家が熱烈眞卒なる涙を以て將軍及夫人の性行を謹話せるもの字々金玉句々皆血なり殉死せる將軍及夫人は本號によりて永世に復活す

普通號として本誌の洗練せる記事は我尊敬すべき女流の爲めに沸々たる趣味を注ぐべき讀物を載す是本誌の特色

卷末 電話番號記入 金蘭簿添付

十一月家庭日誌 温度表 晴雨表 献立表 來客控 九星日曜記載

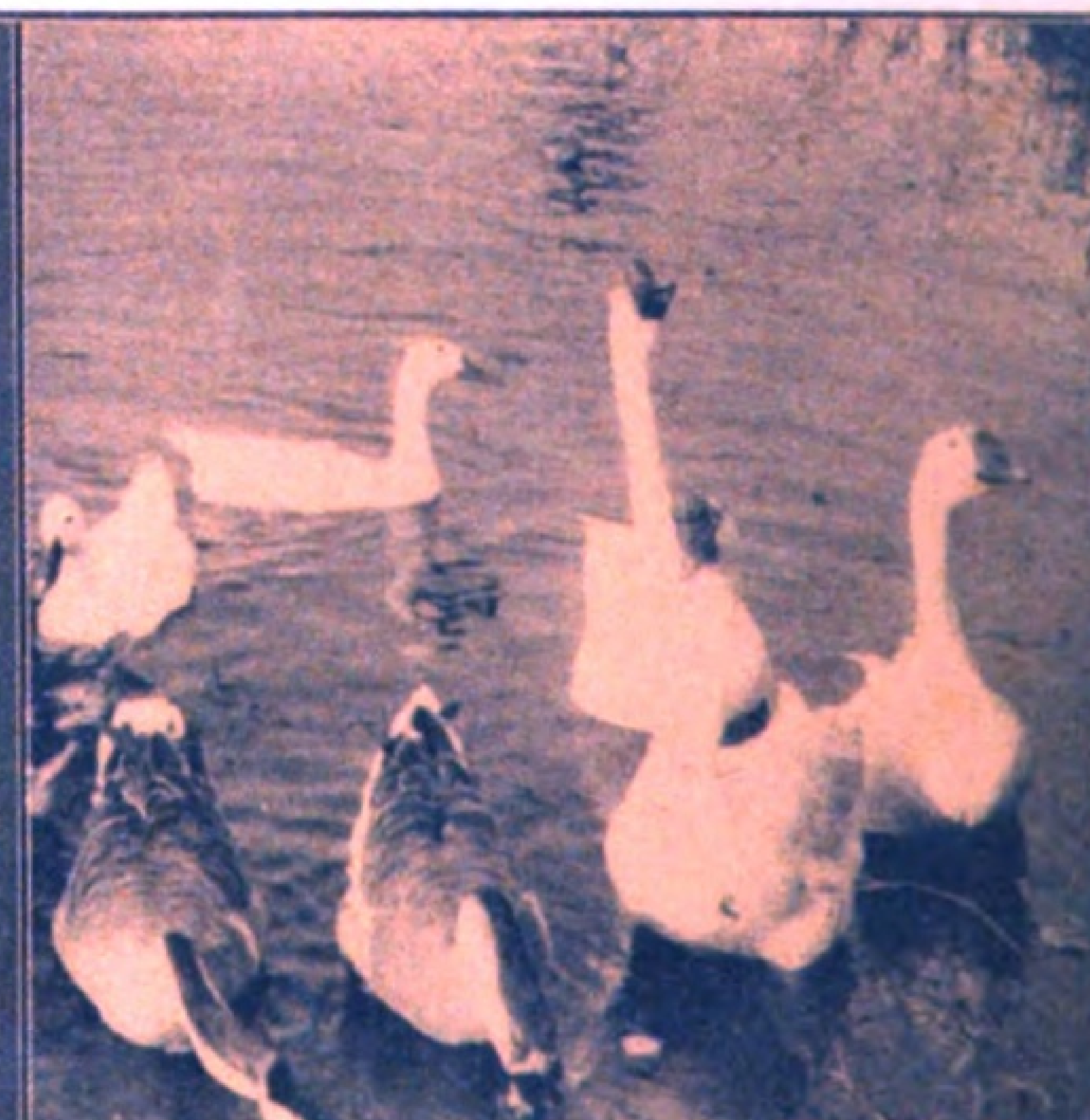
讀者と共に万斛の熱涙を注ぎ子孫の教訓とす

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六番 振替東京一七四四四番


菊！菊！菊！！
何と云つても菊の美に上こす花はない
恰も大學白粉で化粧した上に
ツバメ香水の薫りをとどめたら一つ
かくて女美人は菊の誇をたもつ

# 祝ひ着









狭霧晴れたる水邊の小禽、緣の日向に眠れる小猫、遊ぶも嬉し小春日和に

# こぼれ松葉

左圖 松田房子孃（日本橋）　右圖 比留間梅子（埼玉）



本年流行の

# ミューゼショール

年々花は同じけれど、御婦人が衣裳髪飾りのみは、歳々に同じからず、新を競ひ妍を競ふ流行品は、四季の花の如く目移りさるれど、今年のショールのみは更に迷ひ給ふに及ばじ、ミューゼ、ショール出でたれば!!!

ミューゼショールの眞物には此商標あり

TRADE MARK.
MUSE.
SHAWL.

三越、白木屋、松屋、松阪屋、米倉、關口、
其他著名ノ呉服店洋品店ニテ賣出す

女(への二)

女(への三)

女（への四）



虎の門女學館クラス會小集

# 水仙



上圖　岡部道子（京橋）　下圖　吉岡豊子、同　菊子（洋畫家吉朝育氏令孃）


最新通信教授
毎月二回講義錄發行
三ヶ月卒業 本會
獨特催眠法全部
十六法教授す
素人も一讀
實行保證
催眠術
近時無責
任なる單行
本を欺賣する
者あり大々注意
詳細說明書實驗錄
付會則等は無代送呈
大阪東區生玉
帝國神秘會通信部
催眠術
貸書の特典
本會々員には希望に應じその住所の遠近を問はず催眠術に關する書籍講義錄教授書等の類を無料で貸送する
貸費の特典
本會を卒業した後催眠術を以て營業せんとする者には資本として一定の金員を無利子で貸與し大に盡力する
質疑の解答
本會々員は斯學術に關し質疑ある場合は自由に何回でも質問することが出來て本會では親切に解答返信する
卒業證書
本會通信教授卒業者には教授科目全部を習得した事を證明するため所定の卒業證書を呈し會友の優遇を
購買の代理
本會々員には當市販賣品は何品でも無手數料で充分發賣所と註文物品とを調査したる上購買の取次に應ず
催眠術

女(その一)

明治天皇に奉仕せる名媛佳嬪の生活狀態
世人未知の別天地たる千代田大奥の眞相

大阪毎日新聞記者 齋藤溪舟氏著

結城素明氏裝畫

最新刊

# 女官物語

四六判最美本
定價金七拾錢
送料金八錢

▽伊藤公にも持餘され土方伯にも呆れられたる一種不可思議の潛勢力を有せる千代田大奥の女官達は如何に學習院長たりし乃木大將を評せしか▽伏見桃山の御寶壙に額つきて先帝御斂葬の御儀を目のあたり拜せしと云ふ柳原早蕨典侍、夕顏の燈籠に畏こき邊りの御輿を買へる園小菊の御方、皇太后陛下と御轡を駢べたる乘馬の佳嬪生源寺の命婦など花と匂ひ月と香る名媛二百餘名の生活は如何、大臣、大將、賢婦、才媛の面目は此書に依りて躍如として諸君の眼前に展開せん

女(その三)

發賣元 東京本郷一丁目九 日東堂 振替東京一二五五八番 電話下谷四三六二番

編物の練習



日本實業女學校手藝教室の一部

# 龍田川



上圖 新田目靜枝子　下圖 早川睦子（牛込）

# ●誰でも出來る子宮病自宅療法

一口に子宮病と申しましても其種類は澤山ありますが、其中で最も多い病氣は云ふ迄もなく子宮内膜炎でありまして、素人方の所謂子宮病とは大抵本病を指して言はれるのであります。

## ▲子宮内膜炎の病狀

子宮内膜炎の病狀としては下腹の緊滿又は緊引痛、腰痛、腰部と手足の冷感、不定の子宮出血頭痛、頭重、逆上、眩暈、耳鳴、月經不順など種々ありますが、取分け白帶下と申して膣内から分泌する粘々した下物の多い事が、本病の重なる特徴であります。白帶下と申しても總て皆同樣でありませぬ。黄色い鼻汁の樣なのもあれば、水の樣に澄んだのもありますし、又卵の白味の樣に粘稠なのもあれば、血液を含むだ膿汁の樣なのもありまして、其他種々樣々の種類があります而して毎日の樣に澤山下る御方もあれば月經の前後にほんの少しかない御方もあります、斯樣に種類の違ひますのは、つまり病氣が急性であるとか、慢性であるとか或は病氣の性質によつて違ふのであります。何れにしても多量の白帶下のあるのは、巳に病氣に罹つて居られる證據であります。

## ▲恐る可き帶下の害

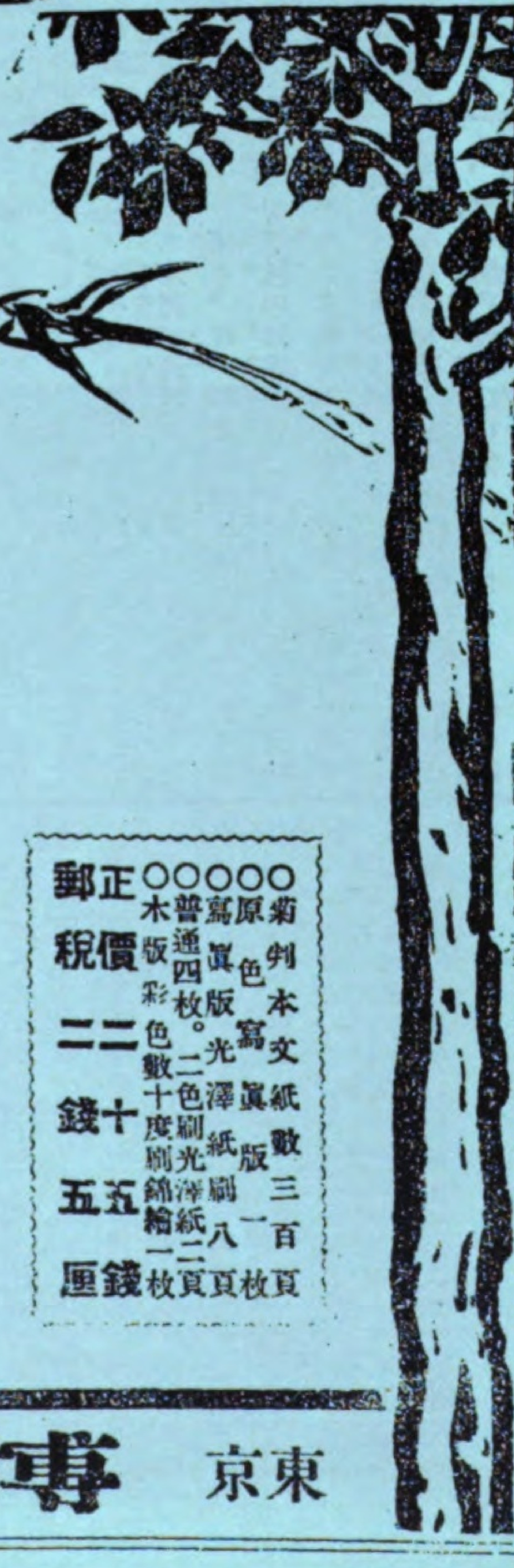
斯樣に白帶下と子宮内膜炎とは密接に相關連するものでありますが、特に此の白帶下の恐るべき所以は、姙娠を妨げて不姙症の第一の原因となる事であります。詳しく申せば子宮内膜炎から來る白帶下の分泌物は酸性を帶びて居りますので精蟲を直に死滅して了ひ姙娠の根本を絶つ事となるのです。又偶精蟲が死滅しないで卵子と接合する事がありましても胚胎した所の卵子の發育を妨げて、往々姙娠の中絶即ち流産を來す事となるのであります。つまり病的の白帶下と云ふものは、不姙娠の唯一の原因となるばかりか、餘り長い間多量の白帶下がありますと身體中の液體が消耗して、爲に全身の貧血と衰弱とを招き、從つて貧血症狀を惹起しまして、或は習慣性の頭痛眩暈、心悸亢進、手足の冷感などを來たすのであります、婦人病の御方に多く見まする所の頭痛、眩暈、逆上、耳鳴　手足の冷感などは大抵以上の理由に基くのであります、又子宮内膜炎には多くはヒステリー的の病狀り現はれるものであります即ち神經過敏となり物に感じ易く、さもない事に怒つたり、或は種々の取越し苦勞をして、くよ／＼物案じしたりするもので、御婦人の癇癪持は實に此の生殖器の病氣ある方に多いものであります。

## ▲誰でも出來る治療法

以上は其概略でありますが子宮内膜炎は一般婦人病の代表的病氣であります上に不姙の最大原因ともなることが御了解になり升左れば何誰も之に對する處置法は必ず心得て置く事が肝要であります、それには婦人科專門の大家醫學士北島佐藤兩先生の御著になりました『婦人病者心得』が一番完全で又一番平易で御座います、此方法によると大體の子宮病血の道は自宅で容易に療治せられ、御希望通り姙娠も出來ます、物は試しと云へば、理窟では病氣は治りません、現に身體に異狀ある方は勿論、何んともなくて、是迄一度も姙娠した事がない方、又は流産難産の癖ある方は、兎も角婦人病者心得を御覽になつて成程と得心が出來たら速かに本療法を試みなさい。後悔は先に立たずです。因に曰く婦人病者心得はハガキにて東京京橋新榮町笹岡省三氏宛申込めば無代進附せらる。

第十八巻第十五號……十一月一日發行

# 文藝倶樂部



一とたび『大川端』てふ長篇小説を公けにし次いで『小さと』に移り愈讀者をして其結末の如何に成行くかを翹望せしめたる小山内薫氏、このたび本誌に『結末』と題し、約百頁に滿つる長篇を物す清新の筆狹斜の情事を叙す。必ずや讀書界の歡迎を受けん。次に花柳小説の開山田村西男氏作『夢』を掲ぐ。津々たる情味は酌めども盡きざるべし。第三に海賀變哲氏作喜劇『たちばな』を收む。滑稽の眞意義を味はん人々には絶好の脚本たらむ。倘其れ新講談に至りては細川風谷氏得意の讀みもの『柴田外記』を載す、千古の忠臣が面目は誌上に躍如たるべし。活社會、長廣舌其他の各欄何物をか讀者の腦裡に印象せずんばあらず、切に倍舊の愛看を祈る!!!

○菊判本文紙數三百頁
○原色寫眞版一枚
○寫眞版光澤紙刷八頁
○普通四枚。二色刷光澤紙二頁
○木版彩色數十度刷錦繪一枚

正價二十五錢
郵税二錢五厘

文(その二)

東京 博文館 本町

●美顔と化粧法 又製本出來ました切手三十錢にて御分ち申上げます ●著者 東京神田錦町三ノ二 高柳こう子

# ●色白くなる

色黑き方、靑き方、赤すぎる顏の御方は勿論、寒くなつて御顏のあれて困る方は切手貳錢封入御手紙下さい必ず生れかわつた程色白くなるよい藥を御知らせ致します ●東京神田錦町三ノ二 高柳こう子

●生れつきの人が何で藥位で色が白くなるものかとお思ひなさる方もありませうが實際私方の藥を用ひるとふしぎにも色白く美しくなります。それで只今まで寫眞や織物や菓子や魚類や其の他地方の物產などをば、色白くなつた御禮にとて御送り下さつた方多く、禮狀などは大きな箱に山ほどになりました。此の數千通の禮狀はどなたにも御出下された方には御覽に入れるので皆私方の藥の效能には驚きなさいます。其の禮狀の二三通を御覽に入れませうか

●一筆御知らせ申上げますあなた樣の御蔭にて美顏散を愛用致しました處はじめて用ひました時少々白くなつた樣な氣がいたしそれから二日三日と引きつゞき用ひましたら五六日でハタケ等なほりました十二三日目には自分ながら美しくなりましたあなた樣の爲めに性來色黑くて困つて居りましたのにわかに白くなつてこんな嬉しい事ありませんわ、厚く御禮致しますうれしさのあまり一寸御禮まで(神田連雀町の御方より)

●文して申し上げます先達は早速御送り下されありがたく存じ候引續き使用致し候ところ三日目より顏がすべ〳〵となり昨日叔母樣まゐりたいさう色白くなりましたれと驚いてゐましたこれも皆貴女樣のおかげ故これから友だちにすゝめます先は嬉しさのあまり御禮申しあげます(神奈川縣橘樹郡の御方より)

●寒さ相增し候ところあなた樣には御機嫌よくお暮しなさいますか御伺ひ申上げます其節は早速御送り下され有り難く存じ候まだ一袋も使はぬ内きゝめあらわれ此頃大へん色白く成り誠にうれしくあなた樣は私に取つては美人の神樣と日々拜んで居ります先は文して御禮申上げます失禮のところは御許し下さい(京都府舞鶴の御方より)

●秋姫のけはひうるはしく四方の景色も一と時雨毎にさびれきてあはれ冬ざれの姿となり候常さへいとう身の上は又來る此冬をいとはれ候ものを貴女樣のお藥をお願申してより顏もあれすきめも細かになり化粧も思ふ樣になりいとも嬉しき極みにこそ以下略(神戸市の御方より)

---

東京產婆看護講習會編纂(總ふりかな附) 八月一日發行

## 產婆試驗及第秘訣

ポケツト形總クロース金文字入正價金七十錢

本書は最近數年間東京府を始め各府縣及本會に於て施行せし產婆試驗問題答案を悉く蒐集し願書書式其他を掲載し產婆受驗者無二の參考書なり

東京市四谷區內藤町一番地 東京產婆看護講習會

---

第十五回自宅獨習生募集!!!

## 產婆科 看護科 講義錄

產婆科六ケ月卒業 看護科四ケ月卒業

本講義錄は斯道の博士學士ドクトル諸氏によりて講述せられたる簡易にして何人にも解し易き書なりかな附の現代唯一の模範講義錄なり、今や本會卒業生にして內務省產婆及看護婦開業試驗に合格せし者千人に達す時は入會の好機、希望の諸姉よ期を逸する勿れ

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

規則郵券三錢

東京市四谷區內藤町一番地 東京產婆看護講習會

女(らの三)

美顔術最新白色法及

脫毛術を行ふ

神田駿河臺袋町（電本一七七一）

東京美容院

院長北原十三男美容術視察の爲

渡歐中不在中の處從前通業

今般歸朝し務に從事

藥品部發賣品

完全なる脫毛材料　漂白化粧料に
きびそばかす藥　隆鼻器隆鼻劑有力
なる毛生劑等美顏毛髮に關する新式
器具藥品一切說明書郵券三錢を要す

最新式

電氣應用

美顏術器發賣

（說明書贈呈）

定價金十五圓

千個限特價

金十二圓

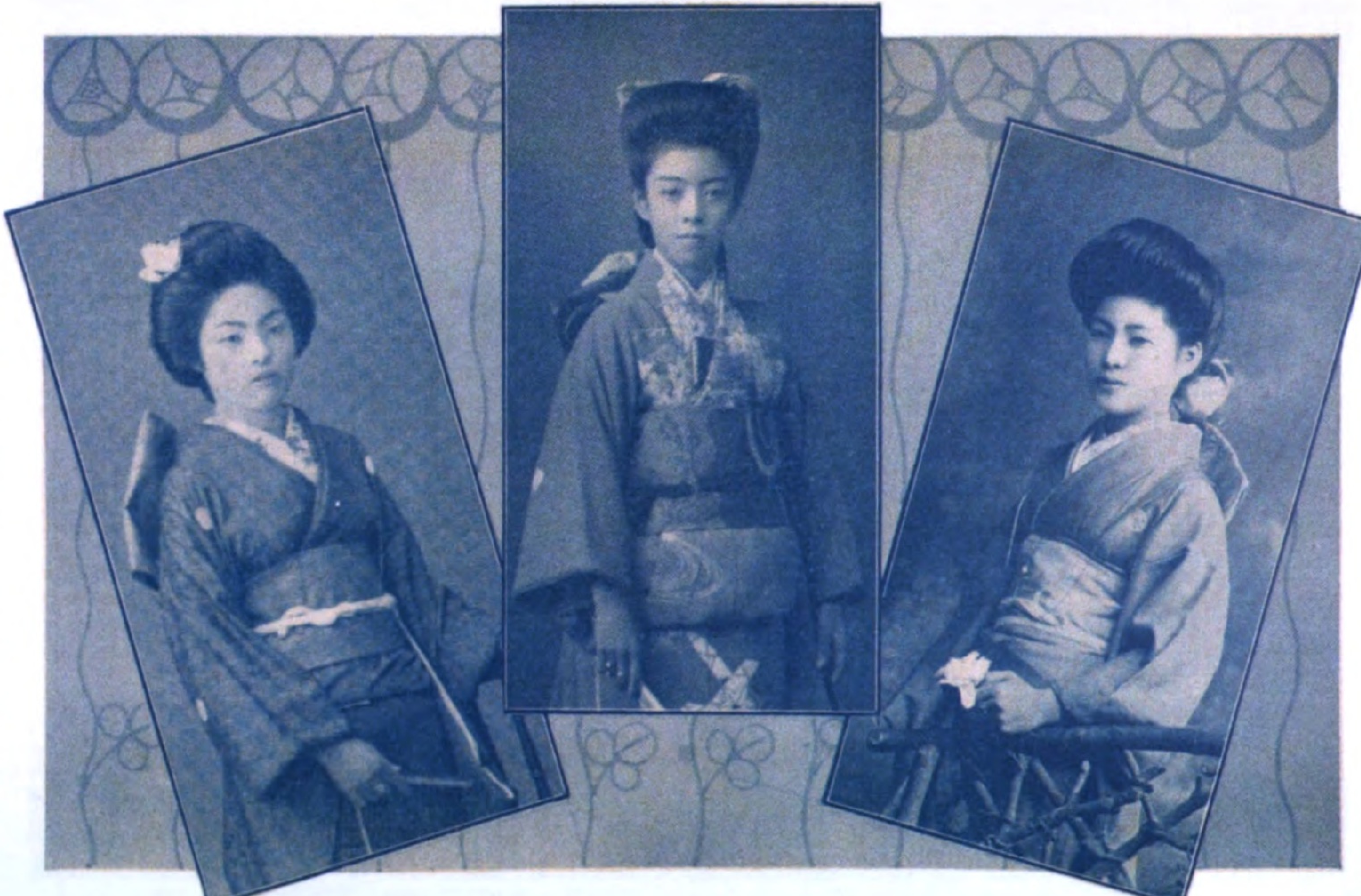
女（ちの四）

# おもかげ



上圖右 中山米子（本郷） 左 田村とし子（四谷） 中 岡島理貴子（京都） 下右 明石きよ子（函館） 左 堤保子（奈良）

## 花嫁栞



右、兵頭正懿壽子。中、式部官渡邊直達氏令孃貞子。左、陸軍少將明石元次郎氏令孃らん子。

# 欺された」

―と思って近頃新聞雑誌等で大評判の▲專賣特許エンゼル香油を是非一度御試し遊せ專賣特許エンゼル香油は現在の毛髪を漆の如く光艶を出すのみでなく毛根の最大肥料となる新發見の高等香油にて一度御用ひあれば終生お忘れ遊ばす事の出來ない本品獨特の奇効がお分りになります



又くせ毛の方はB號エンゼル香油御使用あれば如何なる天性の縮れ毛と雖も自然に矯正する不思議の特許品です正價其他の詳細は返信料を添へ東京本郷東片町十五番地エンゼル商會へ申込あれば説明書を送呈致します

尚本品は一流の呉服店又は著名の小間物店化粧品店には大抵販賣して居られ升が大阪にては目下同名異品が現はれ紛らはしう有ますから御求の節は必ず東京製の專賣特許エンゼル香油と御指定を願升

---

# 美人となる

▼佛國ノルド會社美顔術師の發明による

このホーカー液を使うて御覧なさい

白味劑美顔料

白粉に優る

## ホーカー液

本品特効

▼色を白くすること
▼きめを細かくすること
▼ニキビ、ソバカス、アセボ等に特効
▼白味液にして紳士にも婦人にも向く必要品




御買上の際は必ず●上記の商標と堀越●二八堂の名義に御留意願度候

定價
特瓶八十錢
小瓶廿五錢
送料八錢

有名なる和洋小間物店に販賣す品切の時は直接御注文を乞ふ此際特に送費無料

東京日本橋區馬喰町四丁目

## 堀越二八堂

女學世界愛讀者は特に一割引 切取

女（りの一）

女(りの三)

女(リの四)

# 第二回 新學期開講

**目下入會の最好機――各種の大特典あり**

「女子の學校生活には種々の危險と弊害との伴ふを免れず何人も進歩せる通信教授によりて安全なる女子獨習機關の出現を望みつゝありしが、本會今新に本邦女子教育界の泰斗下田歌子女史指導の下に、最新最良なる女學講義錄を發行し、以て此希望を完ふせしめんとす。小學校卒業を以て女子の甘んずべき時代は去れり。乞ふ速に來りて本會の門に學べ」

# 大日本實修女學會

東京駿河臺

電話本局 三〇〇二番 三〇〇四番 三七〇七番

規則書 見本つき 無料進呈



## 諒闇中女子の心得べき事柄

「に就て、本會々長下田歌子女史は、本會機關雜誌女子の友に於いて每號懇切明到に講述せらる。眞に是れ一般女子の三誦すべき目下の緊要文字なり。尚ほ女子の友は婦人の必讀の評論史傳家政等の記事を滿載せる雜誌にして本會々員に限り每號無料贈呈するものとす。」

# 女學世界

第拾貳卷

第拾五號





# 風俗鏡

磯千鳥

女の見たる女は、女の見たる男より、なべて醜きが多きは我一人の思做にや。男を愛してしか見ゆるに非ず、魂を落附けて冷に兩者を視較ぶるに常にさ思ふ。

第一男には鼻筋凹み鼻蠶豆の如く安居たるは稀也女の多くが頬膨れ横顔拙きは如何。

一説に曰。我と我思ひくたしたる我邦の女は鼻高かるべき由緣なしと。然らば女優の鼻筋缺けたるは如何、思ひ上りたる許にては鼻高くならぬ物と見ゆ。

第二に齒の蟲食ひたるも女に多し。蟲食ひたる隙に、淺ましき糟等溜め色黄ばみたる」かゝる女は朝毎にそそけたる竹楊枝使ひ、其柄の處斜に折りて、空ゑづきして舌かく。亦齒齦捲れ上り齒の筋々に蒼く苔むしたるは、さても嚴となる迄磨かぬ積にや。更に下賤なるは襟より摘楊枝拔き、左の手を拜む樣にして人前にて齒せゝる癖なり

總じて男も女も我めあはせられむとする人の、心樣はともあれ齒の美醜にこそ心懸くべきなれ。男の亂杙齒、煙草にて內側黒みたる人には神かけて嫁がじと思ふ。一度嫁がば一生を契るなり。一生を契る人が笑ふ度に沫飛ばし、脂つける齒したるを見るよりは、鼠がひくてふ婦こそ中々に戀しかるべし。

況して鼠の如く細き齒、あるは山櫻のはなよりはの

先に出たるはをも、物ともせず、我妻と守れる男はさても淺ましく見ゆ。吻つけなどもすさまじかるべし。人を見上ぐる如き眼の力は、三十路を越しても失せである也。

斯く女を貶さば、さても男は思あがりて喜ぶらむ。されど男の惡きは醜に非ずして汚穢也。面皰と云ふ物は唾棄すべし。頬骨のあたりにふつ〳〵と膨らみたるが先稍黑みたるも憎々し。

さりながら十五六の少年の、女の言葉かくれば颯と顔赧らめ、とみには答もえせぬ眼の下の邊などに二つ三つ桃色がかりたる面皰は此上なく可愛ゆし。若し我弟なりせば膝に枕させ痛しと言ふ迄纖き指にて押へ遣る物を、など思ふも廿女の酔興也。

げに牡丹の新芽の樣なる少年の活々しさを外にして男に眞の美しさはある物にや。これに較ぶれば女の、



笛の音や雛ともしらす秋の人　（紅葉）

面皰にも増して胸つかゆるは若き男の顔の肌なり、汚げに脂にじみ柚子の皮の如く厚げに見ゆる。厚顔しとは厚皮しきにて、斯る顔の謂にや、いとをかし。

○

女が世人の批難をも招かず、後指をもさゝれず、所謂淑女の鑑として生立たむには、苟も親の心に違背あるまじきこそいみぢけれ。

世の父親母親の多くは娘をば商品の如く心得たり。一日も早く年取らせ、蟲つかぬ内に、家運の衰へぬ内に、少しにてもよき婿がね得てむと懊惱す。婿がねは少しばかり思慮足らず

所謂お人好と呼ばるゝ流の男なりとも、並々の親には苦にもせず、『氣苦勞なき家、安全なる家』と反りてこれをよろこぶがあり。

就中不屈なるは、姻戚を利して己の名利を滿さむとし、幸先よくば義父の名によりて金等借るを初より工める親あり。

かゝる親は、賣物に花飾れてふ悲しき諺をも怙しとせず、娘を嫁に遣をば「片附ける」となん呼ぶ。誠にいみぢき考也。『一人娘は家門の飾。されど二人の娘は其一方の男なるに如かじ三人四人は家運の呪』云ふ言葉は日頃耳にする言葉也。



ほしとのみまかへろ菊のかをりかは空たき物の心ちこそすれ（崇德院）

『娘は何れ他家に遣る物』との念は常に親の心を去らず。かゝれば役にも立たず、厄介多き娘は、賣物に花飾る積にて、女學校型の如く卒業させ、當人が考には「孝」の道を以て柔順を強ひ、己の欲する處に片附くる事となるにやあらむ。げに口姦ましき鶯鳥さへ我生し仔は孵す物を、——これは家鴨の如き親也。

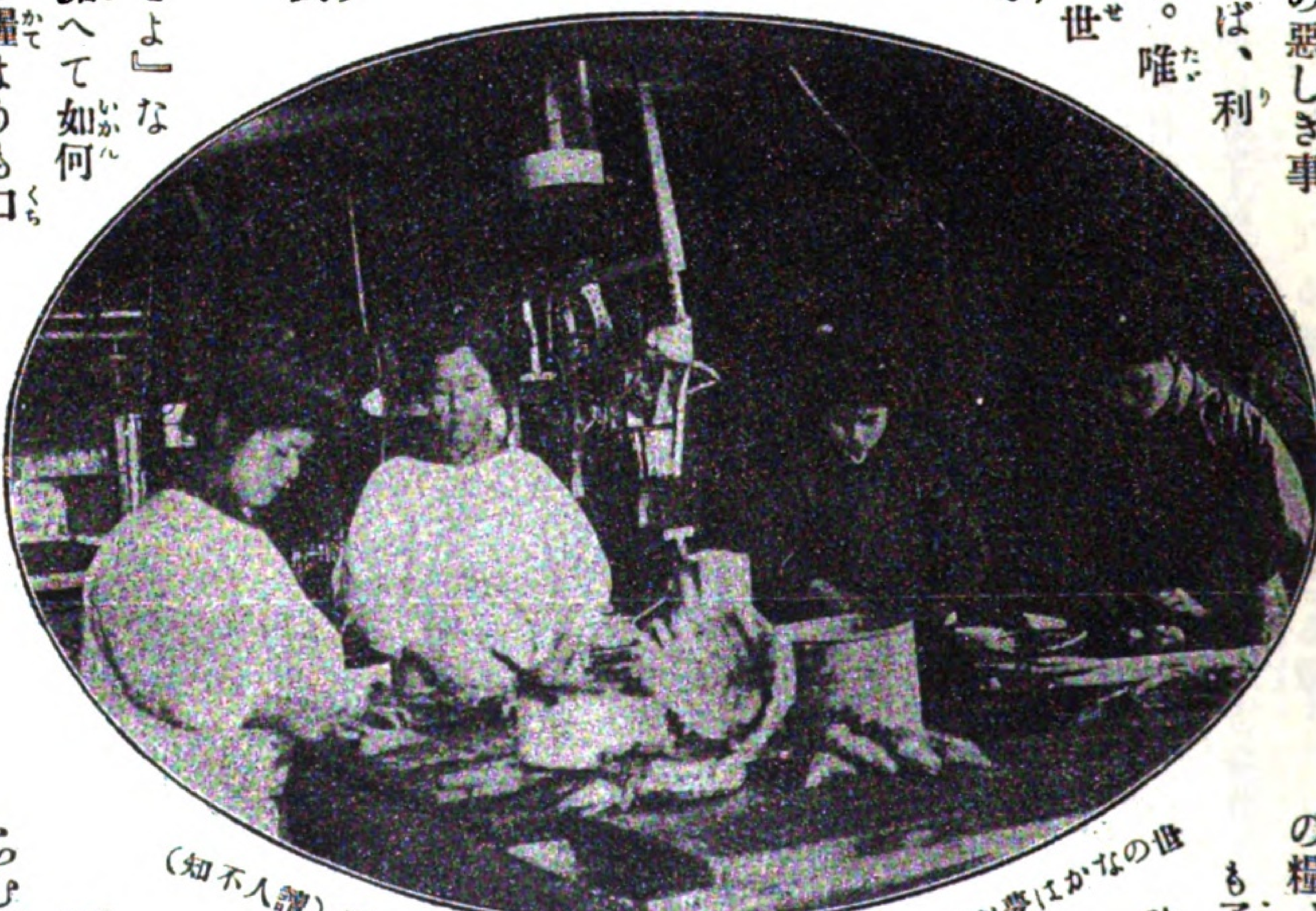
親の心子知らずとは誰が云ひ初めし言葉にや。子の心、親の知らぬ折も多かるべきに。

○

三十女のしたり顔こそ、をかしくも亦悼しけれ。普通の三十女は多くは　三

人四人の子持たぬはなく、世の惡しき事穢はしき事、總て、見果てつれば、利慾を離れし事には腹も立てず。唯日々の生活に追はれ、子供の世話に忙しく、暇あらば針箱等に凭れて居睡すめり。今樣に育ちし女には間々三十路越すとも若き心地にてあるがあれど　そは極て稀也。多くは、『我世既に去れり』と思へるにや、姿にも心態にも身嗜の餘裕なく、火の車に乘りたる如く息もつきあへず、其日其日を渡るなり。

『今少し家の中取亂さぬ樣せよ』など夫の云へば、此乳呑兒を擁へて如何ともし難しと答ふ。萬事心の糧よりも口の糧、斯く足手纒出で來し上はと、いつも子供のあるを喞ちつゝ、さればと言ひて孩兒に手の屆くにも非ず、眼の淚に漾う許になる迄打泣かせておく。



世のなかは夢かうつゝか現とも夢共しらずありてなければ（讀人不知）

○

さるにても取るまじきは年也。

同じ仕業にても妙齡の女のすると、色も香もなき女の振舞ふと其間い自ら逕庭あり。

窓の下なる机に凭れて、頬杖つきたる乙女、時々嘆息する胸の邊の圓らかに、つゝましく波打つも美しかるべし。況して所詮なげに爪等かむ風情は、類なからむ。されど同じ机に凭りていかばかり

嘆息つくとも、三十路四十路なるは興もなく『定めて拂の足らぬ屈托なるべし』と邪推すなり。殊に爪がむ癖に至りては　是にありては汚穢の念を抱く、糊附物等しごく爲に剪までおきしが、先黑く延び延びたるを糸切歯にてこら〳〵と食ぶるが如く嚙み碎くは如何

ほつれ毛を蘭の葉の手つきして搔きあげさては、瞳と瞳とを打寄せて物見る癖も、乙女にしあらば美し、況して…

喉元過ぐる紅の酒の透き見ゆべしと思はるゝ許り、白き頭の邊より胸へかけて、薄着したる乳房の、帶の上徼に膨らみて見ゆる女の姿

夏ならば薄き浴衣、肌の暖さに、稍しなやかになりて、丸き肩にひたとつきたる、何氣なく手觸るれば、吸ひつくごとき、一縷の温味の我手に通ひ來るなど、若き男ならずとも誰か胸とゞろかさゞらむ

これに較ぶれば年とりたる女の仕業は皆わるし。

孩兒抱きたる話好の母は、抱ける子ゆすりあげ〳〵て話す、猶も子のむつかれば　だらけたる胸かきまさぐり、先黑くなりたる乳房出して、澁汁と涎とに汚れたる乳呑子が口の邊に押食はす。

その他――

腋香、高きも三十女に多し、かく臭き妻も夫のみは薫大將の香の如く　いと尊くも嗅ぎなすらむ

眉毛を鉛筆にて光らせたるを誰も心附かずと思へる女

前髪態とほつらせ、額の出でたるを少く見する女

根のぬけたる髮を、簪の脚にてかしかしと搔く女

三十女の心様は更に多様也

未だ三十にもならぬに、氣も心も老け込みたるは一十女の内に入るゝを可とす、かゝる女が姑となれば、甚だ頑固となる也

人の顔さへ見れば、所得税出す苦惱を訴ふる女、富籤の當撰、大金拾ひし夢等頻に見る女、僅許の事を儉約して大損を見る女

我より身分上なる友とは交はらず、其を名利に阿らざる徴と誇れる女、されどかゝる女は多くは少さき嫉

妬の念に驅られて長上と交はらざるなり。

格子の蔭等より絶えず道行く人を眺むる事に興味持つ女。

下駄、草履など突きかけ、三足四足にして初て之を穿く、心遣しき女。

夫が物は我物、我物は我物と心得たるをんなは、さして心の咎もなくして臍繰と云ふ物造る　臍繰とは何の謂にや。されどその持主は臍繰とは言はず、自由になる金、手元にある金、或は内證の金など稱ふ。かゝる筋の金は得て不慮の出來事に失ひ易き物也、惡錢身につかずの類にや。

食事などの折、脂濃き物は嫌ひ嫌ひ、と誠に嫌なるごとく顏しかむる年とりし女、『魚類肉類を好まぬとは不思議なる癖よ』と若き輩の訝かれば『女が三度の食事に肉よ肴よと云ひ立てゝはげに一日も家は保つまじ』など云ひてその皿にも箸も觸れぬ女、

美しく飾りし菓子果物の類、人の贈る毎に勿體なしとて蓄はへおき、日數經ちて黴生へ或は腐れかゝりて初て『腐らぬ内に…』など言ひて、いつも〳〵腐れかゝりし物のみ家にてたぶる女。



ひきむすぶかりほのいほも秋くれて嵐によわき松蟲の聲　（定家）

知人の緣談をきゝて眼異樣に光らす女。

見切賣、さては何割引とさへ云へば、不用の品、己の意に滿たぬ物迄買求むる慾深き女。

同じ着物を幾度も染め更へて喜ぶ女。些細の襤褸切、破れ足袋等暇さへあらばつぎあてゝ喜ぶ女。

犬猫小禽の類を愛する事夥しく棄猫棄犬のある毎に、皆我家に連歸りて、白、雉子、黒なんど名づけて樂しめる女。

○

淺ましきもの一つ二つ。

辭世と云ふ物は、我邦にては猫も杓子も之をよむ、癡情に果つる女、死刑囚なども少し心きゝたるは必ずこれを詠む。されど日頃見る辭世の句に優れたるは尠く、多くは山櫻などになぞらへていと陳腐に詠じ、時としては狂歌川柳めきしさへありて悲哀の情添はず。



夕されば小倉の山になく鹿のこよひはなかすいねにけらしも　（岳本天王）

かゝる拙き歌見る毎に、『などて一生一度の死際に今少し秀句よまざりつらむ、かゝる歌殘さむよりはむしろ、一言の苦惱の聲をも發せず默默の裏に死なざりつらむ』と口惜しく思ふが常なり

亦此頃の書物も淺ましきが多し。

一度小學教師の誤字當字の事公にせらるゝや西も東も相呼應し、雨後の筍も啻ならず生れいでし書物の數々は

作文鑑、誤用便覽、續誤用便覽、增補日用辭典其他數限なきこと、かの不如歸の歌　新不如歸　滑稽不如歸など思ひ合されて淺まし。

「チゴマ」と云ふ探偵譚の祖家爭は誰が烏の雌雄を知らむ。いづれも僞本あり何々の名に御注意々々と書たるよ。

其他大喪の事に關りし數々の書は申すも畏多し。今は乃木大將の御事など綴りしが、めまぐるしき迄出づる也。

―枝のきく折るほどにあらたまの千年をたゝにへぬへかりけり(貫之)



皺は齡の故もあるが要するに筋肉の衰弱から生ずるものである、鏡に對つて顏を見ると、先づ左右の眥に一筋二筋の皺を發見する其二筋が三筋となり五筋となつて、次第に顏一面へ擴がる、到底齡から起る皺の豫防は出來ないが、朝夕溫湯で顏を洗ひ善く濕氣を拭いた後、手の平にクリームを塗り、鼻を中心にして十五分時間も幾度となく撫で擦り、更に逆にこれを拭き取る、これは顏の曲線美を發達させる效めがある毎朝顏を洗つた後、蜂蜜へ少しレモン水を交せたものを塗つて前記のやうに摩擦するのは更に好い。眉の運動は、表情には必要なれど、過度の運動は品格に障るから止すが好い、又た眉を寄せる習慣は避けるが好い、眉を寄せると、眉間に見惡い皺が出來るから平生から成るべく左右に離して決して皺をよせないやうな氣持にするが好い。（山尾同春堂院長）



# 歐米家庭生活の眞相

## ホーム、スヰートホーム

文學士　内ケ崎作三郎

### △家庭と家屋の別

歐米の都會では一軒の家に一つの家族の住んでゐるのは少くて、多數の家族の住まつてゐるのが普通であります。獨逸のベルリンなどには一軒の家に五十幾つの家族の住まつてゐる處さへあると云ふ事です。さう云ふ家では階段や廊下は道路と等しく　其の兩側には嚴重なる扉があつて、外出する時には一々錠を卸　ておかねば、何時竊盜に入られるか分らぬのであります而して、室を幾つか隔てゝ他の家族が居るかと思へば階段を一つ昇つた處には、まるで知らぬ人が居ると云ふ風です。譬へば旅館にでも泊り込んでゐるやうで、家庭に住んだ氣持はしかねる。米國などには五十階もある高い家があつて、其の一棟の中には、工場もあれば事務所もあり、普通の人の居室もあれば倶樂部、料理屋もあると云ふ風でありますから、さう云ふ家の高層に生活すれば、風船に乘つたと言はふか、空倉（窖の反對）に居ると言はふか、兎に角、家とか家庭とか云ふ感じは至つて薄いのであります

### △獨立好な英人の家

然し、歐米の中でも英國人は、前のとは少しく異つた傾向をもつてゐて、餘り他人と密接して住む事を好ます、なるべくは一家族で一軒の家を構へて、家族團

欒を樂しむと云ふ風があります。故に、ロンドンなどでも旅館でさへ二階か三階の家が最も多く四五階の家は至つて稀れです。田舍へ行くと大概は二階で、三階の家さへ少いのです。而して店のない家なら、街道に沿うて先づ庭があり芝生をつけたり、植木、草花を植ゑたりしてあつて、街道との境界には鐵棚を引くとか塀を繞らすとかしてある。處が米國あたりでは、庭もあり植木も植ゑてあるが、垣根がありません。斯う云ふ點から見ても英吉利人が他人と離れて生活する事を好み、獨立の精神に富むと云ふ傾向を知る事が出來るのであります



### △便利のやうで不便な日本の室

日本人は家名を重じ、家門の爲めを思ふ精神が強く、家庭は他人に犯されぬやうにして、生活する傾向があります。此の點は英人とよく似通つてゐます。けれども、日本の家屋は襖とか障子とか云ふやうなもので室を仕切つて、誰れでも自由に出入が出來るやうになつてゐます。（勿論日本の一戸は歐米の一室の如きものなれど）歐米の室が一々嚴重な錠が卸すやうになつてゐるのとは、大分趣きを異にしてゐるのです。日本の室は區別とか、獨立とか云ふ事は、缺けてゐるやうです

が、一方から見ると日本室は至つて便利である。歐米では寢るのは夜のみで、寢る爲めには寢床と云ふものが出來てゐるのですが、日本室にはスッカリ床が敷いてあると等しく、何時でもゴロリと寢轉ぶ事が出來る。至つて便利だと云へば便利である。けれども働くには甚だ不便利です。日本に偉い人が餘り出ないのは、室の構造が勉强するに不便利な爲めであるかも知れません。實際、窮屈極まる日本の室で五六時間も續けて勉强しやうと思へば大變である。殊に、日本では朝來た客が、疊の上に長くなつて話し込み、午も過ぎ夕方になつても歸らぬと云ふやうな歐米人から見ては馬鹿らしい風が少くありません。之れでは、どうして勉强など出來ませう。



## △家族團欒の味

英國人は一般に金持でありますから、其の家も、室の裝飾も立派であります。そして主人の室は勿論、妻君の室、子供の室と定つて別々にゐて、時を限つて一室に集りますが、常には皆なそれ〴〵の室に居るのです。從つて仕事をするにも、勉强するにも甚だ便利であります。獨逸人も金持でありますが、英吉利人には叶ひません。從つて其の家屋なり、室内裝飾なりが、英吉利人には遠く及ばないのです。

英國人が家を重んじ、家庭を大事にする事は有名でありますが、彼等はホーム、スヰートホームと云つて、

家庭團欒の樂みを無上のものと心得て居るのです。英國で商店、會社等の始業は大抵午前の九時ですから、其の勤務者は八時前後に我が家を出ける譯です。そして夕方は早い者なら午後の五六時に退けるし、勞働者でも七時前後には皆な歸宅する。殊に午飯の時に我が家へ歸るものも多いと云ふ風で、一家團欒の時間は中々多いのです

△樂しき食堂

で、彼等の最も金をかけて飾つてゐるのは先づ食堂であります。次ぎが書齋、應接間と云ふ順序ですが、安樂椅子、肱掛椅子、圓卓のやうなものから　額面、置物の彫刻等の裝飾品に至るまで、惜しまず金をかけ、愉快に食事が出來、勉強が出來、應接が出來るやうにつとめてゐます。其の裝飾の方法も日本のやうに、今日文晁のものを掛けたら、明日はそれを外して探幽を掛けると云ふ風でなく、有りつたけのものを皆な出して並べ立てる、殊に日本人などの異樣に感ずるのは、陶磁器の皿に支那繪や日本畫の畫いたのを壁一面にかけ列ねた裝飾である。其の並べ方には中々苦心すると云ふ事であります。それから、寢室は質素を旨としてあり　勉強室などは光線の具合等に十分注意して造られてあるやうです。



處が、日本の家屋はどうかと云ふに、どこでも客間丈けは中々立派にしてありますが、茶の間、寢間、臺所などは、金も餘りかけず、從つて甚だお粗末であると云ふのが普通です。之れでは愉快なる家庭生活を營む事は

不可能であります。要するに日本人は眞實の生活に對する趣味が低いのではないでせうか。

## △婦人本位の家庭

英吉利の家庭は　日本などのそれに比して女本位の家庭であります。然し、米國あたりに比べると、まだ餘程男子の方が幅を利かせてゐるやうです。それかあらぬか、婦人參政權の運動と云ふやうな大變な運動が起るのです。一昨年の六月なかばには一萬五千人の婦人が行列し、ブラモンド夫人が馬に乘り之れを率ゐて市中を練り歩いた。又戴冠式の時に、四萬人の群集が示威運動をしました。

一體どう云ふ譯で斯う云ふ運動が起るかと云ふに、英吉利を初め、獨逸にしろ、佛蘭西にしろ、男子に比べると女子が損をしてゐる。そこで、之れを取り返さうとするので、參政權運動の如きも起るのである。米國の婦人は男子に比して損をしてゐないから、自然さう云ふ運動も起らないのです。

處で、何故に英吉利では女子よりも男子が幅を利かすかと云ふに、之れまで國を創め國を興し、今日の隆盛を見るに至らしめたものは凡て男子であつた。政治も男、實業も男、精神的事業も男、凡て男子の力に依つて今日あるを得たのです日本でも、支那でも、又露西亞でも恐らく殆んど凡て



飴屋の笛吹く門や鳳仙花　文路

の國が然うでせう。で、今後益々國威を發揚し、之れまでの名聲地位を損せぬやうにするには、矢張り男子の力に俟たねばなりませぬ　偉い男が居なくては國家が維持されぬ。其處で、妻君も夫に對しては一歩を讓らねばならぬ　之れ即ち女子が幅の利かぬ所以であります。

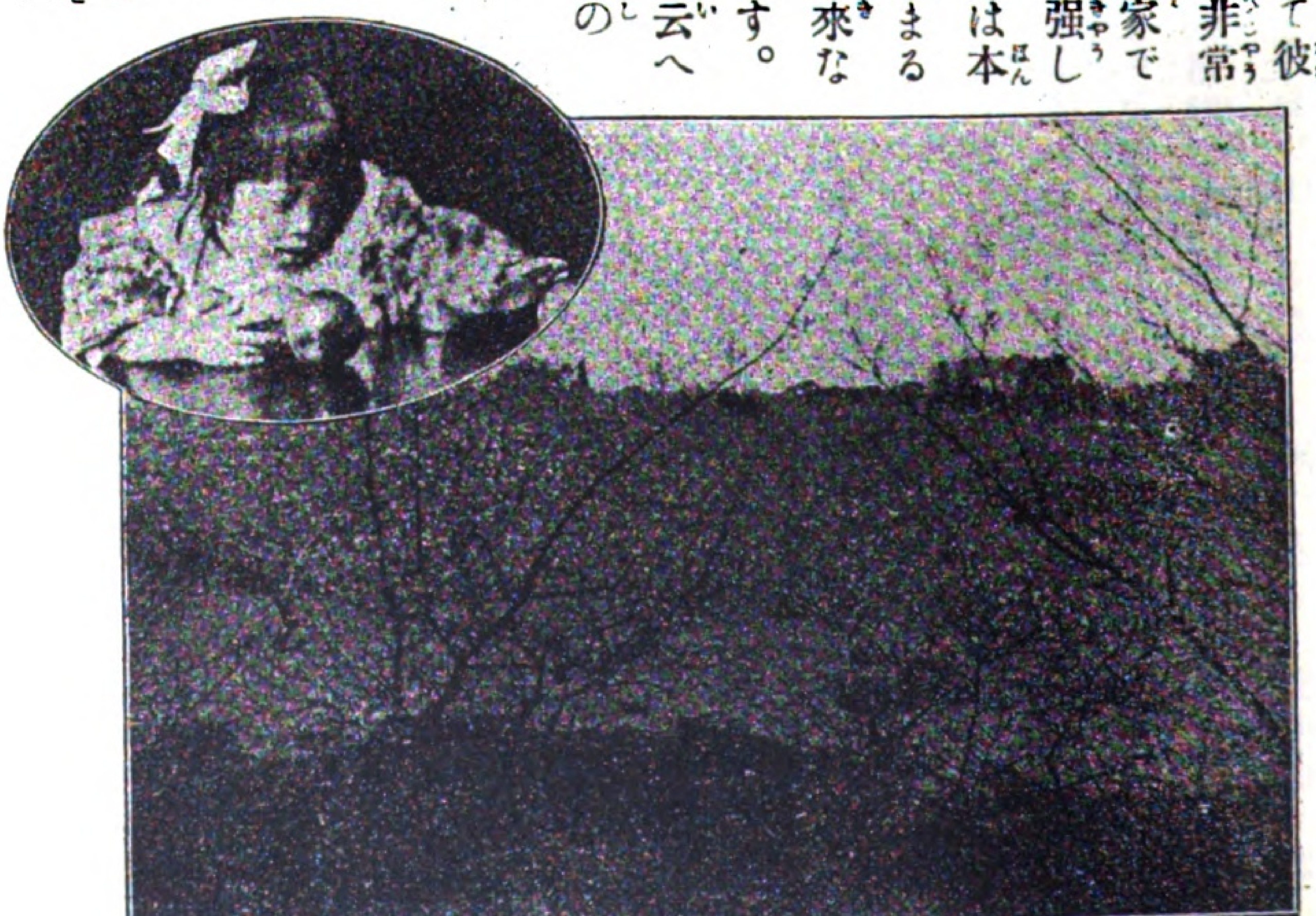
## △激烈な生存競爭

些細な事であるが、英人は女子よりも男子が衣服を澤山もつてゐます。クリケットをする時、テニスをする時、馬乘、魚釣をする時等、それ／＼特別の衣服を着る。男子の方は中々贅澤であります。つまり之れは男子の生活を樂にするやうに出來てゐるのです。

今や英本國には四千三百萬人ばかり居ますが、之れは激しい生存競爭の勝利者と見る事が出來ます。普通以下のものは、到底狹い本國に止る事は出來ませんから、加奈陀とか濠洲とか印度とか其他の殖民地とか外國とかへ散り／＼バラ／＼になつて了ふ　其の後に殘つたのは一粒選りのチャキ／＼です。

而して彼等は皆非常な勉强家です。勉强しなくては本國に止まる事は出來ないのです。

一例を云へば、私の仕へた先生でドクトルのカーペンターと云ふ人



は、六十六歳の高齢でしたが、朝は六時に起き、夜は十時に寝ね、其の間の時間を有益に使はれるのでした。そんな風にしなくては生存競爭の世の中に勝者となる事が出來ないのです。

### △英米婦人氣質の相違

米國などでは、家の下婢でもなか／＼靴を磨いては呉れない。で、二十錢も出して靴磨の手にかけるのです。處が、英吉利では寐る時脱いだ靴を出しておくと下女か下男が磨いて呉れる。田舎などで下女や下男のゐない處では、主婦さんが磨いておいて呉れます。英吉利のえらい處は此の邊にも現はれてゐます。つまり、女子が威張らないで、男を男として立てゝ縁の下の力持をする、之れなどは英吉利の家庭生活の大なる特色であります。

又、夏期休業には一二週間の旅行をする。那威、瑞西、加奈陀などへは盛んに出かける。少し思ひ切つた人は世界一周をやる位は稀らしくありません。そして彼等は休日に愉快なる旅行をする爲めには、平素節儉をして旅費を貯へる事を怠りません。愈〻旅行の季節になると、新聞雜誌の旅行案内を見たり、汽車汽船の割引表を參考したりして、なるべく金のかゝらぬ　しかも愉快な、爲めになる旅行をする事を研究します。そして



女も子供も皆な打つれてたのしい旅行をするのです。唯だ中流以下では餘りやるものが有りません。彼等は自ら進んで遠い旅行をする位であるから、其の態度が世界的であります。獨逸や佛蘭西あたりへ行くと、日本人だと云へば往來で行きあつた者が振りかへつて見ますが、英吉利人は決してそんな事はありません。



日本人も、どうかもつと旅行する習慣を養成しなくてはなりませぬ。避寒だ避暑だと云つて近縣の溫泉や海岸に行つて、朝から晩まで湯に入つたり、海に入つたりする位では、足りませぬ。更らに大に足を延ばして滿洲、朝鮮あたりへドシ／＼出かけて、身神の健康を計ると共に、珍らしい人情風俗を見聞すると云ふ風を養はねばなりませぬ。

且つ平素も英吉利人は盛んに運動をします。激しく精神を使ふと共に、身體も十分練つて健康を保つ事を忘れませぬ。ベースボール、テニス、ゴルフ、乘馬、釣魚、遊獵等盛んに行はれます。日本人のやうに朝から家内に居て碁や將棊を弄ぶと云ふやうな事は決してありません。

## △赤い日曜青い月曜

又、英吉利では父祖の財產を繼承するのは、男ばかりで、次男以下は如何なる貴族でも富家でも皆な冷飯食ひであります。財產の全部は長男が貰ふのです。故

に次男以下は一人前の人間になれば親の家を出て、諸方の殖民地に行くとか外國に渡るとかして、發展する。即ち門地あり教育ある立派な人が出かけるのであるから、各所で立派な成績をあげるのです。又、一方長男は財產が分たれぬ故、大なる資本を以て思ひ切つて大仕掛けな事業を起す事が出來るのであります。

又、宗教上の形式を嚴重に守る事も、英吉利は歐洲第一であります。一例をあげると日曜日は凡て休息すべき日と定められてゐるので、郵便や新聞も配達しませぬ。通行する馬車も少く、電車の運轉を休む處さへあります。汽車も多くは運轉せず、凡ての活動が休んで唯だ聞ゆるものは寺々の鐘の音ばかり、ロンドンの月曜は實に寂しいものです。午前十一時と云へば、平日なら最も殷盛な時でありますが日曜日には日本で云へば銀座の大通りと云ふべき處でも人影は指折り數へられる程しか通りませぬ。そして往來の人は大抵教會に行く人であります。英吉利人は日曜日は教會へ行かねば面白くないと云ふ風であります。

處が獨逸あたりでは、日曜日には特別の汽車が出て、多くの市民は田舍へ遊びに出かける。そして又種々の遊びをして愉快に日曜日は「赤い日曜日」であるが、其の翌日は反動で蒼い、即ちブリユーモンデーと云ふ言葉がある位です。然し、英吉利人は教會に行くとかさもないものでも家に居て書物を讀むとかして暮すので、月曜日には精力を集注して業務を勤める事が出來

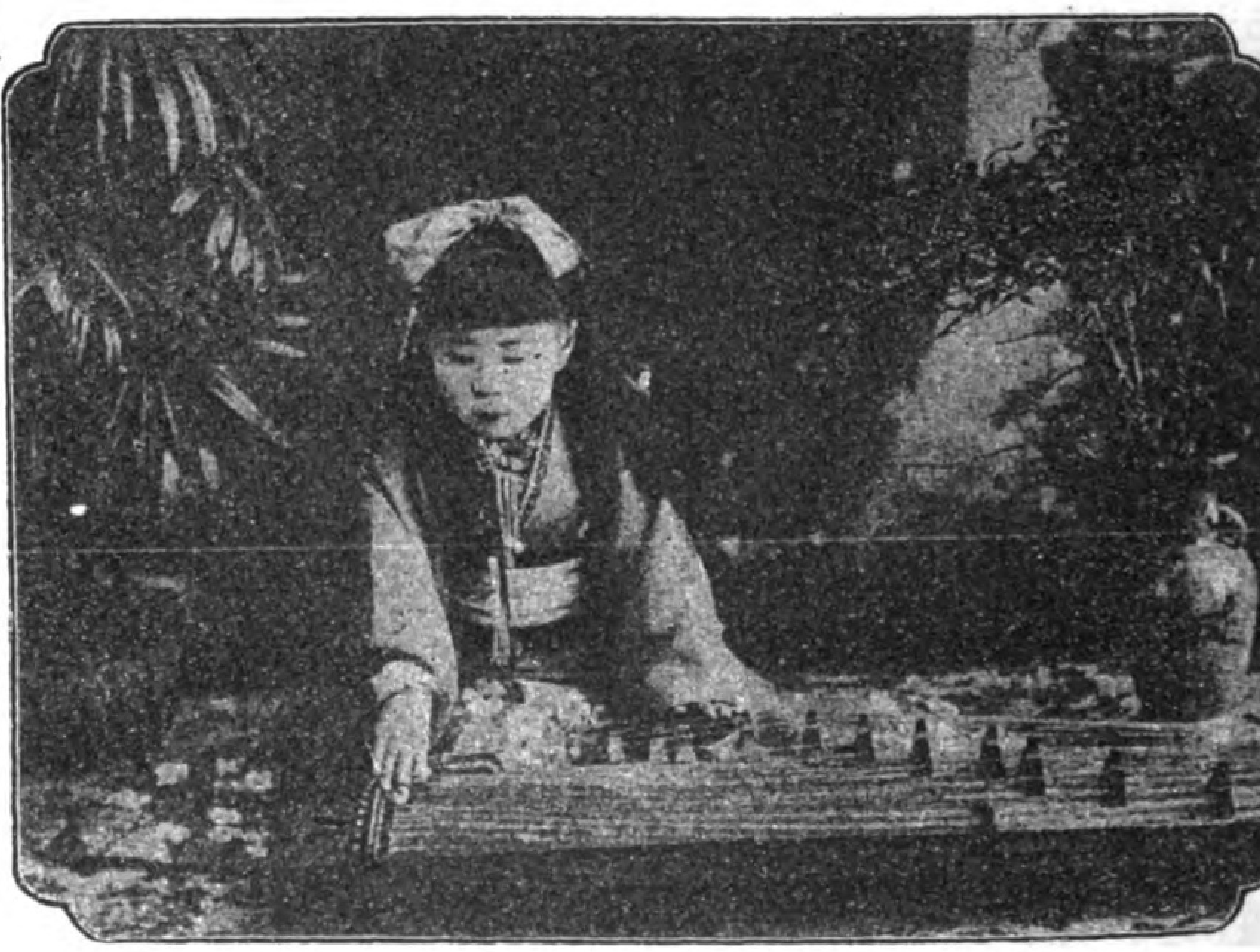


無遠慮に公家の來ますや菊の宿　九董

るのであります。

### △新舊和洋の雜居

以上は、家庭をホーム、スヰートホームと讃美する英國人の家庭生活の模樣でありますが、翻つて我が日本人の家庭生活の現在の狀態はどうであるかと云へば、凡ての事があまりに支離滅裂でお話にならないやうであります。一寸見ても洋服を着たものもあれば和服を着たものもあり、西洋館があるかと思へば茅葺家がある、帝國劇場があるかと思へば、歌舞伎座があると云ふ風で、家屋家具から風俗習慣が新舊和洋の雜居の有樣です。此の中には改良すべきものもありませうし、又改良すべからざるものもありませう。今後我々は凡ての事物をスックリと我々獨特の家庭生活に適應するやうに改良し、馴致して行かねばなりません。それには尚ほ長い間苦しい思ひをしなくてはなりませぬ。が、苦しい中にも樂しい思ひはあります。其の苦しき中の樂しさを味ふのは我々の特權であります。終りまで忍ぶものは救はるべし。』でありますから、今の處は忍耐して、英吉利のやうにホーム、スヰートホームの樂しさを味はふやうにならねばなりませぬ。



# 落葉籠

伊澤修二氏夫人　伊澤千代子

### △親達の注意が足りない

近頃若い男女の學生達が、墮落したとか、腐敗したとか云ふ噂を、ちよい〳〵耳にしますけれど、私はそれは事實ぢやないと思ひます。私も女の子を四人も持ちましたし、息子もありますから、皆それ〴〵女のお友達もあり、男のお友達もあります。さう云ふ若い方方や又親戚の若い者などを見ましても、決して墮落などはして居りません。娘のお友達なども、皆立派なお孃さんですし、息子のお友達でも皆確かりして居られます。今の若い方は、我々のやうな昔の人間とは違ひまして、皆立派な教育を受けてお出でゝすから、思想が確かりして居りますし、考も充分に持つて居りますから、お話を伺つても中々感心する事が度々御座います。學生許りでなく、看護婦などにも隨分美しい心掛の者が御座います。女學生の墮落だなぞとよく新聞に書いてありますが、あれは本當の女學生ではないやうですね　第一物堅い家庭では、若い女を一人手放して何處へでも出すと云ふ事は致しませんし、殊に職業でも持つて居る人は格別、たゞの娘を夜分に監督者もなしに外出させる事など御座いませんよ。もしそんな事を構はずに夜でも夜半でも監督者も付けずに何處へでも出掛けると云ふのなら、それは女の子が墮落したのではなく、親達の注意が足りないのですから、娘ばかりを責められは致しません。

### △暗い街を行く令孃

先達私が用事の爲に外出しましたが、歸りは夜が遲くなりました。傳通院の前迄來ますと、まあどうでせう、十七八の立派な令孃風の女が、二尺五寸もあらう

と云ふ大きな袖の着物を來て、一人の若い男にまるで吊り下るやうにして何か話しながら暗い街を歩いて行くのです。丁度この時、私は梅香女塾の木村貞子さんと御一緒でしたが、木村さんもそれを見られて、ほんとに困るじやありませんかつて、お互に顔をしかめたんですよ。しかしあれは眞面目な娘ぢやないと思ひました。いくらあんなに令嬢風に粧ふて居つても慥に魔性の者に相違ありません。むろん男も、あの時分あんな處をうろ〳〵してゐるんぢや、支那人だか何だか分りやしません。あゝ云ふ魔性の者が、現行犯とか何とか云つて捕まると、不思議に何々女學校の生徒だなんて出放題な事を云ふらしいのですね。それで警察から學校へ照會すると、學校にはそんな人はないからないと答へると片方では又學校の名に關はるから居ても居ないと云ふのだらう位に考へる事もあるのでせうよ。けれど大抵想像したつて分ります。本當の學校の生徒なら、容易に學校の名は出しはしません。そりや多くの中ですもの、稀には不心得な者もあるでせうが、それはほんとに稀ですよ。全く指を折る程ですよ。たま〳〵一つ二つの例が擧ると、それで全體を評價して、やれ敎育家が墮落した、軍人家庭も腐敗した、上流社會も紊亂したと騷ぎますが、實際はそんなものじやあるまいと思ひます。よく事實も調べないで、矢鱈に悲觀するやうな事を傳へるのは、却つて人心を腐敗させる基ぢやありますまいか。

立別れ鞍馬の杉に時雨れけり（七面堂）



## △大抵の人は一杯食ふ

長年私の家へ出入りして、草とりなんぞして居る女で、音羽から來るのがありますが、先日私が買物に出ます時に、あまり持物が多いので、一緒に連れて行きました。處が途中へ出ると、向ふから、非常に立派にお化粧をして美しい着物を着た令嬢が、五枚草履とか七枚重ねとか云ふ私共の娘達になど穿かせた事もないやうな厚い草履を穿いて、澄して來るじやありませんか。その令嬢が通りすがひに私の連れてゐる草取り婆さんに『オヤおばさん何處へ行くの』つてな事を云ふのでせう。すると婆さんが又、『オヤお筆さんか、お前こそ何處へ行くんだい』とかうでせう。私は吃驚して仕舞つて『婆や今のは何處のお嬢さん?』と訊きました。すると婆やはお腹を抱へて、『いやで御座いますよ奥様。ありやお嬢さんなんてんぢやありません、護國寺のお坊さんの何で御座いまさあね、そらあの高等内侍つてんで……』、『エ、勾當内侍つて?』、私が訊きかへしますと『奥様御存じないでせうか、ほら、あの……矢張り高等つてんで御座いますよ。お嬢さんの處か、親達はこちとらと同じ日傭取りですよハア』つてかうなんですもの。あんまりな事に私はあいた口が塞がらずに、さてはさう云ふ者であつたのかと、又ふりかへつて見ましたの。しかしその扮りはどうしても令嬢です

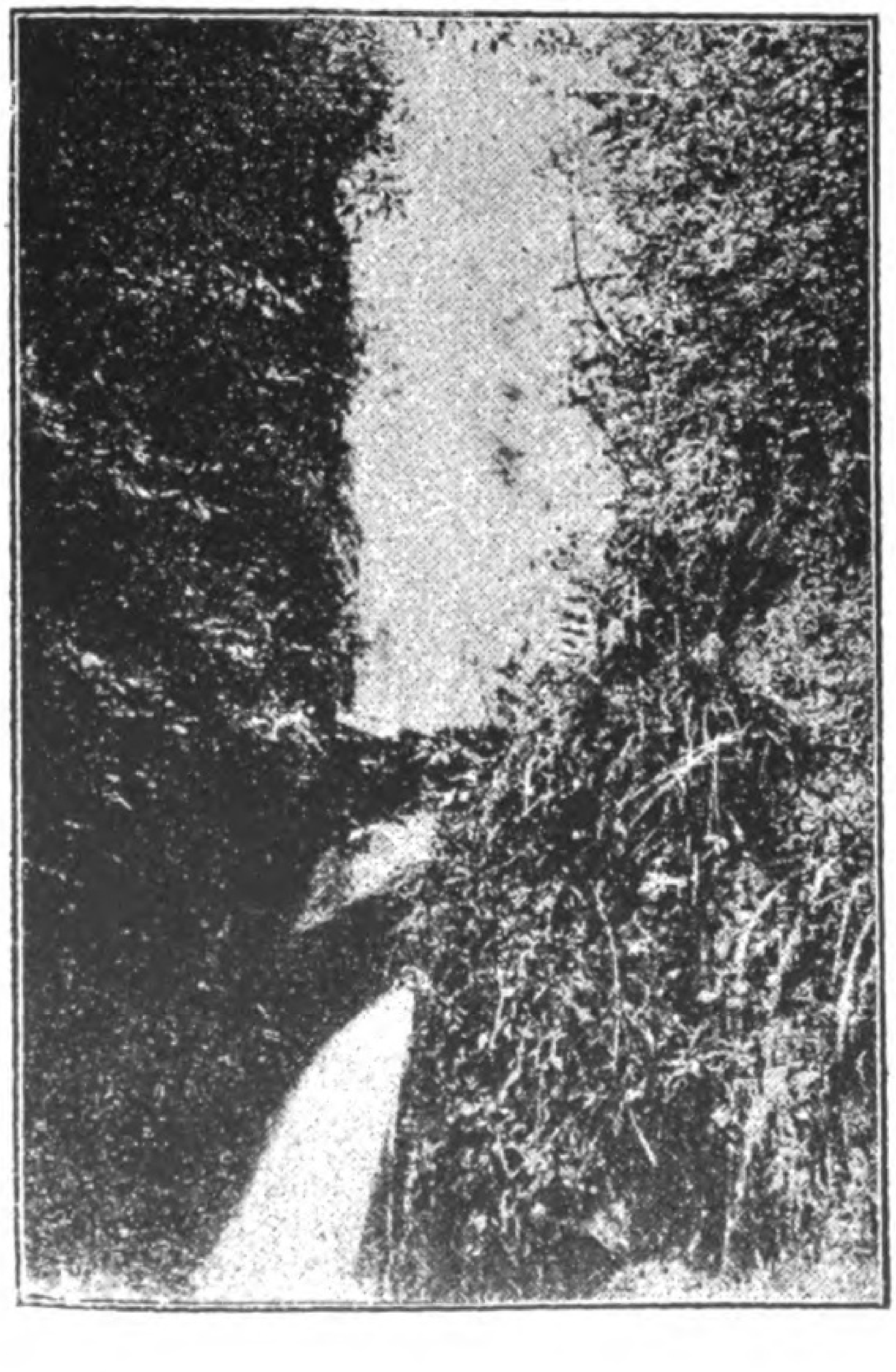


不破の關散る木の葉もて嵐の吹かへにける板びましかな（景樹）

から、大抵の人は一杯食ひますね。こんな人達が至る所が悪い行をすると、直ぐに令嬢が墮落したの女學生が不品行だのつて、新聞にかゝれるんでせう。お互に本人だけが見るならまだ構ひませんが、西洋人になど見られたら、恥かしいぢや御座いませんか。國の體面を汚しますよ。

### △奇態な觀察

いつぞや佛蘭西の雜誌を見ましたらば、勿論私にはそんなものは讀めやしません、娘から讀んで聞かせて貰つたのですが、まあかう云ふ事が書いてありました。日本の女は結婚前には必ず醜業を營む、そして得た處の金を結婚費にする、だからどんな家の娘でも一度は皆醜業婦になる、而して日本政府はこれを奬勵して居る　外國人が日本へ行つて澤山金を使ふのもこの爲で、日本國で外國から行く觀光團を盛に歡迎するのも矢張りこの目的がある爲だ、なほ自分の國だけでは足りないので・團體にして海外へ送り出す。それに日本では藝者と云ふ者の勢力が非常で、有名な某大將夫人も藝者だし、某政治家の夫人も藝者だつた、日本では藝者でなければ貴婦人にはなられぬ、ですつて。ほんとに呆れて仕舞ひました。お互にいやぢや御座いませんか、醜業婦も令夫人も令嬢も一緒にされて仕舞つては。こんな事のないやうに何とか方法を設けて、一見誰にも



夜嵐の吹しづまりしのちもなほ絶えずおち葉の音は聞ゆる（正　風）

分るやうにしたらどうでせう。そりやあ昔だつてかう云ふ種類の婦人はありましたし、外國にだつて皆あるのださうですが、大抵着物の色なんぞが眞面目な人とは違つて居るとか云ふ風で、あれは貴婦人ぢやないと直ぐに見分けがつくさうです。ですからどんな場合にも男子がちやんとした婦人に戯れかゝるなどと云ふ事はないさうです。處が日本の女は皆醜業婦だなんて考へて居ますから、西洋の男も日本へ來ると女を輕蔑する傾があるのでせう。



ぬば玉の夢に何かはなぐさまんうつゝにだにもあかぬ心を　（深養父）

## △遊廓の氣儘狩

昔も曖昧な女は澤山にありましたので、氣儘狩りと申して、奉行所から絶えずお手が入りました。中には隨分甚だしいのがあつて、十萬石だの二十萬石だのつて名のついて居るのも御座いましたとか。それは十萬石なりいくらなりのお大名のお妾、即ちお部屋樣になるので約束がきまると、殿樣の方から三百兩の仕度金が出るきまりだつたさうです。三百兩と云へば昔は大金で、縞の財布に五十兩つて、五十圓のお金でも大したものでしたからね。そこで殿樣から三百兩を頂いて支度を調へてお妾になりに行く。元より長く居る氣ではないのですから、お

側の人と喧嘩するとか、殿樣のお召でも踏むとか何とか、わざと落度をこしらへてそこを出されて仕舞ひます。けれどもさすがにお大名の事ですから、直ぐ三日程で出たからつても、仕度金の三百兩をかへせとは被仰ません。その儘自分の身につくので、つまりその三百兩が欲しい爲にそんな事をする者もあつたのです。さてその上りは堅氣にもなれず、藝もないので藝者も出來ず、一生曖昧な事をしてくらすのが彼等の常でした。しかし昔は吉原遊廓の勢力が中々强かつたもので、廓の外にそんな者が澤山居りましては自然吉原が榮えませんから、自家繁榮策として吉原遊廓の方から奉行所へ喧ましく云つてこの氣儘狩りを絶えず行ふやうに仕向けたのです。ですから割合に今日程花柳病なども多くなかつたやうでした

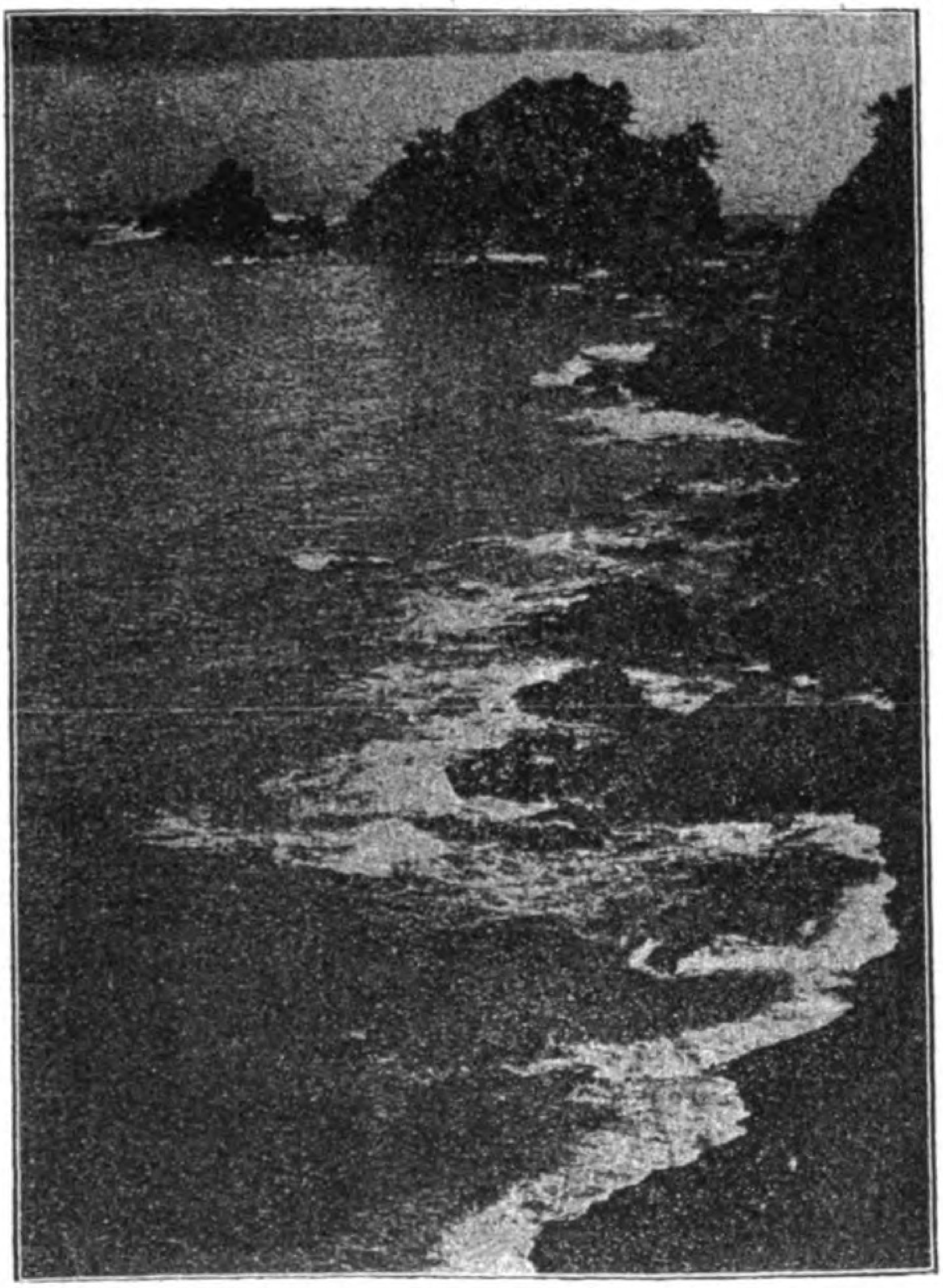


うれしさを何につゝまんから衣袂寛かにたてといはましを　（讀人不知）

### △身分ある人の品行

まあ近頃は隨分花柳病が澤山にあると見えまして、何處を歩いて見ましても、至る處に花柳病の醫者やら藥やらの廣告が出て居りますこと一寸電車に乘れば、一つ車の中に三つも四つも見掛けますし、横町の曲り角には白い角棒の杙が麗々しく立てゝありますし、電柱には一本〳〵に貼り付けてあります

し、あまりに露骨でいやな氣持がいたします。なにもあんなに目につくやうにしなくつても、病氣の人は何處でも尋ねて行くでせうから、もう少し何とか取り締りをしたら如何なものでせう。赤い廣告が惡いとかつて聞きましたが、いくらこの方が風紀上から見て惡いか知れやしません。やはり外國人に對しても恥かしいぢや御座いませんか。すべてがこんな調子ですから、毎年矯風會の方から議會へ一夫一婦案なんぞ持ち出しても顧られないんでせう。何しろ上に立つ方がそれを實行遊ばすのがお嫌ひなんでは駄目で御座いますよ。先達もある奥さんが、御良人のお身持をお話になつて、つく〴〵いやだと被仰ましたが今日の墮落は決して若い學生達ではなくある一部の社會と、社會に地位を得て居られる高位高官のお方が却つてさうなのでは御座いますまいか。金滿家のお坊つちやんはどうか知りませんが、中流以下の學生達なんぞ、なか〳〵眞面目なものですよ。ですから私は若い人が墮落したなんて云ふ噂を聞きましても、あまり心配は致しません。若い者を責めるよりは、まだ



夕日影しづまんとする波の上に離れ小じまの數ぞ見えける　（正風）

先に反省して頂かねばならぬ方々が、澤山にあるだらうと思ひます。たゞ若い女學生や娘さん達に御注意致したいのは、世間から誤解を受けない爲に、夜分なんぞ矢鱈にお友達同志や付添人なしに、緣日あるきや、活動入りなんぞはなさらない方がいゝと思ひます。世間には隨分誤解や誤聞もありますが、若い女に對して多くの人から誤解される事は、此の先女と云ふものが發展して行く上に、どの位妨害になるか分りませんし、女子敎育の上にも大きな損害がありますから、よく〱注意して、危きに近らないのが安全の策で御座います。



とぶ鳥の影はたえたる夕ぐれの野澤のみづに浮ぶ白雲　（幸文）

## △お門違ひの誤解

誤解と云へば隨分お門違ひの早合點もあるもので、いつぞや新聞に、宅の主人が大層お酌を可愛がる、そして私は又主人の懇意の藝者をば妹のやうに可愛がつて、着物やら何やら買つてやるつて書いて御座いました。さうするとそれを讀んだ方が不思議にして、奥さんあなた藝者をお可愛がりになるんですつてね、藝者と御懇意ですつてねなどと被仰るんです。私は

可笑しくつて可笑しくつて仕方がありませんでしたが一人の夫人さんが被仰るには、先達私の友達が、伊澤さんの奥さんは藝者と大層お親しいんですつて、ほんとですかつてお訊きになりましたから、私はそりや嘘ですよ　何故つて云へば、あの奥さんはいつやら私にこんな事をお話になりましたもの、それはね、いつか伊澤の奥さんが、人相見に觀てお貰ひになつたんですとさ、すると人相見がつく〴〵奥さんの相をみて、あなたは大層癖の多い方です、しかし身分に相當して居る癖だから、別して差支へはない、けれどもあなたは待合の女將にはなれませんつてさう云たんですつて、それで餘程私は野暮な人間と見えるつて御自身で被仰いましたもの、そんな事から考へたつて藝者と懇意だなんて屹度何かの間違いですよ、と申しましたつてお話になりましたから、まああなた何故そりやほんとだつて云つて下さらなかつたの、私はこんな無骨な人間だのに、どこをどう間違つてかそんな粹な人のやうに云はれて、何と云ふ嬉しい事だらうと思つて居るのです



底ひなき水の心も見ゆるかな動ぬ山の影をうつして　（忠烈）

谷川の早きながれに移れども山のかげこそ静かなりけり　（光畔）



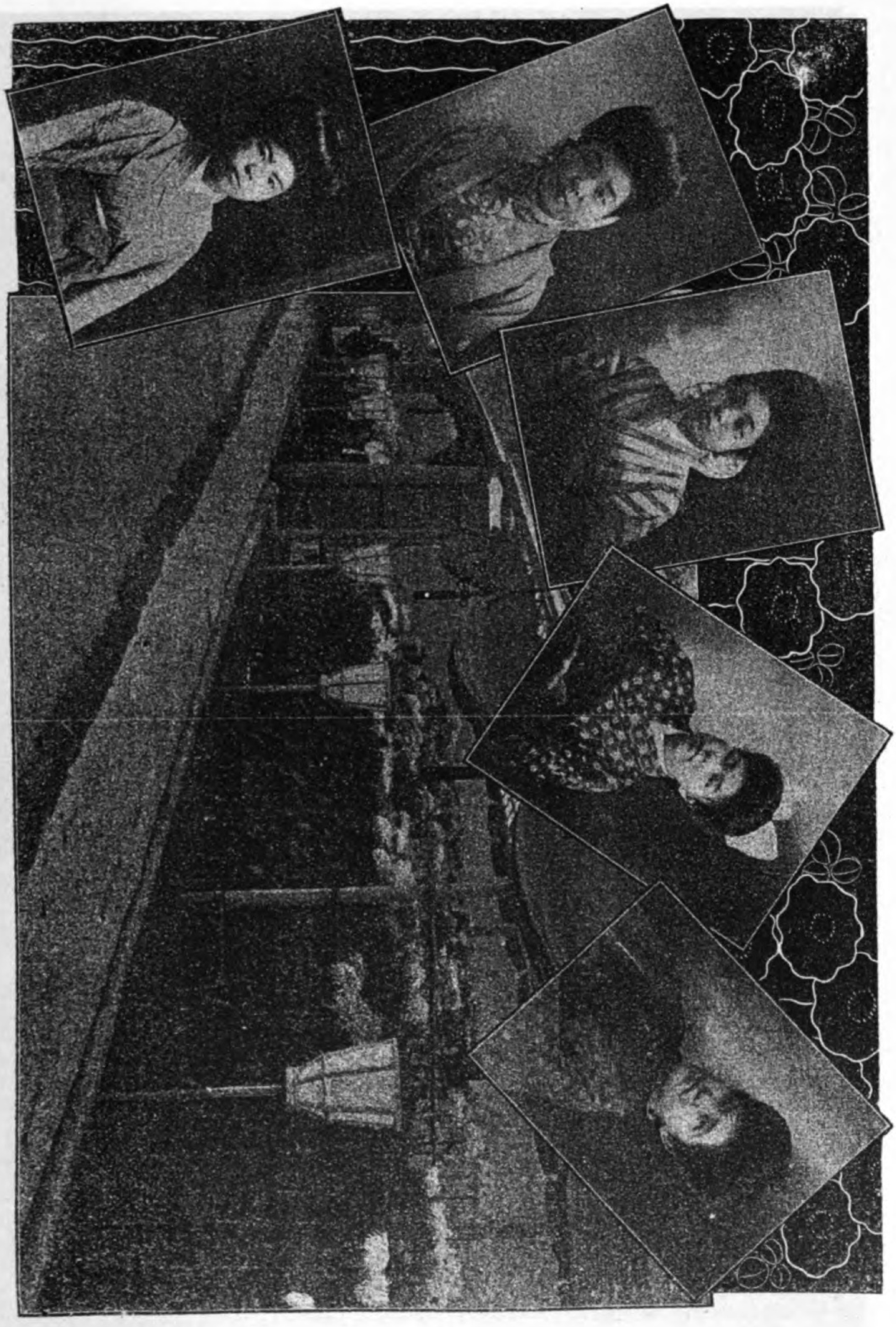
のにつて申しました。それから、もう一度は、私か河東節の名人だと何かに書かれましたの。ピンともシャンとも音も出せない私が、河東節の名人には實際驚きましたね。けれどもこんな者が藝者に友達があるの、河東節の名人のと云はれるとは、まあ何と云ふ幸福者なんでせうつて大笑ひして居るので御座いますよ。こんな誤解ならいくらされても宜しう御座いますわね。

---

◎女よ、女は愚物である、生れた時から何だ女かといはれ、倍も親の手をわづらはして一方ならぬ母の心配でやつと女一人になれば娘三人に七倉あけたのたとへかくまで親が苦勞をして、他の家へやつて仕まわなけりやならない、通常の女は親を召使ひの如くあしらひおのれが絹を着て親のは木綿布子を意としなかつた女が、他家に嫁して子を生めば一生を子に追はれることになる、これではすこしも女たる者の光がないやうだ何か一ッ際立つたことをする工風はあるまいかと思ふ。



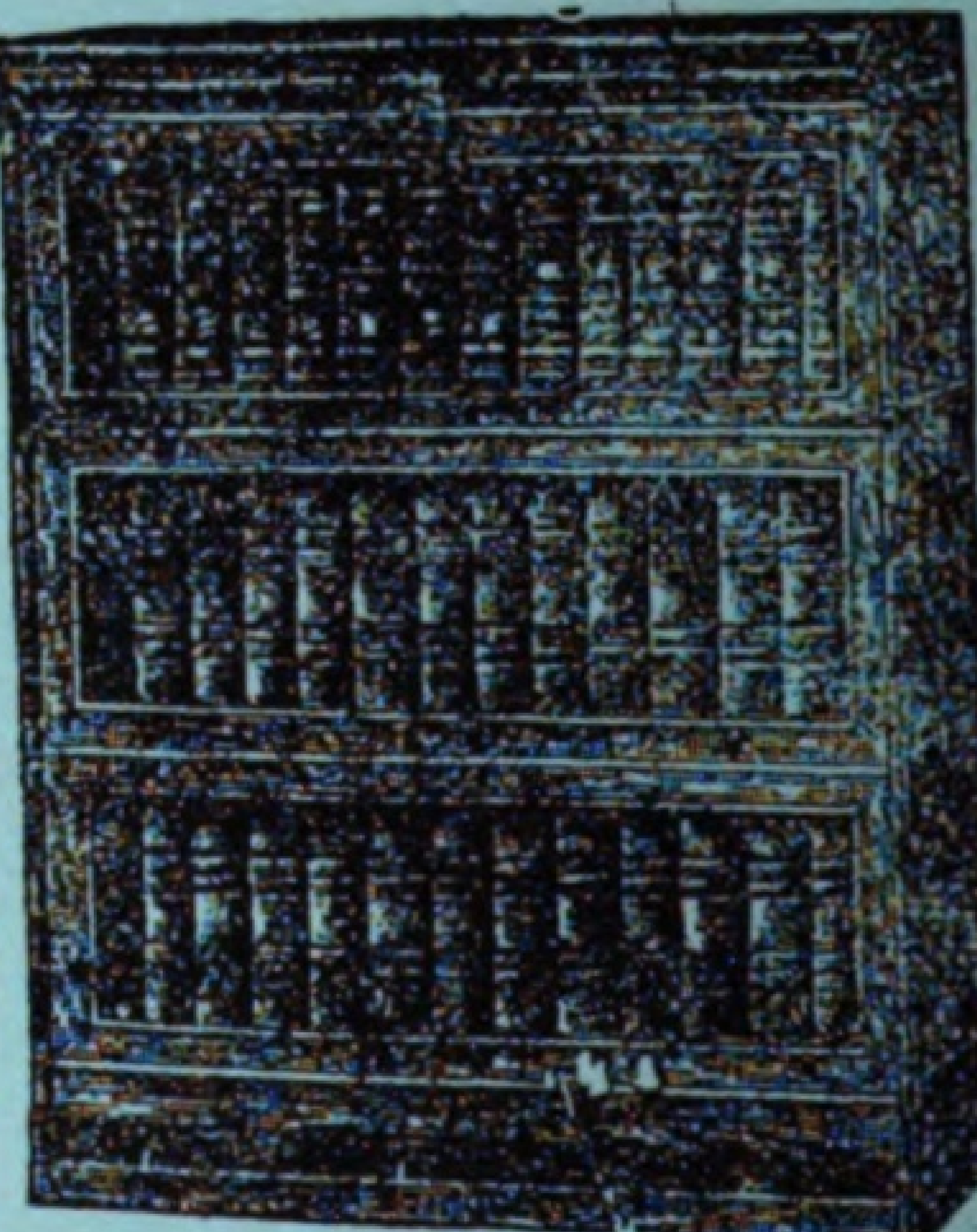




**大隈伯爵家**を始め其他の諸名家より多數御注文の榮を辱ふす以て本器が如何に優秀なるかを知られよ

新橋堂式 **組合せ本箱**

●最新式最新形の本箱にして目下歐米諸國に大流行を極め居れり
●多數の優れたる特徴を有す其重なるもの即ち左の如し



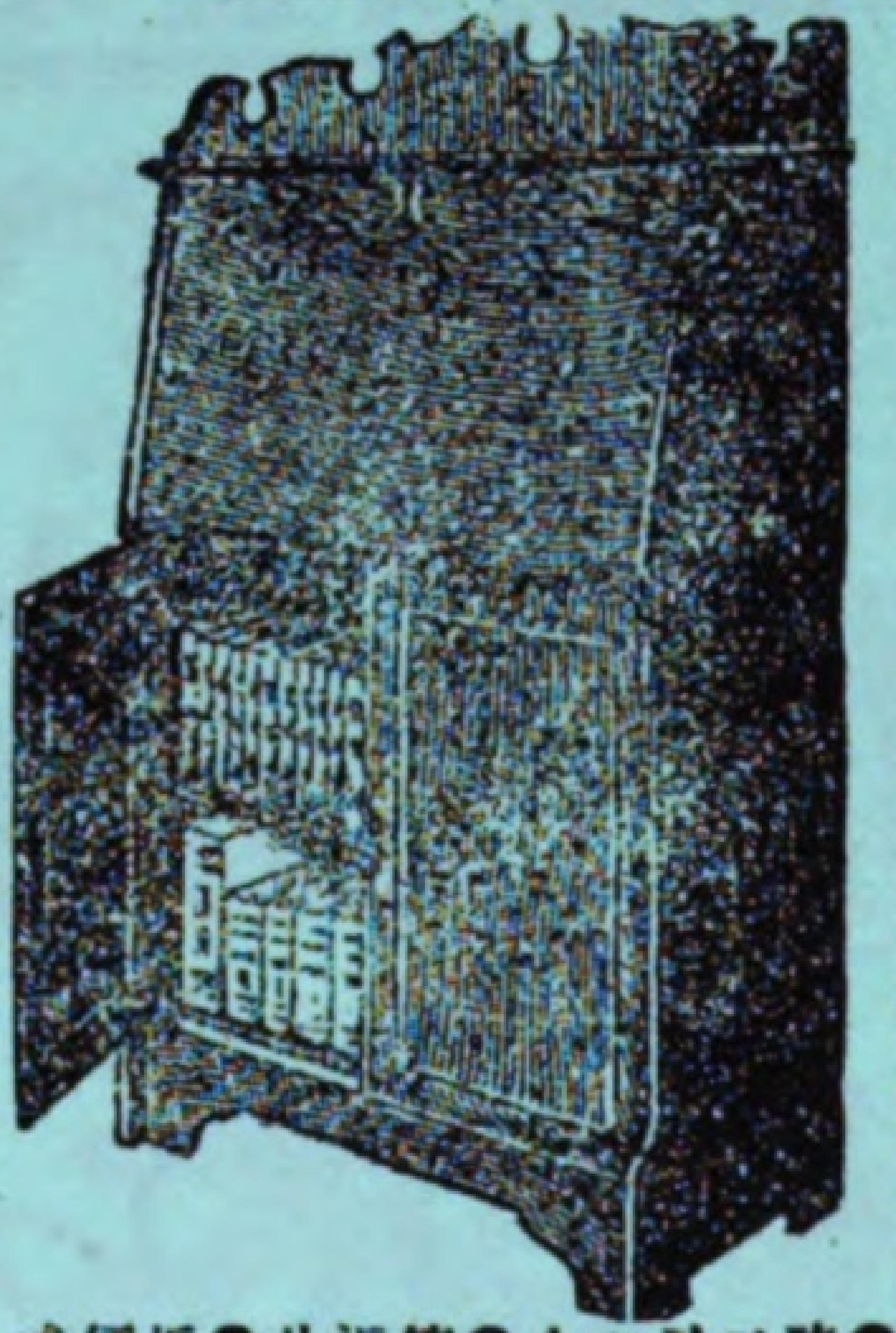
△藏書の增減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし
△室内の構造に應じて適宜に配置し得べし
△書物を分類するに最も適當なる構造を有す
△形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

金二十六圓 檜製
金二十八圓 欅製
金三十圓 櫻製
運賃荷造送費自辨

**理想のデスク**

構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈

事務用定價金廿五圓
書見用定價金廿二圓
荷造費各一圓八十錢 運賃は御自辨



●デスクの上部は事務用又は書見用に用ひられ下部は帳簿棚又は書棚に使用するやう構造されて居ります
●夫故日常必要の帳簿又は書物を最も手近に配置し得て便利此上もありません
●デスク使用後は机板を閉ぢて其大さを短縮する事が出來ます
●材料は兩デスク共檜です塗は木地色のデスク仕上げです

**發賣元** 東京市京橋區銀座大通新橋際 **新橋堂** 電話新橋千九百九十一番 振替貯金口座二百番

---

●**家庭改良の最良指針!!!**

村井弦齋先生著

増補註釈 **食道樂**

春夏秋冬 合本 定價金貳圓 郵税拾八錢

◎本書には米料理百種、パン料理五拾種、病人料理百五拾種、日用食品分析表、食器食品價格表、料理心得の歌百種等の附錄あり

増補註釈 **食道樂 續篇**

春夏秋冬 分本 價各壹册八拾錢 郵税各册拾貳錢

◎春の巻には野菜料理百種、夏の巻には果物料理百種、秋の巻には魚料理百種、冬の巻には肉料理百種の附錄あり

増補訂正 **台所重宝記**

全壹册 和裝 定價金壹圓 郵税拾貳錢

著者の自序に曰く此書の記事は盡く我家庭の實驗する所にして余は飽く迄も世人に親切ならん事を期すと

▲發行所 東京市麴町區有樂町（振替東京七三八番） **報知社出版部**
▲發賣所 東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番） **新橋堂書店**

女(ゐの一)

第七高等學校造士館敎授文學士
鴻巣盛廣先生著

# 口譯落窪物語

落窪物語の描寫の精致、筆路の暢達してゐることは他に其類を見ない。殊に滑稽趣味に富んでゐる點は此物語の大なる特色である。かくの如き名篇も讀み難いので現代人には殆顧みられないのを慨いて現代口語を以て譯出したのが即ち此口譯落窪物語である。原書の味ひを出來る丈其儘傳へる爲めに一々語を逐うて譯して猥に省略してはない。これ一は古文研究者に對して直ちに註譯書たらんことを期したからである。本書は又家庭に於ける善良な讀物たるを欲したので譯者は又此點にも周到な注意を拂つてゐる。

全一冊洋裝
菊判上製美本
紙數三百卌餘頁
口繪彩色刷四枚
正價金八十五錢
郵稅八錢

黑田湖山君著

# 滑稽旅日記

胸中の鬱を披くもの滑稽の興味に勝れるはない、心氣の爽快を誘ふもの旅行の情趣に超えたるはなし滑稽作家として文壇に新旗幟を飜せる著者は玆に此の滑稽の興味と旅行の情味とを巧に鹽梅して本書を世に出す。錄するところの新婚旅行、保養旅行、溫泉の旅、學生旅行、海水浴の旅、登山旅行の六種或は艶味のうちに諷奇を示すあり、或は稚氣を描いて嘲世の意を寓するあり、或は詩境の間に自然の滑稽を語るあり、各種各樣、何れも著者が得意の才筆を揮へるものにして、殊に其の新婚旅行に至りては、三々九度の盃に依って結び合はされたる花嫁花婿の心境を容赦なく解剖し分析し展開して、佳謔縱橫如何なる澁面の頑固老爺といへども、之を讀んで覺えず破顏一笑せざるを得ざらしむるものあり。今や吾人の生活は彌よ慌忙を加へ來りて、天下斯かる種類の書籍に渴す。此の書の各方面に歡迎せらるゝもの、素より當然のことなり。

洋裝四六判上製
紙數四百二十餘頁
三色版口繪二枚
及挿圖六枚入り
正價九拾錢
郵稅八錢

女(その二)

東京 博文館 本町

手本執筆者　御歌所寄人　大口鯛二先生



# 大日本書字速進會

## 女の寶は……美しい手蹟

いかに容貌は美しくとも手蹟の劣つてゐる時には………いかに藝は巧みでも字のよく書けぬ時には……よしまたいかに學問が出來ても字の巧みでない時には……何か物足らぬやうに思はれるのが人情でございます。かりそめのそぞろ書きにも美しい手蹟を殘すやうお心掛け遊ばせ

本會は聲を大にしてひたすら自書自賛をすることはいたしませぬ。本會はたゞ諸姉が一枚の葉書で住所氏名をお知らせ下さることを望みます、本會は直に最新式習字帖見本付規則書をお送り致します、それを他の習字法と比べて冷靜にその優劣を比較して御覽なさいませ

東京市神田區駿河臺鈴木町

見本つき規則書申込次第進呈◉此際入會者は大特典あり

女（ぬの三）

太陽　第十八卷第十四號　十月號

# 御大葬記念號

大好評八版

三色版一枚
二色版一枚
寫眞版廿四頁
本文三百十二頁
正價四十五錢
郵稅四錢

奉額用大附錄＝＝●森嚴なる青山葬場殿全景……（本誌四倍大光澤紙寫眞版）

口繪及挿畫＝○哀の極（結城素明謹寫）＝原色版○二重橋畔の篝火（二色版）○御大葬鹵簿＝當夜撮影の寫眞十六種を特選し、坐ながら眞光景を拜觀するの思あらしむ○桃山御葬列＝十四種を特選して謹載す最も鮮明にして莊嚴○靈柩列車道沿御着の光景○櫻田門外の弔砲禮○御大葬御道筋＝口繪及挿畫數十種○列國特派大使記念撮影○各種奉送團體（數十種）○各國捧献の花環○其他刷込無數



東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇

女（乃の四）

東京市京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社發行書目 振替口座（第壹七貳九番） 全國書店取次販賣

## 十一月普通號

# 女子文壇

毎月一回一日發行

| 定價 | |
|---|---|
| 特別號三拾錢 | 送二錢 |
| 普通號拾五錢 | 一錢半 |

本誌は毛色の異つた無類の女學雜誌です、若い人達に持て囃されて居ます、論より證據實物御覽下さい

▲文部省展覽會の第一印象……荻野の人

◎明治年間の婦人

士夫人▲立花中將夫人▲嘉悦孝子等諸名流婦人の談

▲棚橋絢子▲鳩山春子▲渡邊博士夫人▲辰野博士夫人

▲切子燈籠……横瀨夜雨

▲肖像畫の話……澤村胡夷

▲花壇……窪田空穗

▲黑綸子……廣江曉子作

京都の詩調を京都の若き婦人が描寫して纖々五百行の文字は艷絶佳絶本誌特有の隱れたる逸作

◎乃木靜子と犧牲の精神……高島平三郎

◎故遠山稻子女子の面影……寺田よし子

▲東京郊外一週記……外島浪之介

◎無名婦人傳◎耳袋◎諸國名物類聚◎化粧問答……

▲乃木大將の墓……一記者

◎口繪 △原色名畫 △光澤紙刷寫眞 貴婦人令嬢外八頁美裝

## 十一月一日刊 第四號

# 少年少女 お伽世界

價が廉くて、綺麗で爲になつて、面白い、こんな雜誌は外にありません

價 一冊 七錢 送料五厘

百聞は一見に如かず、最寄の書店にて實物を御覽下さい。

## 女子文壇叢書

### 第一編

水野葉舟氏序 前島優梨子作（既成）

小說 町むすめ

本書は溫順柔和なる心持を以て所謂町むすめの自然の生活を描寫したる短篇小說集なり、一篇毎に異りたる或人生の意味を語り幾度繰返し讀むも飽くことを知らず益讀者に親近せんとするは本書の尤も優れたる特色なり

全一冊洋裝 二百六十頁 作者肖像入 正價三拾錢 送料四錢

### 第二編

河井醉茗氏序 山田邦枝子著（新刊）

姿見日記

著者山田邦枝子は若くして文學に憧憬し出京以來幾多の曲折ある經歴を閱して新しき婦人の勝利の聲を擧げたり其間の消息は著者自らが僞らざる告白として本書に公にせる感想の日記に見れば自ら明かなるべく以て新代の若き婦人が面影を知るべし

全一冊洋裝 紙數三百頁 著者肖像入 正價卅五錢 送料四錢

女（ぬの五）

圖書目録

御入用の方は往復『ハガキ』にて御申込次第送呈可仕候

東京本町 博文館

天下一品にきび取藥




此の藥液は氣休めの化粧水と違ひ不思議に効力を現し幾瓶も用ひずして有効卓絶大概のニキビ吹出物そばかすも跡形殘さず實にキレーになり艶美白色ならしむ

禮狀來る

取次各地藥店になき時は本舖へ又は藥店へ取寄を頼め△小瓶廿錢△中瓶卅五錢△特一圓送各六錢郵劵一割增

本舖 長江校商店 東京日本橋新和泉町六番 振替九八二二番

●御求めの節は必ず『艶美液』と御指名あれ

衛生改良酢發賣

貳合入縁詰一本金二十五錢 送料金八錢



在來の食酢は腐敗し易く貯藏法に至難なるも本品は防腐性を有する醋酸を資料とせし者なるを以て有害なる黴菌を生ずる憂なく永久不變なり而かも之れを桒肉に使用して風味云ふべからず是れ本品の特點にして特に衛生酢と命名せる所以なり家庭に於て御試用の上御高評を希上候

本品二合は普通品の二升六合に當る

藥種貿易商 東京日本橋區本町三丁目 合資會社 博愛堂 電話本局長二八六番 振替口座東京八八一三番

音聲ごもる人

に獨逸醫學博士ローマン氏發見藥完全にして短時日に美音となる療法郵劵三錢送れ説明書呈す

東京市牛込區赤坂元町參參 好生藥院

美術造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地 三國屋 關口商店 電話下谷四〇五一番 振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵劵貳錢御送アレ

女(ぬの七)

女(めの八)



# 警世嘲俗 一人一話 (三)

屈曲凹凸の多い活世界に處し、荒い浪風を凌いで來た人には人一倍の自信力がある。一人一話は此の自信力が言はせる警世嘲俗の語錄である。

世間はひろい。人間の爲てゐることは多樣である。どこに何んな人間がゐて、何んなことを爲てゐるかその人たちは日頃何んな考へを有つてゐるか。まあそれを聽取つて見る事にした。ねがはくば活社會に動いてゐる活人の聲を聽かれよ。

## 女の蔭口

性を研究しつゝある　女流作家某

性を研究しつゝあるといつた處で何も、青鞜一流の新らしい觸感美を鑑賞しやうといふ樣な野心のある方では毛頭ありませぬ、矢張り常識に富み、學問の造詣の深い、靜かに世の樣を觀つゝ味ひつゝ行かうといふ方ですお名前は例によつて暫らくおあづかりいたします。

十月號の『下町の女』を讀んだら、眞實に胸がスーッと爲ましたよ、被仰る通り、女は矢張、下手に出て居る方が見よう御座んすね。

私、頭を拳骨で打擲れるのも、あんまりゾッとしませんけれど、その位の意氣をもつ旦那樣の方が、頼しいと思ひます。良人に楯をついて、勝つて見た所で、えらい譯では無し、却つて自分が我儘者だといふ、看

板をかけて居るやうなものですもの。

よくありますよ、他人樣の前へ出ると——わざとかも知れないけれど——滔々と旦那樣の攻擊を、しかも其前で初める、すると其の旦那樣なるもの『フヽムフム〳〵」てな事をいつて、貴女のおつしやる事は、一一御もつともとでも、言ひ度さうな御樣子、もう、意氣地の無さつたらありやあしません。まさかつて?、否、所が中々さうぢやないんです。そりやあね、女ばかり惡いのでは御座んすまい。

だん〳〵と、そんなにして了ふ男の方にも、責はあるのだと思はれます、けれどもね、初めて奥樣を貰つた時には、きつと、珍らしさと嬉しさ?のあまりに、人形でも弄ぶ氣になつて、大抵の我儘なら、何でも通しておやんなさるんでせう自分の女房を捉へて、さん付にするなんて、男の癖にほんとに不甲斐ないわ、そんなだから、それが積りつもつて癖になり、たゞさへ增長し易い女の心は、もう何でも彼でも物事は總て、己が心のまゝに出來るもので、良人は自分の心の儘に動くものだと決めてしまひ、度重なれば重なる程ひどくなつて、嫉妬深くなつて、其の成の果がヒステリー患者……

考へると、情ない者ですわね、一等國々民の母となるべき女が、こんな有樣ぢやあ、どうもね、末が案じられますわ。

だから男はね、奥樣を貰ふ前に、ちつとは道樂して遊んだ人でなければ駄目ですね、女の一瞥に逢へば、鬼の首でもとつたやうに、有難がるやうな手合に、何が出來ませう、私、藝者買の五六遍もしたやうな男の方が、品行方正とか、秀才とかいふ堅造より、餘計えらいものになると思ひますよ、さうぢや御座んすまいか、さんざ遊んで經驗のあるひとの方が、却つて同情があつて、可愛がつても吳れませう、矢たらに甘くばかりして、猫つかはいがりのひとは、女には毒ですものそんな男、一つ間違つたら、今度は大變な放蕩兒になるんですと、もう、年がいつてからのあそびは、容易なこつちやぬけませんつてね……。

あの、宅の隣家にね、まだ世間に名の知れない――程下手な――油畫かきが居るんですよ、その奥さんつたら厭なかた！旦那樣が、若い女のモデルお使ひなさると、その間、御機嫌が惡いんですつて、女中が笑つて居ますつて、宅の靜がいつて居ましたつけ。まるで成つちや居ませんね．美術家の妻の資格は、ちつとも御座んせん。

そんなぢやあ、旦那樣の身になりや、快く、面白く畫を描く事が出來ないから、ヘツポコになるのも無理は御座んせんね、奥さんにプンとして居られちや、不自由でござんすものね、ホヽヽヽ、あの畫伯だつておしまひにや、ヤケになるかも知れませんよ。

◎

何とかいふ法學博士の夫人、隨分奇拔ぢや御座んせんか、女だてらに馬になんぞ乘つて……、嘲笑こそすれ、賞められた話ぢや無いと思はれますね、

輕井澤から歸つた知人に訊きましたら、ほんとには乘れないのですつてね、そりやさうでせうともさ、寫眞をとる間位なら、馬だつていふ事きいて、優しくして居ませうもの、一鞭でも當てたが最後、いゝ年をして行燈袴なんぞはいた、夫人の優姿？は、露のけ含む秋草の上に、ドツサ…と落るでせう、お尻の重みで一層ひどくね、ホヽヽヽ、馬上の佳人が、聞いて呆れますことゞ。

あんな事して居る暇に、旦那樣の御病氣でも、看護しておあげなさればいゝ、御病氣の時はちつとも世話してお上げなさらなかつたのですつて、そんな時にその法學博士の君、怒鳴りつけておやんなさればいゝ事に、惜しいことをしましたよ、美しい奥樣持つとのろくなるんでせうかまさかねえ。

今の世にときめき給ふ或る紳士が、ある人にお話しなすつた中に、

『今の、女學生上りの妻君には、實際もてあましますなア、私等の仲間の者に訊いて見ると、皆が皆、さう言つてますからねえ、世間一般に困つて居るらしいですね、何しろ、夫に勸るなんていふ事は、テンデ考へ

て嫁ないんだから驚く！　慰めてなんか與れるもんですか、却つて、己を慰めて與れないつてんで、年中不平な顔つきばかりして居るんですからなア。」

ある人が――これは私の友人ですがね――自分の妻君のニコ〳〵と笑つた顔を、且て見た事が無いといふので、どうすれば、優しい笑顔を見られるかと考へた末、「これで、氣に入つた着物でも、こしらへなさい」と言つて、五拾圓やつて見たんですとさ、いゝ度胸の男さね、するとさすが佛頂面の妻君も、その時ばかりはニツコリ笑つたさうだが、サアその次からは、こんだア五拾圓位ぢや笑なくなつたつていひますから、驚くぢやありませんか、一寸、ニツコリ笑つて貰はうと思へば、まづ、百圓仕事なんですからなア、財産家で無いとこたへますよ」ですとさ……。

そこで或る人が（ある人づくめですけれど）

「そりや、男もわるいぢやありませんか、婚禮の晩に、ミツシリ言つて聞さないから、つけあがるんですよ」つて申しましたら、

「否、そりや、婚禮の晩は婚禮の晩で、ちやあんと言ひきかせて置くんだけれど、だん〳〵と時がたつに從つて、無效になつて行くんです、それに、せめて夫の友人の來て居る時だけでも、快よい笑顔をして、食事時間になつたら、何はなくとも、たとひ手製の芋の煮つころがしでもいゝから、『不加減ですけれど』とかつて、出して與れゝばいゝと思ひますがね、矢張、それ、『他人の家へ食事時に來るなんてきがきかない。』とか、『料理の數が幾通り無ければ、お膳は出せない』とかヤレ、すべつたのころんだので、愚圖〳〵して居るので、夫の方は、そんな不體裁を、友人に見せるのが嫌さに、無理にも外へ連れ出して、何所か、料理店へでも入る。從つて藝者もよぶつていふやうな寸法になるんです、いくら男だつて、何が面白くつて、むだな金錢をつかひたい事がありませう、皆、家内が不愉快だからこそ、起る事なんですからなアまつたく、今の女學生上りといふのは、困りもんですよ」つて、歎息されましたとやら風のたよりにきゝましたつけ。

ほんとうに、そんなですかねえ、今は。

◎

乃木大將の奥樣實際えらい御かたですこと、大將の御薫陶がよかつたからとは申せ、女らしい中に雄々しい氣象を持つておいでゞしたのね。

あの、これは祕密ですけれども、ある婦人（教育家と呼ばれてる）がね、乃木大將の奥樣を評して、こんな事いふんですよ。

「乃木大將の奥樣は、そりやおえらいには違ひ無い、けれども何となく、食ひたりないやうなかたですね、大將が死なうと被仰つた時、何故、御意見なさらなかつたのでせう『それは御道理では御座いますが、先帝陛下ばかりが御主君では御座いませんから、そんな事なさつては、新帝陛下にお濟みになりますまい、ですから、何でも彼でも、御殉死遊ばすお覺悟ならば、いつそ桃山御陵の麓に、庵をおいとなみ遊ばして、一生御陵守を遊ばしたら如何で御座いますか』つて、なぜ被仰らなかつたんでせうね、だつて國家の爲ですもの私が奥樣だつたら、さう申しますよ、眞實に殘念でしたねえ」つて……。

そりやあ、日本婦人の典型と言はれる位のかたと、女教師風情とは、人格が違ひますから、仕方が御座んせんよ、と言ひ度かつたんですが、それも餘りですからよしました、その位の意見で、思ひとまるやうなあやふやな覺悟なら、それは覺悟ぢやなくつて、ほんの一時の思ひ立ちや御座んすまいか、國家の干城たる軍人が、自己の責任上決心をしたからは、たかゞ女の意見位で、志をひるがへすなんて、意氣地が無さ過ぎますものね。

尤もこの奥樣がもし、○○社同人とかの人達でゞもありましたら、御意見なさつたかもしれませんが、何しろ平素からのおしつけが違つてたんですから、其の御心中は、とても、異人の語と支那の語をちやんぽんにしやべるやうな、現代ハイカラ婦人とかの、想像し得ない所で御座んせうよ。

別ても坊主は大お嫌ひの大將ですもの、うつかりそ

んな事でも言はふもんなら、それこそ打擲られます。
世間ぢや知らないから、事の濟んでしまつた後で、ヤレあの時にどうのかうのつて云つてますけれど、良人の決心をうち明られたその時の、夫人のお心になつて見れば、我々仲間の考へて居る事所ぢや御座んせんでしたらう、第一、積つて見ても知れまさあね、死は一旦にして易く、生は難しと申すのも、場合によつては、卑怯な意味にとれますからねえ。
あゝ〳〵、長々とおしやべり致しましたこと、私、口が酸ぱくなつて來ました、エッ、口直し？、まア、羊羹ですか。これは憚り樣……。あなたも嘸、お耳がガン〳〵遊ばしたでせうね。
西洋では、他人の惡口を陰でいへば、不德義な者つて排斥されますつて、私なんざ、よつぽどその組ですわね、ホヽヽヽ、まア攻撃されないうちに、逃げませうお喧しう御座んした。さよなら。

## モデル女

今里おてふ

硝子張りの天窓から、美しい光りが海の底のやうに流れ込む、〇〇畫伯の畫室で聞いたモデルの話、おてふといつて十六の、色こそ少し淺黑けれ目鼻立の美しい、もの言ふ時は、蕾のやうに紅を含んだ脣のあたり、微笑を漂す、やさしい聲の女でした。
エヽ私のうち林町ですの、イヽエ駒込のなんですよ、お晝つから？エヽ、神田へ參ります、美術學校を來年卒業なさるかたですつて。
お描きになるのは五拾號位、かなり大きいんですよきつと、文展のでせう、今、水を汲む所ですつて、襷かけて、大きなバケツを、もつて居ます、ホヽヽヽ
エヽ、月曜にはやつぱり、學校へ出ます、學校は、一週間〳〵で變りますのよ、さうね、皆樣のおうちへ

上るうち極く長いのは三月位でせう、岡田さんの所?まだ、あがつたことが御座いません。

私共の仲間?、そりやあもう、大勢ですの、でも皆長くつて二年位しか爲て居りません、何故だか、暫くたつとやめてしまいますの、エ?、そりや又、あとへあとへと逢ふ人が出來ますもの、減りつこはありませんけど……。

やめた人達は大概、藝者か娼妓に成りますよ、いやですわね、私達と一緒にして居た人で、矢場女になつた者が二人もありますよ、先達も逢ひましたら、「又、モデルに成りたいわ」なんかつて言ひますよ、なら、初めつからよさなければいゝのにね……。

そのかた、(壁上の裸體畫を指さし)私知つて居りますよ、およしさんといひませう?、今、どつか銀行のかたのお妾になつて、根岸に居りますつて。

おきみさんつてほら、いつか新聞に出てましたでせう、活動寫眞の辯士と上野の山でどうとかつて、ねえあのかた、もう、田舍へいつてしまつたんですつて、どこに居るか解りませんの。

私?、私はいつ迄も、やめなんかしませんわ。エ、、おばアさん(おきく)の所へ端書さへ下されば、いつでも參りますよ。

## 新らしい女

古い師範出の　女教師某

お名前は暫らく預つて置きます、二十年前來女子教育に從事さるゝ某女史、堅くるしい教員氣質に似合はぬずつとさばけた物の言ひ振り、身のこなしそれで氣焔萬丈皮肉は縱横なか〳〵に女判任官で置くのは惜しい氣がいたします。

日本の人は猿の樣だと云ひますが、ほんとに小氣が利いてる替り、よいこと惡ひこと、よく人眞似をしたがります。それが又、文字に明るければ明るい程甚しいので、まして外國の町を一つか二つ素通りにした位の

人達でも、やれこの頃巴里仕立の服はどうの帽子の鍔はかうのと、いやにハイカラがつて、スカートの裾許り引きたがるからやり切れませんよ。それよりは、日本人なら日本人らしいなりをして居た方が、どんなに見よいか知れやしません。それを、無理やりに、ヘンテコな風を仕度がつて、素直な黒い髪を赤くして縮らして波をうたせたりして、それで得意がつてる人なんざ本當に氣がしれません。

それもまあ、身なりや髪形だけならまだしもがまんが出來ますが、この頃の新しい女とか何とか云のはそれ處の騒ぎじあなく、外國の新らしい文藝に卷込まれて佛國の自然派はどうの獨逸はかうのと、狂氣の樣に血眼になつて騒ぎ立て、今迄穏やかに和らいで居た思想界が嵐にでも逢つた樣に急に、荒れ出し周圍の事狀も何もあつたものではなく、只勝手なことを云ひ乍ら盲目滅法に突飛なことを始め出しますので、つい若い女學生までが、何が何やら解らずながらも、自分達が自覺する時が來たのだなんのと、急に自分だけ偉くなつた積りで、やれ婦人の人格を認めて貰ひたいの、婦人は男子の玩弄物ではない、やたらに人形あつかいにされては困るのと、外國の思想を鵜呑みにしたノラやマグダがそこにも、こゝにも出來て來ますので年を取つた人達は呆氣に取られ、何のことやらお金をかけて學問させ、怜悧な役に立つ女に仕込まうと思つたら、飛んでもない、譯のわからない、小理窟ばかり並べ立てゝ親を親とも思はぬ樣な氣儘者になつたと呆れて涙も出ぬ位ですけれど本人達はそれが大得意で、自分達は女の先覺者少くとも男子に飜弄されない醒めたる女だと社會の一角にすまして居らつしやる。何が醒めた女だか實に興のさめたお話です。

それを又新らしい女だつて偉らさうに擔ぎ上げて騒ぎ廻る新聞屋などの氣が知ません。最も新聞種の少くない今日このごろ、何か三面を埋める記事もがなと鵜の目鷹の目で探がし廻つてる矢先新らしいと云はれる人達が男子と同じ宴會を開いてビールを幾ダース倒したの、ドブロク酒屋へ這入込んで管を卷いたの、豪華

な遊びをして來たのとき〻出したら新聞屋の方ではそれこそ沙魚釣りに行つて、鯖釣つた處の騷ぎぢあないんでせう、早速二號見出し、三面一杯書き立てますので世間には増々評判が高くなる、するとそれが又新らしい人達には內心ホク〳〵もので、このつぎはどんなことをして、世間の人達の度膽を拔いでやらうかといやに惡度胸をおちつけて濟まして居其ズウズウしさはこづらがにくひほどいやになります、それも藝者とか莫連者の果てとかならまだしも、相應の家庭に育つて、人並以上の敎育をうけた人達ですから呆れるぢやありませんかそれも眞から新思想の女で云ふことなすこと確かな根底が定まつたものなら、まだい〻でせうが、今の新らしがる人にはそんな眞面目な處なんて藥にしたくたつてありはしません。全く表面だけの人おどかしで、裏面へ廻つて見やうものなら、丸で成つちや居ません。ペンキ繪の看板見たやうなものです。

そんなまがひな新らしい女よりはむしろ古い頭のない女の方が、よつぼどましです。尤も古い女と云つたところで、只おとなしい素直だけで、人をうごかす力もない熱情もない人は云ふに足りませんが、同じ古い女でも、お七やお駒の樣なのは今の新らしい人よりは數段偉ひと思はれます、最もお七だつて、お駒だつて其時代には外の女とくらべたら新らしいと云はれる女だつたに違ひありませんけれども、今日の樣な輕浮な女でなかつたのは云はなくつたつて知れ切つて居ります、そしてあの壓迫の非道い社會に居て、如何に戀と云ふ強い力の爲でも、あれだけ思ひ切つたことが出來ますから……。

併し道德上から見れば墮落した女、刑法上から云はば大罪人であるは勿論です。けれど自分自身に取つては、眞劍であつたにちがひありません、こんなこと考へて居ますと麻の葉形の帶を吉彌に結んで、結綿に結つた江戸時代の娘姿が眼の前にまざ〳〵と描かれます、けれども、もう今の時代には輕浮な自我の強い女はたくさん生れて來ても、お七やお駒の樣なきれいな強い情をもつた女は、もう出ますまい、私は今の新し

い女に、生きるよりは寧ろお七のやうな古い女に生れたいと思ひます。

## 女房は憎まれ役

植木屋の女房　露木みよ

おみよさんは元築地邊の料理店へ奉公をして居た女です眼元のキリツとした、張のある物言ひ振り所謂小股の切上つた江戸女のタイプです

私のお出入する日本橋邊の去る大問屋の旦那ですがね御身代はしつかりして居るし、御兩親はあるし至つて氣樂な御身分で、前からのお馴染かなんかで、芳町の藝者をお家へお入れなすつた方がありますよ。其の藝者といふのが、至つて氣立のよい、おとなしい性で何しろ商賣がらですから愛想もよく人樣のつきもよし、世話もよく行屆くといつた工合なので、その當座といふものは、旦那も大自慢で、友達の前でせい〴〵鼻を高くして居たんです。

ところが間もなくお產といふ段になつて來ると今まで出入を遠慮して居た母親が毎日の樣に入込で來てやれお守札とか何とか至極舊弊な事を言ひ出して來て始末におへない事になり。果は一家親類の物笑ひになつたといふ事です。

いかに好いた女房でも、こんな手合が入込んで來ちや流石に我慢が出來ないで、遂々離緣に成りましたがまつたく以てお氣の毒な事でした。

しかし、身代が確實して居ればこそ、お氣に入りさへすれば大概の方で治まつて行くやうなものゝ、私達のやうな貧乏世帶にや向きませんね。

ヤレさばけて居るの、通りが好いのといつて讃められたからてちつとばかりの身上ぢや朝煙草の煙と一緒に、吹き飛ばしてしまひますからね。

何といつたつて、亭主は拵へるが役、女房は伸ばすが役ですもの。男といふものは世間がある以上、義理

の交際のつて、時には、うつちやるやうなお金も使はなければなりませんけれどね。女房なんかは根性骨が少し位未申の方角へ突ん曲つてゝ居たつて他人から惜まれるやうでなくつちや、身上のためには成りませんよ。

交際がわるけりやこそ、よそほかゝら頭を下げて無心にくる人も無し、澁い顏見ながら食客してゐるものもありませんからね。何でも彼でも世間からの惡口は女房一人で着被つて、亭主さへ笑はせないやうにしてゐりや工面はだん／＼よくなりますよ。

ほゝゝゝゝ。我が田へ水を引くつて、とんだ鼻張りのつよい女だと思召しもありませうが、全くでさあね。

## 電車の只乘客

電車々掌　山崎益太郎

益さんも故郷にさへ辛抱して居れば若旦那で通れるものを、若氣の過ちから故郷を飛び出し、諸方を渡り歩いた末、東京に流れ込んで數年前から車掌になつた。然し、今日ではもう大分古顏で同僚の間に幅を利かせて居る。談じて曰く、

車掌なんかに面白い話が出來るもんですか。何ですツて？職業に貴賤の別はないと云ふのですか。戲談でせう。――如何に貴賤の別はないにしても、餘り感心した職業ぢやありませんからねえ。つい此間の御大葬の時にも、故郷の知人が澤山上京しまして、折惡く私の車に乘り込んだと云ふもんです。失敗つた！とうかして氣付かれないで濟めばよいと、ハラ／＼してゐるのに、田舍者の癖で、車内をギョロ／＼見まはす。其のうちの一人が遂々掲げて有る名札を見つけた、『車掌山崎益太郎』とあるんでせう。それまでもなく私が東京で車掌をしてゐると云ふ事は薄々知つてゐる連中だから堪りませんや。

忽ち二三人がヒソ／＼囁き合ふ。私が顏を振つて知らん風をしてゐるのを意地惡く注視する。軈て一人が

立上つて車掌臺の處へ出て、『山崎さんぢやありませんか。』と馬鹿丁寧に挨拶するおやアありませんか。全く顔から火が出るやうでしたよ。逃げるには逃げられませんしねえ。

何、そんなに恥ぢる事はないと云ふのですか。それも然うですよ。處で、世の中には隨分立派な風をして居て、心のきたない吝嗇漢の多いのに驚きます。それが電車のお花客などに多いから厄介です。僅か五錢で品川下だりから千住の果まで行けるんだから、考へて見りやア安いもんぢやありませんか。それを只乘しやうてえ料簡が分りません。それも其の日暮しの教育も何にもない下等社會なら兎に角、綺麗な服裝をして、鼻の下に八の字でも生して居やうと云ふものが頻々として卑しい事を企らみますから困りますよ。

其處で、其の只乘の方法ですか。いろ〳〵有りますが、最も多いのは無効切符で誤魔化すやつ。只乘でもしやうと云ふ人は平素からの心掛けが異ひまさア。先づ、電車にさへ乘れば乘り換の必要があつてもなくても、乘換切符の貰はれるやうな所まで行くと稱して切符を受け取る。それを常に用意しておいて、それから愈々只乘りの藝當にかゝるのです。即ち、目的地附近まで行くと、車掌が切符切りに車內へ入るのを狙つて入代つて自分は車掌臺に出るのです。そして、豫ねて用意の古い乘換切符を取り出し、唾液で硝子戸にピタリ貼りつけ、『切符は此處におくよ。』と云ふやうな捨言葉を殘して、ヒラリと飛び降りをやると云ふ方法。

車掌が慌てゝ引返して來て、『もし〳〵切符を頂きます。』と聲をかけると、先刻硝子戸に貼りつけたのを見て居た他のお客さんが、それと注意して下さる。然し手にとつてよく檢べると十日も二十日も以前の日附のある切符や、思ひもよらぬ『行先』と『乘換』にパンチの入つた切符などである事は屢々です。そんな時は、早速チンチンチンと三つ警鈴を鳴らして非常停車を命じ、飛降りた客を追跡して乘車賃を頂くべきが本來ですけれども、大概大目に見て了ひます。

今の飛降主義は、まア月給の十五圓から二十圓前後

でもあらうかと思はれる勤人、又は學生などに依つて行はれるのが十中の八九です。要するに、他の乘客の手前に對して只乘したと思はれるのも恥かしい、そこで一寸無效切符で誤魔化すと云ふ譯らしいのです。處が半纏股引の勞働者となると、面倒臭い無效切符など使はない。大ビラに飛降主義を實行しますよ。だが、角帽を被つて堂々たる最高學府の學生さんなぞが只乘主義をやられるのは餘り見ッともよくはありません。

それから斯う云ふ方法もあります。つい、先日人形町であつた實例を申上げませう。ピカ〳〵する着物を着て中折帽を被つた立派な紳士が、丸髷に結つてショールなど纏うた妻君をつれて乘つてゐましたが、幾ら切符切りに行つても知らぬ顏をしてゐる。そのうち人形町の停留所に來ると、二人連れは運轉手臺の方から降りました。其の時は隨分混み合つてゐましたので、やがて何氣なく發車の警鈴を鳴らすと、運轉手が車掌臺の方へまはつて來て、今、夫婦連れの人に切符を上げたかと申します。つまり運轉手臺を降る時には、切符を買ふからと云つて車掌臺の方へ行つたものと見えます。「いや、そんな人に切符を上げた覺えはない。」と云ふので四邊を見まはすと十間ばかり彼方を逃げるやうに行く二人の後姿があります。追ひかけて尋ねると、紳士は妻君に、「お前買つた？」と白つぱくれる。妻君は顏一つ赧らめもせず「妾はまたあなたがお買ひになつたとばかり思つて居ました。」と眞顏です。「私は又お前が買つたのかと思つてゐた。」と漸々財布を取り出すと云ふ次第。之れは失敗に歸した例ですが、又、只乘主義の一方法で、盛んに行はれるやつです。

無效切符で飛降りすると云ふのは前に申しましたが中には停車してから知らぬ顏で、其の切符を車掌に渡すのがあります。之れは多く書生さんや、小僧さんなどですが、流石に氣が咎めると見えてそんなのに限つて切符を無暗に卷いたり、疊んだりしてありますよ。

御婦人には滅多に今申上げたやうな只乘を企てる方はありませんが、一つ始末にをへぬ事があります。それは十錢銀貨を出して往復切符を求め、一錢の釣錢を

もらつて了つてから、暫らくして今のは二十錢銀貨だつたから、もう十錢お釣を呉れと請求される事です。さう云ふのに限つて中々權幕が荒い。『隨分人を馬鹿にしてるね、確かに二十錢だつたのに誤魔化さうとするんだもの、何てずるい人だらう。さア早く下さい！』と來る。其の言葉は此方から申上げ度いのですが、何と云つても向樣はお客、此方は商賣人、ムカ／＼する胸を抑へてじつと辛抱するもの〻、殘念ですよ。そんな時の處分ですか。それは兎に角向樣の住所姓名を伺つておいて、一週して出張所に歸つた時計算して、お餘りが出たら直ぐ屆けると云ふ事にするのです。

つい此間も斯う云ふ事がありました。日比谷公園で七八歲位の子供を連れた年增の立派な奥樣が五錢出して片道の切符を求められました。それは丁度新宿出張所の方へ歸る所でしたが、一旦車掌臺に出て、次ぎの停留所を發車して間もなく又車の中へ切符切りに入つた時、先刻の奥樣が今のは二十錢銀貨であつたから十五錢の釣錢を呉れと云はれる。無論そんな事は無いのでした。又例の手だなと思ひましたから、靜かに私は其の奥樣に對して、何かの間違ひだらうと云ふ事を申しました。けれどもいつかな聞き入れず、散々惡口雜言を吐いて罵られるのです。その言葉の中に『第一片道では此の子供の分はどうするのか、此の子供は只で乘せて貰はれるのか。』と云ふやうな事もありました。要するに、そんな文句をつけると、おつれの子供の分は只で濟むだらうと云ふ卑しい考から根も葉もない事を云ひ出したものとしか思はれません。例によつて住所姓名を聞いておいて、出張所へ歸ると早速入念に計算して見ましたが、果して一錢だも過不足はありませんでした。斯う云ふづう／＼しい事は男子の方には滅多にありませんが、御婦人の方には每度此の手を出す人があるので困りますよ。

私も今の職業に從事するやうになつて二三年になりまするが、此間まで幸ひに餘り大した事故もなくて喜んでゐましたのに、つい一週間ばかり前、廣尾線で三つになる女の子を一人轢き殺しましたよ。ガタリと突

然車が停つたから、どうしたのかと思つて、早速運轉手臺の方へ驅けつけると、「しまつた！　轢き込だよ。」と運轉手が眞蒼な顔をしてゐるぢやアありませんか。

で、車體の下を見ると、成程血にまみれた小兒の身體がある。五體が滅茶〳〵に碎かれて、臟腑がスッカリ露出し、二目と見られぬ慘憺たる有樣です。それから二三日と云ふもの、胴ぶるひがついて仕樣がありませんでした。何、それは五十圓ばかりの示談金で譯なく事濟みになりましたが、全く好い氣持はしませんでしたよ。





# 衣通姫

磯子

姫の父君は應神天皇の皇子稚淳毛二岐皇子、姫の姉君は允恭天皇の皇后に御立ちになつた忍坂大中姫でございます。姫の名は弟姫と申しましたが、絶代の國色で容顔恰も夜光の璧の樣に、その艶やかな姿が衣を徹して見えましたので、時の人が衣通姫と云ひましたのを後の人はかへつて實名のやうに思つて居るのです。

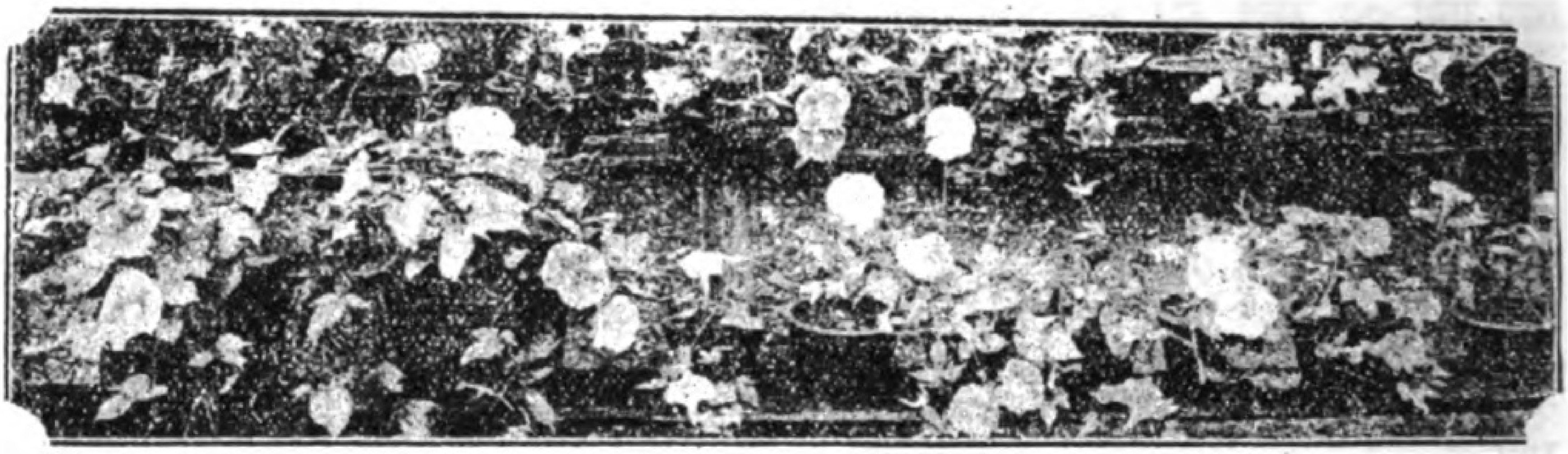
帝は弟姫の艶容を聞召し及ばれ、戀々の御心一日も忘れたまはず、弟姫を納れたまはんと思召されましたけれど好き機會が無く、其儘に打過ごさせられましたが時もよし、七年十二月、帝は偶々御宴を催ふされ親ら琴を執て彈ぜられましたが嘈々切々の妙韻に皇后はやがて御起ちになり綾羅の袂をかへして舞はせられたのであります、當時の習しとして宴の催さるゝ毎に起ち舞ひし人は宴の座長に向ひ某の娘子を奉ると申上げて妙齢の美姫を長に進めなげればならないのです、皇后は帝が自身に弟姫を進めさせろのであろと悟り申したから、舞が終りましても只叩頭するばかりで禮詞を陳べません、帝には早くより此の禮詞を俟つて居られたのですから、何とて常禮を缺くぞと皇后に仰せられました。

皇后は再び起つて舞ひました、而して後靜かにわれ娘子を奉ずと申上げました。此時帝は、娘子とは誰ぞと仰せになりましたので、皇后は已むなく、娘子とは妹の弟姫の事と申上げました。

帝斜ならず悦ばせられ翌日急に勅使を以つて御召になりますと、其時に姫は母君と共に近江の國坂田の里にいつてなります、勅使は更に坂田に赴き姫に宣旨の趣を傳へましたけれども姫は皇后を憚かつて、宣旨を承はらなかつたのです。かくて使ひの來往七度に及びましたが終に事を果たしません、帝は更に舍人中臣烏賊津に命じてかの弟姫を將て來らば朕汝を厚く賞すべしと仰せられました。

烏賊津は坂田に行き、帝の御心中を懇々と陳べました時に姫は答へて、賢き詔を拒むは恐多き御事なれども唯皇后の意に違ふことの心苦しければ、死すとも御召には赴かずとて終に動きませんでした。

烏賊津も是には困じ果てました。我れ宣旨を蒙り必ず姫を迎へ來らんと誓ひましたから、此儘歸りて罪を得るより、此處に坐して死を俟ちませうとて庭の中に座つて動きません、實ははじめから多分こんなことにならうと臆



期してをりましたので、糒を袋に入れてひそかに持つて居りましたから、空腹を覺る毎に密にこれを食べまして七日程も庭に伏して居りました。姫はいろ〳〵勸めて去らせやうとしますけれども中々動きません、又飯食を與へましても、一粒も食べませんので、さすがの姫も遂ひに心を動かされました。これまで幾度かの詔に背いた罪のあるが上に今又我がために一忠臣を失ふは重れ〳〵恐れ多いことであると考へましたので、烏賊津を勞つて京師に入りました。烏賊津は計成就したのを悦んで家に止め參内して其の有樣を奏しますと、帝は叡感淺からず厚く烏賊津を賞されました。處が皇后に於いて姫の入京を喜ばれませんので、帝も皇后を憚られ弟姫を宮中には入れられず、新たに弟姫の爲めに宮を藤原に造つて、時々龍駕を枉げさせられました。

さて其翌年の二月未だ春寒き頃姫は轉た思ひに堪へず、帝を慕ひまゐらせ待ち詫びて居りましたが日傾き黄昏の頃になりましても行幸がなかつたので寂しさに堪へかねて何とは無しに窓の外を見ますと軒から一つの蜘蛛が糸を長く垂れて落ちてきます。

わがせこが來べき宵なりさゝがにの
　くもの行ひ今宵しろしも

姫の言は空しくなりませんで蜘蛛の下りたのが前兆となつて其以前に帝は竊かに行幸になつて姫の樣子を窺つておいでになりましたのでした、帝は深く此歌を御嘉賞あつて

小車の錦のひもをときかれて
　あまたはれすなたゞ一人のみ

と御返しの御製をたまはりました。帝は后を憚かつて竊に潛幸なされたものでございますのに、端なくも皇后の御耳に入りましたので、姫はます〳〵皇后を憚り終に宮を離れ遠居をなされたいと願ひました。そこで帝は河内の國茅渟に宮を造營して姫を徙し屢ゝ游獵に托して御幸をなさいましたところがまたも此の事も皇后の知る所となつて潛幸も絶え勝ちになりました。

玉のやうな姫はつひに薄倖の人でした只山間茅茨の地に麋鹿を友とするやうなことになつたのです。

こゝに五十八代の天皇光孝天皇御惱みになり殿上殿下月卿雲客より下萬民にいたるまで心をいため、御祈禱さま〴〵でありました時に、眞紅袴をつけ容顏玉のやうな女性が帝の枕邊に立つて

立ちかへりまたも此の世にあとたれむ
　名もおもしろき和歌の浦波

と詠じました帝不審に思召され誰ぞと御問ひになりますと美人は妾は衣通姫に侍ると答へましたそこで仁和三年九月十三日右大辨源隆行を勅使として、紀伊の國に下向せしめ和歌の浦に玉津島の社を造立し姫の靈を勸請なされ和歌の神として世に崇められることになりました

夜や寒き衣や薄き片そぎの
　行合の隙にや霜や置くらん

とは此の神樣が詠れたと申します。

# 紅舌三千言

つゞれ式部

野暮よつむじ曲りよと、彼れ是れ彼仰るつてのは、理窟は何か知りませんけど私は何處までも私なんですからね、誰にだつて負けるもんですか、招かば月も傾かう花も笑まう、この柔肌に流るゝ血潮燃えなば燃えよ燃ゆるがまゝによし蛇とも鬼とも何なりとお勝手に、茶々なと召し上つてゆるゆる御批評遊ばしませ。善いの惡いの馬鹿の怜悧のつてほゝゝゝ」それが何で御坐んすえ、笑ふも五十年泣くも五十年、難波のことはゆめの又夢、私はね明日のお天氣なんかくよくよしませんわと投げの島田の髪のほつれをば、きゆうとかんだ朱唇鮮かに凄う笑ふたのか‥‥さもなくば五彩ひるがへす綾の袖、輕羅長う曳く金蓮の歩、檜舞臺の倫敦巴里、天晴東海姬氏國の代表美人、朗々たるフレンチの嬌音には王樣だつて公爵だつて乃至は大統領だつても三拜九拜させる上流貴婦人にお生れなさつてたら‥‥ほんに惜しう御坐んした、この兩極端のいづれにか貴女を置いてその切つて切つて切りまはす御腕前が見たう御坐んしたのに、私共は惜しい芝居を見そこなひましたわねえ、つまり貴女のお生れ處が好すぎましたのよそれと共に惡けなかつたんでせうよ、質素と堅實のとを何よりの綱領にする否せざるを得ない中流社會のとりわけては軍人さんの御家庭をおもちなさつたんだから、あゝ今日の結果は當然で御坐んせう、おあてがひ扶持の三十圓を前に置いて、月末の遣り繰り算段、えゝほんとに小煩いのねえ、十圓二十圓位の端金はおぬぎすての

## 斜子の羽織

のたもとから、四つにも八つにも、くしやくしやに折つたのが出る樣でなければ話せないわ、家賃が七圓米代が八圓八百屋が三圓、それに今月は服代も入れなければならない、いくらなんでもさう〳〵實家へ無心

も云はれないんだものと柳眉ひそめてぱち〳〵と十呂盤の響ばかりはひどく威勢がいゝ——折柄戞々とあたりかまはぬ靴の音、遠慮氣もなくがたびしと安普請の格子戸あけておい歸りましたぜとの御名乘りは自ら、やがて御出迎なされる隙もなく、のそりとしたまるつこい日燒のした旦那樣は莞爾とお座敷につき立てゐらつしやる、今日は馬鹿にあたゝかぢやないかあゝ疲れたと服の儘、ころりと横におなんなすつて、奥さんお茶を入れ給へな、甘い菓子はないんですかと號令に馴れた胴間聲……『ほんに辛いの何のと被仰つても男性方は氣樂なもの、女に比べて見ればなんでもありはしませんのね、食べて寢て起きて又明日はおつとめにお出ましになるこんな單調な生活でも旦那樣は一寸も不足らしいお風もない時偶お世辭に君の許の妻君が僕等同僚ぢや




一等美人で才媛

だなんか正面から煽てられて眞正直にうけ込んでよろこんでお出でなさる、せめて陸軍大學位御志望なさ

る御氣魄でもあればたのもしいのに、御立身だつて御出世だつて今の處じや程が知れてる、ヤツトコ大尉貧乏少佐その位が結局なんだわ、あゝ嫌！　嫌！」と肝癪肚のむらむらは知り給はぬ旦那様は、奥さんどうしたんです顔色が善くないと何處までも率直にのぞき込まれ「いゝえ何とも御坐いませぬ、たゞあの……」……どうしたんです」「あのあの月末の豫算がまた超過しさうなんですもの」あゝ又かとさすがの猛者も二の句が繼がぬ。こんなことが一度ならず二度ならず三度四度とかさなる中にお實家は賣り込んだドクトル様、可成りなお贅澤も生憎馴れてゐらつしやる貴女故、芝居の一度も襦袢の襟の一かけも容易ぢやないのが無性に辛く悲しくやりきれない、自烈たい苦しい世智辛いとあらゆる惡けない形容詞をお一人で背負こんで、迚も迚も私の樣なつまらないものでは辛抱がなりませぬ、もう去にます去なせてもらいましよとかう來たのが今度の離婚の由來なさうですね、貴女の樣な美人で才子で覇氣があつてその上自己本位の我利我利に出來上つた方はとても並大抵な旦那様ぢやあお氣に召しますまいよね、社會に出ては虎のごとく獅子のごとく誰でも向へまわして

## 奮闘又奮闘

どつさりお金をまうけて被在い、そして私の前では猫の樣にちひさくおなんなさい、貴女の御注文はこゝにあるかも知れませんがそんな旦那様は眞面目な方法で眞面目な考でおもちなされたお家庭には、滅多にありつこはありませんのよ、え、何あに？　お嫁入りなんかもう懲々よ、私はどこまでも束縛されるのが嫌だから一人で行きますわつて、それもいゝでせう、どうせお望が高すぎて其處あたりでは納りさうもないのですから、拗ねて咲いた名花一輪、雨が叩かうと風が吹かうとつんとすましなさるのも御勝手で御坐んす、さりながら御飯はどうして召し上ります、ほゝゝゝ銀の細身のお箸でね朝顔形の薄手の茶椀、さらさらとお茶漬が一等さつぱりしてるわねえつて、いやですよさう

ちやあないの、あの生活世過のことなんです、えゝそれは大丈夫よ實家がありさへすもの私一人位はなんでもないことよつて、なる程ねお怜悧な樣でも

## お嬢様育ち

お氣樂なことで御坐んすわ、いつまでもそんな駄々をお捏ね遊ばすおつもり？　それでは前のお言葉束縛されるのがいやだとの仰せは矛盾じやありませんと？いくら御生家とは云ひながら御厄介におなんなさる道理は他人の家と同じこと、こゝ五年十年經つ中には三



杯目にはそつと出す肩身の狭い境遇の壓迫から、またどうした苦しいはめになるまいにも限らない。あのう生家に頼るのがいけないのなら、下女にでも事務員にでも貰子にでも琴のお師匠さんにでもなりますつて、ほゝゝゝ大變な御奮發、そんなこと遊ばさないでも貴女のことなら學校の先生もあります、婦人記者もいゝでせうし、ずんと派手な方を行けばお聲はいゝしお姿はよしおまけにお年齢も行き過たと云ふでもないから女優なんぞもいゝかも知れない、ほゝゝ女優つてのがそんなにお氣

に召しましたの、をや〳〵突拍子もない、あの太郎冠者さんの

## 喜劇の役者

になつて、飛んだり跳ねたり變つたり、踝形に等しい姿をば萬人の前に曝らして安つぽい喝采をうけるのが！　此に至つては馬琴ならねど私は呆るゝ事がまさに小半時、え御本氣なのよく云ふ事ですが花の顏柳の眉、明眸皓齒と出來て居らつしやる上、殆んど直覺的とでも云い度程人の氣合や思惑を見ぬいて臨機應變活殺自在、すばしつこくはしつこくお立ち廻りのお出來なさ　貴女だから或は一時は方外な盛名をお博しにならないにも限りません、が果してそれで貴女は御幸福にお成になれますか知ら、いくら周圍の狀態が改つても貴女がやはり現在の我儘で身勝手な傲慢な貴女だつたなら、依然として元の木阿彌、少しの違もないのみか反つてお苦痛も不滿足も多いでせう、女一人社會に立つて大手を振つて歩くのは中々のことで御坐い

ます、

## 社會の束縛

も制裁も男子のそれに比して猶より多いので御坐んすもの、さうしてひとり立て通して何の功名なのですこゝで一寸鋒鋩をばくるくる後に廻して、こゝ二年前の學校生活にかへつて見ませう、同級生の三十人いづれも專修科の一つもしやうつて云ふ氣位のあるのですから女學校時代の、あどけない可愛らしいのと違つて隨分やかましかつたぢやありませんの、何か問題なり事件なりが起つた時缺かさぬ立て役者は誰でした、中心となつて活動したのは誰さんでしたつけね、申す迄もなく貴女でしたのね、美人で才子で雄辯家の米本かつ子の名前を知らないものは、白ペンキ塗りのあの校門をくゞつたとは云はさないと壯語なさつても誰も一議に及びませんでした、舍監のやかましいお婆さんでも一目貴女にお置きなさるし、皮肉屋の博士の君も米本はえらいつて御意なされたとやらなされぬとやら、

だから皆は何がなし米本さん米本さんつてお立て申して置きました、試驗前にかゝつた面倒な級の庶務や先生への交渉は皆貴女の處に持つて行つて米本さんでなければならないかの樣に拜み倒してしまひしめ、たと許りはゝゝと蔭ではどんなに云つてました!? 米本さんに遣つてもらへば世話なしよ活動家だもの、さうよその隙に字引でも首引しませうよ、でもすまない樣だわ一人に骨折らせて、何あにかまはないわ出しや張ることが好なんだからと横着者共はてんでに好な口を叩きながら



## ノートの整理

そしたものですよ、さあその結果はどうでした、女學校時代なら情實やお贔屓と云ふものもありますけれどそこは專科丈けに採點は手きびしい、お成績は年一年下り坂、入學當初の首席も二年の優等の席も三年の卒業の時は田舍出の橋本さん土井さん達に取られてお終ひなさつたでせう、天晴活動家のミス米本の名は在つても成績抜群のかつ子さんはとうになくなつてましたわねえ。今更變な處に古い事をかつぎ出すにはあたりませんけど私は才故

に美貌故にかへつて自繩自縛の運命に陥りなされ勝の貴女が御氣の毒なのです、世間の人は狡猾から自分でして見たい面白かろと云ふ好奇心は十分ありながら思ひ切つたことは誰れも容易く致しませぬ、たまさか番狂せの人が在つて日頃夢みた離れ業を實地にして見せて呉れゝばそのときこそ聲を揃へてほめたりくさしたりするので御坐んす、つまり役者となる人は少く批評家は多い世の中ですもの、いゝ氣になつてうつかりした事をしやうものなら行きつまつた曉はそれ見たかとも云つて呉れてはありませぬ美人美故に才子才故に、よく世間のこの玩具になり勝なもの、畢竟するに美の才のとそれはかの咲けばかつ散るまぼろしの花、一朝

## 瑤落の秋

が來ればをのが名ををのとは云はじあなめあなめと薄に喞つ不祥な最期もありまする、我がかつ子さん御胸にお手を拱いて考へなほして下さいな、美と云ひ才と云ひそれに誠實の根柢あり人格と云ふ背景があつてはじめて美しくもかぐはしくもなつかしくも不朽にもなるので御坐んす、根のない花それが何が頼もしい、ねえかつ子さん、こゝ一番沈思瞑目、私は美人よ才子なのと貴女をいつでも悩ます妄想を大英斷で放擲遊ばせな。そして生れたまゝの無垢なかつ子さんにおなり遊ばさない!! 美人でもなく才子でもない只の女のかつ子さんなら中尉夫人の位置を御見すてになる必要はなくなりませう。さうしたら即刻幸福におなりになれますよ覆水盆にかへらずとは云ひ條、旦那様松井中尉殿だつて我から遊ばしたお破談ではなし貴女のお折れになるのをきつと心待ちにお待ちなさつてお出でになるに違ひありません、それにねかつ子さん貴女だつて、ほゝゝゝおかくし遊ばすな、離れ居の一月たつたこの頃では御胸の底の底には流るゝ人なつかしの戀しの思……利いた風して種々申し上げた罰に、松井様になり御實母様になりお話しいたしてよければ何なりとも何時でも致しますことよ、えかつ子さん、思ひ返して下さい。

# 營養の貯へ時季

冬期に食慾の進むのは、人間に限らず他の動物にも殆んど共通の性になつて居る。秋の季節からそろ〳〵食慾が昂進し始め、其と同時に營養も良くなつて來るのが自然の法則である。此場合には、分析上左程蛋白脂肪等の滋養成分に豐富でない食物を口にしても、消化吸收の關係から營養に利する處が大であるが、之に反して食慾の起ら無い場合には、假令目前に珍味佳肴を列ねられても、決して多量に食はれるものでもなく、假りに食つたとしても、消化吸收の關係上割合に營養にならない。即ち食慾の進むと云ふ他の一面には、營養を增すと云ふ有力なる作用が伴隨するのであるから、冬期は吾々の健康に取つて極めて大切な季節である。

冬期に入つてから漁獵した一般魚類、鴨に鴫、雉子、雁、兎、猪等の禽獸を調理して見ると、何れも脂肪が乘つて居て、一體に肉は美味である。そして此等の動物は、冬期に蓄へ得たる脂肪分で夏期の營養を補うて居る。かの農村で耕作に使役する馬匹に向ひ、冬期の飼養に特に手厚い注意を加へて居るのも、其爲めである。吾々人間も亦此の營養上の天則から洩れる譯には往かない。

醫師が『營養を高める』と言ふのは、即ち脂肪を多くすると云ふことである。例へば肺結核や神經衰弱で痩せ衰へた患者を治療せしめやうとするには、先づ第一の手段として、其の患者を肥らせる工風を講ずるのであるが、其には所謂『營養を高める』のが必要である。幸に豫期の如く營養が高まつて身體が肥つて來さへすれば、豫後の身の持ち方一つで、百人が百人迄、先づ病氣は癒るに決つて居る。

斯く治吾々の營養に必要である脂肪分は、例へば心掛けの良い主婦が日々の冗費を節約して貯金しつゝ一家不時の大事に備ふると同じに、之をば冬期に蓄積して置いて夏期に補ふと云ふ利用の途を立てることが出來るのである。即ち澱粉なるものは體內諸物の燃料となるのであるが、其の燃料として餘つた分は、脂肪と化して他の脂肪と共に體內に蓄積することが出來ると云はれてゐる。左れば以上の營養上の天則を遵奉し、冬期に於て能く胃腸を整へて、自然の命ずる程度に食慾を充しつゝ、最も豐富に滋養分を攝取して置くと、恰も他の動物同樣に脂肪が乘つて、且つ體質全般が強健となり、斯くて蓄積せる體力をば夏時に分割して、一ケ年の勤勞を均一にすることが出來る譯である。



# 婦人會創立の苦心

子爵母堂　三好梅子

陸海軍將校婦人會と云へば、愛國婦人會について會員も多く基礎も固い婦人の團體で、每年の總會には、畏くも　皇后陛下の親臨をも辱うする會ですが、之を創立するに就ては、三好母堂などは最も力を盡されたので、如何に苦心されたかは下のお話でよく解ます。

## △感奮して創立に盡力す

夫重臣が亡くなつてから、私は、どうか其の志を繼ぎたいと思ひましたものゝ婦人の身ではあり、是れと云ふ修養はなし、國の爲に盡す術もなかつたのですが、明治三十八年の春、時の第一師團布教師髙橋宗雄氏等の有志家が私の宅を訪ねて、只今陸海軍人は國民の總代となつて、身命を抛つて國の爲に盡して居るから、留守居の將校婦人も互に團結して國の爲に盡さねばなりますまい、就いては東京に將校婦人會の必要がありませう、奥様方が率先して之を創立なされては如何です、さうすれば私共もお手傳ひしませうと申されました。私は之を聞て、初めて將校婦人會の必要を思ひ、自ら主唱者として直に創立しやうと決心しました。

## △同志を糾合す

ところが自分一人では到底運動も出來ぬので、幸ひ中佐夫人中野絹子、大尉夫人濱部喜代子のお二人が、私共と極く親しくしてゐたから、之を仲間としました。けれども私共三人は、何れも現役將校の夫人でないからどうかして、現役將校の夫人中、適當の人を得

たいと考へまして、恰度私の知つて居た時の軍務局長宇佐川少將(今の朝鮮拓殖會社長陸軍中將男爵)の夫人秤子さんと、近衞旅團長木村少將(今の中將)の夫人豊子さんに、仲間に入て戴き、尚ほ陸軍少將夫人佐野喜勢子さん(今の中將男爵夫人)は、私とは縁故の厚い方であるから、矢張り仲間になつて貰ひ、尚ほ忠實に活動する夫人を求めて、陸軍大尉夫人北川祿子(今は中佐夫人)さんを仲間に入れ、前の中野、溝部の二方を加へて、こゝに七八人となり、大抵役者も揃ひましたから、兎も角將校婦人會を創立して、行く所まで行かうと思ひました



## △資金調達の苦心

斯の如く私共七八人で、將校婦人會の創立を企て、より〱相談はしましたものゝ、先立つものは金ですから、さて何うして創業費を出し、事業を成功させたらよいかと私の宅で相談しました所、幸に繪葉書の本方を知つて居るから、之を賣つて資金を調達したら良からうといふ人があつて相談がまとまり、七人が夫れ〱繪葉書を賣捌き、其

の利益をすべて創業費に充てやうと思ひました。所が恰度其の時に、大觀兵式があつたので、其の記念品として俄に繪葉書を賣出し、方々走りまはり、有ゆる手蔓を求めて、之を賣捌いた結果、漸く五十圓の資金を得ました。私共の手で金を得たことは、此の五十圓が初めで、物は精神さへあれば出來るものと思ひ、尚も之を續けましたものゝ、何分事が小いから、到底大金を得ることが出來ませんでした。所が、同志の内の北川夫人の知合に、活動寫眞を寄附する人がありましたから、是れは天の賜物と存じ、早速九段偕行社を借りて。之を致した所、幸に少々の金は出來ましたが、これもほんの少しで、お話にもなりませんでした。で、こんなときは已むを得ないと云ふので、一寸申しにくいですが、活動寫眞の當るといふ吉原や洲崎の遊廓で、慈善活動寫眞を催して資金を集めることに努めました。

### △驚かす警察事故

其後高橋氏の知つて居られる足尾の寺を訪ねて、其處でやることに運動したところ、何分　聖上陛下の御寫眞もあつたものですから、警察との間に悶着が起つて、足尾警察署から照會があつとかで、警部が私の宅へ取調べに參つたやうな事もありました。こんなことを致しても、どうも金が足らなかつたので、何かの時には私が立換へましたが、それでも足らなかつたので活動寫眞も運動員丈けに任かせて置かずに、發起人が親しく出張して運動しました。先づ佐野男爵夫人、溝部大尉夫人に行つて戴き、其後神崎夫人や私も加はつて、高崎より前橋に至り、日光や足尾の方にも行きいろ／＼非難のあつた中で慈善興行を續けました。

### △有力なる應援

此の運動のため地方や東京で、少しは金が出來ました。其後麻布の矢吹留守師團長を訪ねて、將校婦人會の創立のことを話して應援を頼みました所、中將は大に贊成して下さつて、非常に力を得ました。それから

會員の募集をしました。けれども何分創業時代のことですから、世人の信用もなく、私共發起人の知人で、僅に百人餘の會員を得て、漸く發會式を擧げることになりました。發會式は明治三十九年一月の二十日で、九段偕行社を借りて擧げましたが、此の日は佐野夫人を初め五六十名の將校婦人が列席された丈けでした。何分會の行末が分らぬ所から、約束をしても出席なさらぬ方もあり、仲には間違でもあると、主人の役儀に掛るからと云つて。お見合せになつた方もあつた位です。其れ所でなく、何時本當のものになるやらと、發起人同志の中でさへ危惧する方がありましたので、今日のやうにするには、隨分心配したものです。



△敎養所の創設

將校婦人會を設けたのは、將校婦人の親睦を敦うし、婦德を高むるが主旨で婦人の慈善事業は愛國婦人會なり、特志看護婦會なり、種々の婦人團體に讓る積りでしたが、矢吹中將が、將校婦人會でも、何か慈善事業をしてはどうかと申されたので、初めは將校遺

族の女兒を預つて世話をしやうかと思ひましたが、どうも女の兒は、手數のかゝる割合に、さう直接國の爲に盡すこともないから、一層將校遺族の男兒を預つて世話をしたら、どうであらうと、皆の意見も纏つて、こゝに附屬教養所を設け、直に戰死者の遺兒二名を預り教養することになりました。

### △家屋買入れの苦心

之より先き、事務所は、四谷須賀町の私の宅を轉じて、一時、麹町區飯田町河岸の一室を借りて居ましたが、何時迄も其んな所にも居られず、漸く四谷區大番町の廣い貸家を一ケ月二十三圓で借りて、初めて陸海軍將校婦人會と附屬教養所の門札を掛けました。けれども未だ會の信用もなく、働く者は發起人と矢吹小將其他二三人位の極く少數の人々でした。大番町に越して、先づ一安心と思ふと、俄に其れが賣家になりました。そこで會を盛んにするには、相當の建物がいる、其れには大番町の借家は、家も廣く、庭も狹くないから、幸ひ買求めたら好からうといふことになつて、持主に申込んだ所、もう買手が定つて、明日登記を濟ますことになつて居るといふことでした。それから買手の名を訊いて其の家を訪ねて見ますと、いゝ工合に其人は軍人の夫人で、私の知人であつたので、いろいろ事情を話して其れを讓つて貰ふことにいたしました。で直ぐに持主に千圓の手附金丈を渡して置かうとしますと、即時に代金全部ほしいといふことで、全く困りました。何分壹萬圓以上のお金ですから、誰れも出さうと云ふ人はなく、私も其んなに金は持たず、仕方がなくて、私の持物を抵當として、或人から八千圓を借入れ、皆樣に二三千圓の寄附を仰いで、漸く大番町の邸を買取りました。

### △初めて春に逢ふ

其れから陸軍丈では面白くないと云ふので、海軍も一緒になり、陸海軍の肩書を加ふることになり、會長を陸軍の大山元帥夫人に頼み、副會長を海軍の伊東

元帥夫人にお願ひ申し、東郷夫人を附屬敎養所長に、寺内夫人を幹事長に、奥夫人を副幹事長に推薦し、自分は幹事として主として會計の任に當り其の他幹事、評議員の役割も出來四十年五月には、有栖川宮妃慰子殿下を總裁に奉戴するの光榮を得ました。

△皇后陛下親臨

尊いで第一回の總會には、畏くも　皇后陛下の親臨を辱うし、且つ有難き御言葉さへ賜はりて、益益會運の發展を御希望遊ばされたので、私共積年の苦心に初めて花は咲いたやうな心地がしました。それからは支部も各地に出來、會員も殖えて四十一年の秋には五千人といふ多數に達したので、こゝに大番町の本部も手狹を感ずるやうになり、寺内大將夫人、宇佐川夫人、其他の盡力に依つて、牛込若松町の陸軍練兵場の一隅凡そ一千坪許りを借り受け、此處に本部と敎養所を建築して、同年十一月に其處へ移りました。此頃では會員は殆ど一萬人にも達しますが、是れ丈の團體になりましたのも、全く御聖德の然らしむるところと何とも嬉れしさに堪へません。


うすら寒


十一月
日
3.10.
17.24.
月
4.11.
18.25.
火
5.12.
19.26.
水
6.13
20.27.
木
7.14.
21.28
金
1.8.15.
22.29
土
2.9.16
23.30



# 江戸趣味と西洋趣味

松平鏡子

七枝は、歸り路に手拭を買つた。

幾卷も幾卷も、小僧が持つて出た手拭の中から、斜つかいに菊五郎格子の染め拔いたのと、ずつと片側だけ薄藍で、ちよつと常盤津の紋に似た形の付いてゐるのとを選つて、兩方とも二筋宛切つて貰つた。

七枝はそれを裁縫のくるんである、友禪メリンスの風呂敷の中へ入れて外へ出た、路々の土が固く氷つて爪先に寒氣が沁みる、はた〳〵と踵にまつはる着物の裾を輕くさばいて、つと小さく褄を取るやうにして歩いた。

内玄關の格子戸を開けると、妹の鞠子が先へ歸宅つたと見えて、編上の靴が脫ぎ捨てられてあつた。七枝はそれを見ると、一寸美くしい眉を顰めて、そしてずつと障子を開ける。

「姉さま、お歸り……」

鞠子が勢ひよく走つて來て、肩に縋つた。

「何ですね鞠ちやん、みつともない。」

嚴とたしなめて、

「阿母さんは。」

と訊く。

「マヽはね、一寸他所へゐらしつたの。」

「さう。」

云ひ乍ら、がつかりしたやうにとんと膝を突くと、風呂敷包を傍へにやつて、ずつと長火鉢にいざり寄りながら、袂の端を脣に銜へて、鐵瓶のお湯を急須にさした。

七枝は、鞠子のお納戸カシミヤの洋服も、のび〳〵

した黒い靴下の現なのも厭はしかつた。だつて十七になる七枝は、下町趣味の憧憬者なのだもの。

袴をはいて束髪に結つて、細い踵の靴をはく山の手の娘の中に交つて、女學校へゆく事なんぞは大嫌ひな七枝は、一人群を離れて三年で退校した。裁縫も近所には學校制度のものしかないので、わざ〱遠い路をお師匠さんの許まで通ふ。

最初、七枝が今のへ通ふやうになつたとき、母親の美くしい眉は顰められた。

「貴女、藝妓家の娘も來るつて云ふぢやないの。」

自分の可愛い娘を、そんな者の中に入れたくないと思つた。

「藝妓家の娘が來たつて何だつていゝぢやありませんか、いけない？」

訊き返したら。

「惡いといふ事もないけれど……」

口籠つた母の横顔をちらと見て、俯向いだ胸には、通つてから嬉しさがざわついてゐた。毎日〱華やかな空氣の中に身を埋めて暮してゆかれる、町に生れて町に育つた娘の中に日を過してゆかれる、と思つたらうれしくつて堪らなかつた。

髪を結綿にして、緋鹿の子の半襟に、黄八丈かなんかの黒い襟のかゝつた着物を重ねて、麻の葉と黒繻子の晝夜帯、紅さした眥まで、紫だんだらの縒總がふさやかに垂れた、簪はあの好きな好きな藥玉……斯うした下町の娘に、憧憬の多くを投げ懸けてゐたけれど、さうまでな態度は母が恕さなかつた。

で、やう〱に、唐人髷で我慢して、着物も半襟の懸らない縞のを着てゐる。帯だつてさうです、母の好みで買つたオレンジ色のは、簞笥の底深くに祕めて、叔母さんのお古の、紫繻子のを締めてゐる。

みんなお友達が、大びらで俳優の噂したり、藝妓の話したりするのを、七枝は美くしい繪卷物でもみるやうに、うつとりとして新らしい智識を凝視てゐた。丁度陸の人間が、海底に迷ひ入つて、馴れぬ景色に醉はされてゐるやうなものだと思つた。

常盤津や清元の稽古に行つて、踊は花柳の流を汲む人達の前で、琴の許を受けてゐて、ヴァイオリンも少こすれるといふのを、七枝は肩身狭く思つてゐた。だからお友達が、稽古の揃の浴衣着たり、俳優の名と紋とを染め拔いた手拭持つたりするのをみると、そんな事の夢にも及ばぬ自分の身と引きくらべて、沁々羨やましいものと思ひ詰めた。



芝居は有樂座の子供日に妹と二三度、あとは矢張妹のお附合に、小公子といふ、西洋人の子の出る芝居を見た限な七枝は、歌舞伎座や新富座の評をする人達の前では、沈默を餘儀なくされてゐた。自分で自分を、ひたすらに卑下してゐたのである。

だから七枝は妹の鞠子が、お下髮の前髮にリボンかけて、洋服着て、延び延びした靴下で編上靴で、白いエプロンで、ひさしの大きい帽子冠つて歩くのを、あきたらなく思つてゐる。

鞠子も、七枝がどうしてあんな半玉みたいな風姿し

たがるんだが、さつぱり不分明。束髪に結はないで何故唐人髷に結ふんだか、リボンかけないで何故簪さすんだか、靴といふ便利な物を捨てゝ、下駄だの雪駄だのをはきたがるんだかと思つた。

* * * * *

縁に近い障子ぎはに、紅塗の針箱とりいでゝ、友禪の小布を剪んで、七枝は爪袋を縫ひ初めた、鞠子は縁側に安樂椅子持ち出して、ゆつたりと腰かけ乍ら、翻譯物らしい少女小説を讀んでゐる。

しばらくして、鞠子は此樣な事を云つた。

「あゝ私も西洋人に生れりやよかつた。」

七枝は、そらまた十八番が始まつたと、心の裏で冷笑して、故意と聞えぬ振につんとする。

「ね姉さま、西洋人の子は親しさうに名を呼ぶわね、……あたし達が西洋の子だと、姉さまつていはないでもお談で出きるのね、ミスナ、エ……いゝわ、……いゝまのお名、西洋人の名におきなつちまふわ、こと姉まさ、姉さまはナ、エツていふのよ、私の事もこれからはマリイつて云つて頂戴な、ね、マリイつて西洋人によくある名だわ。」

「姉さんはそんなこと大嫌ですよ。」

「まあいゝからお聞きなさいよナ、エ、それからね一番好いのはね、パパだのママだのが歸つていらつしやるでしやう、そのときなんぞね、ナ、エお聞きなさいよ……ちよいと姉さま、知らん振してゐちや厭よ…………あのねさうすると、いつも私達お玄關へ行つて、かうして疊に手をついて、かしこまつてお辭儀をしてお歸り遊ばしませつて云ふでせう。それが西洋の子なら、ツッと駈けて行つてマヽツて腕に縋ると、マヽがきつく抱き締めて熱いキッスをして下さるわ。パパだと高くさしあげたりなんぞして、やつぱしキッスをして下さるの、その方がいくら親子らしくつていゝか分りやしないわ。」

「そんなら貴女だけ何でもなさるとよくつてよ、姉さんは日本人だから、そんなまねなんぞしたくもありやしない、鞠ちやんなんぞいつそのこと、黑ん坊の國へ

でも生れてくればよかつた。』

『黒ん坊も接吻すること？』

『知りませんよ、そんなこと。』

『ひどいわよ、姉さまつてば。』

『だつてさうよ、私は西洋々々といふ人大嫌ひさ、アーメンなんていふのも大嫌ひ。ちよいと鞠らやん、昔昔ね、キリシタンの敎へを信じた者は首を切られてしまつたのよ。』

七枝は第一にキリストを罵り、キリスト敎を排斥した。

七枝は、ミスナ、エなんて云はれると、胸が惡くなるんださうだ、ならばお七とでも呼ばれたい位に思つてゐる、ミスなんて炭を倒さまにした位にしか考へてゐない。



妹は薔薇の花咲く巴里の大街の、何十階樓に華かな灯のつく夜。棕櫚竹の葉蔭に眩しい電燈の光を浴びて、上氣した頰に輕く扇の風を送る、舞踏室の淑女の姿、そのほか、まだ見ぬ國の景色に憧憬てゐる。

姉は柳の街の夕暮、しなやかな絲を人知れず結んで願ひを籠むる下町の結綿の女、行燈の蔭の吊衣桁に登の衣裳をふんわりとかけると、幾重ねの紅絹裏を脱けて、焚きこめた留木の馨が、仄暗い部屋の裏にちりぢりと漂よひゆく……。過去の戀の女や、江戸の娘の夢を見てゐる。



# 頓智協會の發會式

落葉籠

渚と云ふ娘の隣に浪男と云ふ男の子が有りました、夏の朝に秋の夕べ渚が調ぶる玉琴の洩るゝひまより垣間見て烈しい戀に捕はれの身となりました、思ひつゝぬればや人の見えつらん、此の頃は枕も上らぬ有樣、親達の心痛、氣のきいた浪男の乳母が委細を聞いて渚を呼びにやりました。亂れ咲く秋草の露打はらひ出て來た渚は痩をとろへた男の枕もとに坐しますと、シゲ〳〵淚の目に見て居た男は、突然細い手で渚に握手を求めました、暫くして手の甲に紫色の脣に接吻を求めました。次には優しい渚の膝に頭を上せて枕にと憐を乞ましたので、心よく許してやりましたのに、其まゝ永久の眠りについたのです。

或る秋雨のそぼ降る夕べ、緣側でしほるゝ花の風情に恍惚として居ますと、生前の浪男の幽靈がスーと出て恨めしそうに見つめました、其翌日も其の翌日も氣味の惡さに堪へ兼ねて

　手と云ふて口を吸はして膝まくら
　　肌と云はぬはおのがあやまり

と聲かけました男の影はパッタリ消えて何の事も有りませんでした。

◎



ある無學な者が歌の師に和歌と云ふものは結末にかゝなとかけりかをつければ字餘りでも歌になると教はつて歸り早速作つて師の許に直して頂きたいと威張て差置ました歌に

雪ふれば河原の石が帽子きる、そこで小溝小溝の鯲等がびいどろ天井張つた樣に思召すらん山櫻かな

と書いて有りました。

◎

詩歌に秀でた或る武者修業が行き暮れた山路に宿かる賤ヶ家も分らず建ち朽れ同樣な山寺に宿りました、淋しい氣味の惡い本堂に横になり見越入道の七八つも出れば好いと考へ作らウト〳〵と夢路に入りました、眞夜中頃位牌堂に烈しい音がしてパッと出現れたは三十幾つ位ゐな住寺らしい人とお小僧とも見ゆる十二三位なのと二人でした小僧が住寺らしいのに「和尚樣申しませうか」「アヽ」

切られてさへも死なれざりけり

と云つてホロ〳〵涙を落しました、强盜にでも出逢つて死んだ人の靈だと思つて武士はニッコと打ち笑ひ「よし浮ばしてやらう」と高らかに

活花の水に命をつながれて

と上の句をつけますと頭を下げたまゝ姿は消えて了ひました。

◎

よく世間には繼子となると仇の樣にする母親が御座います、顏形から學力に秀でたの



を憎んで居る母親が、或和歌の會の席上に姉(繼子)妹(實子)を連れて出ました妹にはよき題もがなと四角張つてキヨト〳〵して居ますと、姉の兼題には大皿に雪を入れ根松をさして朱塗の盆に上せて出されました。所謂難題と云ふので繼母は內心大喜びで居ました。妹の方は螢籠に造り物の螢が四つ入れて有りました。扨て其時が來ますと姉は

盆皿やさらさの山に雪降れば
　雪を根として育つ松かな

妹は千切れる程首振つても歌などのたしなみを持つ頭で無いのでジリ〳〵汗の下から大聲で

螢や螢や貴樣の尻に火をつけて
　尻も光れば股もひかれる

と怒鳴りつけました。

◎

十月十五日に相當する男の子の宮詣での其日でした、乳母は氏神の鳥居の前で出家の使ふ、袈裟と衣に御叮嚀にも珠數まで添へて落ちて有る風呂敷包を拾ひました、大切な男子の宮參りに物も有うにと大變心配して狂歌で名高いねぼけ先生に出逢つたのを幸ひ目出度判斷を願ひました、矢立の中から筆をとり出してサラ〳〵と書かれた先生は乳母に渡してスタ〳〵行すぎて了はれました、見ると

袈裟(今朝)拾ふ衣(頃も)十月十五日



息子の年は珠數の數ほど
乳母は涙を落して喜びました。

◎

關口彌太郎氏は武に強き武夫でしたが、幼き主君と共に京師に在す公家の御機嫌伺ひに上つた事が有りました、其の頃の公家は人の惡いもので江戸の大名はどれ程、文學の力が有るかためして見樣と思つて年の行かぬ主君に（山間の海）と云ふ和歌の難題を出しましたもし出來ないと滿座の中で手を打て笑つてやらうと思つたのです主君は秀才と名ある人でしたが初めての參内に氣後れの爲めか、もじ〳〵して居ます見兼た彌太郎は未だ十六歲の少年でしたが主君の前に拙者一句と料紙を取るより早く、筆蹟も見事に

山間の霧はさながら海に似て
浪とも聞けや松風の音

公家はギャフンと參つて舌をまきました。

◎

今一つ難題のお話し皆樣御承知の歌聖小町が帝に奉仕して居る時でした、萬事に拔目なき小町何か無理云つて困らし呉れんと御考への末をハタとお手をお打になり小町を召せとの御言葉、其時小町は黑髮に香をたいて居ましたが俄かのお召何事やらんと急ぎ平伏しますと「小町よ至急入用である石の袋を縫へ」と仰られました、ハタと困ると思ひの外チラリ美しい顏を半ば上げて



勅なれば石の袋も何のその
　　眞砂の針をたまはれや君

「天晴〱」その名はいやが上にも響きました。

◎

赤鼻になる迄酒に呑れ身をしくじつた僧が行脚の途中卯吉と呼ぶ百姓男と道連になり今を盛りの櫻の一本の其下に腰かけて語りました賤の男の樣にも無い風流な語り樣、追分まで來て僧に別れを告げ紀念の爲にと墨汁を出して書つけた句に

　旅僧きちら、笊鼻の別れかな

旅僧は自分の赤鼻を笑はれたと早合點、無學の人だけに畜生めと男の跡を追ひかけてお前はなと談じつけました「アハヽ」笑つた男はすら〱と讀んで聞かせました。

　旅ぞ憂き散らざる花の別れかな

假名ばかりだつたので讀みちがひで大笑ひ男の名は思ひ出せませぬ。

◎

月見の宴が善光寺の本堂で催されました、開け放した本堂には月の光りが水の樣に流れ込んで松の影までシックリと畫き出されて有りました、思ひ〱の名吟が机の上に並べて宗匠の前に置かれて有ります苦吟苦吟と首を捻る自稱宗匠の頭の影までクッキリと疊に落つるあでやかさ、其夜です緣の下の蚊に困り乍ら手足を伸して寢て居た、十五六の女乞食がありました、餘りの騷がしさにのつそり首を出して見ると、平凡なる月見の





題に苦吟の樣の可笑くニッコと笑んで乞食の少女は、のそり〳〵と這出して幹事に逢ひたいと申しました。「ア、乞食の癖に」と取り合つて與ませぬ、無理に賴んで一句讀まして貰ふ事になりました。

宗匠は眼鏡越しに名吟もがなと皿大の眼に繰り返しても有らばこそ頭を抱へて讀み行く中フト目に止つた一句見事な筆蹟に

　　善光寺で月見る今宵かな

「アッこれだ」と聲立てました、誰の句だか調べても主なく不思議の中に會は終りを告げ樣とするのです。

「宗匠樣、如何にしても解りませんが秀逸の譯を聞かして頂きたいので…」「扨て〳〵情ない人達ぢや名吟の譯を聞かつしやれ、

　　善光寺で月見る今宵かな

少女は松女と云ふ句讀みで御座いました。

◎

屋根の上まで往來になるのは冬の越後です或る年の元旦に家内打寄り雜煮祝ひの最中を屋根の引窓から、ドシンと音して落て來たのは福市と云ふ盲目按摩でした「元日早々雜煮祝の眞中にろくでも無い盲目なぞ落ちて承知しない」と怒鳴りつけられた福の市は白い目をギロ付かせ作らあらたまり。

　　元日に福市と云ふ小盲目(米庫)が、落ちて尻餅つくぞ目出たき

と歌つて罪はゆるして貰ひました。

# 罐詰を旨く食べる法

水産講習所長　松原新之助

魚でも野菜でも、季節といふものがあつて、年中好きなものを食べるわけには行かないが、それを食べさせるのが罐詰の目的で、寒中に筍を得るなぞは何でもありません。また遠き南洋の果物でも、食べたいと思へば何時でも食べる事ができます。其他旅に出て邊鄙の土地で食物に困る處などでは、罐詰ほど有難いものはありません。殊に味を附けたものなどは、旅行用には誂へ向きで、罐さへ切ればすぐ箸が附けられるので、便利から云つたらこの方が一等でせう。けれど、物によつては味附けでは不便なこともあるから、水煮にして薄鹽にしたのなどもあつて、こんなのは食料の原料につかひます。また外國では醬油といふ物はないから、重に鹽漬で、トマト等を加へて味をよくしてあるが、これらは製造する時に高熱を加へないから、香氣が何時までも失せません。

## △調法される日本の罐詰

歐米では、遠來の物といふことを喜ぶところから、日本の罐詰なども、半以上彼の地の料理に使はれます。それに其まゝ食べられるものは、佛蘭西あたりでは、ゴールドロルーといふ御馳走の前に出すしやれた食べ物があるが、それに日本の罐詰なども用ゐられ、又ビール、ブランデー、ウイスキー等の飲料品の副食物としてもよろこばれます。又露西亞でも政府特賣のウヲーカーを飲む時には、必らず用ひられ、又ラック人種の食膳に、しやれたものを並べて食べさせる時にも、之を多く使ひます。そして佛蘭西などで料理屋や旅館で食事する時には葡萄酒を無代で飲ませるやうに、露西亞でウヲーカーを飲めば必ず罐詰をそへて出します。外國ではこんなに需用が多くなつて居るので、此の頃では、罐詰業も可なり盛んになつて來ました。殊に佛蘭西に輸出するサックン（鰯の油）、亞米利加に出

す海老の罐詰などは、彼の地ではなか〳〵得難いといふので、それらに對する關稅を許してあるので、日本の北海で取れるこれらの物は、多くは罐詰となつて彼の地に輸出されます。

## △味と主婦の手腕

種類からいへば、筍、松茸、うど、蕗、あわび等を盛んに罐詰として四季の食卓に並べられるが、其他に豆類でも漬物類でも、皆な之れに作られる樣になつて來ました。だから、どういふ片田舍でも、食べ物にことかく事はありません。殊に突然來客のあつた場合などには之を二三品も用意して置けば、人を四方に走らするにも及ばず、至つて樂に人をもてなすことが出來ます。又たとへ都會に住む人でも、夏分は兎角物が腐敗しやすいから、冷藏函でもある家は格別、さうでないうちでは、夕方の來客に朝から買ひ込んでおく譯にも行かず、又客の顏を見てから魚屋に飛んで行つても、うまく間に合はない場合があるので、やつぱり罐詰にこしたことはありません。けれども之れも蓋を切つてそのまゝに客の膳に並べるのは不體裁だから、それをうまく料理をして、罐詰か何か分らぬ樣にして仕舞ふのが主婦の手腕です。

## △罐詰の料理法

一體日本の罐詰は、重に外國出稼の人に故郷の味を味はせ度いといふのが目的で出來たので、できるだけ價が安くて食べられる樣に製造するので、原料なんぞも、どうかすると餘り良くないのを使ふから、其まゝ食べては決して甘いものではありません。然し外國へ行つて、日本の公使館や大使館で馳走になる料理は、原料は罐詰ばかりでも、料理を上手にしてあるから、何時もおいしく食べられます。よく人が、罐詰もいゝが、どれを食べても同じ樣な味で、一種の匂をもつて居るから、それが鼻についてすぐ飽きてしまふといふが、これは蓋を切つて其まゝ食べるからいけないので、料理の仕方によつては隨分甘く食べられるのです。宅で

ではこの頃、此の料理法を研究して居ります。たとへば蝦の罐詰は酢にして出すとか、又青豆蕗などは一所に取りませて一種のおかずを拵へるとか、其他魚類などは他の野菜類と煮て見るとか、いろ〱工夫してやらせてゐるが、隨分面白いおいしいものが出來上ります。罐詰は、客用の外に、子供の多い所ではお辨當のおかずとか、又登山でもする折には非常に重寶なものですから、成るべくおいしく食べる法を工夫したいものであります。

## 人類の食し得べき物

異常なる出來事の爲め日常食物の缺乏を來たした時、若し食物に對する吾人の考を少しく變へたならば、餓死の厄災を免るゝ事が出來やう。凡てのパンも米も將た又鳥獸の肉も食ひつくされた時には其邦では食用にされなくとも、他國で盛に食用に供せられて居るものを食する事が出來る。勿論熊も、馬も、犬も、鼠も、猫も、象も暫くは吾人の胃を滿たす事が出來やう。されど此等のものも食ひ盡された時には、吾人の食指は蛇類に向つて染められねばならぬ。英國の蛇學者カノン、ホースレー氏の如きは盛に食物としての蛇を唱道して居る。又吾人は毛蟲類を食する事が出來る。西印度に於ては珍味として賞美されて居り、現に或る政治家の如きは庭内散歩の際には常に樹木より毛蟲を捕らへて晩餐の卓上に供ふるを樂として居る。清人は蛹の油いりを食するではないが、蜘蛛も亦食せらる亞非利加のニユー、カレドニアに寓居した多くの歐洲人は蜘蛛を燒いて食する習慣を得たと云ふ事である。又亞米利加インヂアンの酋長は蚯蚓がなければ完全な獻立とは思はぬ、アラビヤ人も好んで蚯蚓を食ふさうだ。偖て凡ての此等のものも食ひ盡された時には土を食ふ事が出來る熱帶國の人民は能く土を食らう。マクダレナ河畔の婦人は陶器の製造に從事中時々土を口に入れるさうだ。雨が降ると子供等は戸外に飛び出して急いで雨に濡れた土を食ふと云ふ。するゝ人間は決して餓死するやうな事はあるまいが、是では丸で野獸と同じ事である。願くはこんな境遇に陷りたくないものだ。

# 色盲の話

醫學士 石原 忍

これまで、色盲は結婚の上に餘り影響のないものでしたが、色盲の航海長は船を沈め、色盲の機關手は汽車を衝突せしめ、色盲の將校は敵の旗か、味方の旗か判らないで、大失敗を招くと云ふことですから、色盲は實に結婚約束に大影響のあるものです。依て石原醫學士の色盲の話を紹介いたします。

## ▲色の冷温

色盲のお話をいたす前に一寸色の事を申し上げませう。御承知の通り、太陽の光を三稜鏡で見ると、七色の變化が判りますが、迴折格子（硝子板へ竪に細線を引いたもの）で太陽の光を分析するともつと、多種の色が見えます。例之ば橙黃色の內にも赤に近いのと、黃に近いのとがあると云ふやうに、一色より他色に移る間の色を仔細に調べると、始の赤から終りの紫までに百六十位變化が見えるのです。それで綠色を中央にして左右へ分ると、左半部卽ち綠から黃までは暖かい感じのある色で、實際寒暖計で試みても熱がある、これを溫半部と云ひます。又綠から紫に至る右半部は、感じも熱度も寒いので、冷半部と稱へる。但し冷半部の色は化學作用がつよいから、撮影すると白色を現はします。

## ▲色の三方面の變化

一の厚紙で圓形を作り、その上に或二種の色を塗つて、速かに迴轉すると白色を現はすのですが、この二色を餘色又は補色或は反對色とも稱へます。例之ば赤と淺黃、牡丹色と綠、黃と靑なぞは互に餘色をなすもので、畢竟冷半部と溫半部は互に餘色を持つて居るのです。尙餘色の間へ中位の色を挾むと、ぼけ合ふて輪が出來る、これを色輪と稱へます。又白、灰色、黑を或色へ交せると濃淡各種の不純粹色を現はす。この餘

色、色輪、不純粹色の三つを色の三方面の變化と稱へる。世界萬物の色彩はこれを基礎として千變萬化を呈出し人の眼に映ずるのであります。

## ▲色を感ずる眼底の組織

眼球の底には、圓錐體と、圓柱體の二つの細胞が瀰漫して居て、色彩を感ずる作用をなすのですが、圓錐體の細胞は明るいところに働らき、圓柱體の方は弱い光や暗いところに働くのです。而して圓錐體細胞は、眼底の中央部に密集して周圍は段々まばらになり端の方では全く盡て居ますが、圓柱體細胞は、端の部分に充ちて中央部には全くありません。

## ▲晝と夜と見え方が違ふ

私共はいつも眼を放つたところの中央が見えるものです。其證據には、晝間書物を見て居る時に、蟲なぞが飛んで來て、ふと眼をその方へ轉ずると、書物の方は見えません。ところが、夜は、中央がぼんやりして却つて端の方が判然見える、暗い田舍道を辿つて、ぬかるみを除けやうとする折なぞ、少し先の方へ眼をつけた方が却つて足元がよく見えるやうなものです。これで眼底中央の圓錐體細胞が晝働らき、周端の圓柱細胞が夜働らくと云ふ理窟が分りませう。彼鳥眼を患ふ人は、この圓柱細胞が病氣にかゝつて、夜の視力を失ふのであります。夜少しも見えぬ鳥、蛇、蜥蜴、龜なその眼底を調べて見ると、圓柱體細胞が缺けて居り、晝間見えない梟、鼠、蝙蝠、モグラなぞの眼底には圓柱體ばかりで圓錐體組織が丸でありません。

## ▲人の眼の發育

圓柱體細胞は圓錐體細胞の十分の一か二十分一しか視力がありませんから、兩方を備へて居る人間の眼でも夜はよく物が見えないのです。尙圓錐體細胞は色彩を見る作用があるが、圓柱の方にはありませんから、夜は只明暗だけがよく判つて、色を見分ける力が乏しく、赤色は暗く見え、青色は明るく見えます。一體人

(るの一)

# 誰でも出來る肺病自宅療法

## 肺結核新劑發見せらる

肺病の恐るべき事は今更云ふ迄もない殊に近年非常な勢ひで患者の數を增しつゝあるに至つては最も寒心すべき一大事である、隨つて色々の奇藥とか靈藥とか云ふ者が頗る澤山流行するが未だ完全なる特効藥のあるのを聞ない、誠に憂ふべき事である、所が獨逸留學より歸朝せられたドクトル松尾先生が効力の卓絶なる新劑を發見せられたと云ふ事を聞いたので未だ此喜ぶべき新劑を知らざる患者の爲に先生の治療談に就て敎へを乞ふた、先生快諾して曰く此病氣は極めて緩漫なる慢性傳染病で治療が仲々困難であるから療法も容易に發見されない私も隨分苦心しました此病氣の大體の容體を御話しすると別に感冒に罹らぬのに時々咳嗽が出るとか、又朝は何共なかつたのが夕刻になるとボーッと熱が出るとか、餘り澤山の熱でもないが定まりなく發熱するとか少しとろ〳〵就眠すると全身に汗が出るとか靜かにして居ても時々呼吸が苦敷なるとか、別段自覺すると云ふ樣な理由のないのに身體が何となく疲勞して仕事が厭になるとか、咯痰が平常より多く又は血の腺が交るとか、夜間眠られぬとか、食物が進まぬとか、胸や脊が痛むとか、少しの事が非常の苦になるとか、下痢があるとか、咯血するとか、非常に發熱するとか、甚敷衰弱して居るとか、夜の明ける時分になると呼吸苦敷なるとか、かう云ふ容態の患者は早く注意しないと再び起つことが出來なくなる、肺病の療法には種々あるけれど只藥を呑む許りでは全治せぬ其れは根本の療法を知らないからであると。

因に本療法は自宅にて誰にでも出來るのであるから詳細を知りたければ返信料三錢封入東京麴町區九段下飯田町四の十六如[illegible]堂藥局（電話番町二八八二番）へ本誌愛讀者なる旨記入し申込まるれば親切に委敷根本的療法を敎示せらるゝ筈である。

女(その四)

幼年畫報 第七巻第十五號 增刊

■十一月十日發行■

# 雀のお宿

すゞめ　やど

□小波作□□□春汀畫□

糊なめて、舌きられ、雀は藪の、宿へいた、山から歸つた爺さんは、雀のお宿へたづねつた、チュツチュツ彼方の藪で聲がする、行つて見たらば雀共、みんなで御馳走してくれて、おみやげにとて大つゞら、家へ歸つて開いて見たら、金銀珊瑚の寶物、舌切婆さん大急ぎ、自分も行つて貰ひ受け、あけて見たらは何が出た、さア〳〵早く御覽なさい。





菊判美麗畫本（石版極彩色……十六頁　活版二色刷……十六頁　光澤紙寫眞版……四頁）

正價十錢　郵税五厘

東京本町
博文館
振替東京二四〇

多年獨逸國に研學せし藥劑師間中綱彥氏の創製にかゝる




嶄新ふけ取香水

# レゾール

定價 小瓶五十五錢 大瓶九十錢

## 秋の拔毛をとめ 髮のくせを直す

唯一の**新香水**なり

亦瓶の新考案の横口にて御使用に頗る便利なり

●有名呉服店化粧品部藥舖洋物店にあり

發賣元
東京本町三丁目
博愛堂
電話本局二八六●四四八四番
振替口座 東京八八一二三番

---

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの定評を博したる奇藥を専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸說を參考し有力藥を配合したる妙藥なれば世間に有觸れたる技術と學理に暗き製が山師的に無責任の廣告を為して販賣する賣藥品の比に非らずされば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早むる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●●パロールノ取次所左ノ如シ取次所ナキ地方ハ直接本舖へ註文アレ●●●●●

東京本郷六丁目 瓜生藥局
名古屋京町三丁目 巴商會
京都五條通富小路 安江洋反物店
廣島市橋本町 万代藥局
弘前市土手町 菊池藥店
京橋本湊町十一 釜長商店
大阪東區平野町 丹平分店
寺町通石藥師角 羅知藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
堺市甲斐町 一色藥局

# らい病

本劑は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職の中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之た根治せしむるは難事なれども本劑を續用すれば必ず癩菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴かしむる事請合本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする贋者主義の賣藥に非ず●定價送料共（ヘザノサール）一ケ月分貳圓四十錢●復方ザノサール一ケ月分參圓十錢

本舖 三河國碧海郡刈谷町
醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞謹製
振替口座東京貳參壹壹
電話刈谷參拾貳番

女（るの七）

# 婦女界

拾月號

一冊拾五錢　郵稅一錢五厘

## ◎男女交際論

▲先づ男子が婦人を導かねばならぬ　山脇房子
▲同情と眞心とを以て交際せよ　日向きん子
▲婦人たるもの第一資格を作つてから　藤生子貞

## ◎婦人の言語

東京文科大學長　文學博士　上田萬年

## ◎新家庭を作る用意

▲中流の家庭を持つに必要なる道具…嘉悦孝子
▲初めて家庭を持つた時……山崎つね子

▲娘時代より母親代まで　橫井博士
▲趣味なき婦人は不幸　佐々博士
▲銀行を利用せよ（婚禮費用は樂に出來る）　佐藤法學士
▲傳染病は恐るゝに足らぬ　白川醫學士
▲様々なる大根料理總菜　山村よし子
▲旨い御飯の炊き方十種　笹木幸子
▲明治の美談 婦人の龜鑑 乃木大將夫人　天野雉彥

## ◎子供の頭腦を明晳にする法…鳩山春子

▲大正徒然草　村上靜人
▲繪噺「小春」　夢二
▲世界の女　モンブラン
▲眼の迷ひ　安藤蘆沼
▲奥様の色々　吉岡ちまき
▲名婦傳「姫と傳說」
▲家庭小說「兄さんの家庭」
▲七五三の祝着
▲新髮形 一葉結の結ひ方

東京神田表神保町
振替東京第一三五

同文館

女（ろの八）

間の眼の出來始り、即ち母の胎内にある時の眼底は、闇柱體ばかりで、生れたても僅かに明暗が判る位のことですが、發育するに從がひ段々色が見え出すので、最初は黄と青ばかり、次に紅色や緑色、それから紫が見えるのです（ヘルムホルツ氏の說に據る）

### ▲全く色の見えぬ人

色を見る作用が缺けて居る色盲者の中に、生れつき闇錐體細胞が出來損つた者と、子供の時、色がよく見えたのが、眼底の病にかゝつてこの細胞が破れた者とあります。全色盲者は、眼に映ずる森羅萬象の色彩が、丁度立體鏡で寫眞を覗くやうに、只黒白と灰色だけに見え青色系は薄く、赤色系は濃く感ずるのですが、これは至つて少なく、世界中に百人とはありません。大學で二十幾年間に十萬人程の眼病者を診察したが、全色盲者は只一人で、京都大學でも十萬人の中に一人でありました。併し只今私の患者に三人あります。全色盲は調査の結果、どうも血族結婚の子に多いやうです。



### ▲或色の見えぬ人

色盲の中に紅色盲、綠色盲、紅綠盲等様々なものがありますが、今紅綠盲の人にスペクトル（日光を分析した色）を見せると、百六十種もある色の變化が、只二色の變化に見える。丁度温半部に黄一色を、冷半部に青一色を感ずるだけで、赤は暗い黄色に、橙黄は少し明るい黄色に見え、綠は灰色に見えるのですが、唯黄と青の二系統を見分ける力は鋭敏なものです。

### ▲色神の減弱

色は面積に依り感じが違ひますから、色盲者でも大きい物だと餘程見易い。私の弟も色盲ですが、友達が赤毛布を出してこの色が判るかと尋ねると、それが判らないでどうすると云つて笑います。又色を見て居る時間が長くつて、それが純色であれば色盲者にも大分判りいゝものです。一口に色盲者と云つてもその階級は頗る多く、丁度盲者の中にも一寸先が判らぬのと一人歩きが出來るのとあるやうなもので、色盲者でも極輕いのは、健康の者が判る程度の距離で小さい薄色の物を一寸見せられる時に判別がつかぬが、その他はさう差支へないものです。この位なのは色神の減弱と稱へますが、矢張病勢が重ると色盲者となるのです。

### ▲色盲から生ずる危害

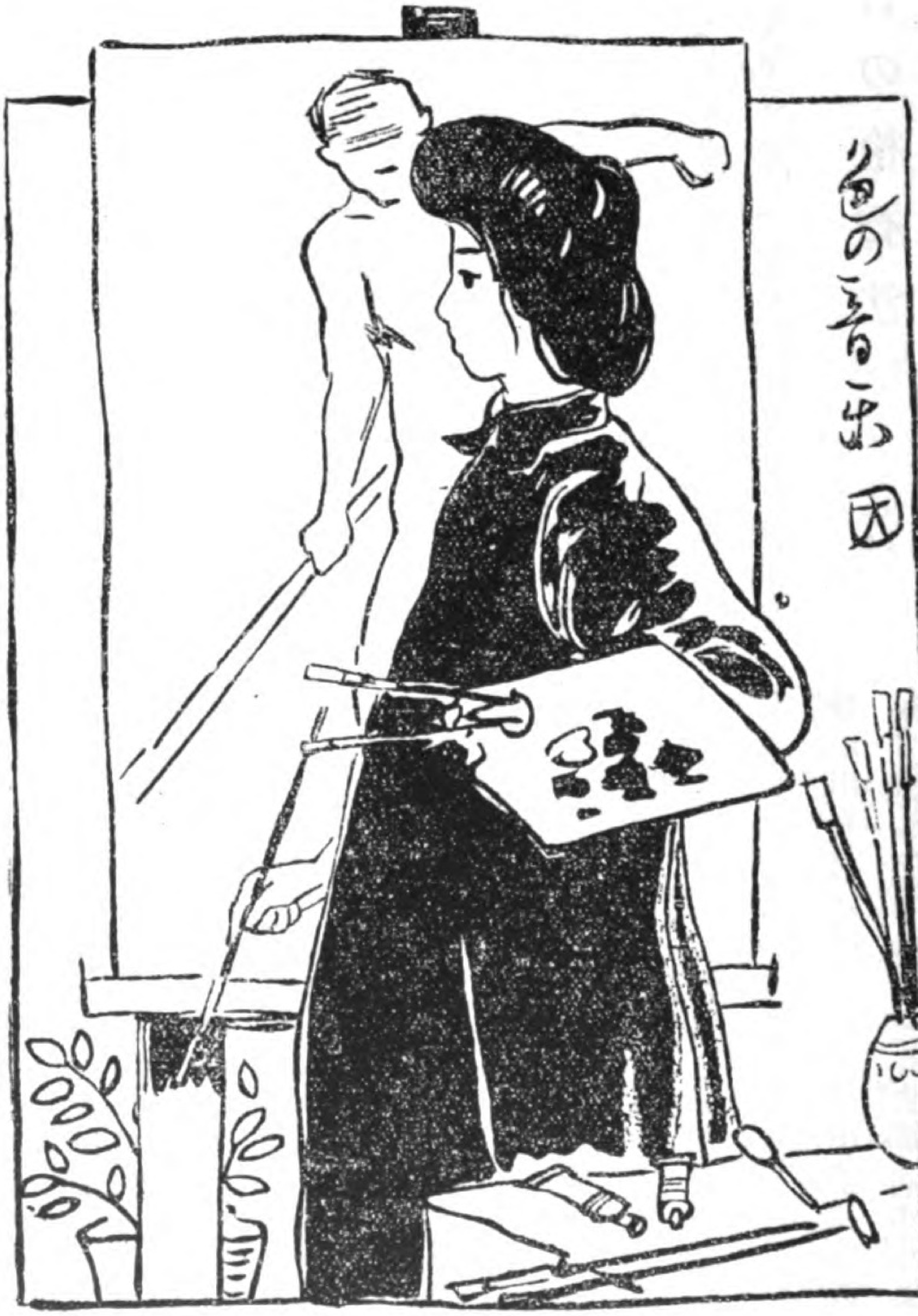
色盲は、今より百二十年前、英國の化學者ダルトンと云ふ人が、自分の紅色盲であることを調査して、社會に報告してから、世人が注意するやうになつたのです。今より三十七年前、瑞典で汽車が衝突して九名の死者を出した時に、キルムクレン氏がその原因を調査したところ、機關手が色盲であつて、信號の色が判らなかつた爲でした。獨逸のプリケスアンザーが衝突した時も、船長が色盲であつたのです。その他追々色盲の危險である實例が發見されたので、歐洲各國では、鐵道員や船員の色盲調査を行ふやうになりました。日本でも近來この問題に注目して、海軍、商船、工業等

の入學試驗や、鐵道員の採用試驗には色盲を悉しく調査することゝなり、陸軍でも大分八釜しくなりました。

一體色盲者は、男子に多く、男子は百人中に五人の割合ですが女子は百人に一人も無い位です今年學習院で調査しましたら、五百二十六人の内、二十六人ありました。

▲自身は左程不自由を感ぜぬ

僅か一日二日ストライキで電車が通はなくつても、非常な不便を感ずる東京市民も、この便を知らなかつ



た十年前には、平氣でテク〳〵歩きを爲て居たやうなもので、主に天性である色盲者自身も左程不自由を感せぬものです。而して大抵花は紅、血は赤、墨は黑と云ふ位のことは習慣上意識して居るから一通り差支へないと思つて居ます。併し楓が緣より紅にかはり、青い柿の實が赤るんだ時なぞに一寸判りにくゝ、知己の紅色盲者は、紅葉見物に往つて何時でも青い〳〵と云つて居ますし、熟した柿を未だ眞靑だと云つて居ます。

又或色盲者は、他の花はどうにか色が見えるが、ツ、ジだけは判らぬと云ひ、私の弟なぞは、百日紅の色が見えません。こんな工合で色盲者は折々滑稽を演じ、茶褐色の手袋だと思つて買つたのが、朱鷺色であつたり、黒縞のつもりでつけて居たネクタイが赤筋であつたりすることがあります。

岡山の小學校で裁縫教師を爲て居た二十二三の一婦人は、全色盲であつたが、自身非常に恥ぢて隱すことに苦心して居ました。それで色のある品物を買ふ時にそれとなくその色を商人に尋ね、潜かに符號をつけて置き、他物の色を推定するしをりと爲て居た。併し友染模樣の色なぞになると一寸間誤ついて、紅色を靑に紫を黄と誤ることがありました。全色盲の人は大抵眼がシヨボ〳〵して明るい所をまぶしがるやうです。

### △色盲の檢査法

色盲の檢査については、諸學者が考へた樣々の方法がありますが、一二を擧げると、各種の色毛糸を亂雜に積んで置き、試驗者がその中から一の或色毛糸を取り出し、受驗者にそれと同色の毛糸を撰り出させる。健康者なら速かに選り出すが、色盲者だとサンザ迷うてから丸で違つた色の毛糸を選り出すこの相違の程度と、種類に依つて、全色盲、紅綠盲、其他の色盲の調査をするのです。又樣々な色を排列した表を一定の距離から見せて、試驗者の命じた色を指させる法もあり近頃は、最初から色盲者の間違ひさうな色を並べて問を發し、又は綠色の中へ紅の文字を現はした圖を讀ませて試むる法が行はれますこれは尤も進歩した檢査法として海軍、鐵道院なぞで採用して居ます。

色盲は天性の疾患ですから治ると云ふことは難しいが、勉めて色の判斷を練習すれば誤りを減ずることは出來ます。又色のある光線で物體を透かせば、餘程見分が出來易いのです。前申す通り彼自身は知らないでも、悉しく檢査すると世間には可なり多數の色盲者があつて、處世上大に不都合を醸すのですが、これにつけても血族結婚の弊害を思はなければなりません。



# 忘恩の人

みづ音

椿の花がポタ〳〵と落ちて地を紅に染むる秋の半ばであつた、我が家の玄關に下された二臺の俥、一人は叔父樣、も一人は此度東京でお迎に成つた叔母樣とでした。漆の樣な高髷に映ゆる白丈長、あの櫻色の御顏、私は只々其のお美しいのに恍惚として居ました。そして今日から私等の叔母樣だと思ふと云ひ知らぬ嬉しさを感ゆるのでした、叔父樣は黒羽二重の羽織に仙臺平の袴を召して、つい三ケ月許御目にかゝらなかつたうちに見違る程口髭が立派に成つて居たあたり、何となく若旦那と云つた風な所も見えました、叔父樣は母樣の弟ですが、今迄私共の家に居らしつたので皆家族同樣に思つてをります。今度お嫁樣をお迎へに成るにつけて別に一軒持つ事に成つたのですが急に良い家も無いし、それに新世帶と云ふものは何かにつけて不自由を感するものですから、叔父樣の願ひと母樣の好意とで離の方をお貸し爲る事になりました、斯うして叔父叔母祖母の、三人の新家庭は作られたので有ります、此方も小さい子供は居ないし餘り忙がしくも有りませんので、臺所萬端を當分母樣が氣を付けて上げる事になりました、人と云ふものは見掛に寄らぬと申すのは此の事では御座ませんでせうか？優しい温順しい好い叔母樣だと思つたは大違。一日一日と經つて行く内其れは隨分だと思ふ事もありました。また家政の事と來たら、から駄目なのですもの、あれでも女學校卒業かと驚ろいてしまひました、何時でしたか叔母樣は鰹節を削いてお出でしたから、咲子さま、何にお使ひなさいますの？　傍から母が斯う訊ますと、一寸後を向いて七厘に掛けて有る土鍋を御覧に成つて、あの斗六寸に入れますの……とお仰る、あゝそれには御入れに成らぬ方が良ござんせう。平然と申された母樣のお口振の巧妙に感心致しました、夕方ランプに灯をお付けになる時ですね、五本も六本もお使ひに成つてやつ

と成效したと思ふと軸の火を消す時フット一緒に消してお終ひに成ります、傍に居た私が付けて上げますと私こんな事仕附ませんのですからオホヽヽ、まあ何と云ふ云ひ草でせう、此れが廿三の奥樣かと思へば侮辱されたそれよりも餘りのお氣の毒さに涙がこぼれるのでした、ですから御飯炊時と來たら一役なのですよ、あゝ其れから此な事も在りました或寒い朝私が顔を洗て居ますと、ボーン！と音がして得成らぬ臭が鼻を突くので彈かれた樣に勝手に行て見ますと、叔母樣はフーフー云つて竈の下の火を消して居らつしやる、あゝ叔母さま！今お水を入れますと割れや致しませんか、私しが居たればこそ貴お釜の破損は免がれたので御座ます。其日お祖母さんは離からやつてきて母樣との御物語り今朝うちでは空釜炊いたのだよ、そしてね咲子つたら昨夜お釜に入れたと思ひましたが等と云ふ許で詫まるなんて事知らんのだもの。まあ馴れぬ内は良く有る事で御座いますよと母樣はいろ〳〵と慰めてゐらしつた樣でした。叔母樣は始のうちは何かと優しい言葉もかけてくれましたが其頃から段々と素氣無く成さいます、夕飯後など散歩に行かうと被仰てはよく梨木神社までお供いたしましたが何時らか默て叔父さまと二人で御出に成ます。祖母樣が何か被仰るのでは無からうか、あゝ若しや私も小姑とやらのそしりを受けて居るのでは無からうか？等、小さな胸を如何に痛めた事でせう、其後は何につけ注意は致して居りました。

或日の事でした、叔母樣が買物に行かれたあとで叔父樣とお祖母樣は何やら話して居らつしやる、丁度と私は庭の菊の蟲を除てゐましたので聞くとも無しに耳に入つたのです、咲子は未だに御飯も滿足に炊け無いのだもの‥‥あとは良く聞えませんでした、今度は叔父さまの聲がして其れやね此處の家の娘の樣に上品に育たなかつたからね‥‥叔父樣も大變お變りになつたではありませんか私は餘の口惜さに母樣に告樣かと思ひましたけれども其れも一時の迷ひ、其の事は誰にも申しませんでした、それから幾月か過ぎました或日叔母樣は少頭痛が爲る‥と云つて床に就かれた、御病氣は如

何ですかと伺ふと一寸此方をお向きに成つて、えゝ有難う私は幼さい中から大事に育ちましたものですから一寸の寒さが障りますの、ニッコリともなさらず急彼方をお向きになる、翌日でした朝早くから御仕度して門の所まで御出掛けに成つた様子でした、御悪いのに何處に御出か知らと思つて居ると、やがてバタ〳〵と、空氣雪駄の音立て引き返して居らしつて、あの今日は御醫者さまに診て頂いて參りますからと祖母様と、母様に挨拶して出て行かれました。其日は土曜なので私




はお正午學校から歸つて參りました、叔母さまはお歸りでは有りませんでした、如何してこんなに遲いのでせうお迎ひに行つて來ませうかなどゝ三人は非常に案じました、二時過歸て來れた叔父様は何？朝から出つきりそんな筈は無い、では今から私が見て來ませうと直ぐ其足で門をお出に成た、火鉢に凭て叔母様の事を案ずる祖母様と母様と私の心は暗う御座いました、一時間程過て歸て來られた叔父様の顔は青いものでした、咲子はね、もう疾に東京へ歸たのですつて、佐伯様とこに伺

つたら左樣云つてました（佐伯樣の奧樣は叔母樣と同窓の友なのです）皆で何か云やしなかつたの？氣に障る事でも、祖母樣曰く、何お云前ふものですか、知ら無事云ふものでないよ、イヤ今日で無つてもです其んな事云ても分つてます、で何か佐伯さまに言傳でも有たのですか、そして病氣は良かつたのでせうかと母樣も常には無大きい聲で淀よどみ仰やる、あの此れを置て行つたのですと懷から飯臺の上に出された一片の紙には斯う認て有りました。

突然驚かし參する罪御許し遊ばされ度候

日々何やら氣分惡く候へど御地に在りては種々の事情のため充分養生も叶ふまじく候まゝ暫く里に歸申すべく候、餘は後るゝ雁にこそと書殘し申し候。

妻より

御良人樣

當つけがましう取り出された叔母さまよりの文を讀終ると暫くして叔父樣は、若や間違ひでも有たら何する積です、さあ、如何して下さる、祖母樣、姉樣！目尻を上げ青筋を立てゝ容易ならぬ權幕。

あゝ思ひ起せば其時から二年の昔、夏は七月の末つ方、父樣は滿鐵に轉任する事に成たので、いろ〳〵相談の上家族を皆連て行くのは子供の教育上其他不自由な事も有るので父上一人行かれる事に定まつて、母さまは住み馴れた土地を離がたく無いからと被仰つて親族とては一軒も無いが母と兄と私との三人其處は下の關の片田舍に詫住ひと覺悟致しました、いよ〳〵父上も渡滿と云ふ前日京都の叔父樣が突然○時着くと云ふ電報を先に立てゝ遙ばる御出に成りました。お鮓が出る御酒がでる、皆は夜更くる迄語りました。

ね、姉樣左樣して下されば私だつてあんな下宿屋なんかに居て不自由しないでも濟むし、それに京都は第一子供の教育上非常に都合が良いですよ等と話して居らしつた叔父樣の言葉は今もよく覺えて居ります、翌日學校から歸て來たら私等は京都へ行くのだと云ふ事をきゝました。叔父樣は然るべき家を探す爲すぐ歸京なすつたらしいでした。今考へて見ると叔父さんは自分の都合の良いためにあんなにお仰つたのでは無から

うかと口惜しう御座います、長い汽車の旅も終つて七條驛に着た時、叔父樣は待ち焦れた樣に迎ひに來て下さいました、叔父樣、母樣、兄さん私と四臺の俥をつらねて此の家に着た時、長い旅に疲れ切た私等を如何親切にして下すつたでせう、叔父樣は三年前から京都の〇〇の技師を勤めて居られると其の時聞きました、折々面白い話を聞せて下すつたり、日曜日には見物に連れて下さいました、人の良い母は朝も早くから夕方まで御留守大事と私等の面倒から家



事一切は人手を借ず、叔父樣の爲には洗濯婆、おさんどんとなつて心よく働いて下さる、叔父さまは下宿屋生活を脱してから顏色が好く成つたよく肥えたと云つて母さまに謝して居しつた、暫て祖母樣を國からお呼に成たについて、お嫁さんを貰ふと云ふ話が持ち上りました、薄給な叔父樣には何の貯へも無いので仕度の過半は母さまの心配でありました、姉樣、大變お世話さまに成ました、この御恩は決して忘は致ませぬと申された其御言葉は未だに耳の底に殘

つて居ります、あゝ、その親切であつた、あれほど優しかつた昔の叔父樣、今我が目に映る恐ろしき其顏、變ればかはる人の心よ。私は祖母さまや母樣が御可哀想でなりません。

叔父樣の御機嫌は其のまゝ直りませんでした、默つて御飯を食てだまつて御役所へ行かれる、此んな日が幾日か續きました、叔母樣からは叔父さまの處へ二三度御便りが有樣でしたが叔父樣は何とも申されません、母樣は其れを聞く勇氣は無いのでした、祖母樣は毎日離れからゐらしつては何か話して居つしやるらしい或日などは泣聲に成て、ねお前自分の身分より良處から嫁を貰ふものでは無よ…自分勝手に定る等と云ふ事は間違て居る。其れは御祖樣の御聲でした、或夜久しく無言で有つた叔父樣は始めて母樣と談話をなさいました、叔父樣の聲、實は私も京都に居てもうだつが上らないし東京に良い口が有樣ですから、一まづ私は彼方へ參る事に定めました、で祖母樣も連て參り度のですが今更此な事云ふのでは有ませんけれど、咲子も祖母樣の居ると云ふ事を知ずに姑の居ない許を選んで來たのださうですから、少々不平らしいのです、母樣の聲、だけども、其んな理由は無いでせう、其にしても祖母樣に申譯が無いでは有ませんか、叔父樣の聲、まあ姉樣默て下さい、其處が所謂仲人口といふもので私も今に成て後悔して居りますが、然何とも仕方が有りません、で祖母樣には私から善樣に申しますから、御厄介ですが當分こちらにお預して戴く事は出來ますまいか、それから數日過ぎて、叔父樣は、それでは、祖母樣をよろしく、との冷かな一言を殘して東上なすつた、叔母樣に逢たい許にあんな事を口實として、わざ〳〵お出に成たのです、位は誰の心にも讀まれたので有ます、其にしても憎しいのは叔母樣の行爲。

理想の高い我儘な、虛榮に滿た處女は、やがては此叔母樣の樣な人に成るのでは無らうか、と思ひましたあとで同役の方に聞ば、京都の勤口を世話して下すつた人にも無斷で役を辭されたさうな、三島は、思たより信用の無い男だ、存外義理を知らぬ人だと、同役間の

噂に成て居たさうです、あれもこれも、思出と成て巡す。
て早き月日は其時から、三度の春秋を迎ました、お祖母様はあの事が有て一年程經て、幾多の恨を呑んで苔蒸す土の下に永ねむりにお就に成りました、叔父様からも叔母様からも、賀正一つ參りません其の後風の便に聞ますと、北海道の〇〇會社に居れるとやら、御母様は薄情な弟だとも恩知らずだとも何とも被仰らず、冬の寒い日等針運せ乍、ガラス障子起しに木の枝に積る雪を眺めて、北海道は今頃はさぞ寒いでせうね、と申されま



私も何は嫁行くべき若き處女の身、其時の事が何かの教訓を垂ては居るまいかと、幾度か、おぼろげな記憶を辿ので有ます。



# 落葉よせ

紅梅

◎半可通

世に半可通なる人ほどあさましきはなし、智慧才覺にはかまはず、何事もおのれのみ知り顔して差し出で、折ふし毎に笑ひの種のみをぞつくる。かやうの男、知人の方より、此度茶座敷出來いたしたれば、席開きの眞似事に、何はなくとも一服差上げたき故と招かれしに、先づ一通りの挨拶もすみ、普請の結構、掛物かざりなど譽めたゝへしまでは無事なりしが、やがて床に挿したる椿の侘助をながめて曰く、さて見事なちよび助でござりまするな。

◎ふつゝか

いづれ物わきまへぬ下ざまより成上りし嫁君なるべし。昔を忍ぶ武士氣質の舅殿と、何事にまれ反り合はねば、互ひにおもしろからぬ月日をのみ送りけるが、冬の夜半を、すは火事よと近隣の人のさゞめき立つにまどひ起ち、其れよ是れよと家具など取りまとむる中に、古びたる刀劍ぢく物など一束にして、風呂敷に八重包みとなし、持ち出でんとするものあるを、嫁は眼早く見つけ、そんな品はどうでも好い、夜店で買うても間に合ふもの、それよりも是を早くさと、おのが鏡臺用簞笥などをさしつけつゝ、





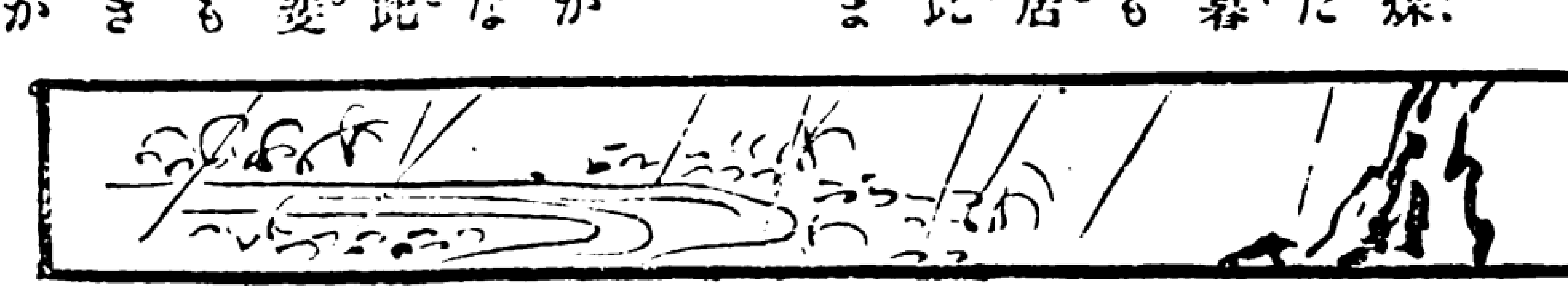
ふと頬かぶりの中を覗けば、南無三舅の顔なりけり。

◎敬遠主義

こゝにも似たるやうの嫁君おはしけり。師走の十日あまりといふに、春待つ家の煤はらひ、わけても廣き住居なれば、人々もあまた寄り集ひ、明方より掃きたて拭きたて叩きたつるうち、冬の日影にかゝるしがらみもなければ、とん〱ばたりと早や暮れ近うなりたる時、小女の走りきて、もはやあらましに成りました、お風呂の加減もよろしければお召しなされてはいかゞと問へば、新湯は人の身に毒なれば、先づ隱居所へまゐりて御兩親からお先へと申上げ來よと、何心なく心のまゝをつたへける。此の君女學校も諸人にすぐれて出でさせたまひしとさへきくを、同じ物いひながら、まづ何事もお老人からと優しう云ひ送りたらむには、さこそと思はれて。

◎双生兒三つ兒

さる大家の隱居、一粒種の子息どのへ美しき花嫁御を迎へられしに、そこの内儀かしこの亭主の陰口にも、此家の嫁君のあでやかな、彌生にまつる雛御前を見るやうな好いおつり合ひ、あの振りの好き、しなの好さと打揃つて讃めらるゝうれしさに、此の上は男の子にまれ女にまれ、早う初孫の顔見たしと、あけくれ神佛にいのりし甲斐ありて、嫁はその年の冬半より、軒端にしぐるゝ雪を見ながら、青梅もがなと無いものの好み、人々の心づくしに十月の間のさはりもなく過ぎけるが、今宵こそ産の氣つきしと聞き、隱居は物も手につかず、やれ産婆を呼べ、それ湯を沸かせと、袖無の上か





らたすき掛けして、みづから取り上げもしかねまじき有様、隠居所の部屋に起ちつ居つ、ひとり心をいらつ折から、やがて産聲たかくきこえしと思ふまもなく、ひとりの女走りきて、お芽出たや安々と坊さま御誕生と告ぐる後より又一人、お喜びあそばしませ、坊ちまでござりまするといふに、さては双子か、とまれ母子ともさはり無きが何よりとよろこぶうち、年ごろ附添ひの乳母なにがし、御隠居さま、お待ち兼ねの坊さまをお連れ申しましたと、わが手に抱へしみつ子をそつと、目の前にさしつくれは、隠居はほく／＼しながらも、芽出度いには違ひないが、もう好い加減に止まればよいが。

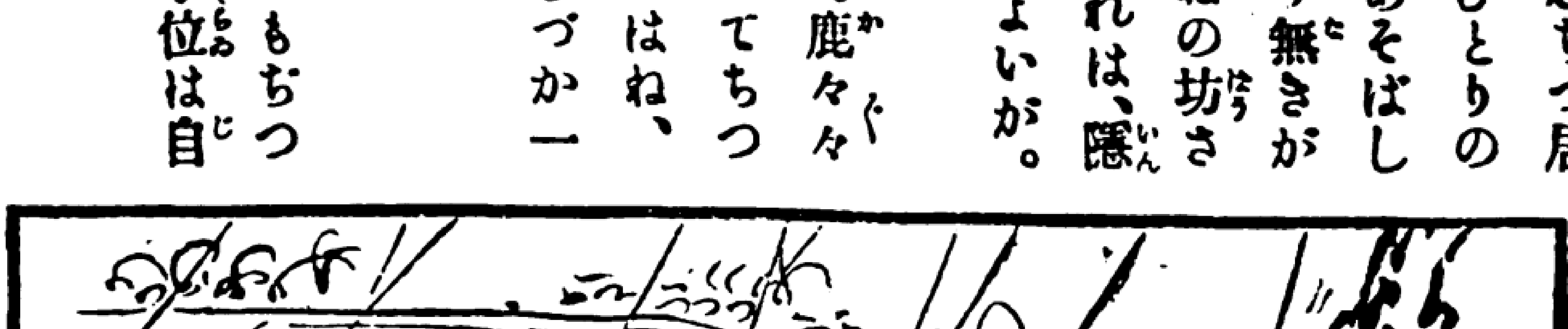
◎電車賃

算盤も持ちやうでかはるもの。上野より品川行の電車に乗りし職人、エ、馬鹿々々しいたつた今つけたばかりの煙草を捨てゝしまつたから、往復切符を買つたつてちつとも割引にやあ當らねえといふ傍から、腰辨當らしき一人の洋服男が、僕なんかはね、新橋までゆくのに、どんなにしても六本呑むから、電車で行けば、乗車賃がわづか一錢五厘ですますよ。

◎小使の氣焔

某會社の小使、氣焔を吐いて曰く、〇〇君なんざあ、僕の事を、何年たつてもちつとして居るから繪にかいた地震だなんて蔑しますけれど、これでも社長の椅子位は自由にしてゐますからね。

◎キザ柿





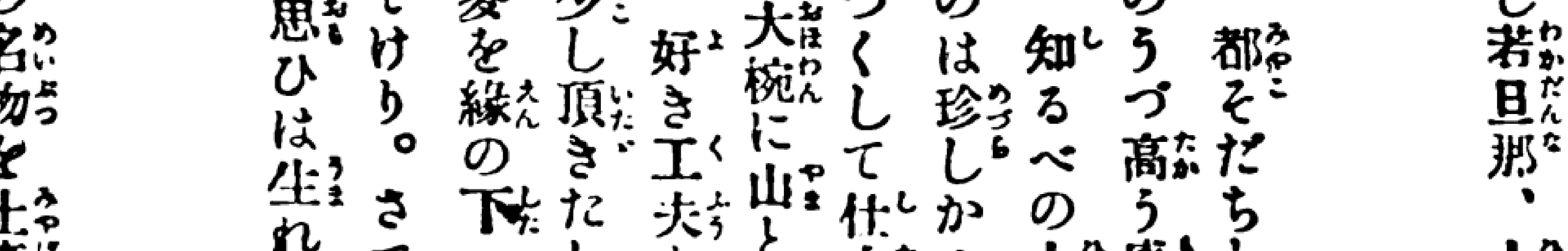
芝居好きの若旦那、本家の忘年會に餘興として、扇屋の熊谷をつとめしに、甲は中中澁いもんだと讃め、乙は甘いものだとそしりしを、もれきゝし若旦那、人を、早柿だと思つてる。

◎お强鉢

國はいづこにや、昔よりお强鉢とてしきたるがありと聞けど、都そだちと品かはりて、片田舍の人の律氣より、珍客とし見れば、まづ手拵へのものうづ高う盛りつけては、尙いく椀を强ひつけ、そを此上なき馳走と心得たるがあり。知るべの人にて、さる地方へ旅せしをり、宿のあるじ、東京の客衆にはなべてのものは珍しかるまじけれど、名物の蕎麥にてもと、朝まだきより仕度にかゝりて、心をつくして仕立てしをすすめられ、否むも氣の毒と、世辭とともに二椀ほど代へしに、尙大椀に山と盛りつけ、いま一椀だけもと强ひてすゝめられ、今は淚もこぼさんばかり、好き工夫もがなと思ふうち、ふと心にうなづき、給仕の亭主にうちむかひ、白湯を少し頂きたしとて次間へ追ひやり、そのひまにあはてふためき座敷を出で、椀中の蕎麥を緣の下へポンと投げ入るゝはずみに、あなや、力あまりて椀もろともに投げいれてけり。さて、亭主の入り來てよりの手持不沙汰、氣まりのわるさ、げに彼の時ほどの思ひは生れて初めて、と今さらに尙、顏うちあかめて語りしか。

◎欠伸の顏

さる人公用にて靑森まで旅行せしかへるさに、何なりとも土地の名物を土産にしたし





と云へば、宿の女かしこまりて、はい、ではアクビのツラでもお持ちなさいませ。ちなみに、アクビはあけびのこと、ツラといへるは蔓のなまり詞なりしといふ。

◎酔漢

櫻花ならば、いざ見にごんせ向島の、堤の上は往さ來るさの人盛り、知るも知らぬもわかちなく、手まづさへぎる盃に、色よし香よし風味よし、たぷ／＼受けて舌鼓たん／＼と打つもあり、はや眼のふちもほんのりと、染まる紅梅ちりめんの、小皺のよりし姥嬶まで、誰が催しの糸竹や、太皷の音に浮かれ立ち、心も足もしやな／＼とさゞめき渡る賑はしさ、もし眼かつらのお若い衆、お一盞お上げ申したいと、袂をひかふる幡隨院長兵衛あれば、あれ附髯の旦那さま、へうたんが落ちまするると心をそふる老女もあり、あたかも覗きからくりとやらむを見るやうの中を、これも酒の氣なくては花見といふものなし得じと思ひてや、赤垣源藏のよそほひすさまじく、眼元も足元もとろ／＼に成りて、よろめきつゝ行く後より、もし千鳥足のお方、紙入れがお危いと呼べば、生酔忽ち立ち止りて、私ですかい、これは御親切に有りがたう。

◎刀の銘

世の諺に餅屋は餅屋といへるがあり。或る人刀劍を求めしに、波平行安と銘ありしを、よみかぬるまゝに、知るべの儒者にたづぬれば、波　平　行　安　とよみかけ、はて刀の銘にはふさはしからぬと云ふ折から、來合せし和尚さま、つく／＼ながめて、波平行安とは、はて何誰の戒名でござる。





# 誠意と幸運

嘉悅孝子

## ▲前代未聞の光榮

乃木大將夫人は實に御幸運な御方だと思ひます。あの通り立派な死を遂げられて、恐れ多くも皇族方の禮拜までお受けになつたのは、前代未聞の光榮ではございませんか。この御幸運は申上るまでもなく只一の誠心を以て婦道を盡された結果で、私共は何時の世までも夫人の精神を守本尊といたしたいものと存じます。

## ▲分に安ずる御手本

乃木大將は、先帝陛下の大御心を遵奉して、質素を守られ、夫人は、大將の意を體して、あれだけの地位であり乍ら、僅か一二人の下婢で繰廻すといふやうな生活を營まれました事は、實に千載不朽の模範でございます。只今國家の經濟狀態を考へて見れば、伯爵の御家でも二人の下婢で濟す位でなければなるまいと申すことですから、大將御夫婦は全く上下の御手本となられた次第です。乃木夫人のことを思へば、私共の生活は、餘り勿體なくて、どうして良か分りません。身分に過ぎた飾りに憂身をやつしたり、臺所事か厭だとか、體裁が惡いとか云つて分不相應な下婢を使つたりする婦人は、穴へも入りたい心地がいたしませう。乃木夫人は、一言半句も世にお叫びにならないで、分を守る有がたい教訓を今の婦人に與へられたのです。

## ▲何事も腹を拵らへてから

新智識を吸收して、文明的な生活を營むのは素より結構なことですが、唯上つらの華々しいところばかりを眞似るやうに、第一に分を守り分に安ずると云ふ腹をしつかり鍛へて置き、それから新智識を養ひ新生活を營も良し、又富有な方々はそれ相應の装飾をされる

のも宜しふございませう。何事も分に安ずる腹が出來た上のことです。この腹が出來てから吸收した新智識こそ身の光りともなり、この腹が出來てからの装飾こそ禮にも叶ひ眞美を發揮する助けとなりませう。

## ▲立消にしたくない

先帝陛下の第一期喪は、哀悼の涙の乾かぬ内にいつしか過ぎて、庶民は最早喪章を付くるに及ばぬと云ふ命に接しましたが、私は滿一年間、この學校へ來る時だけは必らず喪章を附くるやうに生徒に申し渡しました。恐れ多いことですが、御偉徳を追慕し奉るの念も若い女子なぞは月日の經つにつれて薄らがぬとも限りませんから、學校へ出る時に喪章をつけると云ふことに定めてせめて一年間は今と同じ記憶を保存させて置たいと思ふのです。尚生徒が乃木大將御夫婦からうけた感化もどうか立消にさせたくないと存じ、適當の記念方法を考へて居ますが、未だ一寸良い工夫がつきません。此頃大將邸内の一本の草でも欲しいと云ふ者が澤山あるさうですが、こんなものはとても一般の手に入るわけにも參らず、又繪葉書なぞでは永い間に自然散り失せるでせうし、何か良い方法はないかと思つて居ます。

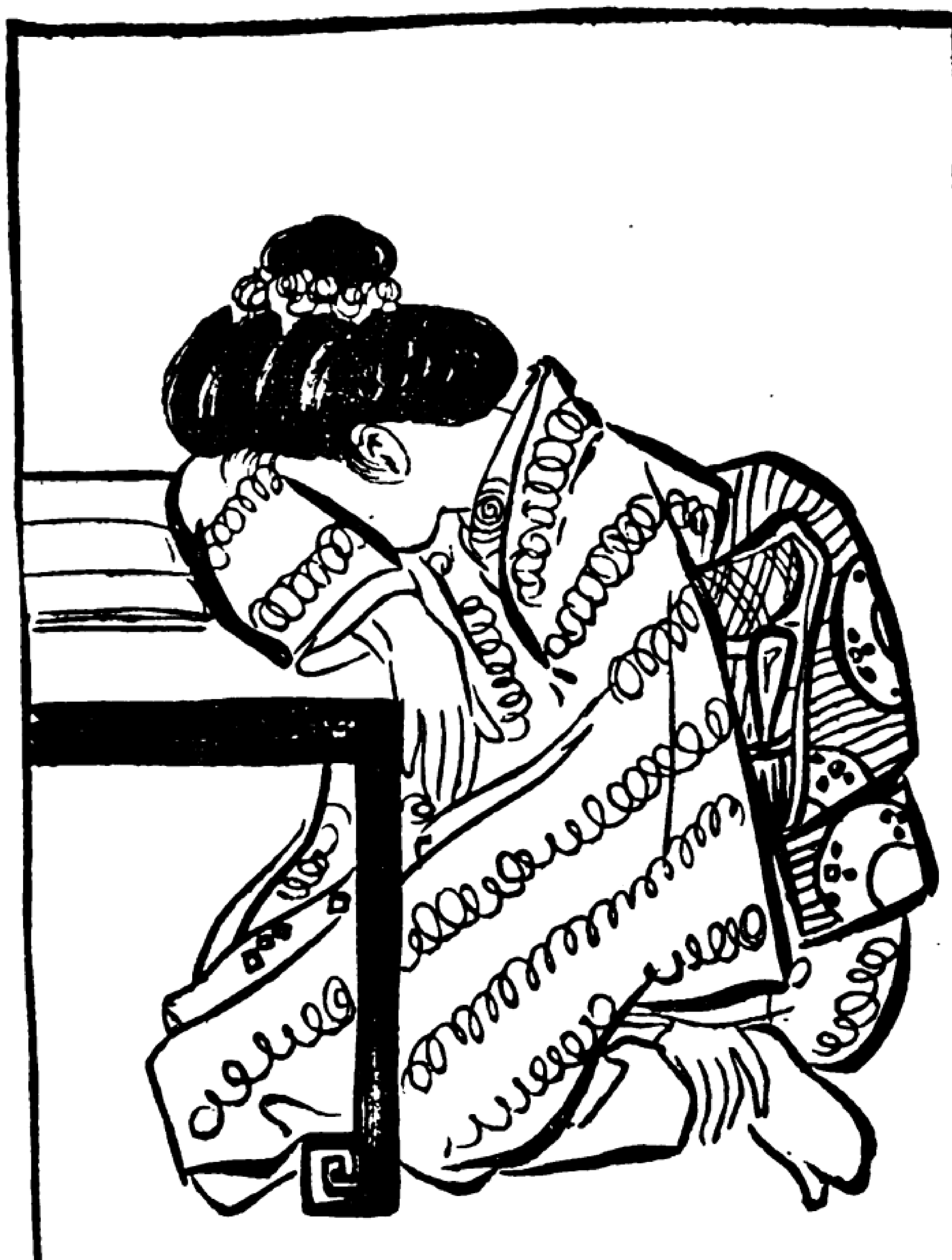
## ▲偶然好評を得た女四書

私は昨年の夏一寸病氣にかゝり、暫らく靜養して居つた内、フト女四書の評釋を爲て見たいと思ひついて、拙いものを纏めました。こんなものは現代婦人に愛讀されぬことは承知して居ましたが、お腹が出來ないで足元のふらついて居る今の若い女子に、一度は讀して置ても良いと信じましたから、卒業生が嫁入りする時の贈物にする考へで、作り上げましたところ、一寸體裁の良いものが出來ましたので、昨年の十二月台覽を乞ふことにいたしたのです。ところが恐れ多くも皇太后陛下におかせられては、御修徳の御栞りに女四書を御愛讀遊ばされし趣が先頃の新聞紙上に掲げられましたので、世間で大分この書に注目いたすやうにな

り、引續き乃木夫人の淑德についても餘程此書の好評を得る動機となつたやうでございます。それで皆樣が貴姉は運が良と仰いますが、豫期せぬことがかうなりますのも、一片の誠意が貫いたのであらうと感謝して居ります。

▲米價暴騰の際

私の如き不肖者でも一の誠心さへ堅ければ、天祐は必ずあるものを見えまして、先頃米價暴騰の際、外國米をお取次して皆樣の便利を計りました時なぞは實に不思議な天祐を得ました。最初私は外國米



を自分で食べ試むる考へで、塾生と共に深川へ少し許りの米を買ひに往きましたところ、老若男女が店先へ蟻のやうにたかつて吾勝に買はうとひしめき、賣手は金勘定をする暇もなく、時には多額の誤算も生じたとやら云ふ騷ぎで、その光景は凄まじいものでした。私は暫しこの修羅場を眺めて居ましたが、世間にはかくまで困難する人が多いのに安閑としては居られぬ。未だ販賣所はここら一二ヶ所であるから他區の貧民は定めし困難を感じて居やう。自分の住める麹町界隈にも鮫が橋や谷町

の如き貧民町もある、これからの人々が電車代を使つてこの深川まで買ひには來られず。これはどうか工夫して吾學校で取次して上げたいものと不思口走つたのを、丁度來合せて居た知己の方が聽いて大に贊成されましたが、翌日の新聞に私が原價販賣を實行すると云ふ記事が出て了いました。

### ▲度胸で買入の約を結ぶ

新聞に出るが早いか、此方でお救ひ米をお賣りになるさうですがとか、施し米を賣て下さいとか云つてゾロ〱と押かけて參ります。私も實は考へついた許りでその手續方法なぞは丸で眞暗闇ですし、第一仕入金の工夫さへついて居ませんのに、かく押かけられて當惑いたしましたが、苟且にも施し米、お救ひ米と云ふ聲を聞いては、どうして捨て置かれぬと心配して居ます内、深川の廻米組合の理事の方が突然私方へお出になり、取次をなされては如何とて懇ろに手續等を敎へてくだされましたので渡りに船と悦こびましたが少くとも百袋の買入を要しこの代金千參百圓と云點にいたつてハタと當惑いたし、千圓と云へば私に取つては大金で素より算段のつく筈もなくとかうの返事も出ませんでした。併し自然にかやうな場合に立至つたのは天の命であらうと思ひ、尚其頃或ところより思ひまうけぬ若干の金が屆いたと云ふのも、この事業の一部に投せよと云ふ暗示かも知れぬと感じて兎も角も一つ企てゝ見やうと決心いたし、その場で直に百袋買入の約を結び翌々日現金引かへに米を受取ることに定めて了いました。皆樣は後で私の度胸に驚ろかれたのですがその折の私は、誠心誠意唯如何にして目下の急を救ふべきか、この慘狀を救ふの道は、外國米を一人でも多くの人に食べて貰ふより他に道はあるまいとの確信を以て決行しやうと云ふだけであつたのでございます。

### ▲大雷雨を犯して金策に歩く

何にいたせ差迫つたことですから、瞬時も猶豫して居られません。早速一人の塾生を連れて金策に出かけ

ましたが、折から雷烈しく鳴り響き、篠突く大雨に打れて兩人とも濡れ鼠になり乍ら一生懸命にかけ歩き、漸く去るお方の同情の許に目的を達し、七月一日の午前に深川の倉庫へ仕入に參りますと、僅か二日の間に、百俵につき二百六十圓騰貴して居ました。併し理事の斡旋で約束した儘の價で買ふことが出來ましたから、一升二十二錢位のところを十九錢の原價で取次することが出來ました。

▲女學生が乳母車で米の配達

外國米は焚方によつて相應に味はひあることを實驗しましたので、中流以上の方方にも試みて頂き、而して下々へ奬勵して頂きたいと



存じ、皆樣にお願ひいたしました。皆樣も私の主旨に御賛成下すつて續々御注文がある、私方の十數人の苦學女生が乳母車へ一斗袋を三ツゞヽ載せて配達いたし他より應援として寄越された十八あまりの青年と私方の小使とがセツセと運び出しましたが、配達先の各御家庭で優遇されるので皆大悅びで働らき小使なぞは、〝先生今日某家の女中が米屋さんと云ひましたら旦那樣が米屋じやアない、これ〳〵のわけだから丁寧に取扱へと被仰つて下さいました又歸りにつひ無提灯で車を輓いて巡査に咎められましたから、早速用意の提灯をつけますと、その火影で巡査が嘉悅と云ふ襟印に目をつけ、忽ち丁寧な調子で『イヤ

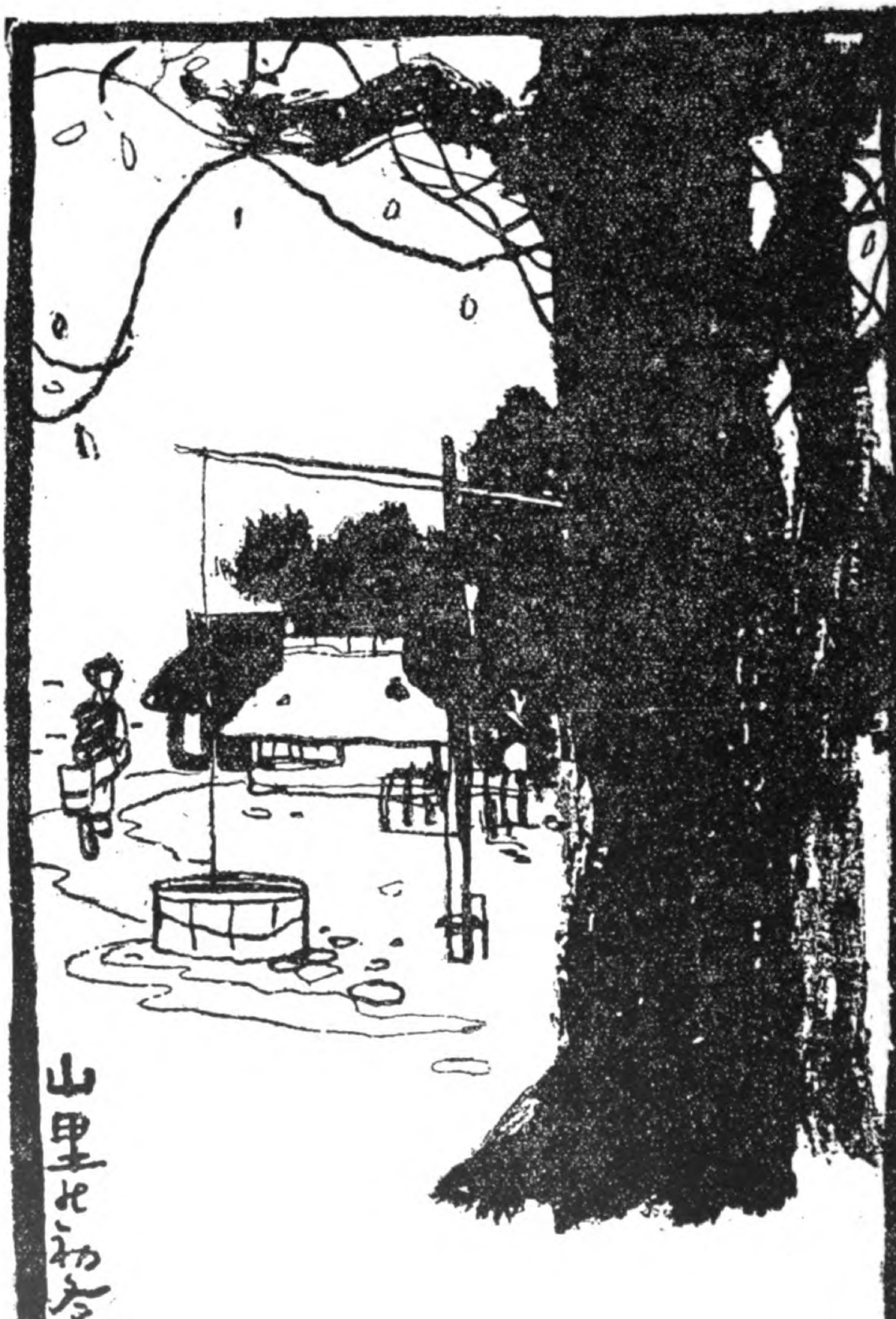
毎日どうも御苦勞ですネ」と云ひましたなど〻得意がつて居ましたが、それほどまでに世間で贊成して下さるのかと嬉しふございました。

五日間の販賣中門前は實に市を爲しましたが、賣手となつた女學生の働きは却々に目ざましく、凡て傳票制度を用ゐて厘毛も計算を誤まらず、貧民に對して丁寧親切を盡し、屈强な勞働者にまで米包を背負せて上ると云ふやうな滑稽を演ずる位でございましたので、買手の悦びは非常なものでした。百聞一見に不如で女學生達は、米價騰貴に疲れた憐れな人々に接したことに依り多大の敎訓を得まして、平生私が八釜しく申しても兎角リボンの幅が廣くなり勝でありましたのに貧者の實況に感じてからは、申し合せたやうにリボンの幅が狹くなつたのは何より嬉しふございました。

### ▲終りを全ふした愉快

結了後には米袋を始め一切の用具を賣拂つた金と一袋についての僅かづ〻の手數料とを合せて、勞働してくれた人達に心ばかりの禮を送り悉皆精算しましたら四十圓を餘しました。この金で米の焚方をかいた摺物を五萬枚印刷いたし、廣告郵便で世間へ配布しましので、一錢一厘も殘すところなく淸々と終りを告げました。この時も皆樣が貴姉は運の良い人だと被仰いましたが、これも全く誠心の賜物と感謝して居ます。

私は田舍へ參る度に、六七十のお婆さんがよく働いて何の慾望もなさ〻うに悦んで若い者の手助をいたし、孫を載せた車を曳きなぞして夕日うすづく畦道づたひに我家へ歸る平和な淸い樣子に打たれるのですが彼の老いて强健なのはこの無慾にしてよく働らく賜でございます。自己の損得ばかり考へて報酬のないことは、一指を動かすのも惱さがり、勤勞せずに幸運を招かうとする、さもしい心と共に身體の弱々しやうな靑年男女は大に省りみなければなりません。私はいつも生徒に、「貴女方は勤勞したことは、誰にも知らせずに天道樣へお預けしてお置なさい」と申し聞せて居ります。


山里の初冬 画



# 料理食品文盲手引（十一）

小泉迂外

## △鰯の味

秋から冬に入りますと、漸々總ての魚類に脂肪がのつてまゐり、鰯、秋刀魚等の惣菜類までも美味しく食かれます。殊に鰯などは大漁の時は、極めて廉く得られるので、魚類を拵らへつけぬ婦人等が此魚によつて、其庖丁工合を試驗される等は最も面白い事であらうと思はれます。

鰯の料理は種々ありますが先づ美味のは、鹽燒、附燒、ツミイレ、ツクネ揚等で酢の物草和、天ぷら、魚田、壓鮓等は料理書に喋々と其手段が述べられてありますが、多くは失敗に歸して、素人方には些つと向きかねます。記者がある家庭で此れの茶椀蒸を食きましたがあまり、妙品過ぎて通人ならぬ私は尠からず閉口致しました。

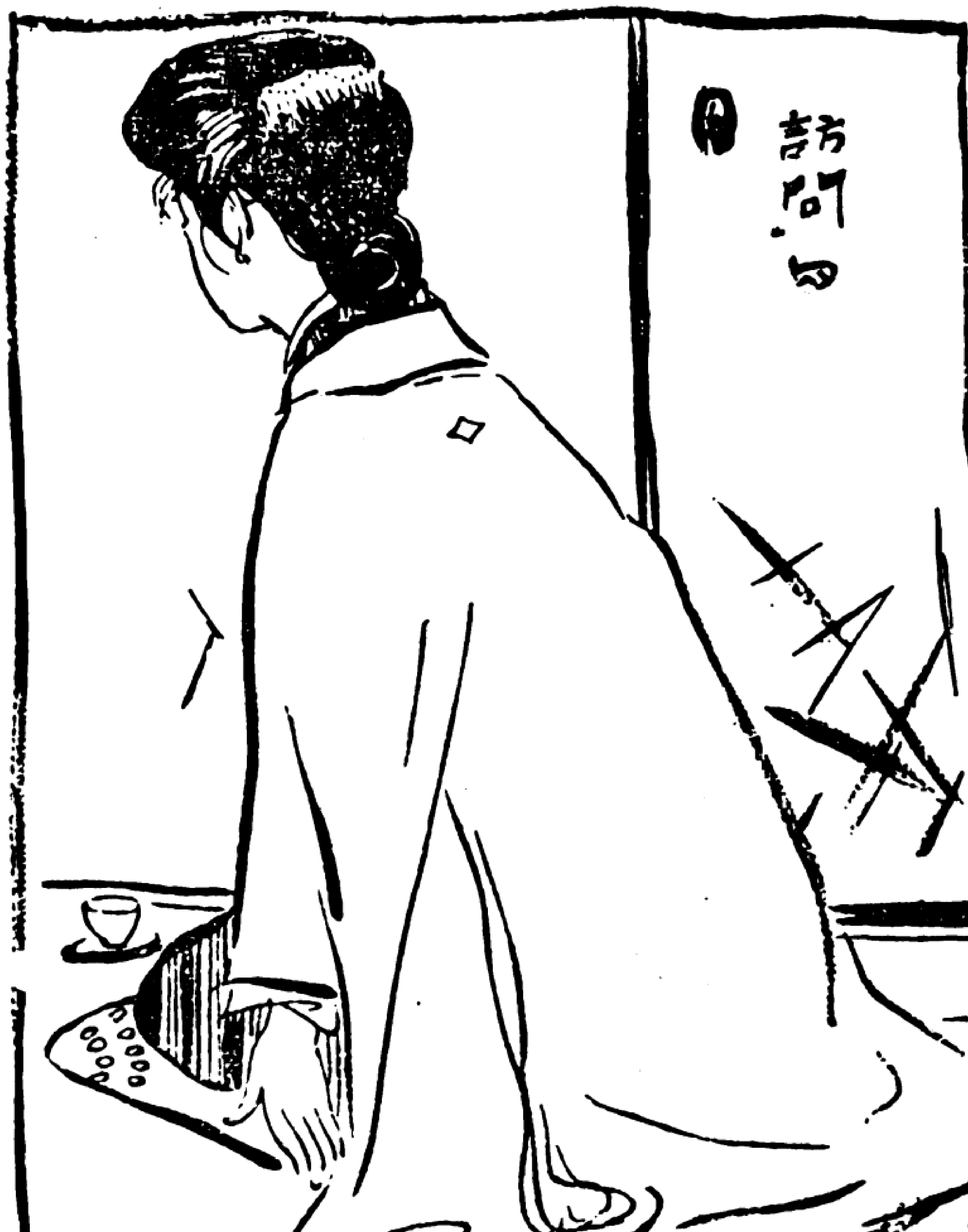
元來此の魚は上等な料理に使ふのは無理なので、あまり手返しをせぬ處に興味があるのです。元祿の許六が「飲食欲箴」にも、

鰯といふものは、魚類の下品にいひなされて、卑しきものゝ添へ物となるのみならず田畑のこやしとなるこそ猶口惜しけれ

とあります如く、古へも惣菜と相場が定まつて居たのです。しかし此魚の頭は、節分の夜に、柊の枝と共に戸外に挿されて、惡鬼を拂ひ、又は疫除のしるしとさ

れます。して見れば、其肉は下品としりぞけられても其の頭は所謂「鰯の頭も信心から」で尊ばれたものです。

又和歌や俳句等に鰯雲といふ文字の見えますのは、秋になつて濱邊に鰯の寄つてまゐる時白雲の起る事をいふので、一說に鰯が鯨に追はれ、數萬群をなして海上を漂ふので、其銀鱗が雲に映つて、雲が變化いたすのだと云ひますが些と附會な說でせう。此鰯雲が起



ると漁師達が地引網を張つて、所謂鰯引を行ふので、引き上げ際の壯觀は筆紙に盡し難いくらゐだといふ話です。

## △鱈の舌

鱈の舌といふと些と氣味の惡い食品のやうに思はれますが、牛の舌が洋式の献立に用ゐられ、而かも婦人が平氣で是れにフオークをつけられる今日ですから、鱈などは敢て怪しむに足らない位です。たゞ其調理法が一般に普及して

居ない爲めに其外見だけで二の足を踏むやうになるのです。

亞米利加邊から輸入つて來る舌は、結晶してゐる位强く鹽がしてあるので、一先づ水で幾度も洗つて眞白に綺麗になつたらば、醋酸水（藥屋で賣る）で煠でゝ、鹽出しをしてから使用ふのです。此れが料理は甘煮とか、口取の附合せに甘く煮れば結構ですが、薄く小口切にして、湯豆腐の上に並べて戴けば、雪見の酒肴として存外特別の味が出ます。

一體此の鱈の舌は、鱈漁の時に、釣り上げた獲物が夥しく、山と積まれるので、中々其頭數を數へるといふ事が困難な處から、釣師は最初に各自左の脇に袋を下げて置き、魚を釣り次第小刀で一々其魚の舌だけ切取つて袋の中に投入れ、後とで計算の時、其舌を一束して檢查人に示すと、檢查人は此の舌の數を讀んで、誰は幾何、誰は幾何釣つたといふ事が判明つて、其賃金を支拂ふので、言はゞ舌は其切符に代用されるのです。ですから内地で一斤五六十錢といへば非常に廉いやうですが、切符の歴物と解れば些とも廉い事はありますまい。

### △風呂吹の味

冬に入るに從つて、蕪、大根の味が增してまゐります。漬物以外に此れを應用した料理は尠くありませんが、最も美味いのは風呂吹でせう。之れは大根或は蕪の皮を剝いて、輪切にしたのを煠でゝ、胡麻味噌で食くので、一寸俳味のある食品です。

之れは味噌加減と、煠で加減一つで美味、不味が著るしく解るので、嘗て私が名古屋で食きましたのは、材料は本場の宮重大根で、煠で加減にも申分はありませんでしが、たゞ味噌がいかにも辛く椀を代へる氣になれませんでした。又東京の或る有名な割烹店で食きました時は、味噌工合は流石黑人だけに結構でしたが、種の大根が、客の顏を見てから急いで仕掛けた爲めに、煠で方が充分でなく、がりつきましたのには恐れました。つまり、名古屋の大根を東京の味噌で食い

たら、定めてよい風呂吹が能きるだらうと思ひます。

故正岡子規子は數ある食品の中で殊に此の風呂吹を好まれて、毎年其の草盧で營まれる蕪村忌には、必ず之れを出席者一同に饗應はれたのが恒例でした

蕪村忌や風呂吹の題

蕪の題　子規

風呂吹を食ふや蕪村の像の前

風呂吹や蕪村百十八回忌

蕪村を讀む毎に子規子を想ひ、子規子を懐ふたびに、風呂吹に舌を燒いた昔が戀しくなつてまゐります。

## △牛肉の今昔




頃日ある新聞で、松井須磨子孃が、某切賣屋から牛肉の皮包を提げて出たといつて珍らしさうに吹聽してありましたが、今の新教育を受けた婦人で之れを召上らない方は殆んどありますまい、婦人が之れを口に入れてはならぬといふのは、舊思想に捉はれてたる一部の人達の言葉です。生前昌んに江戸つ兒がつた故緑雨氏の如きは、牛肉を食ふ奴は百姓だなどと例の皮肉を云はれましたが、眞の江戸兒は却て藥になつてよい等と牛肉を賞翫致したやうです。江戸兒は緑雨氏のいふ如く過去ばかり憧憬して居る人種ではないの

です、新らし趣味から趣味にのみ移らうとする佛蘭人のやうなものです。

明治の初年、淺草御藏前片町に日の出屋悳吉といつて、今の厩橋際の富士山が初めて牛肉を賣り出した時は滿都の人氣は湧くやうに集注しました。しかし當時の牛肉店は今のやうな決してハイカラ臭くなく、頗る趣が變つて、其開業式の廣告も戲作者の魯文翁が筆になつて。

凡牛肉の功能あるや、近來西洋窮理家の食料經驗のみならず、既に張華が博物志にも歴然として其條あり。彼紀元千七百九十六年英國ヘルケレイの地に多く野飼して專ら人身の補藥とせしより各國の蒼生是を用ゐて壯健なること比するに物なし云々。

などと、今から思へば滑稽な文學が列べてあるので、當時の人はすつかり煙に卷かれてしまつたでせう。

當時は牛肉を一度煠でゝ脂肪を煮出してから新らたに煮たといふ話ですから、つまり美味を拔いた、ソップ殼を食いたやうでしたが、それでも獸肉といへば猪か鹿ばかり食いて、居つた江戸人には非常に珍しかつたに違ひはありますまい。

## △謠に因む食品

ちか頃謠曲が流行つてまゐつたので、それにつれて謠曲趣味の遊食會が復活されさうになつてまゐりました。先頃もさる方で催されたのを拜見しましたが、あまり考へ過ぎたのは、及ばざるに遠しで不可ず、さりとてあまり俗に過ぎたのは謠の趣味に適はず、要すに簡易で綺麗なのか、思ひ切つて奇拔なのが受けます。今御參考までに二三をあげますと、

綺麗事では、竹の皮に鶯餅を七つ程包んで竹生島の『竹に生るゝ鶯の』と記されたのなどで、奇拔なのでは、同じ曲の『殊に女人こそまゐるべけれ』で燒芋を澤山新聞紙にくるんで出したので、通がつたのは、へぎ折に車海老と穴子を三四つ煠でずに生のまゝ何も添へずに容れ、『上らんとすれど衣なし』と記して羽衣

の意を採たものなどで、殊に詩趣溢るゝやうであつたのは松風といふ題で、行平（土鍋）に饂飩を容れて、『夜寒さこそと思ども爐火にあたりてお泊りあれと申候へ』と文句を添へたので、斯やうな優美な趣向は他の遊食會ではとても見られぬ味があります。

### △鮒の昆布巻

鮒の昆布巻はいつ頃からあつたのだか慥とは分明りませんが、『應仁別記』といふ書に應仁頃の落首を擧げ、中に、



貞親は近江の浦の鮒なれや
布にまかれてぞ口に入ける。

と伊勢守貞親の末路を諷してあるところから考へますと、足利時代に既にあつたもと。思はれます。

江戸では天明頃から鮓屋で兼業に之を販つたやうで『守貞漫稿』等にも天保から弘化、嘉永頃は盛んだと記してあります。その譯は、冬季になると夏季ほど、鮓が賣れないので、それで小さな鮓屋では冬は鮓を廢して、専門に此の昆布巻を賣つたので、

竈河岸の毛拔鮓などでも維新前迄は冬季鮓を休んで之れを行つたといふ話です。

しかし之れは江戸だけで、京阪では分業して販つたやうです。

## △まぐろの鮓

山葵を鮓に加へることも近昔ですが、まぐろを鮓に付けるのも新らしい事です。

當今では醤油付の握鮓といふと鮪に限つたやうに思はれますが、七十餘年も前には醤油付といふと鯛かひらめに限つたもので、是れは現時でも八百善等の名ある割烹店で刺身に鮪を使用はないのと同じやうです。之の鮪の鮓が行はれたのは、天保の末年頃江戸馬喰町の惠比壽鮓といふ店で、ある時鮪が夥しく魚河岸に着荷て、非常に價が安かつたので、試みに之を購めて、醤油を引いて握つて出しましたところ、それが珍らしかつたので、當時の人氣に當つて、遂に一般の鮓屋に鮪を見るやうになつたのです。

かういふ譯ですから今でも正しい鮓の侑め方をする場合には、鮪は避けねばならない事になつて居ります。

## △バタとソース

やかまし事は解りませんが、どうも日本人は洋食に、バタとソースを濫用しすぎる傾きがあるやうです。

一體バタは料理があればパンへは塗けず、茶でも飲む時にパンへつけて使ふので、それもどうでもよいのです、又日本人は何んの料理へもソースをかけて食きますが、ソースは料理によつて特別に製られるので、牛肉等には一切つかはず、たゞ鹽さへあれば足りるのです。重にソースは白い身の魚類のボイルかチキンカツレツに用ふので、それもダブ〳〵と上から醤油のやうにかけるのではなく、皿の端へ、少し垂らして、是れへちよと切つた肴をつけて食くくらゐなもので、西洋などでは、ウスターソースを使用ふ時は、その都度ソ

トヽス代といふものを別に取る規則になつて居るといふ話です。

## △狸汁と鹿煎餅

私が宇都宮の在へ一泊致した時、其家の主人が、今夜は雪催ひでもあるし、遠來の珍客であるから狸汁を饗應いたさうといはれました。私は狸汁といふのは、子供の折赤本で讀んだ「勝々山」のより智識がないので、内心大に駭きましたが、折角の好意を無にするのも悪いと、無理に一椀食いて燒酎の勢いで直ぐ枕に就いて仕舞ひましたが、翌朝よく訊いて見ると、椀中の材料は眞くの狸ではなく、甘藷を摺つて葛を加へたのを圓めて油で揚げたので、それに燒豆腐と蒟蒻を細く切つて交ぜた味噌汁だつたさうです。狸汁といふ詞で無中で飲み込んだので、神經でそれが狸の肉と思つて食たのは滑稽でした。

恰度之れと反對な話があります、從弟が奈良土産に鹿の煎餅を送られた時、其形狀が東京の玉子煎餅そつくりでしたから、さぞ美味からうと、早速口に入れましたら、何とも形容の能きぬ不味さで、名物ですが遂に其半分を擲つてしまひ、後とで從弟に其次第を語りましたら、從弟は、ヤッと云つて手を拍つて哄笑ひました。それも其の筈で煎餅は煎餅に違ひはありませんが、其れは鹿に遣るべき餌に製つた糠の煎餅で、人間の食くべきものではないのでした。





# 越後の鮭料理

渡邊流葉

△焼物之部

○しらやき土佐をろし○照焼酢取生薑○みそ漬かぐら生薑○けんちん卷焼○一鹽焼青柚子わさり

しら焼はなにも付けずに焼き熱き内に醤油をかけます。土佐をろしは大根をろしの中にもみかつぶしを入れた物です。

照焼は味醂五分、醤油五分で煮つめ、とろとろになし、鮭を焼上げた處へ今の照を塗り乾かします。付合の酢取生薑は、水にザット煮立てすぐに水の中で冷し。後生酢の中へ入ますと、見て居り内に程よくほんのりと紅色が出ます。

味噌漬の味噌は、味醂、酒、砂糖少しを醤油を入れよくまぜ。鮭を漬けろのです。付合のかぐら生薑は、大きな葉生薑の身の處を眞中より庖丁目を入れ、其處へ味噌を入れて焼くのです。

けんちん卷焼は、鮭片身の物を横二三寸位に切り、横口よりうすく二ヶ處ばかり鞍かけに切り醤油、味醂五分の中へ、二十分位漬置き。別に鍋に松茸、銀杏、くづし豆腐等を酒、醤油、砂糖にて味を付けて、煮上りたる處へ玉子を入れてかきまわし、くちや〱にして今の鮭を醤油の中より取出して巻込み、テ パンニのせテンピニて焼き、小口切にして皿に盛る。又玉子焼鍋にならべて上下より火ぜめにしてもよろし。

一鹽焼は切身にして鹽をして一日位過ぎて後焼く。

△汁之部

○はらわた、焼豆腐、しら子、柚子、○鮭の子よせ豆腐、松茸

腹わた汁は普通の味噌汁の中へ、血身から腹わた迄一切細く切り入れ、焼豆腐、白子も同時に入れ煮ます。

鮭の子汁は鮭の子をザット晒置き、すまし汁の中へ豆腐と松茸の横打切にしたのとを煮。御椀に盛る時上より今の鮭の子をかけて出す。

△煮物之部

○鮭頭のべつ甲煮、あられ柚子○煮付、○鮭松茸○をろし煮。大根をろし、そぎ身

鮭頭鼈甲煮は一寸位づゝに切りて、酒及水にてよく煮た處へ、砂糖、醤油を入れ、少し甘口にべたべたに成る位に煮上げて皿に盛り、上よりあられ柚子をかけて進む。煮付は酒、味醂にて煮上げ。煮へたところへ醤油、砂糖を入れて其中で煮上げる。

△和物と膾

○しらあい。鮭頭、千打大根○膾、打大根、木くらげ。鮭頭○鮭の子、をろし大根、焼栗、焼松茸、枝豆。

しら和の鮭頭は、うすく細く切り鹽酢の中に漬け置き、大根は千打にして鹽にてよくもみ、水洗いして置き。別に擂鉢にしろごまを擂り置き、豆腐をしぼつて入れ、砂糖、味醂、鹽を入れてよく擂りまぜ、今の鮭頭と大根を入れて和へ皿に盛り用ゆ。

鮭頭の膾は、酢に鹽を加へた中へ鮭頭の薄く切りたるを漬け置き、大根をほそく打ち鹽にてもみ、水洗ひし木くらげも細く庖丁して、右の三品をまぜ、三杯酢を甘めにしてかける。

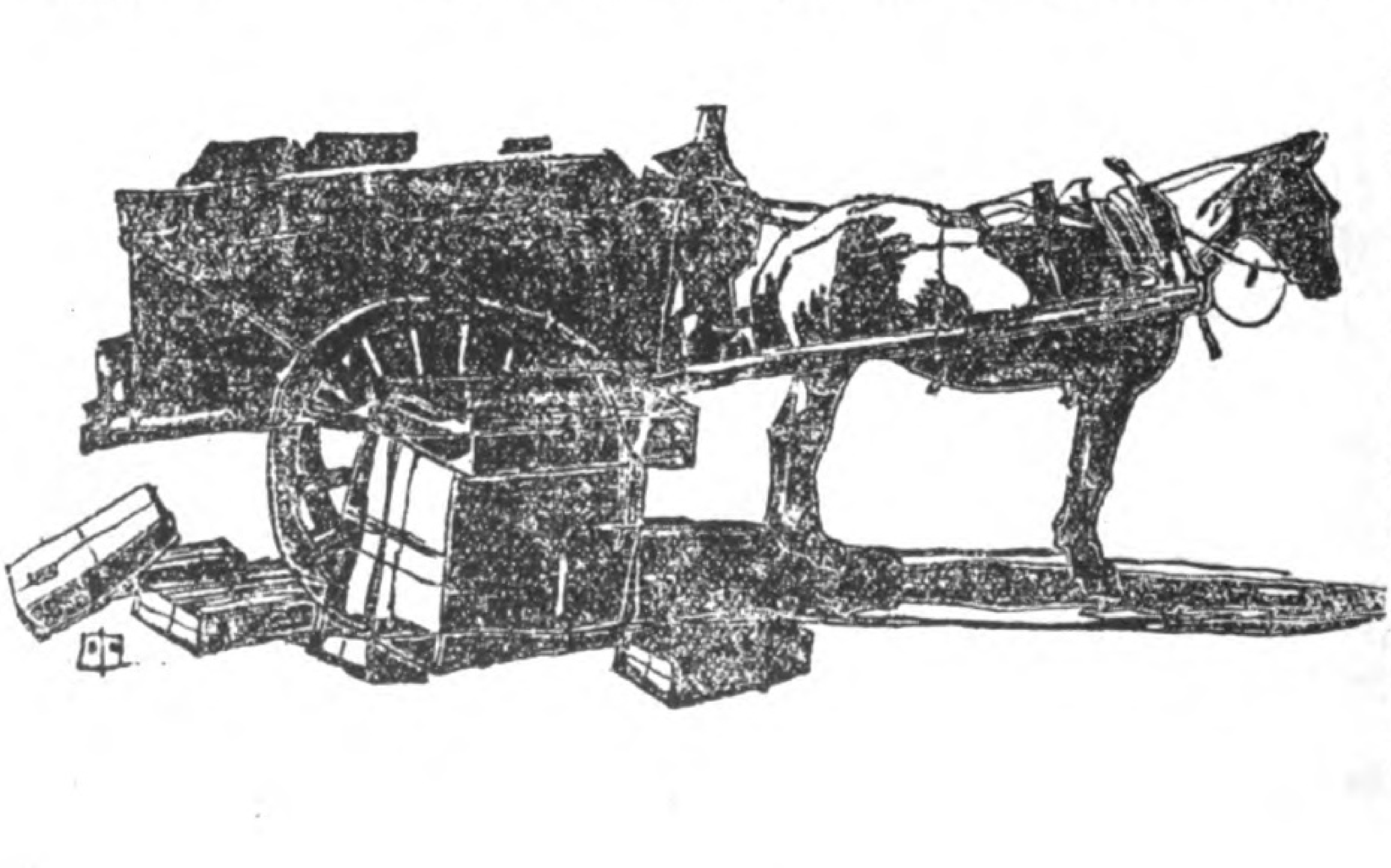
鮭の子の膾は鮭の子を半熟位に茹で置き、大根をろしは、鬼をろしにてをろし、枝豆は煠で剝き、栗は外皮をむき、煎鍋にて煎り、手にてもみしぶ皮を去り、燒松茸は熱灰の中へ二十分位入れ置きて取出し、水洗して庖丁するか又は二つにして金ぐしにさして燒いてもよろし、右の品々に三杯酢をかける。

△貯へ物

又夏食べるのに貯くわへるには、鮭を打身にして醬油、味醂五分〱に合ぜ少し煮つめた中へ、鮭の身を白燒きにして冷して後漬ます。是は燒漬と申しまして夏分に取出して食べますと實に美味です。

卷鮭と申しますのは一貫目位の鮭を鹽七合位にて漬ますが、其四合位は頭と腹のところへし、後の三合は手のひらに鹽を持ちまして鮭の尾の方から頭の方へかけてさかさになすりつけるのです、而しますと、鱗の間に鹽か入ります、それを鹽俵で卷込んで置き五日目に上下をかへて十日間置き、鹽俵の中より取出して一夜位水に漬けて鹽出しをし、風通しよき處へつるし置きますと一ヶ月位で大方固く成りますから、其時腹を（但しうすみの事なり）を切り取りまして其腹をば燒いて食べますと非常に美味です。後の本身は昆布で卷いてつるして置き、夏に成りましたら皮を取り、うすく切り、胡瓜などを付合にして三杯酢にて食べます。

△鮭の粕汁　鮭の頭を薄く切り、ザツト煠でこぼし、粕汁の實に煮るのです。粕汁は東京には無いやうですが、東北の寒い地方にはよく行はれます、仕方は酒の粕を其儘水で煮て鹽にて薄く味を付るだけです、粕は一旦擂鉢にて擂れは一層宜しいのです、薇麼葱を薬味に用ひます。



# 靜子夫人の覺悟を見習へよ

天翔ける雲

## △土鍋の奥様たりし俤

今宵は秋の雨軒に淋しく、更け行く窓には思ひ出でらるゝことの尠からず候まゝ、母上のときものし給ふ側に机を据ゑて、この手紙を認め候。武雄様機動演習に出でられ候留守は何かと心使ひも多かるべく、子供の躾やら、雇人のさしづやら、定めて忙しきことならんと噂致し居り候。しかし、軍人の妻たる御身の責任としては、從順に夫に仕ふる一面には、よく一家を處理し、子女の教育にも意を用ひ、夫をして毫も内顧の憂なからしむるが當然のことに候へば、斯るかりそめの留守も、國家に大事ありし時と同樣に心得、何事にも油斷なきやう心をつくされたく、切に祈りあげ候。

かゝる事は、今にはじめしことにも候はねば、要なき兄の婆心よとのおぼしめしも候はんかなれど、現代の軍人の家庭には不健全なるもの大分これあり、兄などの知れる範圍にても、眉をひそむるに足るもの、十指を折るに餘りある程に候。御承知の通り、軍人といふは尉官より佐官と、官等のすゝみ行くものにて、その官等に伴ふ境遇の刺戟は、しらず／＼の間に、人物を大ならしめ、官等相應の仕事をなすに差支なからしむるを常とすれど、妻なるものゝ人格まで、夫の進歩に伴ふ譯には參らず、尉官時代に娶りし妻は、その夫が、佐官となりし曉にも、その智徳の上にいさゝかの進歩をも認むる能はず、日常の行爲に、依然として、土鍋の奥様たりし昔日の俤をとゞむる如き例は、御身の周圍にも、あまたみとめ得ることゝ存じ候。

## △洒々落々は勇士の面目

處女時代には、相當に修養を怠らざりし者も、一旦家庭の人となる時は、全く、生きた裝飾物と化し去り

て、智德の修養等には、殆ど意を用ゐぬ傾きあるは、日本の女に免れざる弱點とはきゝをり候へども、軍人の妻たるものにまで、同一の傾向をみるは、この上なき遺憾と存じ候、男子とはちがひ、女は內を守るものに候へば、さまで、深き知識を要せずとの議論もあれど、平素自家の修養に意を用ひざる時は、事あるの日に用にたゝぬは申すまでもなく、良妻賢母として、家をゝさめ子女を教養するにも十分の働きはなしえぬことゝ相成るべく候。現に、わが近くに住める某佐官などは、すぐる日露の戰役にも、殊勳をたてられ、勇名かくれなき猛者に候へども、一度、その家庭をうかゞつて、子女の前途を思ひめぐらす時は、人事ながら寒心に堪へざるふしのみ多く候。『武人は一身を邦家に捧げたるものに候へば、一家の私事の如きは、顧慮すべきにあらず』とは、佐官の信條に候て、洒々落々たる行ひは、勇士の面目をたもつにあつぱれのことなれども、その留守をあづかる夫人にいたつては、いづれの點より觀ても人格のみとめらるべきものなく、實に〳〵、見さげはてたる下賤女と申すよりほか無之候。




彼は賣女らしき美衣に身を飾り、日夕、二人の侍女にかしつかれて、從卒や馬丁の前にこそ、奥

楤風を吹かせをり候へども、夫なる佐官の聯隊に出勤するや、動は友をもつて集る尉官の夫人などをあつめ、俗曲の合奏をなすやら、花骨牌の勝敗をあらそうやら、少佐の歸らるゝ一時間ばかり前迄のだらしなさは、何と評して宜しかるべきか。きけば、大佐の年俸は、ほとんど、彼の女の虚飾の費にあてらるゝ趣にて、その髪かざりといひ、その衣裳のこのみといひ、自身は、流行の粹をあつめしを誇とする積りならんも、心あるものは、まづ軍人の妻らしからぬ行ひよと、之を唾棄するならんと存ぜられ候。斯れば、子女の教育の如きも、たゞ打捨ておくのみにて、その躾等にも、一向意を用ゐざるがため、十六歳になる長男は、二年つゞけての落第に、土地の中學をおはれ、二つおとりの妹も、母人に似て顔だちこそ愛らしけれ、學校の成績はいつも最下の方なりとのことに候。

### △平素心懸くべきこと

軍人は、命を的として邦家に奉公するものに候て、一旦急ある時は、硝煙彈雨の間に馳突し、屍を原頭に横たへ、碧血に野草を彩るをも辭すべからざることに候を、家を守り、子女を教養すべき夫人が、斯る有様にては、武勇鬼神の如き人と雖も、心やすく邦家に身命をさゝぐる程の働きは覺束なかるべく候。夫をして内顧のうれひなからしむるは、妻たるものゝ務なる中にも、軍人の妻は、一しほ、その責任の重きを自覺し、邦家のためとあらば、今日只今にても、夫をして死を潔からしむるだけのことは、平素より心懸けおくべきことに候。言ひ換ふれば、未亡人として、他より後指さゝれざる程の用意は、夫の身に事なき日にとゝのへ置くが何より大切のことに有之候。日清日露の戰役に武勳赫々たりし勇士の未亡人などが、亡夫の墓いまだかわかざるに、はやくも、その貞操をやぶりて世の物笑ひとなり、その子女も亦、往々乃父の名を汚すが如き所業ありしは、これ迄もしばしば耳にしたることに候が、これらも、前に逃べし佐官夫人の如き不所存者が、夫の戰歿後、その弱點を暴露したるものにして、

軍人の家庭に不健全のものあることの具體的例證ともみなしうべき事實に候はんか。尤も、その妻を感化し同化せしむる能はず、かゝる所業をなさしめおき候こと、その夫たるものも、責をわかつ可は勿論なれど、その大なる原因は婦德の修養を怠れる妻の過に歸するより外なかるべく候。

二大戰役の當時は、軍人全盛の時に候て、年わかき娘がその配偶を求むるにも、軍裝いかめしきものをえらび、われは軍人の妻なりといふを誇とせるもの多か




りしかど、徒らに虚榮の滿足に醉うて、婦德に培ふことを忘れしものは、こゝに、軍人の妻たるの資格を失ふにいたりしにあらずやとも考へられ候。愛する妹よ。濁りにそまぬは、蓮の誇に候たとひ、御身は濁江の中にたつとも、清らかなる蓮の節を持して、飽くまでも軍人の妻たる面目をたもて、軍人が、事無きの日に操練を怠らざる如く、御身も亦、事無きの日にその婦德を養はれよ、御身が、二人の子の母としての責任は、一家の妻といふ上に更に責任の重

きを加へたる譯に候はずや。

## △綿服を透す婦德の輝き

軍人は質素ならざるべからずとは、御勅諭の中にも懇にいましめおかれし所に候。先帝に殉ぜられし、乃木將軍の如き、實に軍人の典型と仰ぐべき偉人に候か、將軍と同じ枕に自刃せられし靜子夫人の生涯の如きも、軍人の妻のよき鑑なるべく候。美しき犧牲的精神は、軍人にも必要なれど、すべての婦人にも缺くべからざる美德と存じ候。靜子夫人の五拾餘年の生涯を觀じ來る時、この美德がいかに夫人を大ならしめしかを認め得ざるものは、夫人をみるの明なきものに候。乃木將軍は、一汁一菜に甘んじたる簡易生活の實行者に候ひしか、綿服をまとひ、手づから鋤鍬をとられしといふ夫人も、世に珍しき賢夫人に候。

婦德の輝きは、綿服を透しても家をてらし身をてらす時なきにあらず、乃木夫人が、姑に仕へて孝養をつくし、二兒を愛育して忠勤をぬきんでしめ、遂に將軍に殉じて貞淑の節を完うせるが如き、わが國の婦人のかがみとすべき美事なるのみならず、夫の年金を指輪にかへ、綾羅にかへて、徒らに虛榮の滿足を求めんとする現代の軍人の妻には、ことによき訓戒をたれられしものと存ぜられ候。愛する妹よ、御身が、家計裕ならざる中に生れて、嚴なる母の躾におひたちし一事は、軍人の妻として一家をとゝのふるには都合よき所もあるべけれど、教育の程度に於ては、なほ修養を要するふし多からんと推せられ候。

古人も、讀書は、心の糧食なりなど申しおき候ごとく、多少文字あるものゝ智德をすゝむるの道は、書に親しむにこしたることは無之候。御身いまは、尉官の妻なれど、やがては、佐官の妻ともなり、將官の夫人ともなるべき身の上に候。自重自愛、常に、その智德の修養を忘るゝことなく、暇あらば、古今の書にしたしみて、賢母良妻たるの資格をつくる樣心懸くべきことに候。世には、讀書の利益を知りつくしながら、之を繙く暇など申すものも尠からず候へども、多くは、そ

の人の怠を飾る口實に候。鈴のや大人の御歌の中に、
ふみ讀めば大和もろこし昔今よろづのことを知るぞうれしき。
書よめば昔の人はなかりけりみないまもあるわが友にして。
食ふものはみちても消ゆる腹の中に長くのこるは讀る書なり。
書よまでなにゝつれ／＼慰まん春雨のころあきのながき夜。
折々にあそぶ暇はあるひとのいとまなしとて書讀まぬかな。
書よめば又たぐひなき樂しみを書みぬ人は知らぬなりけり。
千萬のふみも年經て怠らずよめばよみえるものにぞありける。
いろはだに知らぬ人をばはかなしと見つゝふみみぬ人ぞはかなき。




と詠れたる、まことに意味ふかきことゝ思はれ候。夜もやうやう長くなりて、燈下書に親しむべき時は來り候。

## △山茶花咲ける南の窓

一日の業を了へ、二兒の美しき夢を辿る枕邊にありて、心しづかに書をひもとく時、その心のすか〱しさは、そも如何に候べき。兒はいま、遥に、その俤をおもひうかべて、うれしさの胸に湧くをとゞめ得ず候。軍人は、いつにても邦家のため一命を捧げ得る覺悟が肝要に候へども、これと同時に、その妻たる者は、いつにても、未亡人となり得る資格を養ひおくが何よりに候。御身が、完全にこの資格をつくるは、やがて、武雄樣を、武勳赫々たる人たらしめ、二兒の前途に光明を與ふる基たるべく候。

別封にて御めにかけ候栗は、秋風の朝な〱背戸にゐみこぼれしを拾ひあつめしものにて、その一半を岡山の妹に送り、その一半を御許に參らせたるにて候。乾柿は、母上の手づからむきて、山茶花さける南の窓にてほしあげしものに候。外見はよろしからねど、そこには甘き慈愛のいひしらぬ味もこもるべく候。二兒の前に小包を開き、田舍の婆よりの賜物をわかつ時、愛らしき二兒の頰には、如何なる影のたゞよふらん。母上は日として、最近の寫眞などあらばみせられよ、二兒の上を語らぬことは無之候。おひ〱寒さにむかひ候折柄、御自愛專一にと呉々も申しいれ候　かしこ。

## 十六萬圓の塵

紐育のワルドルフアストリア、ホテルの携帶品預所にローズ、ブアーレルと呼ぶ一婦人が日毎に食堂に出入するお客に愛嬌を振撒いて帽子や外套を預つて居たがマイク、ダンカンと言ふ一巡査と結婚した。此巡査といふは永年同ホテルの前に立番をして居たので何時とは無く戀に落ちた、巡査は素より身分低きホテルの一使用人と結婚した積りで居た處が披露會の席上で女が突然金貨や株券を取混ぜて大枚十六萬圓と云ふ大金を花婿の面前に突出し「サア之は貴方のものですよ」と言はれて口をあんぐり夢ではないかと呆れて居る中に女の語るを聞くと嬢は十八の年から同ホテルの品物預所に居てお客の帽子の塵を拂つて居る中に段々心附の嵩が積んで五六年の後紐育の郊外に三萬圓の地所を買つた、處が其れが旨く當つてドン〱地價が騰つたから瞬間に十六萬圓の財產が出來たのだと云ふ。



# 茶飲ばなし

白露女史

青鞜社の方達も大分新聞で騷がれまして御座いますね。しかし間もなく御大喪で何れの新聞もその方の記事に忙しくなりました爲か、有邪無邪の間に葬られて仕舞た形で、あの方達には丁度よい折であつたでせう。けれども私共が考へますと何もあんな事に大騷ぎするにも及ばないと思ひます。どんな處かと一寸のぞいて見たからつて別に不道徳でも罪惡でもないぢやありませんか。そりやあ短いやうでも一生と云へば長い旅路ですもの、無趣味な軌道を傍目もふらずに歩くのはよいかはしれませんが誰にしろあきますからね。時には美しい花の咲き亂れた所へ立寄つて道草を摘む事もありませうし、時には神々しいお宮さんへお參詣をする事もありませうし、又いろ〳〵な道伴れと一緒になる事もありませう。その道づれにも善い人があり惡い人があり、中には隨分面白い人にぶつかる事もあるでせう。しかしたとへどんな人と道づれになつたとて、暫らく美くしい物に見惚れて居たからとてそれが何で惡いでせう。一體善だの惡だのつて云ふその善惡が何を標準とするのか分りませんものね。かうしたら惡からう、あゝしたら軌道を外れるかと一々前後を見廻してばかり居た日には手も足も出やしません。さう若い女のする事を一々穿鑿していぢめるのはあまり可愛想ぢやありませんか。何も二人や三人の若い女が物好きな事をしたからと云つて天下が動搖するわけではないでせう。そんな事を喧ましく云ふよりはまだ外に根本の問題があるのぢやありますまいか。

例の本荘幽蘭なんて女は私共より少し後に明治女學校に居つたのですが、あの人は最初から一寸人と變つ

た處がありました。しかしあんなに迄なるのでもなかつたでせうが、初めに少しの事を新聞で大袈裟に書き立られたのがもとで、まゝよと云ふ了簡から大膽になつて仕舞て、終には善い事でも惡い事でも自分の名が世間に發表される事が、嬉しくつて名譽でゝもあるかのやうに思はれて、とう／＼あんなになつたので、云ば社會からあゝ云ふ風に、こしらへ上げられた樣なものです。先年も吉原の角海老へ身を賣つたと云ふ事がありましたから、私はあまり親しいと云ふ程ではありませんが同窓のよしみもあり又あんな風な人をさう云ふ境遇に置いたらどんなになるだらうと考へましたので店の運轉資本の方から一時融通でもして是非身受けしてやりたいとこんなに思ひましたから、早速角海老へ電話をかけました。さうしますともうその時はそこには居りませんでしたが樓主の話に幽蘭と云ふ女は來る事はきました、二百いくらの身の代金でたつた一日目見得と云ふ樣な事をさせましたが何か怪しい氣焰なんか吐いて樓中を煙にまいたり、議論を吹かけたりしましたさうで手がつけられないとか、又以前は救世軍に居つた事もあるさうですし抱へ娼妓達に自由廢業でも吹き込れたら大變だから、何しろ斷はらうと云ふわけで早速斷つて仕舞つたと云ふ事でした。それから幽蘭はそこを出て吉原の店を一軒／＼に入り込で賣つて歩いたさうですが、そんな女とは知らないでも逢つて見るとどうやらたゞの女とは變つて居るし何となく氣味が惡いと云ふので、何處でも申し合せたやうに斷つたと云ふ事で、さすがの幽蘭もとう／＼娼妓になり得ずに、今は何處かで活動の辯士に成てゐるとか云ふ事です。娼妓にこそなりませんでしたが事實はそれ以上で社會の闇黑面と云ふ闇黑面は悉く知つくした女なのです。かう云ふ阿婆摺れ女でもよく聞いて見ますと時にはその胸中に良心のひらめきがあるさうで、その中には人並以上に深く／＼我に立ちかへるらしいのです。そして自分の行爲を心から悔いるのださうです。けれども今迄の惰性でぢきに又まけて仕舞つては放縱な生活から脫する事が出來ないのだと云ふ事ですが、ほん

の瞬間の閃きで、たとへば雲の間からパッと太陽が面を出したやうなもので、直ぐ又雲に覆はれますが兎に角あんなに迄世間から爪彈きされてゐる女でも良心と云ふものはあるのです。平生道德的の生活をして居らないだけに良心の苛責は一倍強いやうです。平生表面を美しく裝ふて居る所謂善人と云はれる人が却つて罪の深いもので、監獄に繋がれて居る罪人なんかは至て輕いものです。一旦の出來心で前後の考もなしにした事がはしなく




も人の作つた法律と云ふ制裁にあて篏まつて苦しい思をするので、精神上の無形の罪惡の方がいくら重いか分りはしません。ですからキリストも貢とりや娼婦のやうなもの丶罪はお責にならないで、牧師や敎會へ出入りするものをば強くお責めになられたとか。又それらの者を鞭うつのは今迄罪を犯した事のない者にせよと云はれました時に誰一人自分が鞭つと云ふ人はなかつたと云ふ事ですが、かう云ふ事から見ましても眞面目な面をしてゐる人に比較的罪惡が多いのですね。

私の處にも二三十人ほどの男女が居りますが、夫らに就いて見ましても普通に惡人と云はれるやうな人間の方が餘程使ひよう御座います。善人だのお人よしだのと云はれる方が却つてよく使へません。何にしてもぐうだらが一番困りますね。

又話が初にもどりましたが靑鞜社の方々などが新らしい女とか云はれて居りますけれど私どもにはどうしても新らしいとは思はれませんね。あゝいふ事をするのが新らしいならば昔から淸少納言や和泉式部はもつと〳〵新らしい女なんでせう。この新らしいと云ふ意味はどんなのか分りませんが私どもが考へますには新らしいと云ふのは原にかへる、眞の自分に立かへると云ふ事なんだらうと思ひます。私は近頃自分と云ふものを顧みてつく〴〵考へますがそれは今迄自分が飛んでもない者になつて居たと云ふ事です。折角一つの箇性を供へた自分と云ふ者がありながら、折角芽を出しかけたその芽を育てやうとは力めないで、やれ敎育、やれ宗敎、やれ道德、やれ境遇といろ〳〵な埃や塵をあびせかけて遂にその芽をおしつけて仕舞てとてつもないものに出來上つて居たと云ふ事です。箇性なんてものは全つきり影をかくしてたゞ舊い道德にのみ囚はれて人の造つたレールの上を歩むとに競々としてゐるのです。馬鹿らしいぢやありませんか。それは勿論敎育も宗敎も道德も人となるには必要なものには相違ありませんが只さう云ふもので頭から押しつけると云ふのは感心しません。私は今迄子供にでもあゝでもないかうでもないといろ〳〵口喧ましく申しましたが、子供が惡いのではなく子供の惡いのは全く自分の惡いので、子供は親の影だと云ふ事に氣が付きました。ですから今では滅多に子供は叱りません。

たとへいくら壓へ付けたとて芽の出るものはどうとも出來やしません。五の力で壓し付ければ十の力ではねかへします。それも眞直に伸びやうと云ふのを無理にさへぎれば橫の方へより大きな力でそれて行きます。社會主義なんてものも初めからあんなものではなかつたさうで、あゝ云ふ自由の思想に憧憬を持つたあ

あ云つたやうな人達がただ一つの思想として話し合つて居たのに過なかつたのを、丸でロシヤの虚無黨か何かのやうに騒がれてやれ警察の探偵のと大袈裟にされたので、否でも應でも何か一つそんなものをこね上げねばならない様なはめに陥つて、とう〳〵あんな事になつたので早く云へばはたからおだて上げたんですつてね。新らしい女なんぞでもさうで




すよ、何でもないのに大騒ぎされると、終ひにはとんだ者になつて仕舞ふかも知れませんね。それに又新らしい女つて言葉が既に眞面目に解釋されては居ませんもの。それをまだ若い年の女の子などが誤解して何でも脱線するのが新らしいのだなどと考へて自分も一つ新らしくならうなんてとんだ勘違ひされると困りますよ、ですからさう云ふ何物にも囚は

れないと云ふ思想は結構なんですが世間の人々に誤解されない樣にしたいと思ひます。しかし只今の處では何物にも囚はれぬ思想と云ふのは極めて稀で大抵は社會からや境遇からいろ／＼な束縛を受けて身動きが出來ないのですよ。社會や境遇からの束縛ならまだ／＼輕いんですが一歩進むと自分を束縛して仕舞んです、これが一番始末が惡いので社會からのがれやうが境遇から脫しやうが、海に避けやうが山に隱れやうが到底束縛から離れることの出來ないものが人間にとつてこれ程不幸なものは御座いますまい。

## 物をいふ眼

女の生命は無論眼にあるのだが、眼の生命は何處にあるかと云ふと瞳である、西洋の女の瞳はスッと前方へ生えてゐるが、日本の女のは上向か下向になつてゐる。一體に女の眼は男のよりは丸く出來てゐるが、男の眼と最も異つた點は、女に色盲が無い事である。凡ての動物は雄の方が翼や色合が美しいといふのは、これで雌を惹付ける爲めだから雌に色盲がないのは神樣も餘程注意したものだ。女が妊娠中であつたり、慢性の子宮病だつたら眼の周圍が薄黑くなる、それを西洋では美人としてお化粧の時には故意と眼のふちを黑くする、時とすると青い顏料を塗る事がある。西洋人の描いた日本人の顏は、どれも眼がつり上つてゐる、これに就いては昔から種々の說があるが、つまる處日本人は鼻が低いからそれだけ顏面の皮膚が餘つて、眼の內側(鼻に寄つた方)に被ぶさるから外側(後の方)がつり上つてゐる樣に見えるだけである。で、西洋人でも子供の鼻の低い間は日本人と同じ事だが、成長して鼻が高くなるとそれが無くなつて了ふ。も一つは、西洋人が歌麿その他の浮世繪を見つけてゐて、日本人の眼と云へば細長くて後が上つたものと思ひ込んでゐるのだらうと思ふ。それから日本人の眼球は大分外に飛出してゐるから、近くに鉛筆でも持つて行くとまたゝきをするが、西洋人はいくら何を持つて行つてもパチリとも仕ない。人間の顏で最も能く働くのは眼である眼さへあれば口がなくとも大抵の事は意味が通じ得るものである。眼が水平な時には平和の表情である、逆八になつた時は喜び、八下りになつた時は悲哀を表す。(永尾醫學博士)

# 貴婦人界と寶石

近時歐米の寶石商人等は、玉質に關する化學的研究に苦心して居ると同時に、一方には模造家が極力寶玉の摸造に浮身を窶してゐるので、今日の處殆んど眞贋を辨じ難きほど巧妙になり、商賣人でさへ之を鑑別する事が困難である爲めに、老練なる寶店までが、多數の模擬寶石を買ひ込んで、大損害を蒙り、甚だしきは自己の財產を傾け盡すものさへある。又佛國パリーには壯大なるルビー工場が出來て、光澤形狀とも毫も眞物と變らぬルビーを盛んに製造しつゝある。其製法は、天然ルビーの細末を酸水素ドロチンの强烈なる熱火にて熔解せしむるのであるが、其眞僞を鑑別するには、强度の顯微鏡に由て其内面に漂よふ細微なる泡の結晶と微細なる曲線のあるのを見なければ之を判別する事が出來ないといふ。

磨き損れの眞珠の如きは、其粉末を或る一種の混合物に粘り合せて損所を固め上げ、之を臺にて被せて直ぐ眞物と同樣にして了ふ。また一千九百八年、ベルリンのメース博士は、露國の或一部に產するアレキサンドレットと稱する寶石の一種から、ルビー、サファイヤ、エムラード等の寶石を製造する事を發見し、佛國の博識者ホールダス博士は、ラジユームの作用でダイヤモンドに次で硬質な鋼玉より、自由に各種の寶石を製造し得る事を發見した。

一日某博士は某寶石商より鋼玉を購ひ、之にラジユームの作用を施した處、其原質のルビー色、赤色なるは紫水晶に、黄璨色は青玉に化し、又綠色の原質鋼玉は黄色に化し、何れも鮮麗無比なる寶石と成て了つた。博士は試に之を前の寶石商に示したところ、商人は熟覽の後、『實に立派な寶石です、お買入れの代價は莫大なものでございませう』と感歎した。然るに博士は笑ひ乍ら、『此寶玉は先日お前から買つた鋼玉をラジユームの作用で化けさせたのだ』と說明したので、商人は驚いて開いた口が塞がらなかつた。

最近英國のウイリアム、ラムセイ博士は、最も興味ある說を立てゝ曰く、大粒ダイヤモンドの製法は、全く其試驗的に使用する金と時間との問題で、其にお構ひなければ何な大きなダイヤモンドでも見事に拵へてお目にかける、而して吾人は近き將來に於いて、我等が日常使用してゐる砂糖から、立派にダイヤモンドを製法する時期が來るであらう、砂糖の成分は世人の知る如く全く炭素より成り、之を熱する時は黑色の塊と變するので、彼のダイヤモンドの成分も亦炭素の結晶體に外ならざるが故に、吾人は極簡單な方法に依つて廉價な砂糖に或の熱度と壓力とを加ふる時は、世人の渴望する所の貴重なダイヤモンドを幾顆でも自由に製作する事決して難事でないと。寶石珠玉が此んな調子で自由に出來る樣になつたら、今後の虛榮家の嗜好は更に何に向つて趨るであらう。

○さあほんとに呆れた。社會つて何故あんなに氣が小さくつて弱いんでせう。なにも青いお酒を吞んだつて、爛れた女を抱いたつて、ちつとも驚くことは無いではありませんか。わたしはもう口惜しくつて口惜しくつてならないんですの



# 八面鋒

むらさき

○ことに相手は色情狂なんですよ。唯さへ頓間で馬鹿な狂人なのですもの、そりや普通の人の出來相もないこともやりますさ。けれどそんな事まで心配してやれ新らしい女だの、やれ現代の醒めた人だのつて言ふのはほんとに氣が知れないわ。

○そりやあハイカラの人に言はせば、狂人は新らしい人かも知れませんさ。けれどねいつまでたつても、、、かもはかもですよ。十年たとうが百年たとうがやつぱり「新らしい人かも知れない」ではやりきれませんからね。鴨なんばんぢやあるめいし……ほゝゝゝ、大變な啖呵でせう。

○もしも狂人が新らしい人なら高御坐に鎮坐まします蘆原將軍はさだめし時代の先覺者なんでせうね。巢鴨原頭數拾の頭顱悉く之れニイチエの所謂新人なりですつてさ。呆れ返つてものも言へない。おや、何時から啞になつたのですつて？　いやな人ね、是の人

は……。

○平塚明子女史はこのごろ馬鹿に得意になつてゐらつしやではありませんか。おだてるつて面白いものね。流石の禪學令孃もすつかり引きかゝつてしまつたわ、けれど社會の人も罪ね、人を弄し入れるなんて可愛相ですわ

○森田草平さんにすつかりラブして居るくせに、草平宛の手紙の文句なんて堂々たるものですからね。

○實を言ふと明子つてわたしは大嫌ひ、負け惜みの強い人よ、男が何だつて言ふ樣な顏をして居乍ら、そのくせ男無しでは一晩だつて寢られやしないんですもの。



下手な白癡おどしには持つて來いつて言ふ代物なのです。

○ 尤も草平さんも嘘付きのやうですね。自叙傳にしろ煤煙にしろ。女の惡口ばかり書いて、自分ひとり良い子になつてゐらつしやる。お二方ともあまり香ばしくございませんね。

○ 死なうなどゝ思ふなんで滑々稽々ではありませんか。雪は冷たかつたでせうね。御同情申し上げますつてさ。いつそ四疊半にでもかくれて、能因法師の眞似でもなすつたなら、ようムんしたらうに。

○ 尾竹紅吉とかひよつとことか言ふ人もありましたつけね。何でも越堂さんの娘で、ある時越堂先生、自分の娘の書いた作品とは知らぬが佛の御說敎。『こんな馬鹿なものを書く樣な眞似をしてはなりませんよ。是れが良い見せしめです。』すると紅吉は得意になつて『まあ嫌なお父さん。そりやあわたしのことよ』。ほゝほゝ、稚氣滿々ですね。あれでよろこんで居るのだから可笑しくつて可笑しくつてならないわ。

○ 社會の人つて妙ね。紅吉のやうな女ごろつきのやうな人のことでも何とか言つてゐますよ。得意がる所以だわ。銘酒屋の女を素見したつて何でもないのに。ことに斯うした場合には、きつと出てくる内田魯庵さん。わたしは何だかいけすかない。

○ いけすかないつて言へば何處やらの美術學校の谷紀三郎さん、ほら、荒木郁子の『その夜』に加筆したと言ふ人よ。氣障なにやけ男ね、ぞつとするわ。自殺した馬鹿な小娘のことをべんごしたり等して、野心たつぷりだわ。

○ このごろ宜く男の方で『あんな事をしたつて男は恐がりやあしない』などと言つてゐるのもあります

けれど、さう言ふのがつまり恐はがつてゐる證據ですよ。意氣地のない人等ね。明子がそんなに恐いの？

○ 何したつて、たかが色情狂ですもの。安心なさいまし。日本の女はまだ泥人形で甘んじて居りますのよ。けれど餘えたコスメチックとくさつた香水、あれだけはやめて頂きませうよ。

○ 女で少し感心なのはやつぱり田村とし子ね。あの人は結婚したから、もの事がわかつて居るのです。結婚しないでぶりぶり言ふブリユーストツキングの連中のすることと言ふ事が機微にふれないのは斯のわけなのです。漱石さんではありませんけれど、明子以下につくづく結婚をおすゝめいたしますよ。



○斯の間、ある獨身の人が男が怖いから結婚しないのですつて言つてましたがあれは魯鈍ですね。そんなことで、童貞名譽に名をさらすのかと思へばつくづく嫌になります。

○田村とし子も好いけれど、良人の眼の前で他人の頰を指で突くなんて見好くありませんね。あれでは松魚先生もたまらないでせう。おいたみ申し上げます。

○文章世界にのつてゐるとし子の創作『惡寒』。妙なのね。當世流行の同性の愛をつかつて見たのでせう評判々々。見るべし見るべし……。

○同性の愛なんてわたしはいや〳〵〳〵〳〵……不自然ですもの。異性の愛が一番美しいのね。誰方、怪しいわねなんて、おつしやるは……。

○女も馬鹿ですけれど男も却々負けないはね。先達ても福寶館でわたしの袂へレターを入れた人がありましたよ。しかもその人は裏の書生さん、擇りに擇つて斯んな三平二滿に……可笑しいわねえ。

○斯んな人に、あれは名文ですねえなどとほめやうものならもう有頂天よ。

○わたしは降伏してくる男は大嫌ひ。レターをよこすなんて愈〻落城だわ。そんな男に限つてクラブオシロイだのミツワ石鹼だのつて騷ぐ、お平の山芋其處のけのにやけ男、見るどころか、聞いてさへこのとほり、げつ〳〵〳〵だわ。

○ハイカラも嫌ひだけれどわたしは蠻からもいけすかないわ、だつて何方もてらつて居るのですもの、そしてその對象はわたしたちなのよ。いもりの黒燒をなすられたつて誰れがラブしますものか。ちつとおたしなみなさい。はゝゝゝ、是れはS先生のお得意の言葉よ、

# 葉書を綺麗に書く法

鎌倉笹目谷　星野天知

日々に來る郵便葉書を百枚も集めて、其中から綺麗に書けたと思ふものを數へて見れば分るが、先づ其中に十枚と數へられるが關の山であらう。

それは尤もな次第で、いづれ葉書でも使はうといふ場合は、多く忙はしい時に用ゐられるか、又は手紙を書くのが面倒な所から用ゐられる場合もあらう、かういふ時は何れも綺麗に書けぬといふ事に成るからである。併しそれでなくとも一體場面の狹い所へ文字を書くといふ事は、なか〱綺麗に書けぬものであるのに、一つは又西洋紙へ毛筆で書くといふ事が既に無理な事で、まだ西洋紙に對する毛筆の研究が出來て居ないから、上滑りがして毛が止まらぬ、此二條件が葉書を綺麗に書かせぬ原因であつて、そこへ大急ぎで書く場合が多いとすれば、誤多々々して見苦しく成るといふのは無理でない。

だが、葉書はまことに實用上便利此上なしといふ通信物であるから、どうか書家の立場からして此書き方を工夫して綺麗に書けるやうに敎へたいと考へ始めた。尤もそれは十年も前の話しであるが、それには西洋紙に對する毛筆の製法を工夫する事と、書き方の式を定めて其書き方を工夫する事だと考へた。

其結果、今日では簡單な筆と簡單な書式とを以て容易に綺麗に書けるやうに敎へて居る。今其概略を左に述べて見やう。

## △はがきの書式

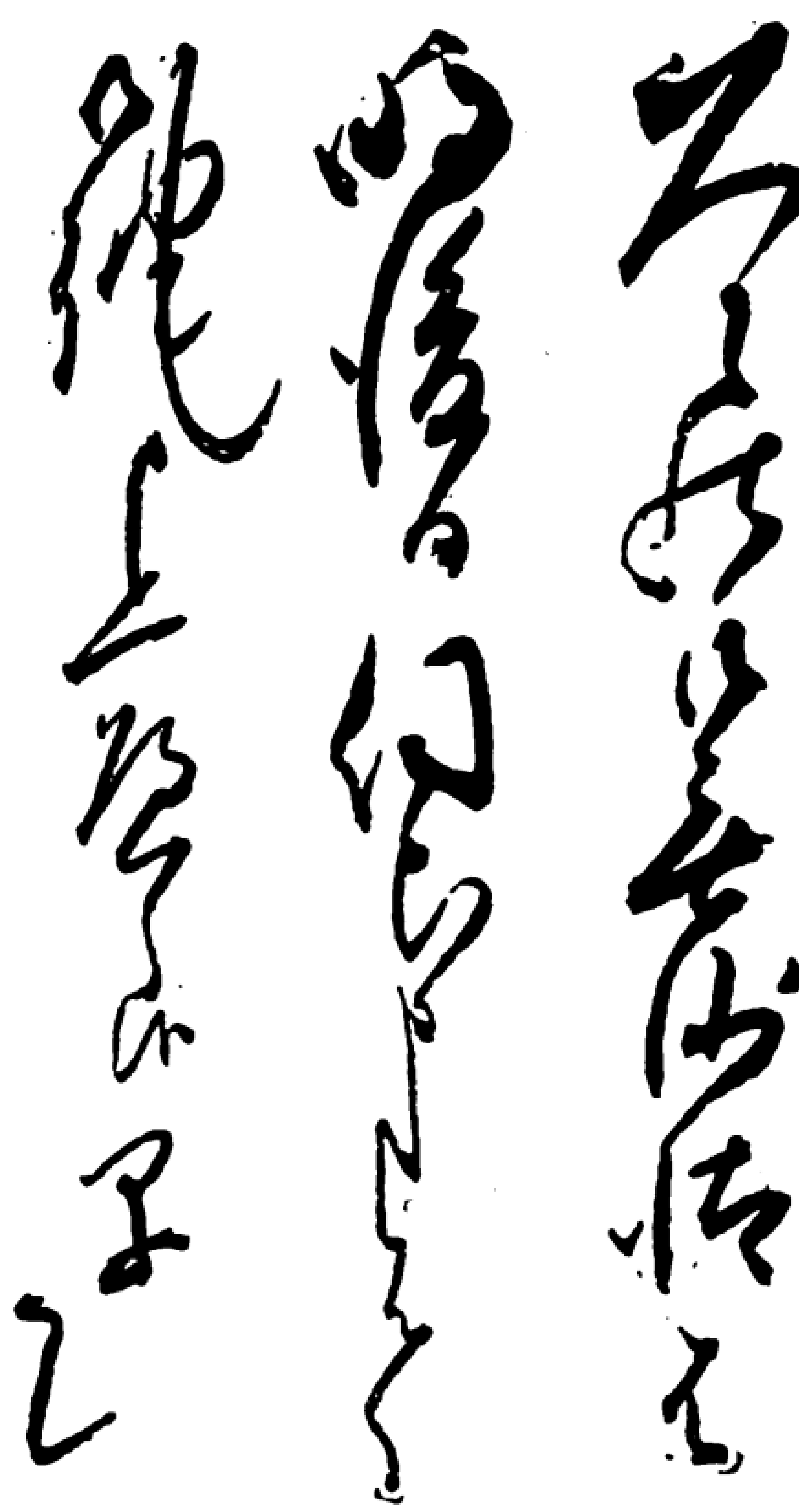
はがきには普通の葉書と繪葉書とがあつて、普通の葉書にも實用の書き方と風流な書き方とある。此風流な書き方とは散し書きの事で、之は繪葉書きと同じに美的な鑑賞に屬するものである。爰では之を後廻しとして、唯普通の書き方に就て述べる事にする。

偖普通の書き方に就て述べるにも、四行以下と四行

以上との二つに分けて述べなければ不便である。

四行以下のものは第一圖のやうに上は明けぬやうに書き、右と下とは三分の見積りで明ける。そして下を揃へる事が肝腎である。終りは始めから三分程明けやうと豫定を立てゝ書くのである。

此上を明けぬといふ事と、終りを三分も明けやうと豫期して書く事に付いては、夫々理由がある。總ての書き物には皆天地を明けるが法である。なせ葉書は天（上の明きのこと）を明けぬやうにしたかといふに、葉書は元來略式なもので、改まつたものではない。さういふものに正則に天地を明けて書くといふ事は、餘り物々しくて、子供などの仕業めく所から、略式もの丶本性を式に定めたのである。實際天を二分も明けて頭を揃へて書くといふ事は、匆卒の際には面倒な事ゆゑ、其手數を省くが至當である。



（第一圖）

次に何故に終りの方に三分の豫定を置くかといふに之は大に心理的に考へた實驗の工夫である。其は多くの葉書を集めて仔細に研究して見るに、初めの二行三行と進みゆくに隨つて、行と行との間隔が終りにゆきて狹く成つてくる。そして其文字も段々萎縮して小さく、且下手に成つて居るのが多い。試に多くの葉書を御覽なされば分る。葉書の大さなどは一目で始めから終りまで見えるのに、何故書かうとする文句の豫定が見積れぬのであらうか。之は見積れないのではない、例へば昨日訪ねられた挨拶を一口言ひ送らうとするに、「昨日は御出下されてまことに

久しぶりで嬉しく思ひました、其節は話し切れずに殘念でした、又御出で下さい」といふやうな文章が考へずともヽ腦中へ浮て來る。これは大抵四行位ゐのものであらうと豫定が着く、此豫定で書出す文字の大さが筆の先きに定められる。さア斯うすれば何も終りにゆくに從つて不安な考へが筆先きへ浮かみさうもない筈だが、文句が筆先きへ現はれてゆくに從ひ、先方の人に就ての感じが動いてくる。斯いふ事も言ひたい、斯いふ用も忘れて居たと、看る〳〵中に一行二行と殖えて來る。豫定が狂ふ、終りの餘白が無くなつて來る。そこで餘白が狭い〳〵と思ふ感じで右へ寄せて書きたいやうに成る。筆はいつしか知らぬ間に右へ寄つて書き文字も急に氣付いて小さく成る。それでも書き切れない。仕方がないから下の緣へ廻して書き、ぐる〳〵廻して讀むやうに書く事にまで成るのがある。斯いふ理由がある故、此あらゆる不安の念を去らしめるやう終りを三分以上明けて置かうと心に極めて書出すのである。さうすれば好しや文句の豫定が少々狂つても、其餘白へ書いて恰度場面が納まるやうに成る。又豫定通り場面が明いて見憎くい時は、「かしこ」とか「何日」とか書いて埋めて置く。左なくとも「尙々」書きで書き殘した禮か、用事か、又は「御大切に」とか溫かい文句を一句入れて埋めて置けば尙は宜しい。

## △墨つぎの事

それから大切な事は、墨つぎを矢鱈にしないやうにする事である。それは此のやうな四行以下のものは一筆にて書き、四行以上のものは二筆にて書くやうにする事である。

又四行以上のものを書くには如何かといふに、唯前の明きと下の明きとを一分位づゝ明ける事とし、墨つぎも二筆又は三筆までにして書き終るといふ事だけが違ふのであると心得れば宜しい。第二圖中○印は墨をつけて書き初めた所である。

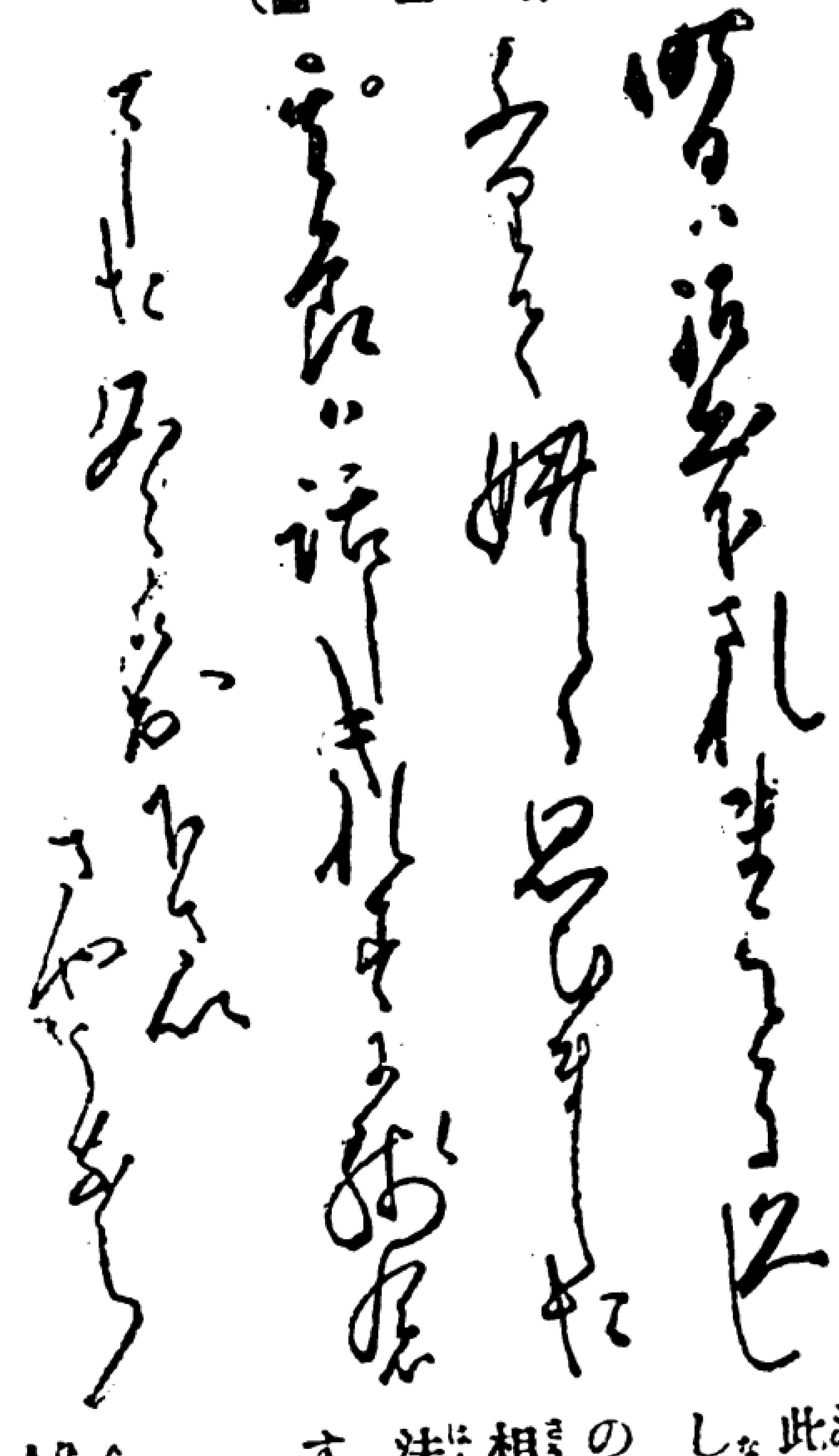
尙葉書きの表に書く名前書きもうまく納まらぬもので、これは位置を極める急所がある　それは此次ぎに

述べやう。

△葉書筆

只今の毛筆は元來西洋紙といふものが無い時代のものであるから、此の洋紙に應ずる作り方を新しく工夫せねば成らぬ筈である。昔も洋紙見たやうな滑かな紙質もあつたが、其には果して其用筆が出來て居た。殊に葉書のやうな洋紙面へ細字を書くのは困難な事で、これと同じやうな場合は、昔、經文を書く時がそれであつたそれで經書き筆といふものが出來て居た。紺紙へ金泥や銀泥で書くのは更に工夫を要したものであるが、葉書はそれまでには及ばぬが、細かい草書を早く書くし場合といふ事が又葉書の方では困難がある。そこで度々作り替へて見た末に、却て簡單な廉價な筆で書けるやうに工夫をした。(一本六錢で小形が五錢といふ價で筆である)。此筆で前の式に從つて書いて見れば、必ず永く切れない經濟的の好結果が得られる。尤も此筆は半分だけ卸して少し斜めにして使ひ慣れるのが必要である。(此筆は相州鎌倉町笹目谷星野書法會へ問合はすれば分讓する事にしてある。)

(第二圖)



△家居の儉約　居宅に富貴なる人も分限より少し狹きと見ゆるが理にかなひたるべし富貴時ありてつくると春樹秋にあひてしぼみ凋月十五夜を過てかくるが如し天地の理皆斯の如くなれば今富貴にして居所こゝろにまかせ作りたりとも遠き慮りなきときは後は修復の力もなく破れ損じ淺ましく見えるものなり(俔文話)

# 御大喪儀寫眞帖

## 萬代不滅の記念畫帖

博文館編輯局纂

明治天皇御大喪儀は實に皇國空前の盛典世界の一大偉觀にして國民の宜しく長へに敬悼讃仰し奉るべき所也。本帖收むる所東京及桃山に於ける御葬列の全部、當日の沿道雜觀は云ふ迄もなく、靈轜を始め御葬列の各神具、青山葬場殿、桃山御陵所の眞景より、大喪奉仕の各宮殿下及び諸員、歐米各國より參列の御名代宮及代表者、當夜殉死せる乃木大將夫妻及び靈柩列車通御沿道の光景等、本館寫眞部の謹寫せる寫眞百數十葉、苟も御大葬に關するものは收めて漏すなし。之を全部コロタイプ版もて寫上畫學紙に印刷し、附するに平福畫伯の御葬列スケッチと明治天皇大葬記を以てしたれば、その畫面の典雅莊重と內容の完美とに於て尋常寫眞帖の遠く及ぶ所に非ず、敬悼讃仰の記念として傳家の珍寶たるべきもの蓋本帖を措いて又他に求むべからざる也。

### 目次概要



洋裝四六二倍橫判天金縁大和綴函入美本
コロタイプ刷五十二枚
御大葬記事十六頁……南木文學士
御葬列圖十個……平福百穗畫

定價一圓三十錢　小包料內地十二錢　臺、樺、清、朝卅五錢

# ちゞれ毛直しくせ（複法ベント）

本劑は一度之れを使用すればちゞれ毛、くせ毛を直伸し永く使用すれば殆んど治す

定價九十錢　小包料一個に付八錢

# 毛はへ藥（エフ、ビコール）

本劑は頭髪は勿論眉、口鬚其他凡そ毛の生ずべき所に皮膚病其他故障の爲め生毛せざる者又は發生せるも極めて微弱なるに塗抹すれば生毛疑なし

定價（特製金三圓　並製金一圓五十錢）　小包料一個に付八錢

# 生毛強壯劑（エフ、トニツク）

定價　卅日分二圓五十錢　小包料十六錢　十日分一圓　小包料八錢

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして毛髪を美化するにありされば身體強健血行良好となり皮膚腺の分泌を盛んにして毛根の營養を能くし從つて薄毛、細毛、赤毛、髪等に運用せば奇効あり

發賣元　東京市本所區外手町八十七番地　深澤國華堂　振替貯金口座東京二一〇八二五番

# 美髪法（けをよくするほふ）

□毛の無き處に毛を生ずる法……

□くせちゞれ毛を治する法……

□呑んで毛を良くする法……

□白毛赤毛を黒くする法……

郵券二錢封入御申越あれば直ちに贈呈すべし

---

# 中央醫院

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒りん病　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人病　わきが　ぢ

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町停留場横

---

ぢ諸病　梅毒（横根　下疳　全身梅毒等）りん病消渇、

子宮病　血の道　月やくとまりたる病　子なき婦人

生殖器諸病　神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等　生殖器病萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

わきが　色の黒き人　にきび　ふきでもの

そばかす　あれ性　皮膚諸疾患　いんきんた蟲等症

▲病症記し郵券二錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

# 中央藥院

東京市淺草區瓦町廿八番地　淺草橋通瓦町電車停留場横

女（その五）

☛家庭整理の指導――

# 家庭百科全書

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

全部五十册・毎月一回發行

和裝美本(上)紙數各三百頁
石狀彩色口繪一葉挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵税一册金八錢

第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
第二編 四季料理 石井泰次郎君著
第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
第五編 茶道と香道 永原翠香女史著
第六編 諸流生花指南 琴松庵文雅君 松幸齋理常君 共著
第七編 育兒の務 田村貞策君 朝倉孤舟君 共著
第八編 簡易治療法 藤井靜子女史著
第九編 禮式と作法 佐方鎭子女史著
第十編 惣菜料理 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著
第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
第十二編 婦人の生理と衛生 牧野清子女史著
第十三編 教育お伽噺 木村小舟君著
第十四編 女德の養成 前田長太君著
第十五編 家屋と庭園 内山正如君著
第十六編 魚鳥家畜の飼養 鹿野化骨君著
第十七編 女子作文法 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
第十八編 子女の教養 棚橋絢子女史著
第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
第二十編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著
第二十一編 書道手引 井田秀生君著
第二十二編 歌の手引 大和田健樹君著
第二十三編 刺繍術指南 磯村大次郎君著
第二十四編 摘み細工指南 山田興松君著

發行所 東京日本橋本町三丁目

女(その六)

# 婦女必讀の大全書

第廿六編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第廿九編 兒童訓話 **母の知識** 木村小舟君著

第卅三編 **婚姻のかゞみ** 河崎醉雨君著

第卅七編 **偉人の妻** 前田雪子女史著

第四十二編 **洋菓子の調製** 赤堀峰吉君赤堀道子女史共著

第廿五編 **室内裝飾法** 近藤正一君著

第卅編 **洋食の調理** 東京治庖會講師著

第卅四編 **交際と談話** 福田琴月君著

第卅八編 家庭日常 **公けの心得** 小西眞雄君著

第四十三編 **續編物指南** 石井とみ子女史著

第廿七編 **衣服の調整** 石崎蓁園君著

第卅二編 **衞生と衣食住** 福田琴月君著

第卅五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

第卅九編 歐米 **魚介新料理** 赤堀峰吉君著

第廿八編 **洋樂手引** 前田久八君著

第卅一編 **東西名婦の面影** 高須梅溪君著

第卅六編 **日用家庭理科** 一戸清方君著

第四十編 **家庭新飲料** 赤堀峰吉君小原鐵雄君共著

第四十四編 **看病と養生** 醫學士 森友道君閲 伊藤尚賢君著

●上編看護法＝緒論○看護の一般注意○病室の設け方○病人に適當なる衣食○病人の觀測法○病人の介輔○藥物給與の方法○藥の特殊なる使用法○罨法の仕方○洗滌法○特別なる手當法○消毒法○繃帶の仕方○腦神經病と其看護法○呼吸器病と其看護法○循環器病と其看護法○消化器病と其看護法○泌尿器病と其看護法○運動器病と其看護法○法定傳染病と其看護法○一般傳染病と其看護法●下編養生法＝養生法とは何ぞや○神經衰弱の養生○眼病の養生法○耳疾の養生法○鼻病の養生法○呼吸器病の養生法○齒の養生と齲齒の養生法○心臟病の養生法○胃腸病の養生法○痔疾の養生法○腎臟病の養生法○脚氣の養生法○花柳病の養生法○皮膚病の養生法○婦人病の養生法○月經の養生と月經不順の養生法○つはりの養生法○姙娠中の養生法

第四十五編 **花の園藝** 北村東紅著

花を植ゑんと志しつゝも、未だ着手せぬ人。花を求めたれど、如何に處理せんかと惑ふ人。花を植ゑたれど、名も知らずと歎ぜらるゝ方。花の名は知れど、培養の心得なきを歎ぜらるゝ方。花の咲く草や木が春から冬へかけて、百千數知れぬ程ある許りか、近來は舶載の品種踵を接して輸入し來るので、到底其一々に通じられん事、大方の難しとし給ふ處ならん。本著者は「花と庭」との著を以て、斯界の高評を得たる北村東紅氏、如上の人々の爲めに實地萬般の培養方法を極めて簡易且つ懇切に説敍せられ、加ふるに苟も園藝的觀賞に値する、和洋草木を一々辭典的索引に依て記上したれば、讀者座ながらにして、草姿花形花色の細より、個々の培養法を悉知するを得べく、眞に花の園藝に於て、遺漏なきを得たりと謂ふ可し。

# 博文館

振替口座東京二四〇番

女への七

女(その八)

# 新妻日記

若紫

萩がすがれて、芭蕉が破れて冬が来た。
乾いた風の音、置く霜の色、磯の香高き我宿にも冬は立つた。

海は木枯に冴えて、紺青の色美しく、植ゑつけた海苔の間を縫ふ、海苔採舟に霜が下りて、朝日の光りに白く紫にかゞやくのが、中二階からよく見える。

雲井に巻いた襟元に櫛げの露が冷いやりと、今朝は寒い。ミルクを沸かしてパンを焼いて手軽な朝食がすむと、夫は御出勤。

忠坊はおもちやをもつて、おとなしく遊んでゐる、茶の間の長火鉢にもたれて、濃い鼠地へ大きな松の模様の、ちやんちやんを着た、可愛らしい後姿を見入ると、何とはなしに微笑まれる。

女學校を卒業るとすぐ昨日までのお下髪を、重い高髷に結んで、曙染の振袖着て嫁いだのはついこの頃の様に思はれるが、その明る年、生まれた忠坊は、もう僅かで三歳になる……片言ながら母様とよばれる今日この頃。

乙女の春は短かゝつたが、若い人妻も女のほこり、露もたれなん丸髷に、手柄の紅も初々しや、つゝましき新妻振りこそ、婦人美の極と、さる人情通も言つてゐる。

世の女が處女の時代に名殘りを惜しむのは、つまり結婚すると急に老込んでしまつて美くしかりしおもかげも日毎にうつろひ行くのを悲しんでの事でせう、妻でも母でも、若い女に變りはない、今つからくすぶり込んでたまるものぢやない。

この夏、湯上りに洗髪を、其まゝ後へ長くたらして、白地モスリンに紅入りの羽二重の帯しめて、縁の柱にもたれてゐたら、母親に手をひかれた、蛤屋の女の子が、垣の外から、

「あら姉ちやん」

と私を指さすと母親の目は妙に光つて「姉ちやんちやあねえよ小母ちやんだよ」と眞面につていふ、をかしくつて〳〵。

「〇〇さんの奥さんは、あんな子があつて、何て華奢なおつくりをしてゐるんだらう」チラ〳〵耳に入る。馬鹿〳〵しい子が無けりや、四十になつても緋のりボン掛けて、白粉つけてもをかしかないつて言ふのかしら。

「母様お菓子」いつの間にか忠坊が膝によつてゐる。「おとなしいのね。いゝ子、お菓子上ましよ」後様に手を伸ばして茶簞笥からチヨコレットの鑵を出すと、小さな手をたゝいてよろこぶ、銀紙をくるりとむいては口へ入れる。

南縁に日がうら〳〵と當つてくると、寒さにちゞんだ手足ものびる、手ミシン持出して昨日裁つた夫のシヤツを縫ふ、ガタガタガタと重いひゞきにつれて眞白い布は針の下を走つてたちまちのうちに出來上る。

正午お歸り、お晝食がすむと直ぐ買物がてら品川の姉様のところへ御無沙汰お見舞にいらつしやる。

霜降りのハンチングキャップに緋うらのマント、緑色のゴム靴はいた忠坊は欣然として先に立つ。

「辰やそこがすんだら、木村屋までいつて來ておくれな」「ハーイ」と長い返事をして間もなくヒヨツコリ顏を出す買物を書つけた紙片を渡すと二三度讀返して、「かしこまりました」と日の丸のやうな頰べたにうづまく笑くぼ。

見るから生々と心地のよい辰やの十六の年にはませた後姿が勝手口から門を出る。

福は井戸端で洗濯、唯獨居の靜けさよ、夫や坊やの脱すてしまつして書齋にはいる、階段を三段ばかりの中二階海に近く突出した四疊半風過ぎるので、硝子戸をめぐらして、疊の上に敷きつめた橄欖色のカーペット踏む足輕く、ふわ〳〵と音もしない。

大きなデスクの傍には高蒔繪の書架に、色々の本がギッシリ脊を並べてゐる。紅天鵞絨の椅子引よせて腰

を下す今日はめづらしく風も無い、見る目はるけき東京灣は碧の玉のやうに凪いで、羽根田の燈臺が小さく見える。海面を滑る樣に白帆が一つ、節面白い欸乃が水を渡つてほのかに聞える、手近にあつた本をとつてハラ〳〵とページを繰りながら寄宿舍の默讀時間を思出した。

三人づゝ向ひ合せた机をよせて頭髙の束髮が六つ——眞面目に教科書はひらいてゐるがともすれば黑い瞳は外に流れて誰からともなく筆談が初まる。

「‥‥でせう」「いゝえ‥‥なのよ」「あら‥‥だわ」等を沈默の規則を忘れては廊下行くスリッパの音にハッとして口をつぐむ事もたび〳〵。

家事に追はれながらも今は書齋に來て、種々の書物に目をさらすのが樂しみの一つ——昔の樣に閑があつたらと思ふ——

白い紙に浮上つた"Prisoner of Time"(時の俘)といふ黑い文字が强く目に映つた。

かういふことが書いてある。

ベニスの貴婦人で窈窕花の如き美人があつた、或時自分の身を美くしい甲冑で、名高い女神の彫像の樣に裝ふてその姿を名畫工に描かせた、かうして永久に若い美くしい我姿を世に留めて置いて、花の色の褪せぬ間に人の目から身を隱してしまつた、一度でもその面影に接した者に些しの衰へた樣をも見せたくはなかつた。

今日を最後と定めた日には、扮裝ひ凝した花の姿を華美を極めた離別の宴に現はした。

その翌日から庭園の中の靜かな家に蟄居した、幾年も絕えて人に會ふとなく鏡の無い部屋の内に我面影をさへ次第に忘れて只靜かに一生の終るを待つてゐた。

世の人にはこの貴婦人は昔の物語りの美女の樣に思はれた、朽葉の散つた濕つた狹い道に立つて階上を見上げると、左右の窓は皆鎖され扉は釘付けにされて居る、只一つ婢僕の通ふ路のみ殘されて、そこから生きた死人への食物が運ばれてゐる——

永久に美くしく生きんとする可憐しい望

永久に世の人に讃美されたい強い慾望。

その貴婦人は鎖された窓の中で、何を思ひ何を描いて最終の日を待つてゐるだらう、幽かに洩れてくる戸外の馬車の音や、人の聲を聞いて何を感じてゐるであらう、隙間洩る温かい光を見ても、庭の木の間に囀る雀の聲を聞ても、些しも心を動かさずに居られるだらうか。



面影の變らで年のつもれかし、とかこつた小野の小町、若かれとねがひ、美くしかれとのぞむは東西違はぬ女の心か……私もいつまでも若くありたい、眉秀で鋭氣は燃ゆる若人の夫も永久に變らせたくない……それよりもそれよりも星の瞳や、林檎の頬、些の汚にも染まぬ玲瓏

玉の様なあの忠坊こそいつまでも〳〵今の儘に置きたい。

一日も早く大きくなれと願ふのは世のつねの親心なのに、こんな事思ふなんて私もよつぽどどうかして居る。

辰が歸つて來たやうだ。

客間の置時計が四時を報じた。細長い餘韻が幽に空氣をふるはしく短かい冬の日は早ぼんやりと黄昏る。

茶の間に花瓦斯がついて福やを助手にこしらへた料理の數々、ゆら〳〵と湯氣たつお吸物、白い鹽燒、赤いお刺身、見るからお美味さうに卓に並んだがまだお歸りが無い。

湯上りのうすら寒さを袖抱いて門にたゝずめば夕もやの中に忠坊を負んぶした夫のお姿「母さーん」と忠坊が呼ぶ、私は無言つて再び可愛い聲を待つた。

## 中耳炎の手當

近來中耳炎の名を恐るゝこと恰も死神の如く中耳炎と云ふと難症の胃病にでも罹つた氣持になるではあるまいかと疑はる程である、尤も中耳炎も病勢の變化次第で難症に陷る場合がないとも限らないが、併し其治療法は意外に進步發達して居るから、中耳炎として最も難症とも見る可き「腦膜炎樣の症狀」になつたのでも、例外の手後れと他の合併症を發さない限りは、確實に治癒し得るのである、況して普通の中耳炎は治療の時期を過らないと一週間か十日で癒る。中耳炎の名に恐れ非常な大手術でも受なくてはならぬかの如く心得て治療を仰ぐことを躊躇するは好んで難症に陷るの結果になる中耳炎は通例の風邪からも發ることもある勿論流行性感冒からは最も罹り易いが急性のものは治療次第で直に癒る又慢性中耳炎患者が流行性感冒に襲はれると其爲一時病勢が增惡する、不幸にして一旦中耳炎に罹つたら棄て置かずに然る可き醫師の治療を受く可きである中耳炎は多くの場合に於て切開を要しないが、膿汁の溜り方に依つては切開しないでは疼痛の止まないのがある、切開すると直疼痛が止つて仕舞ふ、中耳炎は大抵一側(一方の耳)に罹るものであるが或患者は兩側共冒されて切開したが一側を切開し終ると其處の疼痛が直と治つたと言つて喜んで居た。(小此木耳鼻科醫院大野副院長)



# 繪もの語　木の葉の時雨

太田三郎

## 菊

むかし源中納言といふ人に、かざしの姫君と云ふ美くしい令孃がありました。いろ〳〵の草花を前栽に植ゑて、清い娯みに耽るのを樂しみとして居りましたが、わけて菊の花をば非常に熱愛して、毎年その花の香が秋晴れの空に漂ふ頃には、たゞもうそわ〳〵と籬のほとりを彷徨ひ歩いて、鮮やかな色や高い薫りに見恍れ嗅ぎ恍れるのが常でありました。

ところが彼女は、ある年の十月頃から不圖譯もなく心地が優れぬやうになつて、紅葉の月、白雪の月、さては立ち返る春の光の霞む頃と、だん〳〵月日の經つにつれて、愈々惱しさを增して行くのでありました。



二親の心痛は一通りでありません。加持よ祈禱よとそれはもう有らん限り術を求め手を盡すのでありました。併し不幸にして其心づくしも少しの效を見せませんでした。周圍はたゞ不可解な惱みに不審の眉を寄せるのみで、どう詮方もありませんでした。

けれど、不可思議は軈て自らにして解かれる、否解

かるべく餘儀なくせられる時が來ました。

激變した食物の嗜好と絶え間なき神經の顫動、女親は先づそれに氣附きました。加之ある夕、御粧ひ殿の簾をちらと漏れた女の乳首は、悲しくも暗い紫に纏はられて居たのであります。

それは更により以上の不可思議として、人々の額に不審の雲を被せました。年老った乳母と共に西の對の



一室に、清淨な處女生活を續けて來た女の、恁うした結果を齎さるべき原因は何處にも求める事が出來なかつたのです。乳母をはじめ近侍の者、誰一人としてついに一度さうした疑を挾む場合を認めなかつたのであります。

とは云へ事實は犯すべからざる權威を有つて居ります。だん〳〵と形を變へて來る女の體は、何人も否認する事が出來ませんでした。終に母は或る夜娘を膝下に呼びました。

其時に、面なげにさし俯首いた女の頰は、痛ましいほど眞赤に顫へ續けました……

それは丁度去年の秋、あの好きな好きな菊の花が咲き盛る季節の、一夜のことでありました。

日一日を雛はなれず暮した彼女は、帳の陰に歸つてもなほ其色や匂ひのみが偲ばれて夢見心地の體をうつとりと机に凭せて居りました。と、何處からか類へやうの無い芳烈な匂ひが、靜に漂つて來たのを感覺され

ました。刹那ふと氣附くと、傍に莞爾として一人の青年が寄り添つて居るのでありました。

女ははつと驚いて、思はず恐怖の聲もろともに身を起しました。……が、我にもあらず柔かい暖かいある力に引かるゝ思ひ、更にそつと偸み見ますと、それは二十あまりの狩衣姿の、薄化粧太眉づくりの風情が宛で夢のやうに匂つて居るのでありました。遽然、女は美酒の酔に浸されて行くやうな快感を總身の血に覺えました。小春の頃の生暖かさに、自らしつとりと肌が潤ふやうな夜であつたのであります。

男は其後毎夜々々來ました。女は其うるんだ瞳の奥に、限りない生の歡樂を雀躍りさせました。

併しやがて破綻は來ました。ある夜男は蒼白になつて女の室に馳け込みました。急に内裏へ徴されねばならぬ身となつて、嬉しい逢瀬もはや今宵かぎりとの事です。二人は泣いて泣いて泣き死んでも、なほ泣き盡されない悲しさに泣き沈みました。

しら／＼とした曉の空氣の中に、なへた狩衣の肩寒う、悄然として白菊の間に隠れて行つた男の後姿は、永へに消えぬ悲哀を女の瞳に與へて、かくて此淺い短かい戀は終りました。が、結んだ縁は深かつたのか其時既に女は唯ならぬ體であつたのであります。



恥しい而して悲しい告白に女はたゞ涙です。母は呀とばかり胸を打たれて了つて、更けて行く灯の影に、

二人は何の言葉もありませんでした。

それにしても不思議なのは其靑年です。嚴重な貴族の邸宅の、忍び入るやうな隙は何處にも見出せないのに、なほさうして夜毎に通つたのが、如何にしても奇しさの極みです。周圍の人々はまるで雲霧の中に捲き込まれたやうな昏迷の境に心を漂すのでありました。が、不圖氣附くと、其靑年が内裏に徹さるゝと云つた其日こそは、父の中納言が勅命に依つて、庭中の最も秀でた菊を掘つて率た日でありました。而して夫れが嘗て生えて居た場所は、彼の哀別の曉に男がすうと消えるやう去つて行つた所と同一であつたのであります。



女の熱い愛と美くしい姿とが、非情の草にまで働いたのでありましやう。麗はしい話ではありませんか。

## 片戀

元文の頃のことです。陸中の或る武士の家に召仕の中に一人の若い男がありました。

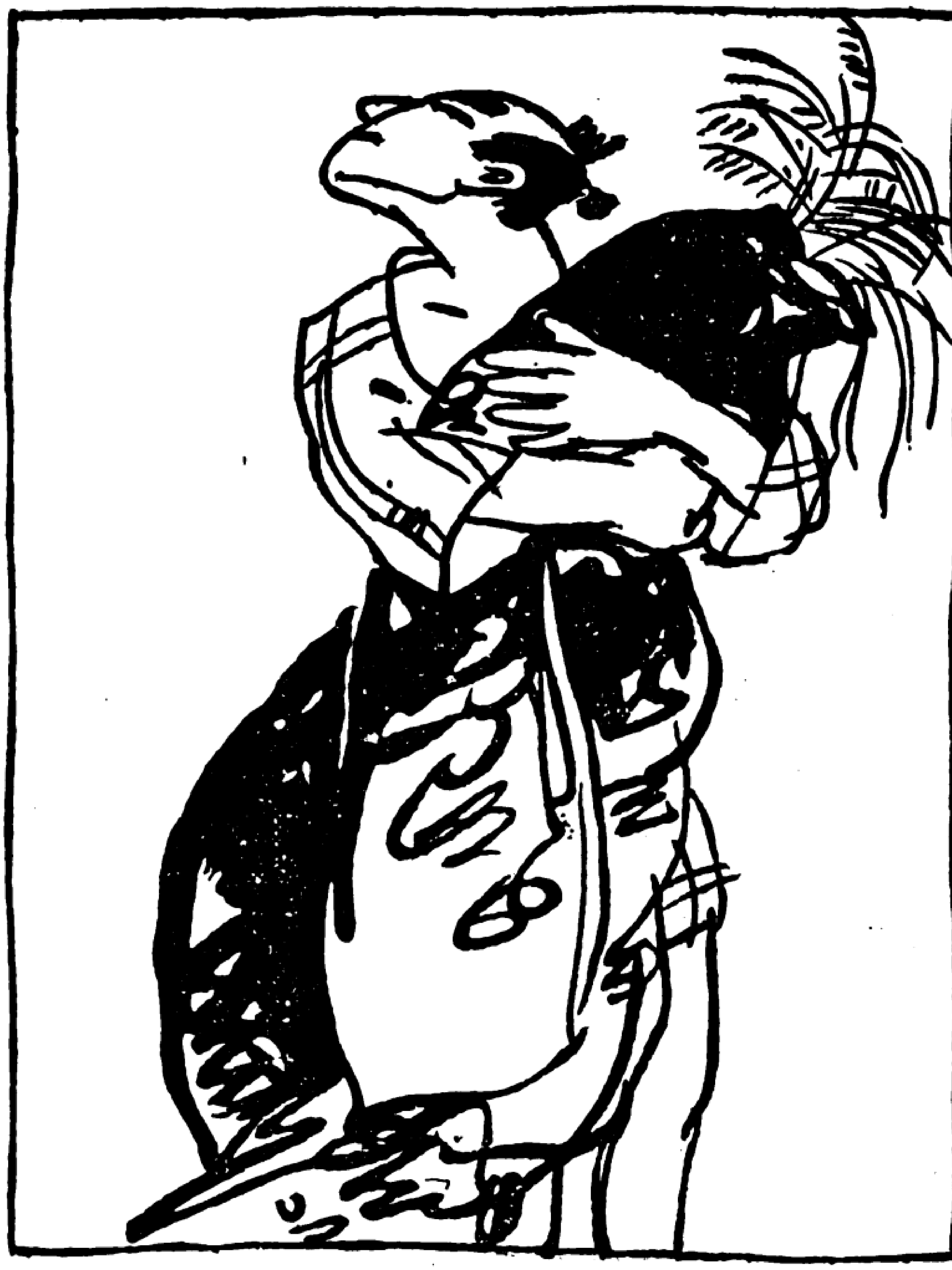
不圖、主の愛孃の眩ゆいばかり美くしい姿を垣間見てから、激しい戀に陷つて、寢ても覺めても想ひは其事ばかり、片戀の切なさに身も心も碎け果てるばかりでありました。

或る時、もう如何にも堪へ切れなくなつて、少しの機會が有つたのを幸ひ、綿々の嘆きを剛らぬ筆に寄せて、そつと懐しい人の振りの袂に忍ばせました。

が、それが不幸にも事の破れの始め、入れられた文は、未だ其人にそれと氣附かれぬ中、何時しか滑かな紅の絹を滑り落ちて、而してそれが運惡しくも嚴格な主人の手に拾はれたのです。

主人の立腹は云ふまでもありません。直ちに男は其家を追はれました。

けれど阻まれてなほ激するは湧き返る戀の奔湍の常で、居るに家なく食ふに食なき身の上ながら、念ひはなほ愈〻募るばかり、城下はづれの野の中にささやかな小屋掛して、里の人等の情に其日々々を送つて居りましたが、果てには終に氣も狂はしくなつて了ひました。



遂げ得ぬ戀の慘めさを、情の深い里人逹は袖手して見過すに堪へられませんでした。合議の上いとせめて何なりとも一品、彼女の所持品を請ひ得て渠を慰めやう、と夫れを武士の家に云ひ入れました。軈て一襲の華やかな女の衣は男に齎されました。男は跳り上りました。直ちに四邊から薄などを取つて來て、女の形らしいものを作り、それに其衣を被せて日と云はず夜と云はず抱き締

めく〳〵、軟かい絹の快い手觸りと、紅の色の甘い刺戟と、而して艶めかしい女の匂ひとに耽溺し續けるのでありました。が、其中終にさうして固く固く、哀れな戀の對象の假りの形を抱いたまゝ、眠るやうに息絶えて了つたさうであります。

## 石の枕



月影が草から草に出入つたと云ふ武藏野の昔のことです。

うねく〳〵と長う走る奥州街道の、丁度今の淺草邊に一軒の佗しい家がありました。して、一人の少女が往き來の旅人に一椀の茶を鬻いで居りました。

青々と苔が蒸した板庇のほの暗い陰に、女の顔はくつきりと白う浮いて見えるのでした。其處に遠い行手

の旅路も忘れて、四邊の穂に迫る夕の色を顧みぬ若い旅人も尠くはありませんでした。

が、女の瞳には何時も物倦げな、光を憚るやうな惱ましい陰影が漂つて居ました。戰慄すべき痛ましい罪惡は、此暗い庇の下に行はれたのであります。

彼女の二親は極惡非道な人で、己が手に咲いた花を利用して、其香に眠る蝶の翅を一つ殘さず捩ぎ取らさずには濟さないのでした。夕々、娘に解かせる旅人の草鞋の、假りの情は固い冷たい石の枕の下に交はされるので、魔のやうな老父老母は、其春の夢の濃やかな頃を突然驀入して、旅人の頭を碎き所持の財寶を掠めるのを例としたのであります。

女はどんなにか深く其淺ましい怖ろしい罪を嘆いた事でせう。もとより死を決して諫めた事も一再ではありませんでした。が、貪亂な老人達の心は如何にしても矢張貪亂でした。氣の弱い柔順な女は、たゞぢつと眼を閉ぢて、其夜〳〵の鮮血の香に戰慄を續けて行くの外はありませんでした。

ところが或日、此怖ろしい網にかゝつたのは、未だ年も若い而して花のやうな男、獲物よりも先づ囮の方が恍惚として了つて、女はどうしても其美くしい姿に血を見るに堪へ得ませんでした。

併し、と云つてそれをあの一度見入つた父母の、毒蛇の眼から奪ひ返すことがどうして出來ませう。とつおいつ、小さい胸は旋風のやうに亂れるのでありましたが、終に初戀の純な力は痛ましくもある最後の覺悟に彼女を送りました。憫しい女は窃に事の次第を男に漏らして宵闇の脊戸から逃れしめ、其身はそつと男の位置の毎時の場所に横はらしたのであります。

軈て夜はだん〳〵と罪に向つて更けました。頃を計つてむつくと立ち上つたのは惡鬼夫妻。もとより渠等は娘のさうした計ひなど夢にも知りません。矢庭に毎夜の部屋に跳り入りました。……あつと玉切る女の聲

有繋の夫婦も此犧牲にはひどく胸を打たれて、其後は眞の人間となつたさうであります。

# 文展のうはさ
# 美人畫の評判記

うづまき

電車を輕るく乘り捨てゝ、あの傾斜を自然と前のめりに上野の臺に上つて行く氣持は、恰で銀の斧を引つ提げて美しい森の中へでも分け入るといふ、希臘の古い神話にでもありさうな氣持だ、心がドキ〳〵と彈んだり、ロイツと沈んだり、昨年目についた繪がひよい〳〵と頭の中に浮んだり、もう他愛もなく度を失つてゐる。

拓殖博覽會の方で音樂隊の音が遙かに傳つて來る。見下した不忍池が、空氣の加減か莫迦に手近に見えて、蓮の枯葉が未だ根を失なはず、池一杯にうづまつて、風が吹かばカラ〳〵と鳴りさうである。精養軒の前には二頭立の馬車が二輛止つて、温和しい馬の、白い髭に秋の日が當つてゐた。

「文部省美術展覽會」と云ふ去年も、おとゝしも使つた古看板が、イカめしくぶら下つてゐる、會場の前には自動車が横づけにしてあるゴム輪が市を成してゐる、群集は蟻のやうにうごめいてゐる、成ほどこれでは客止になるのも尤だ。人波を押分〳〵して切符を買つて這入ると新しい麻裏の赤い鼻緒が、印地打のやうに散つてゐる。これから美人畫を見立てやうとする自分には、如何にも相應しいと、おもつた、……取つつきが第一部(日本畫)の第一科。同じ美人畫でも、日本畫の方だと何だかいた〳〵しい花嫁でも訪れるやうな氣がするが、こゝから油繪だとなると、何だかウツカリ飛び込めないやうな氣がする今にも新時代の女子が四方の壁から攻め寄せて來さうな氣がして、臆病な男には少々安心が出來ない。

## ▲秋の夜(中山秋湖)

一曲りした、餘程奥になつた所に、はじめて現はれたのがこの繪だ。美しい元祿の女二人の、一人は俯向いて本を讀み、一人は膝を恰好よくくづして淺い物思ひに耽つてゐるといふ圖柄である。丸形の朱骨行燈にポツと火が入つてゐるので、さては夜だなと始めて合點の行くくらゐ、明るい繪である。まさか秋と云ふ說明を附物の模樣でした譯ではあるまいが、座つた方の女の肩から掛けて、おつかぶせに桐の葉の模樣を描いたのは、一寸氣持が好かつた。俯向いた方の女の模樣は狐忠信が旅て出さうな車紋で、これは感心しない。

何しろ劈頭第一の美人畫なので、大分人群りがしてゐた。

「これは元祿の遊女なのね」

「さうね? だけど、あの時分は處女だつて皆んなこんな風なしてゐたんぢやないんでせうか。」

こんな事を云つた女連れがあつた。

「オイ、座つた女の持つてるな扇だね、秋のうちわと捨てられてと云ふ

洒落かれ。」

こんな事を云ふ男の聲もした。

## ▲雪見の御幸　（大坪正義）

これは對幅の、手の緻密な繪だ。昔、白河院が大雪の朝、少しばかりの家臣を引き具して、突然小野皇大后の宮の許を訪づれると云ふ、いとも目出度き繪柄だ。雪は何處までも白く、朱欄は飽までも赤く、池の色は飽までも深碧で、其の際だつたところに、無量の調和がある……だがこれを美人畫の中に入れるのは少し無理の樣ではあるが、しかしズラリと並んだ宮女の殿居振りは、あでやかなもので、一人々々に離して見たら皆目覺めるばかりの美人だつたに違ひない。

## ▲花　（山本昇雲）

何んだか從妹にでもめぐり會つた樣な氣持がした。繪柄と云ひ、書き方と云ひ、色と云ひ、又スラリと立つた美人の顔せと云ひ、どうしても初對面ではなかつた。さう云へば金茶の繻の帶も、今迄どこかで見た事がある品だ。綺麗にすいた島田の艶、撫で肩の線もよく、振り袖の模樣は蘭といふ、どこまでも昇雲式を發揮したものである。しかし昇雲氏の畫く女は、東京でもなく、京都でもなく、やつぱり大阪の橋の上に立たせる女である。

## ▲桃の節句　（松村梅叟）

畫幅一杯に、眞つ赤な雛段を背景とした目も覺めるやうな繪だ。その赤い色に吸ひ取られて、此の室に這入つて來た女達れは忽ち此處へスーッと集まる。愛宕の段々のやうに高い雛壇には、未だ雛は並べてなく、對雛の一組だけがやつと場所を定めて、買つて來つかつてゐる。其の外のは未だ箱から出して貰へないでゐる。其の雛壇の前には、島田の美人と、桃割の少女と、未だ髮の結へない下髮の子供とが、いろ〳〵考案をめぐらしてゐるのだ。作者にはそんな考へは無かつたらうが、なんだか雛祭といふものを中心として、それに對する三つの異つた乙女心といふものを考へさせられる。そして私はその內で島田の女の心を一番淋しく思つた。

そんな事を考へてゐる側で、又柔しい下馬評が起つてゐる。

「島田の女の黒好みはいゝわれ、帶だつて澁いし……。」

「今年の流行柄れ……大正記念だわ。」

と皮肉を云つてゐた。

## ▲茶の香　（小西長廣）

茶園で姉樣かぶりの女が働いてゐるところで、即ち鄙には稀れなる美人といふのだらう。日本畫特有の淡い綠がザッとかゝつて、氣持のいゝ繪だ。始めから茶の香なんてしやくらすに、おとなしく茶園とか

なんとかした方が、却つて好かつたらうに……此處では下馬評を聞かぬ内さつさと逆行する。

## ▲宗右衛門町の夕（島成園女史）

宗右衛門町の夕べは、一見フレツシユな氣持の善い感じを與ふる繪だ圖面はいかにも不夜城に化せんとする一時前の靜かさを保つてゐる。目裏に染みるやうな黄昏の風が、音もなく流れて、チラチラと行燈に火が入つた。大阪役者の世話物に使ふ書割のやうな眞新しい表格子があつて、其の門口に二人の美しい中玉が、今お化粧したばかりの機嫌のいゝ顔を並べてゐる。同なじ姉妓さんの手に育つた妓でなくても、二人はきつと舞妓の中の一粒選りで、姉妓さんに玉の樣に可愛がられてゐるに違ひない。

『わたいかて、そりや苦勢おますのや……』などゝ云つて、如何にも苦勞者の樣な顔をするけれど、其の苦勞は、姉妓さんにお小言を食つた時か、厭な時踊らせられる位ひのものだつた。

かくて宗右衛門町の夕べは、だんだんと燈の光りが强くなつて行く丁度その繪の出來も、紙の新しい行燈に火の入つた樣に、淋しいけれど艶めかしい氣持がたゞよつてゐた。

## ▲ひともしごろ（池田蕉園女史）

これに評判の繪だ、出來のいゝ惡いではなく、只だなんとなく評判になつた繪だ。去年の鏡は淋しかつたが、こんどは六曲屛風一雙に元祿あたりの遊女屋の、門と二階とをべつたり裂き分けたもので、澤山の女が横になつたり、座つたり、立つたりしてゐる。

『松葉屋』とした暖簾のさがつた門先きでは、涼臺に美しい遊女が二人身をくつして、夕闇に馴染客の顔の浮くのを心あてに待つてゐるらしい。その馴染客の一人らしい小姓かと思はれる元服時の若衆は、手を取つて招き入れられてゐる。美しい男と美しい女のさゞめきにはかまはず、門の柳がなよなよと風に搖れてゐる……と云ふのだ。

二階の方は、眞つ直ぐには座にも堪えぬ、柔かい筋肉の女が數人、放埓な姿をして廓の夜に入るのを待つてゐる……と云ふのだ。

この女等の瞳には、少しの理性の影も許さなかつた。夢見る目、あこがれの目、そして繪の具の面にはやる瀬無い氣分がたゞよつてゐた。この氣分が此の繪の貴さである。衣服の模樣は、流石の女性だけあつて他人の及ばない緻密な意匠をほどこしてゐた。マダム蕉園の筆はさいはひにして鈍つてゐなかつた。

## ▲都の人（池田輝方）

奥樣の蕉園さんと、旦那の輝方さんとの間には、『板塀ざわ』（合田一峯氏）といふ繪を一枚へだてゝ、並んでゐる。トルコ帽を冠つた學生が連れに、

『アゝこれが有名な板塀ざわだれ…… イヤ板塀ざわが有名なのぢやな

い、間に水を注してゐるから有名になつたんだね……。』
『サン、新聞にも此の屏一重がきゝならぬ、なんて書いてゐたが、あんな事を書くのは餘まり好くないね。』

こんな會話が取り換された。

繪は、同じ六曲屏風一雙に、都の女連れが、野遊びかなんかで田舍道を通るのを、田舍の娘や爺さんが手を休めて見送つてゐる。眺望、或は輕い嫉みといふものを覗つた繪である、風俗は徳川時代で女の顔は燕園さんの筆とソックリだなどゝ大分八釜く茶々を入れる人があるが、私はさうとは思はなかつた、輝方氏の繪には意志が動き、燕園女史の繪には氣分が動いてゐる。

## ▲夏の夕（河崎蘭香女史）

浮世の塵に染まない童貞の乙女、濁つた情緒に囚はれない清淨無垢の女〟とは何人の眼にも疑はない。日本型の女が籐椅子に體をもたせ、束髮の少女がその側に立つてゐて、下には月見草が一杯に咲き亂れてゐる。さう云へは、此の女史の繪は、丁度この月見草のやうに淡い色の感じを持つてゐる。立つた方の女の顔は、あんまり特徴が利き過ぎた故か、何だか合の子の樣になつたが、椅子に倚つた方は蘭香さんの美人として恥かしからぬ容貌だ。再びいふ矢張り清淨無垢の乙女だ、情緒はまだ動いてゐない。

## ▲鶯（松村梅叟）

緣の端で、鶯に餌を與へる美人を畫いたものである。籠の小鳥の小さい魂と、それを愛づる美しい女の瞳とが、ひたと合つて、其處になんとも云へない穩かな、美しい氣心がたゞよつてゐる。輕ろく桃を置いた恰好が如何にもよく出來てゐる。女の不用意の時の自然の姿で、決して人前で風姿をつくる時の姿ではない、そこが何とも云へず。

## ▲お七（池田輝方）

火事の日のお七である、消防梯子の太い竹に白い手を掛けて、今登らうとしてゐる處の繪だ。スラリとした背丈の延びた初心々々しい姿はいいが、顔はあんまり現代式で、それに餘まり苦勞のあり過ぎる顔だ。モツト晴々とした、戀する顔でなくてはならぬ、自分の犯した罪を罪と思はぬいぢらしい顔でなくてはならぬ。

これは却つて燕園さんの方に畫かせたら却つて、さうした女の心がしみじみと味はれたかも知れない。

先づこれで日本畫の美人畫はザツと見盡した、サアこれからが大變だと、それでも滿々たる好奇心を抱きながら、暫らく彫刻室の長椅子に體を休めて鋭氣を養ふことゝした。

# 胸算用

まつむし

## △下戸の建てたる藏はない

萬年筆を枕頭へ轉がして時計を見る。まあ漸つと八時半。晝間何うしてか眠くて／＼堪らなかつたので、いつも日の暮れきらぬ内御寢なさる父樣の直ぐお後を追ふて、次の間の床中へは入つたが、餘り早過ぎて夜の長い事夥しい。

李白が一斗の酒ぢや無いが、夕食後濃くした一杯の紅茶が因をなして、晝間の眠氣は何處やらへそして其替りに此の百句を得た。其中から五十句選んで、先生へ御送りする樣に、起床て清書する。殘句は裂いて紙屑籠へ片付けて了ふ。

暗闇を探つて、そつと次の間から一本を抽いて來た、雜誌だつた。

繰つて行く中に、炭は何が良好かと云ふ題で、石釜と、土釜と、櫻炭との、目方代價、火力の持久等を比較して、何れが割に經濟だといふ事に結論してある。三種とも格段の相違は無いのだ。

恐れ入りました、世の中で私などは隨分暢氣坊だと自任して居たらば、まだ／＼斯樣な暢氣な事を研究して被居る御方も有るのだもの、時計と、火と、睨めつくらして居る御顏が眼に見える樣だ、と云つたら眞面目の人からは怒られるだらうけれど、馬鹿々々しい幾許炭の問題許り解決したつて、經濟の要は主として其の使用法如何に有るのぢや無いか。

彼の瓦斯を御覽なさい、毎日同じ樣に煮炊きして居ても、馴れた婢と、不馴れな婢とでは、計量器に非常な差違が生じて來る。だから炭其物の、僅少な値段の高下よりも、如何にして巧者に使用ふべきやを、各自注意した方が、著しく要點を捕へ得られる事になりは爲ないだらうか。

一體夫れに限らず總ての事に、恁うした方が經濟に

なるとか、否、彼したならとか、始終こせ〳〵と御重箱の隅を楊子でほじくる主義の人が、何れ程巧者に經濟をたてゝ行く事だらう

少し御見當違ひな諺だけれど、下戸の建てた藏は無い、と云ふ昔からの言葉が、ちやんと是にも當て塡まるから面白い。

## △家庭簿記より

### 胸算が大切

商賣や何かは、餘り大雜把な考へで行つたならば是は損をするかも知れ無い。然し十人足らずの定まつた家庭に、簿記のカードのなんのと一々記け込ま無いだつて



も、胸算用で大凡の緊め括りをつけて、細かい處は適宜に融通させて行けば、それで澤山。決して迷付きはし無い。若し夫れで臨時費が出たと云つて慌てる様ならば、其の胸算用がマイナスなのです。

さうした人が、必ず何何圓以内で暮しを立て様と爲るのなら、彼の世故に長けた某女史の考案に成る家計簿も可いでせう。然し、只毎日々々義務的に、何錢々々支出、何圓殘金と記入して行つた許りで、果して月末に希望通りの餘裕がつくや否やは覺束無い。

夫れはもう、家計簿其の者は、必ずよく整理のつく

樣に出來て居るに違ひ無いけれど、幾許よくても畢竟手段に過ぎ無い。根本は矢張精神なのだから、原因が薄弱で好い結果の得られよう筈が無い。今月は特別苦しいのだから、まあ是丈け超過にして置かうなんぞや一向效能は無い、其特別は兎角續出するから。

夫れでも先あ左樣したなりにも、豫算を立てゝ掛つて居る方は、縱それが實行出來ない迄も、兎に角精神の在處丈けは分つて居るから好いけれど、私の一番滑稽に思はれるのは、何不足の無い家でもつて、別に概略の豫算も無しに、要る、出金す、で、御構ひ無しにどし〳〵支出して居ながら、矢張面倒臭い、一々支出高を記けて居られる人の有る事だ。

大勢でそれ〳〵勝手に持ち出して費消ふ、と云ふのぢや無い、一人で元締めして居るのなら、別に不分明な出所の有る譯では無い、それでは、其帳簿を月末に調査て、支出の多少に依ては注意し樣……と云ふのでも無い、他日に出して見て照應しやう……と云ふのでもない。現金と帳簿とが少し位齟齬して居ても、一向にお構無い。只無意味に、死んだ子の年齡を數へるの愚を、敢て爲て被居る。然も此の御連中は、中流に最多く有る樣にお見受けする、矢張四十八癖の中の一癖でも有らう。私は平常此の事を考へる度に、彼の、金果累々たる柿の木の下に、矢立と帳面とを控へて、無數の果實を數へる眞似した人のお話を思ひ起す。然し此の方が遙に意義が有るのだ。

### △生活問題を噺すのは女の恥

以前から有るのか、それとも此一二年來漸く私の耳が其方面に開いて來たのか、無闇に生活問題の聲が高い。さも無くてさへ、兎角女は糠味噌臭くなり易いとして有る、さればこそ靑疊と共に輕く云ひ做されて居るのは、一概に男の移り氣から許りでも無い、女の眼からでも矢張そんな女は不愉快に見える。集合精神で、一層聲を大きく雷同させないで、超然として自家の整理丈けを立派に行つていく事は出來ないのでせうか。

悔々、こせ〳〵と、其麽考へに許り沒頭して居た日

には、長い浮世に短かい命つて、割に合やしない。實生活許りが生命ぢや無い、少しは心中に餘裕を殘して、美的方的へも生きたいものだ。

詩を作るより田を作れ、つて誰が那麼事を云つたのでせう。詩も作れ、田も作れつて、山彥の樣に反響したい。

全然詩から離れ去つて、現實にのみ齷齪して居る人は隨分多いけれど、幾ら空想的美の國に憧憬て居る人でも歌をパンの代用にして三度の御飯を全く忘れて平然として居る人は無い。幾程忘れ樣としても、何處々々迄も現實は執念く私達に膠着して居る。忘れ樣としてさへ其位だもの、況して最初から其方面へ許り突入して了つたら、夫れは隨分色彩の無い「生」だ。渦卷く浮世の荒浪に、只焦心つて、悶掻いて、游ぎ乍らも彼岸の灯も望み、天心の月にも眼を上げて見たい。然も無くちや怒濤の中を悠然と乘切る事は出來やしない。



△貧乏も程度問題

物質上にのみ生きて居る人は、一度逆境に陷ちたら最後、大抵悲觀して了ふ、ぶく〳〵と波に呑まれて了ふ。其うした時の救命袋は精神的生命に限る。如何なる場合にも北斗星が燦々と輝いて、希望の指針を與へられて居るのは此人達だから。

金満家に成るのも、或程度迄は好い。然し會計が澁面して控へて居て、自分の財産で有り乍ら、思ふ様な方面へ使用はれ無い様なお藏の番人なら、絶體に御免蒙る。

貧乏も或る程度迄はなつても好い。然し「一軒のつま木も焚きはてゝ、拾ふ木の葉の積もる間ぞ無き」程のは成る可く避けたい、でも是位はまだ好い。只、彼の棄兒行を叫ばしめた梅田雲濱に至つては、實に悲慘とも何とも云ひ様が無い。願はくば私の生涯に、是程の思ひ丈けは爲たく無いと、常に祈つて居る。

### △食ふと働らくといづれが先

今迄の廿二年は餘り平和に過ぎたから、是から些とは波風に吹かれても見たいと思ふ。穏かな沼には、兎角我が儘と云ふ濁りが生じる、從つて映つる月影はぼつかりと、猿も手を出しさうに眠つた様に浮く。

見よ！　大海原月夜の景色、爽立つ潮流は燦々と、金龍銀蛇を千里の波濤に躍らせて居る、是でも同じ月だらうか。

噫、活動！　厭やだ、厭やだ。沈滯した空氣！　濁つた水！！　躍る事よ、若き血潮の……。

だが世の中つて隨分矛盾して居る。食へ無い、食へ無い、とお米の値を呟き乍ら、一所懸命にパンの爲めに稼いで居る人が有るかと思へば、一方では或る事業を爲遂げたい許りに、一心に病軀へ滋養物を運び入れて、生を大切と勞つて居る人が有る。

一體、人間は食はふが爲めに生れて來てそれで稼ぐのか、働かうが爲めに生れて來てそれで食ふのか、何方が原因で何方が結果なのか、人生にはまだ青い私には、よく解釋がつかない、けれども何うやら後者の方に意義が有りさうだ。彼奴は食へないと云はれる人程よく食ふ道を心得て居るのもをかしい。

噫、漸つと時計が十時半を打つた。散らした本を片附けにかゝると、四邊で鳴いてた蟲の音がはたと止まる、暫らくすると又鳴き出す、好い聲！　名は知らない蟲だけれど。

# 近代的な婚禮式

永島藤三郎

## △古代の婚禮式

私は一小商人で何の素養もありませんが、結納品や婚禮の儀式に必要な品を商つて居ますので自然御得意の方々から結婚の儀式について樣々の御尋ねがあり、この度毎に私がこれまで見聞したことや、家に言ひ傳へたことをお話し申上て居ましたが、式の起りや理窟も解らずに、無意味なことを御話しするのは間違つて居ると考へまして、作法の各大家について不審を正し尙その道の學者方にも一通りの由來を伺つて見ました。一體我國古代の婚禮式は餘程よく整うて居つたもの見えまして、或學者が見出された極古い婚禮式の書物の中に載つて居る神前の奉告文なぞを見ますと、萬世に通じた眞義が籠つて居るやうに思はれます。その中から拔萃した花嫁の奉告文は、

愼しみ敬ひ畏みて、吾遠の祖、近き御宗の大前に告奉る、聽しめせ。(己の名を入れる) 淺からぬ緣由を以て、今日と謂ふ芽出度日から定め合、結婚の式を擧げ、夫と仰ぎて此家の貴き妻となり侍る、かゝる緣由の身なりせば、今日より吾身祖宗の家の御末の身となりて、女子の道を守りとげ、夫の敎へに隨がひて千代も八千代も變りなく、勉め勵みて祖宗の遺し玉ひし家產を多に豐かに彌增て、夫の勳の彌高く、人に敬い尊とまれ、榮盛りて善男子擧て御祖の大前に捧げ奉らんことを我祖宗の大前に確く誓ひて破らまし、悅こび給ひ聽し召せと某謹んで申す。

先づかやうなものでございます。文中故更に善男子を擧てとあつて唯男兒ばかりを重じたところは近世に不適當でせうが、大體に於て祖宗を尊び、夫を尊敬する中に夫を愛し、又自己の位置を重ずる意味が、遺憾なく發揮されて文明の今日に適用して缺るところはないやうに思はれます。

### △三々九度の起り

古代の結婚式の中には、花婿が花嫁を玄關に迎へて花を取交はす交花式と申すのがありますが、これらも指環の取交せと似て居て、一層高尚なやうに思はれます。又花嫁と花婿が神前で夫婦の誓を定めるしるしとして神前に具へた酒を啜り合ふこともあつたので、これが彼三々九度の起りと申すことですが、後世次第に神前の誓ひと云ふ事は忘れられて唯三々九度たけが重んじられるやうになり、尚花嫁花婿が先祖の靈前に禮拜奉告する、崇嚴な式も追々省かれてまゐつたやうです。

### △禮式の復活

我國古代の結婚式は、かやうによく整うて居ましたが、中古大に衰ろへ、徳川氏が天下を統一するに至つて鎌倉幕府の遺式によつて再び嚴かなものを定めました。小笠原流なぞはその頃專ら行はれたのでありますが、儀式が煩雜で費用が嵩むために、一般の民間に行はれ難く、且維新後文物の大改革と共に婚禮式も一時虚飾として顧みられぬ傾となりました。併し文明の度が進むに從がひ、禮讓の重んずべきことを自覺し、追々復活の勢を呈してまゐつたのは結構なことでございます。但惜いことには、折角復活した結婚式も費用と時間のかゝるために上下に通じて行はれにくいのでありますから、不肖を顧みず樣々の研究と工夫を凝らし、神聖な古式を基礎として簡易な式を撰らび、極近代的なものを考案いたし永島婚禮會と名けて發表しましたところ諸新聞雜誌を始め、諸賢の高評を得まして、追々社會各般の家庭に歡迎されるやうになりましたのは誠に光榮の至りと悦んで居ります。左にその式の主要な點を掲げますと、

式場には伊弉諾尊、伊弉冊尊、產土大神を祭り、新郎新婦は神前に於て夫婦の約束を爲す事、神前の式を終りて祖先に奉告する事でありますが、その次第の概略は、

修祓、降神式、獻饌、神官祝詞奉讀、媒酌人誓詞奉讀夫婦盃、昇神式、祖先に對する奉告、親族盃と云ふやうな順序に定めてございます。尙床飾り、祭具及び儀式に關する諸器具は當會より一切御貸し申上、神官を始め酌人、給仕、介添までも出張して儀式に關する凡てのことを取扱かひますが右一切の費用は七圓以上三十五圓まで五種の階級に分けて御依頼に應ずるのであります。



△煩雜な古例には拘泥せず

この婚禮會では、神前と祖先の前に奉告誓約する古式の尊い意味は充分に執りますが枝葉に渉る煩はしい式には餘り拘泥いたしません、譬ば銚子を飾る女蝶男蝶なぞも禮式の專門家の中に大分異論があつて、長柄は男性で偏提が女性であると云ふ說と偏提の方が男性だと云ふ說とあつて、何れも一の理論がありますし、又た酒のつぎ方は左の口

から酒を出せば、陰に始まつて、三獻目の陰に收まるから、之れが自然の理法だと云ふ說もあり、左の口は水盃の場合にのみ用ゆると云ふ說もありまして、こんな事の意味を一度探究すれば、殆んど際限がなくなりますから、これらは各御家庭のお望に任せ、私方では只或一定の式を設けてあるばかりです。尙酌人は平素十二三歲位の少女を仕こんで置き、白衣に緋の袴の服裝で侍することにしてあります。

## △依賴された家庭の種類

この結婚式は明治四十三年の紀元節に永島結婚會と稱して披露いたしたのですが、その以前から少しづゝ取扱つて居ました。その數は、四十二年に拾組四十三年に五十四組、四十四年に九拾五組で、平均三、四五の三ケ月と十、十一、十二の三ケ月が一番多うございました。尙結婚者の職業別は、各方面に渡つて居ますが軍人、官吏、會社員、醫師等が尤も多く其中軍人が一番多數を占て居ました。

## △樣々の家風に應用が出來る

この婚禮式は、日本間でなければ不適當かと云ふに決して左樣ではありません。西洋間であれば、式場の裝飾、祭具の備へつけ等を、凡て立禮に適するやうにいたしますから少しも差支へないのみならず。新郞新婦の禮拜の酌人の進退等は却つてこの立禮の方が都合がよい位です。これまで軍人方からの依賴が多かつたので度々水交社で取扱ひましたが、餘程工合が宜しうございました。基督敎の家庭で取扱ひました時には、牧師の說敎がすんだ後にこの結婚式を行ひましたが、別に調和を缺くやうなことはありませんでした。

## △黃道吉日

御依賴者からよく黃道吉日の御尋ねがありますが、私の考へでは曆を調べるより、實際相方の御都合の良い日を撰ぶのが一番で、特に花嫁の生理的に差障りのない時を考へることも一要件ですから、曆の上の吉

日にばかり拘泥しないで、萬事都合のいゝ日を吉日とした方が善いと思ひます。

### △時間は正確に守られたし

前申上る通り、この婚禮會は、神前誓約を主旨といたし枝葉の式は、その土地の風習や家風に應じて臨機便宜な取扱ひをいたすのですから、豫め御相談下されば、御希望に應じた取計らひをいたします。但し依賴者方に望みますのは時間を正しく守つて頂きたいことで、舊來の習慣のやうに、花嫁の着が一時間も二時間も後れますと、凡ての準備に手違ひを生じ、自然神嚴な意を失ふこともあり、且同日に他家の結婚式がある場合なぞ、その御家の迷惑も一通りでありませんからこの點は自他のために深く御注意を願ひたいのであります。（麻布飯倉片町十七、永島婚禮會）

## 感冒の豫防

体質が強健でさへあらば凡ての病魔に對して容易く侵されなくなる、皮膚や粘膜の抵抗力が強くさへあれば、寒風に吹き曝されても雨露に濡れても、感冒などに冒されるものではない、此が爲めには滋養ある食物を取り、便通を規則正しくして營養を高め、適度の運動を勵行して體力を強大にせねばならぬ、皮膚に對しては冷水摩擦もよし、冷水浴は一層結構である、常に口中を清潔にして含嗽を怠らず、冷水を鼻孔や口腔に通ずる事なども最もよろしい、然し如何に良いと云ふたとて慣れない事を虛弱な身體でありながら、無鐵砲に始めてはならぬ、此寒空に初めて冷水に飛び込んで御覽なさい、それこそ忽ち感冒にとりつかれますから、漸を追ふて始めねばならぬが若し感冒を引いたら身體を温め汗をとり熱をさますのであるが、身體を温めるには外からばかりでなく、熱い飲料で内からも温めた方がよい、葛根湯も振り出しも砂糖湯や葛根湯も此が爲めには結構だ、之には發汗劑としてアンチピリンかアスピリンの頓服を併用すれば猶更よろしい、日頃強い人で感冒も單簡な輕症のものならば斯うして一二夜も温まれば拭ふた樣に治る、併し虛弱な人や又單純な感冒でない時はこんな事では治らぬから早く醫師にかゝつて治療の時期が遲れぬやうにせねばならぬ（及能醫學士談）

# 暴動遭難記

支那福州　内山小久子

去年の秋、私は南京に居つてゆくりなくも東亞の大事件なる革命戰をまのあたり見る事の出來たのは女としては幸福の次第であると思ふ。一ケ年の月日は瞬く間に經つて、早や去年の今頃はと追懷止むなきの時となつた、甘つたるい戀に憧れ給ふ母國の若き人々に、開戰初日の私の日記を紹介したい。

### △二條の火焰

十一月八日午前四時頃フト物音に眼をさますと、何やらベランダーで人の話聲がする、昨夜二時過ぎまで仕事をしてグッスリと疲れてゐる主人を起して、二階へ上つて見ると早や皆さんが集まつて御出でになる、遙か一里許り東方に二條の火焰が天を焦す許りに立ち上つてゐる、火事は毎夜の事故珍らしくもないが、まだ明けやらぬ暗の空に明星のみ輝けるあたり、風がないから火柱の樣に濛々と立つ炎は、唯の火事ではあるまい、十一月と云へばもう大分に寒い、「何處でせう、例の火事でせうか知ら」とブル／＼寒さに顫へ乍らヂッと見てゐる主人は『ねー〇〇君どうも滿洲街か總督衙門附近じやないかと思ふ、ソレだとすると或は燒打ちかも知れない、然しあんまり靜かだからなあ』と兩手を耳にあてゝ銃聲の一つだもを聞かふとしてゐる、不穩の噂が傳はつて以來一ケ月餘にもなる、事實燒打ちが始まつたとしても自分は少しも恐いとも思はない箏ろ何やら恐いもの見たい樣の氣がする、火事は一時間許りで止んでしまつた『何んだ矢放火かな、近頃は消手がないから放火と强盜はやり放題だ』と皆なつまらなさゝうに各々の室に歸る。

### △遙かに鬨の聲

其から一時間あまりトロ／＼としたと思ふと、俄かに事務所の方が騷がしくなる、シキリに電話が鳴る、サア何か始まつたかと思ふて見ると主人の影はない、此頃主人は着のみ着のまゝで寢るから何時飛び出すか

解りはしない、眠むさうな眼を擦り〳〵ボーイが入つてくる、尋ねて見ると、主人は總督衙門附近に住んで居る默山先生から「今總督衙門附近に盛んに銃聲が聞へます」と云ふ電話を受取るや否や、自轉車で觀に行つたさうな、近頃暴動熱にうかされてメッタに室に居た事がない、二階から耳をすますと遙かにワー〳〵と



二度許り鬨の聲が聞える、其内に各方面からの情報によつて「今朝午前六時に革命軍の決死隊二百餘名は、總督府を燒打しやうとしたが、官軍に發見せられて七十名許りは捕虜となつて直に斬首せられた、決死隊の殘兵は南門外に逃れて新軍に投じた、城外の新軍二萬餘は革命軍となつて南京總攻擊をする由

△殺氣滿々

總督衙門方面からワイ〳〵と支那人が逃げてくる、人力車や馬車が幾輛となく續く、時々騎馬の官軍が黃い旗を立つて進んで行く、然し銃聲も絶えて極めて靜

かに唯道路に犇く人の往來が忙しい、折角避難して來た支那人も頼みに思ふ揚子江岸に面した北方の城門を閉ぢられたので、袋の鼠の樣に行く所なく、右に逃げ左に漂ふてをる、しかしまだ戰爭と云ふ戰爭の始まつたのではなく、唯革命軍は城外二里許りの所に集中して、機を見て城内の官軍と火蓋を切らうと兩軍共作戰計畫中なのだ、其故何時何處の方面に彈丸が落ちてくるかも知れない、況んや白い布を纏ふてをる者は一言の訊問もせずにドシ〳〵殺戮してしまふ、張勳の門前には早や三百人の死人が山を築いてあると傳へらる。

△籠城生活

領事館の命令で、其日の夕方までに日本人全部は領事館に參集した、手まはりの道具を持つて、家を釘付けにして引揚げて來た總數百數十名、女も二十四五名あつた、官軍は外國人に就いては特別の保護を加へて、微疵一つだに負はせまいとしてをる、町の四辻には首のない死體が殆んど懲戒的に梟首してある、黑い羅紗の洋服に中華民軍と金字で書いた大黑帽、左腕に纏ふた白布は、血潮の紅に染まつてをる凡てが二十歳前後の若い男であつたらう、女の身のあられもなく、一生見る事が出來ないと人に勸められて殺戮の跡を見に行つたが、さすがに薄氣味惡く、夕飯の時思ひ出して嘔吐さうにもなつた位だが、異國の人のせいか可愛さうと云ふ同情の念よりも、殘酷な事をする官軍だと思つた、丁度子供の殺した蛇を見た時の樣に……、其晩百數十名の日本人が一夜作りの竈で、男も女も立食ひするの已むなき運命となつた、少さな部屋に數十人の人が折に入つた鮓の樣になつて寢なければならなかつた然し若し彈丸にあたつて死ぬやうなことになれば百數十名の殉死者があると思へば又た氣強くも思はれた、

△夜半の觀戰

其日の午後八時頃から、革命軍は南門外雨花臺方面に攻撃の開始した、夜陰に乘じて城内に突入せんとするのである。私等は二階に上つて觀戰する事が出來た、丁度直經一里半許りを距つた雨花臺砲臺から發する大小の砲火が、電光の樣に閃くと十五六秒經てからドー

ンと耳に響く、一體夜戰に大砲等を打つのは、支那人だけださうだけれども、戰爭は豫想程見榮へのするものではなかつた。其中に砲聲が追々烈しくなると思ふと、やがてパチ／＼ガラ／＼と爆竹の樣な音がする、それが所謂機關砲だと云ふ事で、革命軍が砲臺に肉迫した事が解る。機關砲の音は數分間で止んだ、此數分間に幾人の人が死んだであらうと思ふと、ブル／＼と身ぶるひがした、やがて夜は再び靜寂に歸して、五分間每に發射する山砲の音がコン／＼と板を打つ樣に響く、勝ち誇つた革命軍は、一齊に雨花臺砲臺に肉迫したが、計らずも數門の機關砲の爲めに箒で地を掃く樣にパラ／＼と倒れてしまつた、遠くは吳の孫權の都となり、近くは明の舊都たる南京城、容易くは陷落もせまいと思はれた。折から南朝四百八十寺は霧に包まれて、寒さは一段と募る。私はトン／＼と階段を下りて室にかへつた

＊　＊　＊　＊　＊

其日から約三週間十二月二日南京陷落の時まで革命軍は城外を取卷いてをつた。私等女共に十一月の十三日に、一方の血路を開いて城外に出で、獅子山砲臺の下を通つて上海に逃れてそれから日本へ歸つたのである。

## 一夫百妻

今より千二百年前頃迄は、アラビア邊では、一夫百妻が認められて居たが此時に當て忽然として現はれたのがマホメツトで、彼は一人の男が百に近い女に圍繞されて歡樂の裡に惑溺して居る狀を沁々と哀れに思つた。そこで之が救濟策として

彼は一夫四妻主義を唱した。其の條件は斯うである。「四人の女に各同量の愛を注ぐにあらざれば許るす、又一に娶つた妻が病身で兒を擧ぐることが出來ぬ時初めて第二を許す、以下第四妻までは許すが、其時尙は兒を儲け能はざれば、是れ男子の虛弱なるに原由すとして、再び第五を許さない」マホメツトが一夫一妻にせず、殊更に四妻にしたのは、當時遙かに一夫一妻の行はるべくもなきを看取したからであらう。之について面白い話がある。昔或る一人の男が一人の女を愛した。彼は美しい指環を彼女に握らせて、「誰にも見せるな」と固く契つた。間もなく又他の一人と相愛に陷り、彼は再び「誰にも見せるな」と第二の同じ指環を與へた。そして彼は二女を一堂に集めて、「我は我の指環を持つ人を愛す」と空嘯いて居たと云ふ。

# 從妹の許へ

露艸

漸う凌ぎよい時候となりましたわね、ホロ〳〵と蟋蟀の鳴く夕べなど、肌觸りのよい、モスの浴衣一枚では冷々する位ですもの——ほんとによい時候に成りましたわね、叔父樣は、不相變御壯健？正夫ちやん、英子ちやん、嘸、可愛く御成長で、貞雄樣の御機嫌もさこそでせうね？あなたも其後御變りはなくて？げに遠ざかれば、疎しとやら——でもまあ私は、着任當座の雜事で、遂、心ならぬ御無沙汰をしたとしても、あなたは不相變の、筆無精ネ。エ、子供が殖えて用が澤山あるッて？ホツホヽヽ喜美さん！そんな申譯は相手によりけりでね、御同樣二人の母の私にはちつとも效果は無くてよ。しかも、あなたは、あの子供好な叔父樣も在らつしやれば女中だつて、宅より二人も多いぢやありませんか。そんな意氣地の無いお言譯はやめて、稀にはこの淋しい田舍住居の身に華かな、都の便りでも聞かせて頂戴よ、不相變御化粧に是日も足らずつてんじやなくて？否、全くネ綺麗な方ほど、人一倍のおめかしを爲たいものとは、整然と定つた事ですもの——それに就てネ、御反省までに近處の奥樣の御平常の一端を申上て見ませうか。御年齡は奥樣ざかりと云ふ二十六で五ッになる御孃さまが御一人、奥樣の御美しいのは無論の事。旦那樣と女中一人とで都合四人のごく呑氣な御生活。お孃さまは連日宅の前の長屋で男の子と一處になつて廣くも無い家の中で、鬼ごつこをする、繩とびをする、太鼓を叩く、笛をふく、いや、もう大變なさわぎ。お晝時分になると、肥えて〳〵着物の前も合はぬ樣な女中が、「お孃樣御飯で御座ますから御歸り遊ばせ、御母樣が御呼びで御座ますよ。」などゝ殊勝氣におむかへ申し上げても、お孃さま一かな御聞き入れなく、其家でも始めの程は、何はなくとも、坊と一所に召しあがれなどゝ御愛嬌を申て居た樣でしたが、毎日の事、それも續かず、近頃は其家の主婦さん

が、子供共々お孃さまを御宅まで御送りしては漸くお暇を戴くと云ふ始末。無論男の子と一處に、成つての御動作ゆゑ。お召物も汗と泥とで、白い處は鼠色、袖口や袖付は、綻の絶間なし。お頭と云へば『もうそろそろ延ばさうと思ひまして……』と云ふ奥樣のお心組から、前も後も、延び放題にのばしたのをさすがに、前はセルロイドの護謨櫛で、あげて居らつしやるのですけれど、御母樣に、御似ました澤山なお髮の、且はそんな亂暴なお子樣ですもの、どうして、櫛がちつとして居ませう。バサバサと目の上のあたり、まるで角力のまわしの樣。之に反して奥樣といへば、天の爲せる麗質に朝な夕なのおたしなみの程も思ひやらるゝ美しきお姿を、通りに面した格子窓に、御見受けする事凡そ日に何十編。抑々其御住居たる當地にても屈指の人通り繁き賑はしき橋の渡り詰めの事ゆゑ、往き來るさの人々が、三伏の暑氣將に堪へ難き頃も、此窓に、此美しき夫人を見ては、まあ綺麗な奥樣が、と、思はずも少しは暑さも薄らぎ汗も一時は引こまむ程の美しの君に、在はすものを、朝は、疾くより起き出で給ひ演習よ射撃よと野外に、汗ばみ玉ふ背の君が、夕べ家路に急ぎ給ふの時、橋の彼方に、其美しき俤を見給ふ時の御心……、さすがに、勞れ切つた、御足の運びも知らず知らず、早まるでせうよ、軍隊には度々ある樣に見受けらるゝ、早朝よりの演習の時など、此旦那樣、寢坊な女中の不都合より御飯もまにあはず、近處の菓子屋に賣れ殘りのパンを求めて、匆々とお出ましの後、女中は、御臺所も一通りかたづき、風呂場の隅に山をなしたお洗濯物も漸と、洗ひ終へた頃、奥樣は雨戸隙間もる朝日の、絶えがたくてか、やをら、起き出で給ひ、御髮あげお手水、お化粧、御召替へと、却々に短かゝらぬ時を經て、扨朝の御食事と云ふのはもう、九時過、――エヽ、夏の最中でも――この奥樣常に仰せのたまはく、『どうも夏になると、ぐツと體に障りまして、食事なども一こう進まずこの通り瘦せてしまひますの。』おゝ御尤もさま、汗かきの私などもう、そろそろ、手拭を冷水に浸して、汗をふき始める頃ですもの、

どうして、美味しく、召し食れる筈も無いじや有りませんか。朝のお食事に準じて、凡てが此通り、宅の夕餉の時、たまが一郎を背負して、裏で遊でる時に、漸く、例の肥つた女中が御夕食の材料を近き魚屋に求めに行くのですつて‥‥。田舍の事ですもの、もはや賣切れて何も無い時も度々有る樣子、そんな時にはまあ、如何遊ばすのでせう？奧樣の御手腕のほど、知るよしも無く、陰ながら餘計な氣をもんで居りますの。ネ、隨分おだらの方でせう。旦那樣だつて、もう彼是分別盛といふ四十にも手のとゞく方ですもの。この奧樣のふしだらが御目にとまらぬ筈はないのですけれど、ホラ其處が美しい奧樣が〇〇を下に敷島の道とでもわきまへて御出でなのか。それとも旦那樣が奧樣の美しさに、只もう譯も無くとろけ込でおしまひ遊したのか。其邊一寸計り兼ねますが、何れにもせよ、美しい奧樣に基因して居ると思ふと、夫人の美しい家庭は、何だか危いものだと思はれますの‥‥。尤もあなたには經驗に富だ、しかも嚴格な叔父樣も在らつしやるし、又赤門に其人有りと知られた秀才の貞雄樣も在らつしやるけれど、叔父樣には可愛い〳〵一人娘だし、貞樣には、いとしの〳〵、しかも小石川一と迄謳はれた大切な戀女房ですもの――萬一の事もやと、御參考までに一寸棚下しをしましたの。呉々も御自重遊ばせよ。乍末叔父樣はじめ貞樣にも宜しく。なほ時候から折角御身御大切にネ。一郎も近頃は盛にあるき出しましてよ、其中皆の寫眞を御送りしますわ。

さよなら

露草より

きみ子樣



# 薄倖の人
## 乃木大將夫人

冬湖學人

筆者冬湖氏は自ら乃木大將の近親なりと稱し、平素其知る處ろを記して寄す高潔なる偉人の家庭に潛める一面の眞相を窺ふに足るべきをおもふてこゝに掲載す。

兎角の批評をするものはあつても、それは何れの場合にも能くあることで、敢て取るに足らぬ。冷血漢が何と云つても、乃木大將の最後は實に立派なものであつた。壯烈鬼神を泣かしむとは應にかう云ふ行爲を云ふのであらう。稀代の傑人、絶世の英漢、敬愛すべき軍神である。而も其の死は實に意味深長なるものである。

大將を追慕するものは、より大なる同情を以つて大將夫人の殉死に對する。九月十八日を以つて青山原頭に擧行された葬儀の際に、沿道に堵列した群集の中に婦人連の多かつたことは、前代未聞であつた。ソシテ崇敬の念を以つて砲車に運ばるゝ將軍の靈柩を送つた十五萬人士が續く靜子夫人の靈柩を迎へては、もう熱い涙の流るゝを禁ずることが出來なかつた。多くの婦人達が忍び音に咽び入つたのも無理ではない、この群集の涙は、軈て貞操古今に冠絶せる靜子夫人に捧ぐる貴きプレゼントであつた。

あゝ其の涙！　或は夫人の薄倖に泣く涙もあつたらう、又壯烈なる最後を讃美する涙もあつたらう。今日に於いて靜子夫人の五十四年の生涯を顧れば、奮鬪の歴史であつた。多忙と苦心の結晶であつた。更に薄倖の記錄でもあつた。思へば靜子夫人は一寸の休息も得ず、幸福の甘き眞味を快く吸ふタイムなくして黄泉の客となつたのである。

靜子夫人が其の良人に殉じて自ら刃に伏したと云ふことは、眞に貞女の鑑である、絶對の讃美を受くべきものであるが、乃木夫人が家庭の人としての三十五年間と云ふものは、放蕩に耽る良人に仕へた、火焰の如

き不平ある良人に仕へた、鐵石の如き嚴格なる主人に仕へた。ソレデ一點の非難を受けなかつた許りでなく更に年少くして乃木家に入つた靜子夫人は放縱にして殿烈なる姑に仕へても亦實に立派なる嫁であつたのである。

靜子夫人が乃木家に嫁がれたのは、花恥しきその二十の頃であつた。その當時には乃木大將は殆んど今日よりして想像し得られないやうな生活をしてをられた。全く別人の如き行動を擅にしてをられた。その良人に仕へるさへ世慣れぬ年少い夫人には重い／＼任務であつた上に、その頃には未だなか／＼元氣のいゝ若い姑、即ち乃木大將の生母が存命してをられたのである。

私は思ふ、今日私共が乃木大將を追慕するの情は、決してその年少時代、不品行時代を語ることによつて減ずるものではない。乃木大將の高潔にして清廉なる人格も、血氣時代の放縱を悔悟し、自ら修養して贏ち得たるものであるが故に貴いのではあるまい歟、丁度

靜子夫人が乃木家に嫁入られた頃と云ふものは、乃木大將は少壯佐官として利物であると共に、盛に酒色に沈湎したものであつた。靜子夫人は勝典と云ふ可愛い子供が生れても、良人の放蕩は少しも已まなかつた。否な、寧ろこの頃から一層猛烈に乃木大將は花柳の巷に出入するやうになつた。靜子夫人の切なる諫止も、偉材を惜しむ僚友先輩の忠告も、乃木大將には馬耳東風であつた。諫言すればする丈け、忠告すればする丈け、愈々ヤケ氣味になつて遊び廻ると云ふやうな形跡さへ往々にしてあつた位である。ケレド乃木大將の爲には靜子夫人は愛妻であつた。令息勝典は二となき將軍のプライドであつた。

この愛妻と令息とを持ちながら、將軍は何故に放蕩に耽つたか、どうしてあゝ云ふ莫迦な眞似をされたのであるか。當時に於いては夫人にも分らなかつた。僚友にも先輩にも疑問であつた。然るに今日に於いてこの疑團は釋然として氷解した。と云ふのは『……明治十年の役に於て軍旗を失ひ其後死處得度心掛候も其

機を得ず。」と云ふ將軍遺書の一節である。西南戰爭中に軍旗を失つたと云ふことが、どれ丈け將軍の心を痛めたのであるかは、今度の自刃もこれに原因することより推量すべきである。

この事あつて以來、乃木大將は既に死を決してをられたのである。唯だその死すべき場所を索めてをられた。單にその最後を遂ぐべき機會を待つ許りであつたけれど未だ、その時が到來しない。憂慮は懊惱となり更に苦悶となつた。むしやくしやする胸衷を慰むる爲に酒を呼び。苦惱を忘れんが爲には女をも近づけた。そして一時の安きを求め、片時の快をも取つた。けれどこれは決して將軍の本心ではなかつた。この間にあつても將軍は嚴格なる良人でもあり且つ父君でもあつた。

更に將軍の不平は烈しくなつた。不滿も甚しくなつた。軍旗を失つた將軍のみは同僚と共に榮位に昇ることを得なかつた、進級が後れた。それが爲に將軍の放蕩は一層激烈に一層放逸に亂暴になつた。

恁るが故に、情誼に厚く、愛憐の心深き乃木大將は靜子夫人を愛しながら、令息等を慈しみながら、その燃えるやうな愛情を注ぐことを自ら抑制して、泣いて無情とも見せ、冷酷とも裝つた。それで良人なき後の妻を心安からしめやうと深くも考へられたのであつた否な、自刃の日まで將軍が靜子夫人に對して淡きこと水の如きものであつたのもその故でもあるまいか、其の最後の日の將軍夫妻の一擧一動を知悉する私は、かう斷言するを躊躇しないのである。

かくして靜子夫人は良人に仕へた。そして五十四年間を過失なく終えた。更に母としては勝典、保典二人をあのやうに立派なものと育て上げた。あゝ枯木ともなり、冷灰ともならんの雄々しい心を以つて犧牲の生涯を終つた乃木大將夫人の高潔、清廉の人格は、良人將軍に恥ぢる處ろはない。

靜子夫人の姪とその嫁いだ某家の姑との間に不和を生じ、圓滿を缺いた時に、姪女は良妻として、賢母として評判がよかつた。けれど靜子夫人はその姪女を呼

寄せて、

「…何事もお前が足らぬから家庭の不和が生ずるのである、姑と云ふものを六ケ敷ものと思ふてはならぬ。心から親身になつて仕へねばならぬ、或時は自分と云ふものをないものにして仕へねば、決して圓滿を缺ぐやうなことはない。」

と、懇々と諭され、猶ほ詳しく說かれたとは、姪夫人が涙ながらに繰返して語るところであるが、靜子夫人のこの訓戒を深く味つて、その過去五十四年を顧みるならば、全然その經驗を語るものである。皆これ靜子夫人の心事の告白である。

　年少き靜子夫人は放蕩の良人に仕へ、人の子の母となつた。そして更に並々ならぬ姑にも心を配らなければならなかつた。この姑と云ふ人は、流石に乃木大將の生母である丈けに、非常に嚴格な婦人であつた。學問もあり、識見もある女性であつた。若し母堂を訪ふならば、客は直ちにその部屋に讀みさしの儘に開かれてある和裝の「源氏物語」、さては「榮華物語」のやうな書物を見たであらう。讀書は母堂の嗜好であつた。それ故に、話題も多ければ、見聞も亦博かつた。その母堂に滿足を與へる爲に靜子夫人の苦心は並大抵でなかつた。併しこれ丈けであれば別に云ふべきこともないけれどこの乃木母堂はその讀書を好むやうに酒を嗜まれた。朝にも、晝にも、夕にも食膳に酒が上らなければ箸を執られなかつた。そして醉へば殆んど別人の如く、高談放語、冷罵熱嘲、靜子夫人は常にその矢玉に擧げられた。骨を刺すやうな語は年少き嫁には堪へられない。幾度か人知れず靜子夫人は涙を拭つた。この母堂の口に酒氣の日一日と雖も絕えなかつた良人の獨逸留學中は、夫人に取つて實につらい時であつた。けれど母堂に對して何處までも孝行なる子であつた將軍は、靜子夫人の苦心を見て、それと察しながらも知らぬ風をしてをられたのである。

　この母堂に仕へること二十餘年、姑を臺灣に葬つた時は、男爵夫人として靜子夫人は愈々重い任務を背負つてをられた。日露戰役には良人の出征、二人の愛兒

が續いての戰死、靜子夫人の生涯は多忙を以つて終始し、奮闘を以つて繼續された。そして夫人が眞にほつと息する時さへなかつた。

あゝ靜子夫人！　夫人を讚美する聲は麗しいものであると思ふ。靜かに夫人在世の日を回想すれば、婦人として、女として、人間として學ぶべきものが多い。或時は自己を沒し、我を無視して健闘した靜子夫人のライフは眞に意義あり、更に貴いものであると云はなければならぬ。

## 貧乏樂と小身樂

昔會津神公とよばれ給ひし左中將正之卿、或時儒官某に對はせ、其方にも何ぞ樂みと致す事有りやと、問はせ給ひけり。

某、謹みて承り、如何にも大に樂みと致す事二つこれ有り、是を何より有難く存じ、其日を送り居候由、申上げたり。左中將重ねて、其二つとは何々ぞと聞かせ給ふ。されば候、第一に貧者と生れしを悦び居候、富貴に育ちては奢を常とし、禮義の道に疎く、心に不平の絶えざる者に候、天然の貧乏と生れしは、冥加かと心得候と申上ぐれば、實にさも有り氣なり、して今一つは何ぞと問はせ給ふに、御ゆるされ候へ、此義は何とも申上難き事に候。と畏り入りたるを、押して猶せまり給ふ。

然らば乍恐大名と生れざりし事に候、仔細如何にと申候に、小身者には師匠も嚴敷仕込み與れ候得共、大名などには只御機嫌損せぬ様にと、些能き事有れば山の如に褒めそやし、惡し處は氣隨氣儘に敎立申候間、性質御聰明の方をも、天晴あはうに成し參らせ候、偶々此世界に生れ來て、人にだまされあはうに御成遊ばし候、大名は是非も無き事の至極と、直言に憚らず申上げるとか。

あはれ今の世にも、あはうにされてお得意の方もいましけり。

# 裁縫科の豫備試驗を受けた實驗

松風

新らしい女！　自覺せる女！　で喧しい世の中に、裁縫の意義や目的、敎育的價値、敎授の方法などゝ、それ以外に考へる餘裕のない狹い天地を形ちづくつて彷徨よてゐる私も女の一人、さて何と名のつく部類でせう。

可惜靑春一刻を、映もなく無慘〱と唯一枚の免許狀を得やう爲めに浮身をやつすのですもの。半狂亂の態體らくで、自分が着るのでもないのに婦人洋服の割出し方に思ひをこらし、無垢比翼の裁方、縫方順序に頭をいため、博物館へ行つて古代服も一寸見て來ねばならず、三越の新流行品を窺く必要もあり、さては圖書館へ行つて織物集覽も讀まねばならぬとか、衣類の整理法も知らねばならぬ、染色學の智識もいると云ふ騷ぎで、無暗やたらの詰込主義でやつとパスして鬼の首でも取つた積りでゐなければならぬ悲しい身の上です。

人樣は知らず、私の試驗を受けるのは何も偉大な刺戟の爲めに敎育者として世に立つべき自覺を得たと云ふやうなわけではありません。だから假令裁縫科の敎師にせよ、苟旦にも敎育者としての資格があるかしらむ、天晴れ育英の事業に身を犧牲にして止むの決心が果して有るかしらむ、と顧りみて自らはづかしく思ひます。

敎育の事業は神聖です。敎師は神にもたとふべきものであります。けれど考へると、無資格敎員を漸次淘汰して有資格者を採用すると云ふ文部省の方針ですから、餘義なく試驗を受けるといふ私のやうな者の出來るのも當然でせう。ことに資格があれば二十圓が三十

圓になると云ふのが今日の趨勢ですもの。

八月十七日は、教育大意の試驗日でした。小學校本科正教員以外の私達は受驗せねばならぬ事になつてゐるので、試驗に出かけました。試驗は御茶の水の女子高等師範學校内で行はれました。

控所には、三々五々陣取つた袴の人、帶の人が、喋喋としやべつてゐました。

『教授の段階は豫備、提示、比較、概括、應用、に分れてゐますね』と控所に入つてからまで、未だ研究しあつてゐる人もあれば、「今年は裁縫科だけでも二百八十九人ですつて、さうして一割位採用すると云うんだから、隨分恐いのね」と話してゐる人もあつた。まあ結構な事だ、競爭が激烈であればある程優良な教員が得られるわけ。眞に力のある人が結局勝利を占めるのを祝福する事が出來ると、私はひそかに思ひました。

記名の紙を試驗場の入口で受取つて席についたのは、午前八時少し前でした。配布された問題を見ると、

教育大意問題（第二十六回）

一、本邦現時の學校系統を舉げて特に師範學校、中學校、高等女學校の本旨を明にせよ。
二、觀念聯合、抽象、歸納の意義を説明せよ。
三、教育上賞罰の價値及其運用上の注意を述べよ。
右二時間

實に教育大意の名に背かぬ問題の出し方ですが、全く意外で、何だか物に魅せられたやうな心地がしました。小泉又一先生の心理學と教育學とを讀む事は讀んだが、自分ながら不充分だつたと思ふので筆が澁つて書き現はすのが實につらうございました。何も教育學の智識がなくとも、常識で判斷してわけなく書ける筈の問題なのに、無暗と恐怖心がつきました。考へると馬鹿げたおはづかしい話です。

能きないとこだけは書かずに、やつと筆をおいた時は、既に規定の時間にあやうくさしかゝつてゐました。讀かへして見ると何だか意に滿たないことばかりで、勉強のたらなかつた事を痛切に感じました。

越えて廿二日は文部省内で裁縫科の試驗が行はれました。

裁縫科豫備試驗問題（第二十六回）

一、左記五種の織物につき其用途及び原料を述べよ
　精好、薩摩上布、羅紗、銘紬、ローン、
二、裁縫の際針を慎重に取扱ふ習慣を養ふ方法如何、
三、幅三尺六寸の縞セルにて大人並に十二三歳の男袴の裁ち合方を圖解し之に各部の名稱及び寸法を記入し且つ用布の總丈をも記載すべし
四、幅二尺の用布にて婦人洋服の下着一組を仕立るにつき左の事項を示せ
　一、裁ち方及び各部の裁ち切り寸法
　二、縫ひ方順序の大要
　三、附屬品の種類及び數量
　　右四時間

豫期した問題が多少ないでもなかつたけれど、實際思はぬ不意打を食ひました。

困つたのは第一番の問題中の「ローン」でした。三越タイムスを見た時、女兒服や帽子類等に、ローン製と云ふのがあつた事だけは記憶してゐたけれど、さて其の原料がわかりません。野口保興先生の、經濟地理世界物産誌の織物の部も、一寸目は通したが、ローンは見つかりませんでした。で思ひ切つて「絹絲」と書いたが、之れは當推慮も甚しいものでした。此の間三越へ行つて、ローン製の女兒洋服と云ふのを見たら、其のローンこそは俗にいふ「絹冷紗」だつたのには、開た口が閉さがりませんでした。

第二、第三の問題は、左程骨は折らなかつたが、第四の問題には少々惑ひました。「婦人洋服の下着一組」といふ事に就て一寸判斷に苦みました。全くの處私には何々を指すのかはつきりわからなかつたのですが、まあ、シミズ、ズロース、ペテコートの三種ぐらゐを書けばよからう位の考で書き始めました。所で裁ち方です、一體割出し方を記載すべきだらうか、それにしてはもう時間がない。特に二尺幅の用布を提出してあるのは大なる恩惠だ、割出し方を殊更に記載せずとも、極く簡單に書き現はす法はあらうと、隨分腦を絞つて、やつと變手古な應用を試みました。嘗て伊澤峰子先生の洋服の書籍で、大人シミズの丈は百仙米尺とあつた事を思ひ出して、丈だけは二尺六寸とわかりました。さうして何でも二尺幅の布で一度裁つて見た事がたしかにあつたやうに思はれたので、能きないと書き度くないばかりに、大に自己流を試みました。ズ

ロースは女股引や運動ズボン下等を交へて書いて置きました。ペチコートは、スカーフを二尺幅三布で裁つた覺えがあるから、二布でよからうと大急ぎでやつて置いたが、後で考へると、何だか歩けさうもない簡見たやうなものが出來るわけで、試驗官は餘程噴飯の材料を得られたらうと、自分でもをかしくなりました。

今度試驗を受けて私がつく／＼感じたのは、洋服の剳出し方をおろそかにしてゐた事です。こんな事に騒ぐのは、もうおそいので、遠くの昔に知つて居らねばならなかつたのです。試驗問題は次第に容易くなつて來てゐるが、しかも益々範圍が廣くなつてゐるから、うつかりしては居られません。

昨年度までの問題を解いて書いたノートが約十冊、練習用として使用した罫紙の數も隨分でした。これに費した時間と、けがしたノートや罫紙に對して何と申わけをしたらよいでせう。しかし私は此の試驗場を踏んで此の失敗に少なからぬ經驗を得ました。石の上にも三年のたとへがある。私は僥倖でない衷心から滿足するの良結果を花々しう得ようと大決心をしました。敢て過ぎ去つた失敗に未練は起しませぬ。來ん年を樂しみにと……。が流石に寂寥の感が……。あゝ私は女です。

## 食品の撰擇

我國では昔から習慣によつて何と何とを食べ合はせると中毒するとか言つて居りますが、これは食品の不精選にも據りませうし、それを食べた人の身體に異狀があつた爲めもありませうから、遽かに總てを信ずる譯にも參りませんが兎に角昔から人が惡いと言傳へて來た事を無理に犯してまでも惡いと言はれるものを同時に食べる必要もありますまい、これらの食品を記して見ますと鯉に胡椒。鮒に砂糖。鰻に梅干。鴨に猪肉茸。辛螺に蒟蒻。雀に李。赤貝に土筆。蟹に熟柿。などの類は同時に合せ食するのを忌むのであります、生椎も茸などすべて中毒すると言ふのではありませんがよく中毒しますから注意する必要があります、蝦は滋養分が多い食品でありますが卵を持つてゐる時には中毒する事がありますから吟味して食べなければなりません、その他熟さない果物や古い食物殊に生で食べるものなどは蟲の卵などが附いてゐることがありますから善く撰擇する必要があります

# 内藤千代子と松平鏡子

あざみ

○

千代子の君と鏡さん、まあかう並べたからとて、何も牡丹と海棠と何れが美なぞと、とても別けもしない事を解かうと云ふのではありません。

たゞ今は夢の明治の御世の、女學世界の文壇にて妾の印象を深うせしお二人の作風を、本箱の隅から發見した古雜誌に由つて懷しんだあまりに、一寸書いてと、とんだ謀叛氣を起した譯です。

○

千代子の君の作品は、憧憬の心が始まりです。心の中の影を捕へ得て發する滿足の聲でも、得た滿足の心の中に戀に仕様と云ふのでもないやうです。滿足の後の哀情の、極みなくやるせないのでも猶更ありません。離れ小島に沖を通ふ舟を引きつけんと、かなづる妖女の人を昏醉さする竪琴の響の沈痛な憧憬であります。觸るゝもの悉く燒かんとする焔の様な熱烈な聲であります。それも束の間の音で、通りすぎた舟を呼びもどすほどの強い印象は與へません。されど戀に戀し、紫の濃きに憧憬れ、帝都に憧憬れる熱火の、束の間にせよ、若き男女のうら若き血潮を湧きたゝますには置きません。女の青春を惜しむ餘り、「妾し許り爲年頃でもつまらない、人もわれもいつまでも青春の人で、その甘酒に醉うてゐたい….今この花の世界を出でゝ現實の國に入るのは厭です、口惜しいわ、あゝ青春は惜しむべし、はげしき心紙にそゝぐ、ペンを儚はる….」と獨り叫ぶのも、「花姿衰へぬ限りは青春でございませう、青春は年に限りのあるものではない….戀を戀して、限りなく人の懷しかりしわが十六の夢であつた」と鏡の前に泣き倒れるのも、所詮は的もなき憧憬の、燭火の蟲もやかゝると待つ痛恨の情であります。何物を描くにも人生は美しきものと、表面の永嘆に終り、奔放な空想に走るのは當然でありませう。

○

鏡子の君は、出發の時から、やるせない心を抱いて文壇の上を歩まれた。絶えず求むる哀愁のその苦痛の反響を聞かんとあせつてゐられる。求めて空虚なる胸の淋しい心を充實しやうとするのではありません。充實させて樂しみを得やうとするのでは勿論ございますまい。どこまでもどこまでも哀愁の苦痛を淋しい心の中に味はふとされるやうです。千代子の君の竪琴に對して、月も冴えた奥の森の樹立も深い泉の邊にさゝやかに流れる水の音の冷い淋しみを覺えずには居られません。感情の激しい高度に熱する響の音を聞かせじと、おさへる聲の切なく激しいのです。鏡さんは優しいおとなしい人であります。從つて華かではありません。色ならばピンクの淡さであります。「夕通せた袋の傍に朝顏の窗は吹き折られて絹洋傘を疊んだやうなのが、がつくりとうなだれて可憐と

いつたら……普通の朝顔より早く咲いたのが不幸だつたのね」と憐みの深さ、『ダリアの花の深刻な色彩を見つめると、寂しい遣瀬なさが潜んでゐるやうに思はれます。それを包む華美な衣裳、丁度都會に住む女の心によく似てゐるではありませんか』。『逝くものを戀うてゐる内に遂に妾も逝くであらう』など、悲みの極み、やるせなさの心の現れであります。理想と感情と衝突して生ずる激しい哀痛であります。筆の跡の一文字毎に哀愁となるのも無理はありません。

○

憧憬の心を何時までも失はぬ人は幸福の人です。淡い〳〵的もない憧憬のさう長く續くものではありません。憧憬の後には醒めた苦痛が來るものです。『つくることなき歡樂世界を讃美した頃の生命は、何處で葬れて了つたのでせう、柔かな美しい感情のこはばつて行くにつれ、文も荒さう、冷かになりませう。冷めたる私しは人にそむいて獨り泣きますよ……障子によつてうなだれて了ひました、歡樂の後の寂寥、たまらなく寂しい心地になつて、何の泪かホロリとしたのでした』と千代子の君の自ら云はれるのは、君の當時の心、失はれゆかんとする青春の心をしみ〳〵といたむ心の動搖であります。昔をしのんで強いて感情の激しからんと願ふの餘、却つて淋しいいら〳〵とした哀愁となつたのです。

○

うら悲い心を包んで無邪氣をよそほふ苦痛は鏡さんにあります。空想は鏡さんの生活ではありません。鏡さんは現實の人であります。しかも現實を恐れて常に安からぬ心を抱き、生の上に萬斛の哀痛を感じてゐられる。たすきがけの手を休めて、『もう蜩も啼かずなつて朝夕の寒さが感じられる、木の葉も中染つてしまつたし――秋逝く音か冬來る囁きか妾しの胸の底も寂しい』と嘆じ、『妾の幼ない昔は、少なくも現在までは繪のやう詩のやうであつたに相違ありません……妾しは樂しいこと許りでなかつた自分の過去を感謝して居りますわ、今は只未來もかく斯る許り』と小さき胸に表面を樂しんで、思ひ離き苦しみを振袖に包む鏡さんの心は、美しさに充ちてゐます。

○

文章の生命は儘に其半以上聚つて音調の上にあると鏡花先生は云つてゐられる。千代子の君は調子によつて奔くの人であります。其の文章は殆んど調子によつて命脈を保つてゐるのです。燦然と渦を卷く妍麗の語の、一道の筋を辿つて統一してゐるのは、巡りに人の入るを許さぬ垣の内であります。『くだけ落ちる瀧つせ、水晶のやうな激流は石を轉し飛沫を散らす。四山今やよそほひ半ば、翠の杉に相映ずる木々の紅、橙色、朝日にきら〳〵と輝くさま美しとも美し』とか、『銀河擎なく四に流れ、溫泉宿の秋の夜のさゝやき、君が御手はわが優肩に』、「芳」と只一言、『數積!!!』の如き、そゞろに鏡花先生を思はずにはゐられません。從つて此の點に先生が破られる批難は、當然君の優肩の上にもになはなければならないのです。人は、目まぐろしい修辭の餘りに惡どいといふけれど、これは君の長所でもあり短所でもあるのです。こ

れを失へる君は殆んど價値のない人とならればしますまいか。これに由つてつなぎ得た君の名聲の、必ずこの儘ではありますまい。

○

千代子の君の文章から、鏡さんの紙の跡、滾々と流れる小川のやうなのを進れば、一種の涼しみを感じます。あの輕快な洗煉された、あの淡白な、巧みな云ひ廻しは、却つて早く老成な心配させます。『それ等の事は一も爲し得ず、千枚足ずの紙の重みに腕を勞らせて、毒草の一卷を廣げたまゝ意識もなく眠りました』とか、『美知姉さんは戀しい愛を求むる爲に、群集を物色する瞳の色、私は自分の瞳の輝きが怖ろしくなりはしまいかと、獨り懷うてぞつとする』など、飽かず讀み耽らせます。鏡さんに描いて深刻なれと強いるのは無理です。何處までもあのセンチメンタルな弱々しさを失はれたくはありません。何處までも鏡さんは印象的の明るさに生きなければならないと思ひます。

○

千代子の君は夢から醒められたと云ふ。『箱から出た女』、綾さんの遣瀬ない心、憧憬から醒めた人生の苦き味ひ、それは君の聲でありませう。『吾を守るもの吾あり、餘り多くの人に多くを望み過ぎた罰だつたと悟つては、それは二人の靈の離れゆく始であつた』といはれるのは、妙年頃の傾向であつて孤獨を嫌ひしから孤獨に憧憬れる君の心の奥ゝ塔へ離くなつてゆくのを窺えます。同時に『一體女性の世に存在の意義と價値とは』と女性に對する眞面目さが見えて來たのを喜びますが、それと共に憧憬から醒めた反動の、『あゝ現實暴露の悲哀』などゝ現實を嘲り乳母の聲を冷笑する綾さんの心を恐ろしく思ひます。解し難く思ひます。

○

ユーモアの華やかな明るさと、うら悲しい淋しみの陰影と、無邪氣と、野暮と、意氣と洒落とを、燃え立つ血潮にまぜた鏡さんの其の特質を、近來益ゝ發揮せられてゆくのは喜ばしいと思ひます。肩揚に別れを惜んで、『私は年は取りたくないと思ふけれど、美しくない女は早く年を取る……』と眼の中に熱い涙をためたり、更に『一つ位秘密をもつたまゝ死んで逝つてはいけないの』と床の中にむせび泣いたり、鏡さん美しい性格が眼の前に見えます。更に此の優しい鏡さんのマダム振りはと久しく待つたのが、遂々先日お目にかゝりました。『緣に立つて夫のゐる都の方を眺めては戀しい人の歸るのを待つのが夫人の日課でした』と、水に漂ふ美しい小箱に思ひをよする優しい人は、果して期待にそむきませんでした。何處までも鏡さんのこの心を嬉しく思ひます。

このお二人を有するわが文壇は、いかばかり美しいものでございませう。けれども大河の決する勢で文壇は移り變つてゆくのであります。作家は絶えず向上しなければなりません。明治の御世も逝つて世は大正と新らしくなりました。夏も過ぎて秋も來ました。今に冬が來ることでせう。さらばわが文壇の明星と輝くお二人、永へに健在にましませ。

# 女子寄宿舍の生活

## 奇談百出

ドクトル、オブ、フィロソフヒー
米國哲學博士　原口鶴子

### △ロマンチックな應接間

大學に在校中、一番樂しくて、又一番自分を益したと思はれるのは四年間の寄舍生活です。此處で初めて米國婦人の眞價が解り、また米國人の團體的精神を玩味する事が出來た。今でも折々可懷しい其頃の生活を思ひ出す時に、あり〳〵と心に浮んで來るのはアムステルダム、アベニューと、百二十丁目の角にある煉瓦作りの大建物で千人以上の女學生にホームを與へて居るホイチヤホールです。ホールに來る人々は、先づ第一階の莊嚴華麗なのに驚く。厳めしい石段を十ばかり登つて、入口のドアーを開けると、百五十疊も敷けさうな中央の大廣間に出る。其處には眞白い天井に配置されてる五箇の大電燈と、周圍に半間毎に置いてある十燭の電氣とが、大理石の床と四方の壁とを眞晝のやうに明るく照して居る。室の右手の石段を登ると事務所がある。次が郵便物取扱所があつて、嚴重に鍵のかゝる各自の郵便箱が並んでゐる。

大廣間の右手に二つの少さい應接間と、大きな舞踏室がある。舞踏室は壁、椅子、カーペットなど凡て緑色で、黒色の床が隅のグランドピヤノの色にマッチーて居る。大廣間の左手のクリーム色のカーテンを上げると、小さな應接間が見える。眞白い床、眞白いテーブル、椅子とカーペットがクリーム色で、其れと同じ

色の周圍の壁には、金で縁取つた青々した海の額がかかつてゐる。此の部屋は私が入寮した頃には無かつたのだが、其れが作られる樣になつたのにはローマンチックな事情がある。澤山の寮生の中には今でも結婚約束の出來さうな人や、最早や左の藥指にダイヤモンドの指輪を嵌めて居る人が隨分あるが、さういふ人々の親しい友達が折角尋ねて來ても、中央の大廣間では、しんみりと話す機會がないので、遂二人して、夜、外出する事になる。寮舍ではそれを禁じ樣としたけれど仲々行はれないので、色々考へた末、特に此の人達の爲めに此の應接間を作り、二人づゝ代る〴〵用ゐさせる事にして、漸く外出の禍を防いだのです。

### △波濤の如き紐育市街

次は讀書室で、此處は壁も椅子もカーペットも皆赤茶色なので、レッドルームと云はれて居る。周圍の本箱に歐米の文學書があり、中央のテーブルの上には、文學、宗教、政治、演劇等に關する有らゆる雜誌や新聞が載せてある。

第一階は此の樣に立派だけれど、第二階以上八階迄は、小さな六疊敷き位の室に仕切られて、狹苦しい石の廊下が各部屋々々をつらねて居る。部屋の配置、構造は、各階皆同じて、其の數は一階に百三十ばかりあるから、全體で千以上はある。

食堂は第九階にある。三度々々斯んな高い所まで行くのだから、隨分不便の樣だけれど、エレベーターで昇降するから、雜作はない。學校から晝飯に歸つて來て、お腹がペコ〴〵空いてる時に、鈴を押しても〳〵エレベーターが來ない時などには、花より團子で、食堂が一階に有つて欲しいと思ふけれど、矢張り九階にあるのが有り難い。正面の窓からはニューヨーク市の稠密した人家の屋根が波濤の樣に見え、其の向ふにイースト河がきら〳〵と流れて居る。後はハドソン河が東岸のパリセードの絕壁が分明と窓に映つるなど、何とも言へぬいゝ心地がする。前面に二つ後面に二つ都合四つの部屋で出來て、いづれも二百五十人を優に容

れる事が出來る。此の外にレストランドがあつて、來客を招ずる樣になつてゐる。

### △優しいノックの主

市街の喧噪を離れ、見晴しの極めて良い八階の一室が、私の勉強室兼寢室でした。初めて此の部屋に導かれた其の晩程淋しい悲しい思ひに襲はれた事はなかつた。アルタマウンドのキャンプから其日來たばかりだ、未だ荷物が着いて居なかつたから、氣を紛らす物は一つもなく、空つぽの鏡臺、空つぽの机、空つぽの衣服棚、何かと裝飾のない四方の壁が冷たく私を眺めて居た。廊下では大騷ぎで、友を呼ぶ聲、笑ひ興ずる聲、「私の部屋はもう片付いてよ、内から持つて來たお菓子があるから今夜召し上りにゐらつしやいな。」「明日にするわ、今夜は



兄様と芝居見に行く約束してあるから」など言つてるのが聞え、私の部屋の前を行き來する足音は繁々したけれど、私の室の戸を叩く者は一人もなかつた、私は只ベッドの上に仰向けになつて、茫然天井を眺めながら、色々な事を考へて居た。その内外が少し靜かになつたと思ふと、廊下の彼方に足音が聞え出して、それが次第に近くなり、私の部屋の前に止つて、優しいノックが聞えた。「お這入りなさい」と云ふ聲に應じて戸を開けたのは、美しい黒の夜會服を着た、四十二三の婦人でした。

『あなたお淋しいでせう、私は此處の寮監のミス、ダニエルです、こんな所に一人でゐらつしやるとホームシックに成りますよ、私と一緒に一階にゐらつしいな』と言つた其の言葉付き、歩きぶり、何から何まで上品でみやびてゐる。私は髪を撫で付け、夜の衣服を着けて、迎へに來たレデーに從いて出た。

## △大廣間の歡樂

エレベーダーは直ぐ私共を澤山若い婦人達の笑ひ興じて居る中央の大廣間に連れて行つた。彼方の椅子、此方のソフアーに、男女の組が樂しさうに語らつてゐる所は、日本から來たての私の目に珍しく映つた。いづれも白、ピンク、クリーム、空色等の薄い夜會服を着け、眞白い顔と蠟石の樣な腕を見せて、目映いばかり美しく見えた。ミス、ダニエルは私の手を引いて色々な人に紹介し、大勢と知り合ふ樣にして呉れた。

舞踏室に音樂が初まると、其れに合せて舞ふ人々の衣ずれの音が聞え出した。ミス、ダニエルは私を其處に導いた。踊つてゐる組の中には、女同志のもあり、男女のもあつた。『何故此處に男なんか居るのですか』と東洋的な質問をすると、『あれは生徒の兄様や友達で今晩訪問に來た人達です、斯んな若い男女を良く導いて高尚に交際させるのが私の義務の一つです』とミスダニエルは説明した。男女が一緒になつて踊るのを見るのは之れが初めてだけれど、只優美と云ふばかりで少しも變に感じなかつた。舞踏室の隅のソフアーに腰

かけて居た婦人が、私の方へ進んで來て、一寸ミス、ダニエルに會釋して此方を向き、「あなた、私とダンスを遊ばして下さいませんか」と云ふから、私はつい此頃日本から來た許りで、ダンスなどは出來ぬと答へると、「日本のダンスならお出來になるでせう、踊つて見せて頂戴な」と婦人は云つた。「またいづれ」と答へたが、此の舞踏室の眞中で扇子を持つて踊り出したら、隨分良い見世物だらうと思つた。婦人は仕方無さそうに「では明晩私が米國のダンスをお敎へするから、あなた日本のを敎へて頂戴な」と眞面目に云つて向ふへ行つた。色々な人に會つて、種々なお話をして面白い最中、四方の電氣が消えて眞暗になつた。數秒の後再び明るくなると、ダンスはぱつたり止んで、訪問に來た男子は歸る支度をし初めた。十分經つて、電氣が同じ事を繰り返すと、皆名殘り惜しさうに暇をつげて一度に出て行つた。

午後十時三十分以後、男子を舍中に置かぬのが、ホールの規則で、第一の消燈は「歸る用意をして下さい」第二のは「お歸り下さい」と云ふ標であつたのです。

### △詩を拈る人と料理を說く人

寄宿舍生活で樂しかつた一つは、良く知り合つた同志が互に笑ひ興じながら食事をした事です。食事の時間は朝は七時から八時半まで、晝は十二時から二時まで、夜は六時から七時まで、食物は校醫の監督が嚴重だから、滋養に缺乏する樣な事はない、朝は第一が果物、次に出るのがシリアル（オートミールの種類）一番終にはカフイー、燒麵麭及び肉類が出る。晝飯は第一にスープ、第二に肉或は魚（どちらでも好みに應じて取る事が出來る）と野菜が三品位、第三にデザート夕飯は晝のに似て居るが、只異ふのは一層手のかゝつた料理が出る事と、デザートとして一週に三度づゝアイスクリームが付く事とです。

一つのテーブルに八人づゝ坐り、黑服に白のエプロンを着けた給仕が一人づゝ付く。

嫌でも應でも日に三度は行かねばならぬのだから、

食卓ばかりは樂しくないと辛棒が出來ないが、幸ひ私のテーブルには良い人ばかり居たので、食事はいつも、樂しかつた。生れた故郷も、學んでゐる學科も、各々隨分異つてゐながらも、良く同情が通ひ、平和に親密な交際を結んで居るのには實に感心する。私の向ふに純文學專攻で詩や歌許り拈つて居る人と、家政科で毎日料理ばかりして居る人と並んでゐたが、お互に良く調子を合せて居た。一人がブラオニングやテニソンを講釋し初めると、他は喜こんで聽いてゐた。其の代り麵麭の燒方やお芋の煠で方の說明が出た時に、相手は物質的だとも顏を顰める樣な事はしない。日曜には必ず二回づゝ教會に行くが、バイブルを一から十まで尊信して居るオーセドリクスの信者の側に、ハツクスレー崇拜者が坐つてゐることもある。時々自由意志問題で衝突が起る樣だけれど、平常はいつも樂しさうに語らつてゐる。自分の意見を強く保持して居ながら良く人を容れ、社交には餘り議論めいた事をしたがらないのが米國人の通性らしい。

毎日顏を合せてゐるのに、話してもう話の材料の盡きないのには驚く、日本で女子大學の寮舍に居た時には、食堂が淋しくて仕方がなく、どうしたら話が出るだらうと眞面目に心配した事があつたが、此處では反對で、どうしたら少し默つて居て呉れるだらうと心配な程です。勿論、米國婦人は日本婦人より發表的ではあるけれど、話のはづむ原因は、畢竟趣味の多方面な事と、見聞の非常に廣い所にあるらしい。政治、敎育、社會問題、芝居、見世物、何んでもかでも話題になつて、然かも各々云ふ所をどつさり持つてゐる。初め私は新聞も讀まず、國の事情も知らないから、話しの相手をする事が出來ず、引き込み勝ちになつて居たが、社交的な米國婦人は何時までも私を其の儘にはして置かなかつた。日本の事や、私の專門の學問についてや、色々私が知つてると思ふ樣な事を持ち出しては話しかけるので、自然引き入れられて、十五日許り經つたら、口もはき〳〵利き、もう私は別物と云ふ樣な感じがちつとも無くなつた。

### △寢巻姿の奇觀

寮の生活には樂しい面白い事もあるが又噴き出さうに可笑しな方面もある。ナイトガヲンパーチーは其一つで、讀んで字の如く、寢衆會と云ふ洒落れた集りです。之れは寮のヲーソリチーなどに知れない様に密り催す會なのだから、餘り口外するのは同窓の人々に對して濟まないけれど、私が日本語で書いた文の內容のこんな細かい事までが、ニューヨークに飛んで行つて、寮生が、お目玉を頂く様な氣遣ひはないと思ふから、寮舍生活の滑稽な方面の一つとして此處に紹介する。




私が入寮してから一月ばかり經つて、ある土曜日に學校から歸つたら、私の郵便箱に立派な招待狀が待つて居た。舞踏會が何かに誘はれたのだと思ふて開けて見たら、內に、

今晩十二時、私の部屋にて、ナイトガヲンパーテー相催し候間、御持ち合せの中にも最も美しき御寢卷を召して御來遊下され度候

第三階室三百五十六番

m・A・

とあつた。

夜の十二時が會の時とは可笑しい、晝の十二時の誤りではないか、然し會の名が名だから、之れが本當なのかも知れない、招待狀には左樣書いてあるが、まさか字通りに寢卷で行くのではあるまい、兎に角初めての事で樣子が解らぬから、普通の服と一番綺麗な寢卷を用意して置いて、迎へに來た人に訊いてどちらでも着て行かうと定めた。

十時半に電氣が例の瞬をすると舍中一度に靜かになつた。各室の火は消えて、大多數の生徒が夢路を辿つてる十一時半頃、私の部屋の戸に低いノックが聞える開けて見ると食堂で私と同じテーブルに座るお馴染のm孃で、髮を解いて長く後に下げ、ピンクのリボンで飾つた眞白い寢卷の上に、何か上つ張りの樣な物をかけてゐる。私の耳に口を當てゝ「お迎へに上がつたのよ」と云ふ、私は大急ぎで云はるゝ儘に寢卷に着換へスリッパを穿いて足音の仕ない樣にこつそり部屋を出て行つた、丸で駈落でもする樣でした。破格な衣服を着て居るのだから、エレベーターなどに公然と乘れないので、其の側の石段を、御苦勞樣に八階から三階迄下りて行つた。あたりの部屋は皆眞黑暗で、三百五十六番丈けは、戸の透間から光が漏れて、中にひそ〳〵話し聲が聞こえる。低く戸を叩くと、內から直ぐ戸が開いた。夜中だから大きな聲は出せなかつたが、部屋の光景を見た時には、全く吹き出した。

六疊ばかりの小さな部屋に、十五人許り這入つてゐる、髮を解いてばらつと下げてるのや、編んでリボンで結んでるのや、色々樣々な樣子をしてゐる、寢卷はピンク、空色、白などが多かつた。皆一番良いのを着て來たさうで、胸に美しいレースの裝飾のあるのや、頸のまはりと袖口一面に縫箔をしてあるのなどがあつ

た。椅子は一部屋に二つづゝしかないのだから、其れを占領した二人の外は大抵何んな恰好をして居るか解るでせう。鏡臺に腰を掛けてるのがあるかと思へば、トランクの上に座を占めて居るのもある。寢臺の上に五人許り乘つてるかと見ると、あたりの器具に戴りきれない人達は、床の上に無雑作に坐つてゐる。私が顔を出すと、珍らしい來客だと云つて寢臺の上に招じられたが、五人の中央に割り込んだので、隨分苦しかつた。



△眞に無邪氣なる學生會

勉強机の上にあつた本やインクに今夜はすつかりお暇が出て、其の代りに色々な勝手道具が載つて居る。中央のアルコールランプの上に、チエーフインクテイッシユ（お鍋の樣な物で四つ足が附いてゐる）がゝかつて、其の周圍に砂糖の筒だの、レモンの瓶だの、チヨコレットの箱だの一杯並んでゐる。

其の間に主人公のA孃が、白いエプロンを二つ三つ出して來て、『誰れでもフヲクチ（チヨコレットで造つ

た菓子の一種」の造り方を知つてる方は手傳つて頂戴な」と小聲で云ふと、座中皆應と答へた。けれど其の中の上手さうな人だけにエプロンが渡つた。直ぐ茶菓が出る事だと思つたら、これから其れを造らへるのだとは驚いた。もう一時過ぎだから、お菓子が出來て頂戴する迄には二三時間もかゝらう、飛んだ御招待に預かつたと私は思つたが、外の人は一向平氣で、お話しに餘念がない。机の上では、湯が煮立ちすぎてざぶざぶテーブルの上に溢れ出したり、チョコレットの跳が飛んだり、砂糖の入物が轉つくり返つたり大騷ぎをしてゐる。一時間餘たつてやつとお菓子が出來上つた。いよ〳〵お菓子に有り付けると思つたら、其れはそつくり棚の上に載せられ、今度はサンドウイッチ製造が初まつた。主人は衣服戸棚の引き出しから、ローストビーフの大きな塊と、麪包を十斤ばかり持ち出した。麪包を切る人、肉を切る人、バターを付ける人、肉を挾む人、大勢でしたから、三十分經たぬ内に十五人前のお辨當が立派に出來上つた。

午前三時やつと御馳走に有りついた。初めに甘い葡萄酒のなみ〳〵と注いであるコップが一人に一つづゝ渡り、美味しいオリブが其れに添ふて出た。次に山の樣に盆の上に積んであるサンドウイッチが廻つて來た皆遠慮なんかちつともない。「まだ葡萄酒が殘つて居ますか」などゝ主人公に質問する人もあつた。山の樣にあつた。サンドウイッチが束の間に無くなつて、次にフヲッヂが出た。ミルクとチョコレットで出來た舌觸りの良い此のお菓子は、鹽つぱいサンイウドッチの後で殊に美味しく感じた。

其間にも話は絕えない。大きな聲をすると、お隣りから小言を云はれるので、小さく耳語くのだけれど、十五人が一度に耳語いては、隨分高い騷音になる。

話題は無邪氣な事ばかりで、何先生が此頃お髭を生やしたとか、あの先生のカラーは高すぎるとか、昨日のドイツ語の時間に此の發音が出なくて困つたとか、なんでも無い事を云ふて可笑しがつてゐた。皆上氣して頰が赤くなり、其の對象で腕や頸が殊の外白く、豊

かな額に金色の波が打つて居る樣子も心も、眞に無邪氣な若い女學生の集まりで、何ともいへない可愛らしい光景でした。

そろ〳〵歸る仕度を仕初めたのは五時頃。

## △寮舍の日曜

日曜の晝過ぎ、一階に來て、其處を行來する人を眺めて居る程面白い事はない。三時頃入口の戶が開いて、一人の青年が現はれる。帽子を取つて事務所に行き、自分は何何と云ふものだが、何々孃にお目に掛りたいと云ふ。事務所には其の爲に十二三歲になるボーイを五六人使つてある。其の中の一人が名指された令孃の部屋に派遣されると、間もなく同孃は綺麗なアフターヌーンドレスを着て出て來て、嬉しさうに來客を迎へて應接間に案内する。次に入口の戶が開く。また青年が現はれ、同じ手續をして其友の婦人に面會する、また戶が開く。斯う云ふ風に、若い訪問者が陸續這入つて來る。事務所は非常に忙しい。ボーイが上へ行つたり下に來たりてんてこ舞をする。訪ねるレデーが面會の用意の出來て居ない時などは客は三四十分も待たされる。「君はいつから待つてる、僕は此處に三四十分も立ち往生して居るけれど、僕の友達は出て來ぬ」



欠伸しながら傍の人に不平を云ふ人もある。

三時半から茶室に茶菓が出る。食堂の一つのテーブルに坐つてる人が一組になつて組々が代る〴〵毎日曜の茶菓の支度をする。私が入寮してから四番目の日曜に、私のテーブルに番がめぐつて來た。此のテーブルには極東からの「大使」が居るのだから、大に立派にさうして奇抜にせねばならぬと云ふので、其前の金曜日の夜、皆な私の部屋に集つて來て、相談を初めた。一生懸命考へた末、ある人の發議で斯う云ふ事が定まつた。それは一階のライブラリーを茶室にして、一面の櫻花を飾り、給仕は皆日本服を着、私が一番良いのを着て茶を出す役をすると云ふ事であつた。土曜の午後皆なして茶室を飾り、入口と部屋の周圍に小さい日本の提灯を下げた所は、丁度櫻花爛漫たる下に園遊會の催しでもある様でした。

△茶會でした滑稽

日曜の午後、私は云はれた様に、小豆色の派出な裾模樣の附いた縮緬の晴着に黒地に金絲の浮織りのしてある帶をしめて一階に行つた。他の人は皆揃つて私を待つて居た。其の人達の扮裝は實に奇々妙々で、試みに其中の一人の服裝を云つて見ると、此の人の所謂日本服と云ふのは、赤、青・黄色などの濃て〳〵した色の大形模樣の付いた安つぽい木綿縮で出來てゐて、スタイルは西洋、支那、日本服の間の子の樣な物です。短かい廣袖がどてらの樣に明きも何にもなく身頃に付いてゝ、襟の縫りと頸の周圍に異つた色の縁が取つてあり、背筋の中央から下に襠の樣な物が這入つてゝ、お尻の所に襞積が出來てゐる。此の妙ちきりんな日本服を、着樣も有らうに左前に合せて、其の上に三尺の樣な物を猫ぢやらしに結んで、之れをヂャパニース帶だと呼んで居る。斯んな下品な嫌なテーストの物を、我國固有の服だと稱するさへしやくに觸るのに、其の髪の裝飾を見ては實に驚いて了ふ。入毛を一ぱい入れて、不相應に前髪を出し、高い前髪の上に猶高く聳えて居る髷の兩側に、大きな桃色の櫻花が揷してある。

最も可笑しいのは、小さい派出な扇子の開いたのが、髷の所に結び付けられてある。之れはまだ我慢をしたが、日本婦人の歩き方だと云ふて、足を内輪にし、腰を屈めて、ちよこ／＼歩き出した時には、全く勘忍がならなかつた。七人が七人とも色合や柄などこそ異つてるけれど、皆なこれに似あつた風をして居た。

寮生はそろ／＼來客を連れて茶室に這入つて來て、先づ部屋の裝飾を非常に賞め、次に我々の服裝が美術的だと云つて、口を極めて賞讃した。「矢張り其國の人に見てもらはなければ斯んな美しい衣服を得る事は出來ません」など云つて、化物服の功能をのべたのは、可笑しくも又有り難た迷惑でもあつた。

人々はお互に自分の友達を紹介し、其れへ／＼と知己を弘めて行き、一時間位で、集まつた人は、皆既に良く知りあつた人の樣に、打ち解けて話してゐる。私の所へも皆なが友達を連れて話しに來た。そして「一度は花の國と云はれる貴國に行きたい」とか「日本人は支那人と同人種だと云ふけれど、支那人より見た所も心もちもずつと勝つてる」とか、私の耳を喜ばせる樣な事ばかりどつさり云つて聞かせる。私は初め皆之れがお世辭に過ぎないと思つたが、後になつて左樣でない事が解つた。實際良い方面ばかりを見、良い方面ばかりを口外するのが米國人の習慣であるのです。

五時頃段々人が歸り初めて、六時頃全く茶室は空つぽになる。しかし中央の大廣間や應接間には、まだ樂しさうに語らつてゐる男女の組がどつさり有る。

### 石臼藝

世に用に立たぬ藝を少しづゝ覺えたるものをば石臼藝といふ。むかし武田信玄の家人に長坂釣閑といへるものありけり。短册二枚を手に入れけるに一枚は今川氏眞の題名、一枚は北條氏政の題名ありけり。されば主君信玄に對しては、一人は甥にあたり、一人は婿にあたりなれば、必ず喜びたまはんとて、それを主君へ獻りしに、信玄以ての外に氣色を損じて曰く、武門に生れて武勇なく、徒らに筆蹟なるは、猫の鼠は獲らで毛色麗はしきが如し、武勇は武士の能なるに、能にもあらむ歌道の秀れたるこそ口惜しけれ、石臼は種々の用に立てども座敷にはあげず、茶臼は茶を挽く一能にて座敷にも置くなり、兩人の歌と手蹟とは、たとひ美しとも、石臼藝なりと罵れりとなん。古へ宋の泙漫と云へるもの、三年の間龍を屠ることを學び、漸う其技を成せしが、終に用ふることなかりきとぞ。いと愚かなる倣みなり。寧ろ一道に通曉するには若かず。

# 懸賞募集 新しい人 舊い人

〆切十二月十日

◎弱いものとの古い諺を破つて、強いものと自覺した新しい女。
◎弱いものを弱いものとして滿足して來た舊い女。
◎現今の思想界に蟠れる此二樣の婦人の內面を描寫すること。

## 賞金

| | | |
|---|---|---|
| 一等 | 五拾圓 | 一名 |
| 二等 | 參拾圓 | 一名 |
| 三等 | 貳拾圓 | 一名 |
| 四等 | 拾圓 | 三名 |
| 五等 | 五圓 | 十名 |

◎文體は各體隨意の事
◎紙數は(二十字詰二十行)十枚より二十枚まで
◎字體は楷書にて丁寧に認め亂雜ならぬ事
◎封筒には「新しい人舊い人」と朱にて表記すること

# 十一月の惣菜料理獻立(一)

| 日 | 朝 | 晝 | 夕 |
|---|---|---|---|
| 一日(金) | 里芋味噌汁 | 小鯛鹽燒 | 燒豆腐、椎茸・煮染 |
| 二日(土) | 海苔佃煮 | 牛肉つけやき | すゐき酢味噌和 |
| 三日(日) | 豆腐味噌汁 | 鹽鮭 | 玉子燒大根おろし |
| 四日(月) | 蕪酢漬 | えびフライ | 小蕪甘煮 |
| 五日(火) | 大根味噌汁 | ぜんまい、揚豆腐白和 | 平目煮付 |
| 六日(水) | 菠薐草ひたし | かます一鹽 | 豆腐、松茸清汁 |
| 七日(木) | わかめ味噌汁 | はんぺんつけやき | 豚肉カツレツ |
| 八日(金) | さつま芋味噌汁 | にしん昆布卷 | 生鮭てりやき |
| 九日(土) | 燒麩・湯ば煮〆 | 鰈鹽燒 | 京菜胡麻和 |
| 十日(日) | 海苔佃煮 | 大根風呂吹 | 鰯うしほ |
| 十一日(月) | 豆腐味噌汁 | 鰈干物 | かきフライ |
| 十二日(火) | 燒海苔、生玉子 | 蓮根、揚豆腐煮〆 | 烏賊つけやき |
| 十三日(水) | 大根味噌汁 | わかめ・すゐきぬた和 | うぐひ煮附 |
| 十四日(木) | 金山寺味噌 | 鰈鹽やき | あんかけ豆腐 |
| 十五日(金) | 小松菜味噌汁 | 大根風呂吹 | 鹽鰤やき |

# 十一月の惣菜料理献立　(二)

| 日 | 朝 | 昼 | 夕 |
|---|---|---|---|
| 十六日(土) | ぜんまい味噌汁 | じやがいも甘煮 | 豚煮物 |
| 十七日(日) | お多福豆 | 鮪さしみ | むきみ、豆腐清汁 |
| 十八日(月) | つみな味噌汁 | さんま干物 | 牛肉、葱、じやが芋、オムレツ |
| 十九日(火) | 焼海苔 | 子芋ころ煮 | むつ煮附 |
| 二十日(水) | 玉菜ひたし | 鯛フライ | 高野豆腐、椎茸、清汁 |
| 二十一日(木) | 葱、味噌汁 | 三ツ葉、玉子とじ | 小海老甘煮 |
| 二十二日(金) | えび佃煮 | 数の子味噌和 | はんぺん清汁 |
| 二十三日(土) | 小蕪味噌汁 | かまぼこ、子芋、煮物 | うぐひてり焼 |
| 二十四日(日) | きんぴら牛蒡 | あさり、わかめ、酢味噌和 | 鮪の山かけ |
| 二十五日(月) | 半熟玉子、やきパン | 鰹でんぶ | 湯豆腐 |
| 二十六日(火) | さつま芋、味噌汁 | 鮭味噌煮 | ビフテキ |
| 二十七日(水) | 福神漬 | まぐろ、つけ焼 | はうれん草ひたし |
| 二十八日(木) | ぜんまい味噌汁 | はぜ佃煮 | せいご、照やき |
| 二十九日(金) | 葱、味噌汁 | いぼ鯛、味噌漬やき | しのだまき、子芋煮〆 |
| 三十日(土) | 煮豆、金山寺みそ | 鶏肉、椎茸、葱煮〆 | むきみ、葱清汁 |



# 和歌

一等 ○

赤々と夕日は柿の實に映えてむら鴉鳴く山里の秋　北海道　岡　田　篤

評　平淡にして而も寂びあり。

二等 ○

さく〳〵と秋の草食む牧の駒の鬣を吹く明方の空　高崎　村田彩美子

評　何となく勇ましき歌なり。

二等 ○

蟲の音も日々に細りて桃山の御陵のほとり村雨のする　茨城　皆川さち子

評　一風一雨悉く傷心の種となる

三等 ○

岡の邊の雜木林に霜滿ちて月冴ゆる夜を狐鳴くなり　長崎　有元薫花

評　凄々たる夜色人を襲ふ

三等 ○

板戸拂ふ落葉の音に小夜ふけて寐覺わびしき秋の山里　山口　見玉てる子

評　木曾山中に泊まりし當時を追憶せしむ

三等 ○

遠近の落葉を風の吹きよせて寄せし落葉を小つむじに卷く　澁谷　宮川みち子

評　秋晴の日によく見る景色なれども歌の着想としては新し

## 秀逸

○ 朝の湖雁啼く方は雲あまたうすら寒げに重りて居ぬ　埼玉　神崎菫子

評　金氣人に迫る

○ 雨過ぎし軒のしづくに色そめて朝日かゞやく秋晴の日よ　神戸　山口さい子

評　神氣自つから清爽

○ 　長崎　山下よれ子

星姫の挿頭の眞珠露とおりて秋の千種の花にこぼるゝ

評 可憐の趣致

〇　大阪　毛利眞子

ぬかづけば御すやのとばり秋寂びて浮雲とざす桃山の暮

評 一讀襟を正ふせしむ

〇　茨城　中林たけ子

みさゝぎや夕日まばゆく照り映ゆる峰の紅葉を仰ぐ尊とさ

評 吟じ來つて愁更に新たなり

〇　臺北　太田楢

土人等の細き歌聲身に沁みてふるさと戀ひし秋の夕暮

評 暮煙月を罩むるの光景眼前にあらはる

〇　上總　伊藤ます

晝過ぎの暖き日をばぱち〳〵と豆莢はせる十月のには

評 小春日の郊外に出でたる心地す

〇　鹿兒島　松崎しま

手すさびに開くノートの間より見出でし花のなつかしきかな

評 そゞろ昔のなつかしかるべし

〇　出雲　長崎君子

雨そゝぐ酒屋が門の柳蔭濡れたる馬の身ゆるぎもせず

評 實景なるべし

〇　北海道　佐藤ゆか子

木枯の音も淋しく暮れ行きて宵月寒し蝦夷の山里

評 熊の髑髏の風に揺ぐ樣も思ひやらる

## 佳作

〇　彥根　村岸秋子

忘れにし人のことなも思ふかな月さやかなるおばしまにして

〇　神戶　高田みつ子

風の夜はまたなく哀し楓の葉の一葉一葉に秋深み行く

〇　群馬　田島澄江

霰を打つ音より外に音もなく雪に暮れ行く冬の山里

〇　高岡　山本その子

栗落ちてしばし音なき一つ家の背戶の栗山に小鹿なくなり

〇　福島　坂本文子

思出はかなし枯野の大銀杏背しながらにさびしくも立つ

〇　麴町　牧野銀杏子

かくてわれ三十路の秋となりにけりわかぬ望みのいつかはつべき

〇　成田　小野寺姬百合

牧場の道に幾うねり〳〵野菊秋萩とり〳〵の花

〇　巣鴨　杉本いち子

藍甕に湛へる水を覗きつゝ髭ふるひ居るひるのこほろぎ

〇　埼玉　柳下翠香

蘆芒に白帆かくれて船唄の微に殘る野川の夕

○　下總　ふさ子

わけもなくすねても見しがひとりねのさびしくなりてひそかにくひぬ

○　麻布　白菊

おもしろきむしのもろ音にさそはれて終日あそぶ秋の野邊かな

○　愛媛　深津　愛子

うすれ行く夕日さびしき廣野原やせ馬引きて馬子一人ゆく

○　北海道　志和　光子

世を呪ふ鋭き叫よとり／＼の歌悲しげに女工過ぎ行く

○　美作　喜代子

色白き乙女たをれるコスモスのうすくれなゐに夕日照り添ふ

○　下野　紅花

白粉の花見る毎に故郷の幼なじみのなつかしきかな

○　長岡　小坂部　鳳

嫁きては父母のます古郷もかりのやどりとなるぞ悲しき

○　大阪　中井　いと

街はづれ凱旋り行く騎兵の疲れし顔に落日の照る

○　滋賀　村西　靖子

秋晴れや鎮守の森に殺氣みちときの聲して豆鐵砲なる

○　京都　大前　はな子

近松の油地獄に小夜ふけて秋雨の空を雁なきわたる

○　四谷　島田　愛子

憎みてし人を戀しと思ふまで秋はさびしきものにもあるかな

○　麻布　上杉　しげ子

死ぬ身とも知らで衣縫ふ母の手を還しとせがむ病める妹の

○　成田　姫　百合

利根川を下る汽船の影消えて灯火くらし川舟の内

○　筑前　日下部　はるな

寂びれゆく秋の入江の古き町船板塀に村雨の降る

○　大阪　淺井　みつい

秋雨はわが黒髮と人形の金茶の髮をしめらして逝く

○　下總　佐藤　幸子

ふと覺めし夢のなごりのあと追ひて行きても見たき古郷の山

○　札幌　岡田　のぶ子

別れたるたらちね戀し古郷は栗や笑むらん茸や生ふらむ

○　福岡　角銅　雪枝

とほ／＼と牛車ゆく野の路の尾花十里に風吹き渡る

○　鹿兒島　やよひ子

梳づる櫛にまつはり黒髮のいたくもぬけて秋の寂しさ

○　水戸　川和　美代子

やはらかに黄金を孕む日の光り山の線など蒔繪にも似て

○　大阪　田　鶴子

讀みさしの本そとふせしめやかに降る秋雨の庭を眺めぬ

○　小石川　近藤　ふぢ子

落葉鳴る檜の林は星さえて心寂しき秋月の影

○　下關　奈眞野代文子

淋しさはひとひ／＼に増せし哉かぞへし桐は影もなくして

○　下總　宇賀田　常世

行く雲に都の友を思ふかな萩みだれちる秋のたそがれ

○　伊賀　稻田　銀子

緣切れて歸りし人のことさらに粧ひこらす淺ましきかな



# 俳句

## 天

鶯藪に散るもみじ葉や潭の水　山口　中山　秀子

## 地

門に出て嫁荷見送る小春哉　石狩　弓削　梅子

## 人

枯花にとまりて佗し秋の蝶　茨城　岩田清香子

## 秀逸

歌麿の裾に紅葉の散りにけり　東京　永井　久子
月明き草野の水や渡り鳥　肥前　隈部　芳子
白帆行く草の狹間や秋日和　芝　本田萬里子
枯柳溫柔鄕も淋びにけり　福井　山口　靜枝
ものゝ音に驚く牛や秋深し　大阪　町田よし子

## 佳作

山茶花や尼寺早く灯のともる　肥前　黑田てい子
放養の牛に踏まれし鷄頭かな　兵庫　鵜見　紅女
露ふみて歩みやさしき羊かな　朝鮮　佐藤チカ子
鳥落ちて露照る月や蘆の花　愛知　す　み
離緣荷のつく夜な秋の小雨哉　牛込　鈴山　廣子
冬されや家高低に雜司ヶ谷　本鄕　淺井　徽子
雷枯れの杉の木高し鵙の聲　門司　福田　八重
朝顔の末枯や桑も黃葉落ちて　愛知　花桐いづみ
蟋蟀や細雨明るき夜の椅　浦賀　大關あや子
饅頭塚にさす月白し蓮枯て　芝　大村　房榮
稻塚や狐火通ふ風くろし　四谷　近藤　操
野芝居のはてゝ戻りの夜霧かな　下谷　鈴木すゝ枝
無花果の廣葉に雨や雁の聲　金澤　吉川　雪子
冬空や杉に嘴研ぐ山鴉　麻布　吉田かつ子
冷かへや石鹼の泡流れゆく　深川　佐野たまへ
こゝら長屋ぼろ干してあり冬の蠅　八王子　鈴木ゆき子
神の馬もありく白萩月夜かな　鹿兒島　山下登代子
洪水の記な編む秋の灯かな　筑後　佐藤　信子
白菊や唯がよみさしの絹表紙　京都　大まへ花子
水髮の鏡に寒き姿かな　中澁谷　よ　し　子
花賣りの時雨れて來たり祇園町　肥前　隈部　信代
騎馬過ぎて西三條の時雨かな　土佐　し　づ　か
綸に振つて灯な捨つ船や天の川　瀧の川　山田　水月
蠟燭に冬の蠅來る佛間哉　本鄕　瀧澤紀美子
水樓の欄に干す蒲團かな　神戸　川島けい子
亡き人の衣干す日や百舌の聲　大和　谷　村　愛

落葉ふむ足元淋し夕時雨　京都　長谷川敢子
絶壁や夕日に映えて散る紅葉　牛込　大山たか子
贈位沙汰に童話も見事雁晴れて　名古屋　永田花子
山裾に松明つゞく野分哉　京都　和歌子
驛傳の馬の紺ぶさ秋深し　大阪　宮田隆子
人買の舟月に去る寒かな　芝　早船ハル子
秋晴れて一山高し北の空　千葉　伊藤ます
犬の兒の重なり合ふて冬日和　香川　猪熊さい子
柘榴皮箕に一杯や冬日南　香川　大井俊子
法螺吹いて漁船集むるや秋の晴　福島　山中よね子
渡舟あれど守なき狹霧渡哉　牛込　杉浦もと
峠下りて神輿來ませり秋晴るゝ　小樽　高橋末子
時化過ぎて藻を燒く濱や渡り鳥　長崎　眞崎綾子
秋草や川近かな丘いだく哉　豐橋　平出靜子
霧晴るゝ大樹あり新番鐵魂所　豐橋　高木慶子
山路に寒き夕日や雉の聲　下谷　杉島鶴子
囮籠暮れ殘しけり柿紅葉　下關　山本芳子
繭を煮る窓や花見る秋日和　愛知　米倉花女
三逕の草枯れて小蟲あさる鳥　福岡　井上みよ子
彩雲や紅葉照り映ゆ潭の水　埼玉　松本殘花
刀店に灯冷たし秋の雨　水戸　川和癸代子
木犀や黒塀高き家の構　相模　椿子
馬賣て濁酒侘しき夜長哉　兵庫　大山富子
牛車つながれてある紅葉哉　近江　松鶴
不幸あるな來てなく鳥や夕づく日　秋田　工藤せつ子

黄昏の鼓陣寒し落し水　大阪　操子
千種花歌にやよまむ竹の秋　下總　小野寺英子
川霧や夕灯またゝく向ふ村　下關　喜元紅雨
耳病で温泉宿の秋も更けにけり　茨城　春野三千緒
白萩や白兎を飼ふ草の宿　橫濱　村上浪子
銀婚の日を秋晴れて宮詣　尾張　木村不二枝
秋人や雲の行衛を見る癖が　小石川　山本やな
比叡颪に納め燈籠や湖晴るゝ　名古屋　渡邊昇芙
眠り癖する老となり鳴子引　京都　沈丁子
聖賢の壁畫古りけり芙蓉寺　橫濱　山内幸子
鹿鳴くや旅に大和の草枕　京都　菊岡雅子
涙もろき病母老ひぬれ夜半の秋　麻布　鈴木賢惠子
朝霧や一鳥啼きて山幽か　本鄕　矢野まさ子
木枯や北空に落つ鳶一羽　本鄕　瀧澤きみ子
明月や姥捨山も明らさま　淺草　杉本貞子
紅葉見や馬の噂も戻り山　石狩　弓削一葉
白菊や俎上の鯉生きてあり　東京　小林花子
山晴の湖凪ぐや紅葉夕づける　小樽　進藤浪子
廓の灯による雨の鹿淋しうす　福島　川原田りう
夕鳥の羽音冷たし紅葉谷　下野　高崎美代子
奈良は古き三笠の月や鹿の聲　伊賀　花野とら子
洛陽の家並古びぬ枯柳　近江　吉野品子
黒谷の鐘暮れかてな落葉哉　京都　石井きみ子
菊の香や草深き里の線香屋　石川　多田滿子
末枯や手に掬ぶほどの溜り水　廣島　大島春子



# 誌友倶樂部

▲細り行く蟲の音に、秋も深くなりました、もう越路に服がまゐりましたよ。(越路にて千枝)

▲七月號に書かれた、シヤトルの淸子樣に申上げます、あなたはたいへん寫眞結婚の肩をもつて下さいましたのネ、この事に就ては、以前本誌に「善惡相半す」と書いてありました通り、少しく實情に通じて居るお方には、異議のない筈と思ひます、一般こちらで結婚しても差支ないといはれて居る階級は、市街地に居るビズネスマンと、田舍に居る農業者でしよう、さうして前者は數に於て現在以上の發展を望むことは出來ますまいが、農業者は今後長足の進步を促すでせう、それにビズネスマンの多くは既婚者ですから、これからの寫眞結婚の大部分は農業者だと思はれます、沃野千里に亘る新開地に、內助者として一家の運命を開拓する、それはをゝしく、立派な、さうして快心のことでせうが、それには淸子樣の書かれた通り、逆境にも屈せす、着實に働くといふとが第一だゝ思はれます、けれども、在米幾多の郞君は、「醒めて近來的」のお方を頻りに希望して居るやうに書かれたのは可笑しいワ、それでも奮鬪とか活動の意味なら宜しいのですけれども、實際氣儀の多い日本の女學校卒業生は、農業者の妻として何等の權威もありませんからネ(米國北部にてうゑ)

▲元祿姉さんの「つむじ風」、ずいぶんね、讀み行くまゝに、こわくなりましたけど、私じやないとふつと思つて、思はずほつと致しました、女優に何ぞなつて此の世の中を渡つて行かうと思ふのには、こんなキツイ氣でなけりやいけないでせう、でも私のやうな弱い少さな氣のものには、やつぱりその女學校の先生とかに同情致しますわ、こんな事云つたら又元祿姉さんにしかられるかしらん御免なさい。(洛西白れんげ)

▲磯千鳥樣「新夫婦の冒險」、嗚呼私はどんなに熱心に力をこめて讀んで居たか解りませんでした、「下男が大狼狽で駈けて來た」の處までは全く夢中で讀んで居りましたが、嘘がつかりいたしました、お陰さまで頭がいたみます、頭ばかりで尾のない文ですね、恐らく皆さんも私と同感でしたらうと思ひますわ、ほゝ失敬々々、それから皆さん、誌友倶樂部をもう少し有益な物にしたいものですねー、いつも同じ事ばかりでなく、例へば我家の實驗とか、失敗とか、然し限りある紙數ですから、長いくだ〳〵しいことははぶきて、大に經驗になる事などを出してはいかゞですか、殊に一家を持つとそんな事のみ目に立ちます記者樣いかゞですか、是非贊成下さい。(朝鮮江原道春川府片田舍にてホワイトローズ)

▲「新らしい女」と申す「ニユーオールド」が出來て、私も實は淸涼樣と同じ樣にその意義の解し方に困りました、けれど私はこれには何にも深い意味は無いものと思つて居ります、あの青鞜の人々を新らしい女と申すのは、只一部分の新らしい女で、つまり偏頗につけたものと思ひます、一般にいへば、進步した敎育を受けた女は凡て新らしい女と申されます…女學世界の讀者の方々は、皆な新らしい血に充ちた新らしい女ですから、此の雜誌がいつも生氣にみちたものとなるのかと思つて悅しくつて…。(菊香)

▲七月號でてつ子樣のおこゞと、まつたくわたし共には頂門の一針です、しかし悲慘の境遇に居るお方に同情した方まで恐しくおつしやるのは心得ませんよ、第一同情した方、同情された方がおきゝになつたら、どんなお心持でございませう、同じ事柄を同じ調子で書かれては、不滿もございませう、その繁にも堪へますまいがそれは、あなたが順境にばかり居つたから小說臭く見えてうるさくもなるのでせう、善惡併呑は宜しくありますまいが、雅俗混合位はお互ひにがまんが出來ますまいか。(北米うゑ)

▲風もないのに木の葉がふわりつとちる、之を見ると、只わけもなく淋しい思ひが致します、かういふ時に氣のあつた趣味のあつたお友だちがあればいゝけれど、私には一人もありません、(名古屋、松原喜代)

▲上原綾子樣の美しい花の如きお姿を、九月號に拜し參らせて實に〳〵嬉しくよろこばしく存じました、此の數ケ月、あのはなやかなるお作を拜しませんが、如何遊ばしたのですか。(麻布輝子)

▲地方舊家中產の家庭に成長せる二少年あり、何れも中學在學中、血統正、身體強健、順境に育ちたれば、資性溫良也、甲者は性質優しき方

にて、尤も賢者として遣ふならんか、乙者は數學に得意に、活達の方也、今度少々事情あり、家庭普通にて子弟の教育に熱心なる子なき家庭に遣はしたき旨、實は友人に依頼せられたれども何分交際の範圍狹く、頼みを全ふする事能はず、誌友倶樂部を借り、もし愛讀者諸嬢のうち、お心當りあれば、御面倒ながら先方の戸籍謄本をそへ、下名へ御相談下されたし。(備中、五島町、火宇上成、福島樣内藤子)

▲河崎園香先生は、伊豫八幡濱港の須賀町にお出遊ばしたのですつてね。先日八幡濱の伯父がまゐりました時、其噂しをきゝました、一寸も存じませんでしたワ、現に御兩親樣は八幡濱にゐらつしやいますさうで、私の家は八幡濱から三里、あの大洲のすぐ側でございますのよ。先生は桃谷イシ(舊姓松下)樣を御存じでせう、「きく子樣とはよく談なした事もあります」つて、あの方のお宅は私宅の側です、先生どうか毎號かゝさずに口繪をお出し下さいまし。(伊豫、平野村狂島百合香)

▲まことに申しかねますが、私は獨和字典をもとめ度いと思つて、色々の人に聞いて見ましたが、どうもよいのが見つかりません、もし御存じのお方がありましたら、お知らせ下さい、(兵庫にて秋月幸子)

▲私の學校は、現在生徒は七百名許り、東京の方々には見られぬ質素なものです、女學世界愛讀者は升ではかる程澤山あります、時節柄御身大切に。(仙臺東華高女千葉ひろし)

▲待ちに待つた秋香樣やあや子樣にお目にかゝつてうれしかつてよ、今度は鋭子樣のお姿を拜したいわ。(南の國、芳香)

▲誌友の皆樣に申上げます、私の懇意な先に、私立大學を卒業なさいました今年二十七歳の温厚なお方がございまして、何處かへ養子に行きたいと申して居られますから、良き處が有りましたら、お世話して上げて下さいませ。(朝鮮全羅南道光州北門内水野君子)

▲野菊樣、京の月がなつかしう御ざいますわ、加茂河畔で眺めたあの月は、今もなほ心にしみて忘られませんのよ、あゝ詩的の都に住み給ふ御許樣が羨しい、さらばすこやかにませ、同じ假名の薩州月見草樣つてどなた? 私も八月は山水明眉の薩州海岸で暮しました、おさしつかえなくば、お名前おあかし下さいれ、ひよつとしたら私御許樣をしつてゐるかもしれませんの、(別府にて月見草)

▲十月號取る手おそしとひもとけば、御なつかしい花散里樣の「處女に別るゝ記」― ほんとに面白く拜讀致しました、それから太田先生の「繪もの語波の夢」― ほんとに〳〵可愛らしいお話ですことね、繪もの語は毎號樂しみでございますのよ、愛知縣の愛讀諸姉樣よ、愛知縣には名高い投稿家がない樣でほんとに殘念にぞんじますのよ、ます〳〵ふん發致さうではございませんか、私は岡崎町から一里ばかりの田舍に淋しく日を送つて居りますが、皆樣とうぞ誌上で御交際をさよなら。(三河國美合の里、川村繁子)

▲筑前田舍娘樣に申上ます、髮のくせをなをしますには、桐の葉を葉柄共に一二寸位に切りてよく煎じ、其の汁にてお蒸しなさい、妙になをります、澤山煎じて置いて瓶などにつめをき、入用の時に少しづゝ暖くして使ふのも宜しうございます、しかし是を使ふ時には、油をつけてはいけません、一旦結ひ終りましたら、髮の乾くまでは手をあてない方が宜しうございます、又桐葉柄だけを沸湯に浮かして蒸すのも宜しうございます。(室津の岬の田舍娘)

▲ちゞれ毛女樣に申し上げます、私の友達で、ちゞれ毛の甚だしい方が有りまして、其の方は、ちゞれ毛の爲めにいろ〳〵と手をつくされましたが、中々によくなりませんので、到底治る見込みもなしとあきらめて居られましたのですが、當時、新舞鶴軍港字行永に開業中の醫學士有吉先生の施術によつて全治し喜んで居られます、若しお尋ねになるならば、くはしくお話し致しませう、又直接先生にお尋ねになるとも差支へないと思ひます、私の知つて居る方に根治しられた方が四五人ございます。(京都府加佐郡倉梯村字森六十五番戸高橋きく子)

▲相州の一少女樣、奥州の一少女樣、手甲のイボにてお困りのよし、根治療法敎示いたしますから、病症と御住所を下名まで御通知下さい、自宅療法の出來る樣くわしくお知らせ致します、名宛は左の如く Dr. Chiropady P.O.BoX 989. SanDiego California U. S. A.

▲記者樣にお伺ひ致します、女學世界第拾二卷の第七號に、一藝に達する者は萬藝に達すと云ふ題で、松江先生樣のお話がありましたが、其の女子共立會は何處に有りますか、次號にてせひおしらせ下さい、お願ひ致します。(女郎花)本郷區駒込追分町三十番地です。

▲私の友人で、私立獨學校を修業して、今度は

醫院又は病院に勤務しつゝ、藥學校に通學したいと申して居る方があります。藥學校のある地方のお方にて、お心あたりがありましたら、誌上にてお知らせ下さい、すぐ履歴書を送るか、又は近き所は參上致します。(神戸市兵庫松田の濱にて浮草)

▲濱宋みさを樣、貴女、若しや名古屋高女の八回の御卒業のお方ぢやございませんか、一寸誌上でお答へ下さいませんか、只今の御住ひもお差支なくば誌上でお知らせを願ひます。(名古屋市外愛讀者)

▲皆樣、當地温泉の繪葉書お望の方は、下名までお知らせ下されば、お送りいたします、こゝは避暑地として名高い妙高山の中腹、赤倉温泉場です、皆樣の中にも避暑に入らした方がおありでせう。(越後中頸城郡赤倉引橋友子)

▲別府の月見草樣、私も御地に二ヶ月ほど遊びました者で、まことに別府の景色がおなつかしく存じます、何うぞ誌上で御交際を願ひます。別府は竹が名産で、きれいなる細工ができますの、私は不老町にある別莊にゐましたのよ、雲泉館つて御存じで居らつしやいませうね、公園はまことによろしいのね。(伊勢コスモス)

▲誌友の諸姉樣にお願ひ致します、私はある事情のため一身をあやまりまして、切ない〳〵思ひに明暮なやんで居ります、もはや此世に何の望みもなく、唯々此の身あるのが恨しく思はれます、いつそ故里はなれた東都へ出て、良家の家庭に奉公致したいのでございますが、東京には別に親類知人もありませず、勝手も分らず誠に困て居ります、お情深い皆樣方、お心當りもあらば、何卒ふびんと思召してお世話下さいませ、又六月の本誌にありました、大阪の婦人ホームの樣なのが東京にありましたらお敎へを願ひます、年は廿三でございます、小學だけは卒えて居ります、裁縫も一通りは心得て居ります。(日陰草)

▲私は浮世の波風にもまれ〳〵て、とう〳〵帝都に獨旅すべく餘儀なくされて、去る一日當地に參りました、今は芝の一隅に居ります皆樣何分によろしくお願ひ申上ます。(東京白菊)

▲諸姉樣方の内で、本誌增刊「驚く手紙」、「こゝろの日記」をお持ちのお方がございましたら、何卒下記の所までお送り下さいませ、お禮には篠山名所繪はがき一組を差上げます。(丹波多紀郡味間村稻山小春)

▲皆樣のお中で、廣島の女學校を卒業遊ばした永田かふ子樣を御存知の方はございませんか、父君は兵庫縣赤穗、鹽の出る近所に鹽專賣局長をして居らつしやると承りました、元小學校の頃、三河幡豆郡吉田に轉任して入らつしやつて妾と仲のよかつた方です、御手數恐入りますがお知らせ下さいまし。(三河に於てK子)

▲誌友の皆樣、私は數年來外國繪葉書の交換をいたして居ります、諸姉樣の內でお望のお方はお知らせ下さい、外國少女を御紹介申します、又在米の皆樣、以後どうか御交際下さいませ、(名古屋市西區江川町美濃鐵方高木榮子)

▲故國に在ます諸姉樣よ、私は遠き異國に女學世界を無二の友として暮して居ります不束者でございます、あの皆樣にお訪れ致しますが、昨年四月中村高女の優等卒業生の井口八重子樣の佐所御存じの方に至急御通知下さいませ、お禮を致します、　Miss Masuyo Iwazaki 430. Powell st. Vancouver B.C.

▲もし諸姉樣のお手許に、內藤千代子樣のお作になつたホームンか、又はスイトホームを御持ちの方は、相當の價でお讓り下さいませんか一寸拜借いたしてもよろしふございます、きつとお禮をいたします。(府下北多摩郡戸塚村字源兵衞百〇七番地小林瀧代)

▲繪葉書交換を、內地のお方と、外國のお方とにお願ひ致します、お送り下されたお方にはお禮として、英、伊、佛、ヘワイ、ウラジオストツクにある女學世界愛讀者のお方を御紹介致します(佐賀市諸富字大堂一四六末次安子)

▲東京成女高等女學校の誌友樣方にお尋ね致します、御校に居られました山岡マサ樣と申す先生の御住所御存じのお方がございましたならば何卒〳〵誌上でお敎へ下さいませんか、私も四五年前山岡先生のお敎へを受けました一人ですから。(千葉の誌友)

▲記者樣、私はこれ迄本誌に五六度も投書致しましたが、一度も出たことがござりませぬ、然し修養が足らぬのだとあきらめて勉強して居ます、これでもいつかは誌上の片隅に、「糸萩」てふ名をのせられたら、どんなに元氣づくことでせう。(丹後舞鶴の片隅にて糸萩)

▲皆樣のうちで、增刊「おどろく手紙」をお持ちのお方はおゆづり下さいませんか。(土佐國安藝郡井ノ口村梶原ゆき)

淑女畫報
特別號
# 新粧百令嬢
十一月一日發行
定價三十五錢

▲令嬢寫眞壹百種の外更に大正婦人の風俗寫眞數葉を添ふ▼
▲寫眞版は最上の光澤紙を用ゐ六十頁の全幅悉く光輝燦然▼
▲記事は現代各方面に於ける令嬢の裏面を細叙して驚異駭目▼

本號には東京は勿論全國各地より募集せる新粧の令嬢一百人の鮮麗なる寫眞を滿載す。百人百姿の表情美。百人百態の動作美。百人百種の衣裳美。各妍を競ひ芳を爭ふ。ブローチの主、ダイヤの主、深窓の佳人、町内の美人、豐頰曲眉の佳麗六十餘頁の中に活現す。

懸賞變裝寫眞は本誌獨得の新意匠にして考案の奇拔、趣向の斬新、畫報界の記錄を破れるものなり。此寫眞は同一の令孃が衣裳動作を異にして撮影せるもの數人數葉を百人の中に竄入しあり、其中より人數と寫眞の數とを捜索して解答する趣向なれば秋の夜長のつれ〴〵には家庭最上の娯樂なるべし。

時恰も深秋、滿山錦繡を彩どり情思ます〳〵清爽なるに當つて、此新粧百令孃を迎ふ。宛然仙苑に入つて靈花の香に浴するの想ひあらむ。

# 五人の令孃を以て組織せる變裝寫眞の懸賞

# 募集（十一月八日〆切）

## ●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲短　文（一人一種）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△短文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

### 賞品

△短　文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

---


## 毎月一回一日發行

### 定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
（定刊數……十二冊
內 增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

### 廣告料

| | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 一行（二十四字詰） | …… | …… | …… | 七十錢 |
| 四半頁 | …… | …… | …… | 十一圓 |
| 半頁（卅二行） | …… | 廿八圓半 | 廿三圓半 | 二十圓 |
| 一頁（六十九行） | 六十五圓 | 五十五圓 | 四十五圓 | 三十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

### 註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用には一割增にて五厘一錢の切手に限る
●每月錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

### 不許複製

大正元年十月廿三日印刷納本
大正元年十一月一日發行
第拾貳卷第拾五號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　市川七作

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三千百三十八番　二千六百二十二番　二千三百二十九番

# 女子教育家に告ぐ

東京女子高等師範學校教授　今村順子先生
東京府女子師範學校教諭　小谷野千代子先生　共著

# 尋常小學 裁縫教本

價四拾五錢　送料六錢

小學校に於ける裁縫教授の至難なるは、斯道教授の任に當らるゝ諸姉の常に苦心せらるゝ所なり、本書は現行小學校令に準據して、好評嘖々たる從來の小學校裁縫教科書教師用を訂正增補し以て、本科教授の改善に資せんとす、若し夫れ其の內容に至りては、一教材每に教授の事項、方便物の準備、教授の方法、教授上の注意等仔細に說明を加へられたるもの、座右に備へて以て直に教案となすを得べく、教授上如何に稗益する所多くして、其の效果の大なるかは信じて疑はざるなり。

## 高等小學 裁縫教本　近刊

發行所
東京市日本橋區通三丁目　成美堂書店　振替東京一七一九
東京市京橋區南傳馬町二　目黑書店　振替東京二八〇九

女（後付の一）

# 大正二年 當用日記

▽賣捌所は全國各地の書籍雜誌店及紙類文具店到る所にあり

全國に數百萬の需要者を有し更に海外にまで發展し殆ど博文館の獨占事業たるが如き觀ある日記類は編纂印刷製本の精を拔き美を凝らし近々市場に現はれんとす希くは倍舊の好評を賜はらんことを

當用日記は卷頭に皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等色刷して揭ぐ……

附錄 ●金錢出納錄●知己人名簿●雜錄●諸統計表●米價換算早見表●諸稅則摘要●郵便電信諸規則●新式萬年曆●徵兵規則……

紙數各五百四十餘頁

((當用日記定價))

大形(菊判) 上製〜舶來洋紙總クロース金文字入 ○正價五十五錢 郵稅十四錢

中形(四六判) 總革製〜舶來洋紙總革製金文字入堅牢美本 ○正價金八十錢 郵稅十錢

特製〜舶來洋紙脊皮美製金文字入 ○正價金五拾錢 郵稅十錢

上製〜舶來洋紙總クロース金文字入 ○正價金卅八錢 郵稅十錢

小形(菊判半截) 上製〜ース金文字入 ○正價金三十錢 郵稅八錢

發兌元 東京日本橋

電話番號本局 三〇三・二六二〇

懐中日記改良の要點

紙質を改めてフールスとし罫線を改めて全紙を藍、赤、墨の三度刷となし體裁甚だ優良且つ從來容積稍ゝ厚きに失して使用上不便なりしを改め携帶至便の懐中日記となしたり

1913

Diaries

# 大正二年 英文日記

## 當用日記

四六判 總クロース特製 價五拾錢 郵稅八錢

## 懐中日記

三六判 總革三方金緣付 價卅五錢 郵稅四錢

吸取紙數葉附

多年の經驗に依り獨特の編纂法を用ひ好評を博せる英文當用日記及英文懐中日記は本年更に最新の樣式を加へ紙質を改良し實用と體裁と兩つながら冠絕したる模範的日記なり

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館 振替東京二四〇番

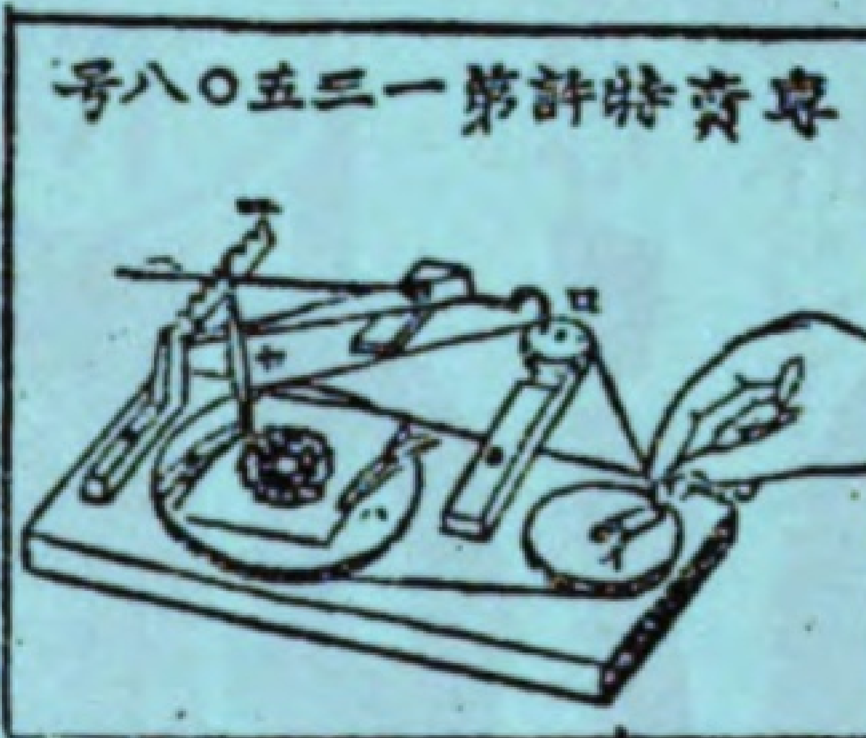
女(後付の七)

# 博通社

特價
一號 金四拾五錢
二號 金參拾錢
三號 金貳拾五錢

教育玩具
製圖器械

今回專賣特許を得たる發明品にして兒童の好奇心を滿足せしむると共に構圖力創作力を並す可き趣味に富める意匠圖按製作の製圖器械なり各幼稚園の御用命續々




送料 內地二十錢 臺樺朝滿卅錢

## ホーム號

各商店に於て舶來と稱し日本製と云つて各種の器械を賣出せりと雖も一度ホーム號出するや月前の群星の如く光を失し其名亦隱る宜なり……



蓄聲器 一臺 特價拾四圓五拾錢（市價廿五圓）

ニツケル製喇叭付
蓄音盤（十吋） 特價八拾五錢

荷造費は五十錢
運賃は着拂とす

# 特賣品

（目錄無代進呈）

世に樂器と稱するもの洋樂にはピアノありオルガンありヴアイオリン、ギタマンドリン、洋琴、銀笛等實に無數あり邦樂にては琴、三絃尺八、胡弓、月琴、一絃琴、明笛等亦其數多しと雖も輕便なるを最とし音律正確なるは手風琴を推す

特價八拾五錢
譜本 特價拾七錢

右に記せる樂器何れも取扱ひ致候
送料內地拾五錢其他卅五錢



追々寒むくなつて參りました御婦人の最も御注意なさらなければならないのは冷込です婦人病の原因も此れです藥物的治療を俟つよりは先づ衛生的に保護せられよ！

## メリヤス 御婦人用 シヤアツ

襦袢仕立 シヤアツ仕立 及上下共に同値段

總裏毛
一號優等品 金壹圓
二號上等品 金八拾五錢
三號普通品 金七拾五錢

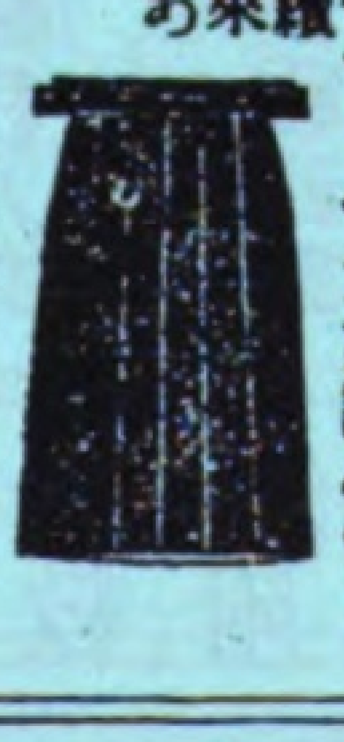
送料 內地は拾錢臺樺滿朝は卅錢

# 博文館代理部
日本橋區本町一丁目

## メレンス

| | |
|---|---|
| 一尺六寸 | 壹圓四拾錢 |
| 一尺八寸 | 壹圓五拾錢 |
| 二尺 | 壹圓八拾錢 |
| 二尺二寸 | 貳圓 |
| 二尺三寸 | 貳圓廿錢 |
| 二尺四寸 | 貳圓五拾錢 |

一度廣告するや大好評を博し註文陸續として來りつゝある品



送料內地拾錢臺樺朝滿卅錢

## カシミヤ

| | |
|---|---|
| 一尺六寸 | 參圓八拾錢 |
| 一尺八寸 | 四圓廿錢 |
| 二尺 | 四圓五拾錢 |
| 二尺二寸 | 五圓四拾錢 |
| 二尺三寸 | 五圓六拾錢 |
| 二尺四寸 | 六圓 |

電話本局六百十四番
振替口座東京五十番

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SCEOND CLASS MAIL MATTER.

女學世界 第拾貳卷第拾五號 (毎月一回廿三日印刷納本)

(大正元年十月廿三日印刷納本)

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

# 求婚廣告を見て

近頃の新聞には、求婚廣告といふものが大分見えるが、是を仔細に調べて見ると、今の人が何を標準として妻君を撰擇して居るかゞ分る。即ち何の廣告にも「身體の强壯」といふことを第一に置いてあるから、此「身體の强壯」といふ事が標準であるといふこともすぐ知れる。

昔は妻君を床飾り同様に心得た時代が有つた此時代には容貌さへ好ければ、それ一つで易々と玉の輿に乗つた者も少くなかつた、併し今日は自分の妻といふものに付て、眞面目に考へる様になつて來た。それで、容色本位で妻君を撰ぶ人でもあらうものなら、無智の人不心得の人として、他人から笑ばれる様な始末である。

扨て妻君を撰ぶ標準が何故こんなに變化したのであらうかと云ふと、全く生存競爭の結果である、人口はドシ〳〵殖えて來る、同種類の職業は增して來る、そこで人と人職業と職業の競爭が始まる、今日の様な烈い競爭の世の中では、商賣をやつても中々うまい儲けはなし給料なども各方面共に昔より相場がズツと下つて居る、で、これからの人は相當の敎育あり技倆があつても僅か許りの[illegible]で辛棒せねばならぬ次第である。それで上流社會は別として中流以下の家庭では女中を置かず妻君自ら水もくむ、御飯も炊く、洗濯もするといふ風にして、少しでも夫の負擔を輕くせねば、一家の經濟は保つて行けない。

處で身體が弱かつたらいくら、意氣込みが旺んでも、ドッコイ身體が動かない、夫の負擔を輕くする處が、反對に高い藥を飲んで夫の負擔を重くするといふ具合で細腕一つで活計を立てゝ行く夫には誠に堪へ切れない現今の人が妻君の體格に重きを置くのもこれが大原因である、それ今後の女子は身體が弱いと結婚上非常な損がある。

獨り結婚前の女子許りでない、既に嫁いだ人でも同じ道理である妻君がいつまでも身體が弱くてぶら〳〵して居ては遂に小言も出る、品行問題からの痴話喧嘩に花が咲いて、出すの出るのと騒ぐ様な次第結局自分の不幸を招く基となるのであるから「健康」といふ事には大に注意せねばならぬ。

然らば婦人の健康は如何にして計るかといふに勿論中將湯を服用するが一番安全且つ迅速である、中將湯が子宮血の道から起る諸症及び月經に關する色々の障害それから、産前産後の故障等婦人病一切に有効な事は、世既に定評あるが、中將湯が他の婦人藥に比して甚だよく利く譯は他の藥の様に一藥萬能主義で無くて、各病人の容態に應じて十數種の加減藥を調合發賣して居つて、病人が自己の容態を詳しく書き添へて本舗へ申込めば、其容態にキッシリ當てはまつた加減藥を送ることになつて居るからである。

猶ほ婦人病の起る原因や兆候及び治療の方法等に付ては「婦人衛生手引」に詳細記述してあるから早速取寄せて一讀するがよい、本書は東京市日本橋區通四丁目或は大阪市堺筋大寶寺町津村順天堂へ申込めば無代進呈するから希望者は遠慮なくハガキにて同所へ至急申込むがよい。